

第10回 保育所保育実践研究・報告集

平成 28 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

はじめに

保育所や認定こども園等に対する地域の要望は様々であるが、子育て専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域ではそれらをおいて他にない。日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育所保育実践研究・報告」は、「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。第10回目を迎え、会員各位のご協力により、19件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。

第7回から、課題研究の取り組みを評価することとし、各賞の区分の見直しを行い、従来3区分だったものを5区分に変更している。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたことではないことを申し添える。

会員の皆様にはより積極的に応募していただけるよう課題等について更に検討を加え、第11回の募集に生かしたいと考えている。内容がより充実していくことを期待し、併せて積極的に保育研究を行っていただくことを願うものである。またこの報告への応募を、保育現場がいかに様々なことを行っているかを発信する手段としても活用していただくことを願っている。

平成28年3月

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

第10回「保育所保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

1. 目 的

日本保育協会では、保育所保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主 催 社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 対 象 日本保育協会会員保育所の所長、職員（個人研究、保育所内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所との共同研究を含む）

4. 部 門

（1）課題研究部門

以下からテーマを選び、課題や取り組みについてまとめてください。関心を持ったきっかけ、疑問などの課題又はどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③ 子どもの健康・安全

施設での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

（2）実践報告部門

テーマは自由です。日誌に記載された日常の実践や、地域・保護者に向けて実施した調査結果など、保育実践・事例報告・調査報告等を対象とします。日々の記録の中から得られた事柄や傾向の変化など、客観的な記録・報告をもとにした考察に注目するものです。

- （例）
- ・施設での実践事例（感染症・食中毒への対応、特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
 - ・施設（地域）での調査など
 - ・施設として実施した子育てに関する特別活動、子育て家庭への支援・地域との連携など
 - ・災害への対応（防災計画の策定等）

5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第10回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

○優秀研究賞（課題研究部門）

該当なし

○研究奨励賞（課題研究部門）

・課題研究①人との関わり

「人権に配慮した子どもへの関わりについて～保育者の言葉の力を考える～」

浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）

○優秀報告賞（実践報告部門）

・実践報告

「H男の発達を求めて～音楽遊びを通して～」

東田 結佳（石川県・清和保育園）

・実践報告

「食物アレルギー児の健康と安全について

～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたこと～」

玉城 久美子（沖縄県・第2 愛心保育園）

○実践奨励賞

・課題研究①人との関わり

「ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション」

武元 善輝（鹿児島県・認定こども園つるみね保育園）

・課題研究②遊びと学び

「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」

榎本 侑季帆（東京都・砂原保育園）

・実践報告

「遊びの発展に必要な援助～友達の関わりから見えてきたもの～」

松田 陽央子・高野 里沙・倉内 麻衣子（北海道・公益財団法人鉄道弘済会釧路保育所）

・実践報告

「英語で遊ぼう～Let's play in English～」

佐藤 友美・石井 智子・片岡 祐子（秋田県・公益財団法人鉄道弘済会秋田保育所）

・実践報告

「保育環境を考える～異年齢保育の視点から～」

大森 葵（東京都・砂原保育園）

・実践報告

「作ってあそぼう～できたことの達成感から次への探求心へ～」

石坂 由香・市川 千寿子（長野県・公益財団法人鉄道弘済会長野保育所りんどう保育園）

・実践報告

「子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて

～お泊り保育から運動会、生活発表会へとつながる心の育ち～」

一谷 あす香（和歌山県・れもん保育園）

- ・実践報告
「アレルギー代替食の対応について
～富士保育園アレルギー対応マニュアル作成を経て～」
殿山 明子・佐々木 美佳・本田 幸奈・村尾 千景（広島県・富士保育園）
- ・実践報告
「このことの大切さ～はいはい遊びを通して運動機能を高めよう～」
山崎 千尋（鹿児島県・建昌保育園）
- ・実践報告
「体づくりと心を育む食育活動～食育活動から見えてきた子ども達の育ち～」
仲宗根 綾乃（沖縄県・愛心保育園）

○奨励賞

- ・課題研究②遊びと学び
「0から始まるド・レ・ミ♪」
林 大介（大阪府・認定こども園友渕児童センター）
- ・課題研究③子どもの健康・安全
「保育施設におけるリスクマネジメント～ヒヤリハットを迅速に共有する～」
熊谷 あすか（東京都・つくしんぼ保育園）
- ・実践報告
「異年齢交流から見えてくるもの～3歳未満児と3歳以上児～」
庵 幸世（富山県・公益財団法人鉄道弘済会富山保育所）
- ・実践報告
「社会福祉法人都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」
頭師 綾子・岡本 幸子・志水 友美・川並 茉奈果・潮崎 早織（大阪府・社会福祉法人都島友の会都島乳児保育センター・都島第二乳児保育センター）
- ・実践報告
「地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを！」
大神 敬一（福岡市・多々良保育園）
- ・実践報告
「水・砂・土と触れ合いの中で見えてくる子どもの思い、私たちの思い
～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～」
中島 陽子・福田 久美子（北九州市（研究会員）・公益財団法人鉄道弘済会門司保育所）

目 次

はじめに

第10回「保育所保育実践研究・報告」募集要綱概要

第10回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

1. 総評	1
総 評	3
委員長 藤 澤 良 知	
2. 入賞作の紹介及び講評	5
(1) 研究奨励賞	5
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究①人との関わり	
「人権に配慮した子どもへの関わりについて～保育者の言葉の力を考える～」	
浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）	7
(2) 優秀報告賞	21
〈実践報告部門〉	
・ 「H男の発達を求めて～音楽遊びを通して～」	
東田 結佳（石川県・清和保育園）	23
・ 「食物アレルギー児の健康と安全について	
～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたこと～」	
玉城 久美子（沖縄県・第2愛心保育園）	28
(3) 実践奨励賞	37
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究①人との関わり	
「ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション」	
武元 善輝（鹿児島県・認定こども園つるみね保育園）	39
・ 課題研究②遊びと学び	
「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」	
榎本 侑季帆（東京都・砂原保育園）	43
〈実践報告部門〉	
・ 「遊びの発展に必要な援助～友達の間から見えてきたもの～」	
松田 陽央子・高野 里沙・倉内 麻衣子（北海道・公益財団法人鉄道弘済会	
釧路保育所）	51
・ 「英語で遊ぼう～Let's play in English～」	
佐藤 友美・石井 智子・片岡 祐子（秋田県・公益財団法人鉄道弘済会	
秋田保育所）	57
・ 「保育環境を考える～異年齢保育の視点から～」	
大森 葵（東京都・砂原保育園）	62

- ・「作ってあそぼう～できたことの達成感から次への探求心へ～」
石坂 由香・市川 千寿子（長野県・公益財団法人鉄道弘済会長野保育所
りんどう保育園）……………70
- ・「子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて
～お泊り保育から運動会、生活発表会へとつながる心の育ち～」
一谷 あす香（和歌山県・れもん保育園）……………78
- ・「アレルギー代替食の対応について
～富士保育園アレルギー対応マニュアル作成を経て～」
殿山 明子・佐々木 美佳・本田 幸奈・村尾 千景（広島県・富士保育園）…83
- ・「這うことの大切さ～はいはい遊びを通して運動機能を高めよう～」
山崎 千尋（鹿児島県・建昌保育園）……………93
- ・「体づくりと心を育む食育活動～食育活動から見えてきた子ども達の育ち～」
仲宗根 綾乃（沖縄県・愛心保育園）……………99

(4) 奨励賞 …………… 105

〈課題研究部門〉

- ・課題研究②遊びと学び
「0から始まるド・レ・ミ♪」
林 大介（大阪府・認定こども園友渕児童センター）…………… 107
- ・課題研究③子どもの健康・安全
「保育施設におけるリスクマネジメント～ヒヤリハットを迅速に共有する～」
熊谷 あすか（東京都・つくしんぼ保育園）…………… 114

〈実践報告部門〉

- ・「異年齢交流から見えてくるもの～3歳未満児と3歳以上児～」
庵 幸世（富山県・公益財団法人鉄道弘済会富山保育所）…………… 120
- ・「社会福祉法人都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」
頭師 綾子・岡本 幸子・志水 友美・川並 茉奈果・潮崎 早織
（大阪府・社会福祉法人都島友の会都島乳児保育センター・都島第
二乳児保育センター）…………… 126
- ・「地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを！」
大神 敬一（福岡市・多々良保育園）…………… 131
- ・「水・砂・土と触れ合いの中で見えてくる子どもの思い、私たちの思い
～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～」
中島 陽子・福田 久美子（北九州市（研究会員）・公益財団法人鉄道弘済会
門司保育所）…………… 138

「保育所保育実践研究・報告」企画・審査委員会

- 委員長 藤 澤 良 知（実践女子大学名誉教授）
- 小林 芳 文（和光大学名誉教授）
- 石 川 昭 義（仁愛大学教授）
- 井 桁 容 子（東京家政大学ナースリールーム主任保育士）
- 酒 井 かず子（金目保育園園長）
- 日 吉 輝 幸（平和こども園園長）
- 岡 田 澄 子（見和めぐみ保育園園長）

1. 総 評

総評 委員長 藤 澤 良 知

保育の専門性の向上を願って制度化された、「保育所保育実践研究・報告」は平成27年度で第10回を迎えました。応募件数は19件と前年度より3件増加、保育実践研究の進め方については、保育界2015年4・5月号で「研究レポートの書き方」についてガイドラインが示されたこともあって、研究報告内容は随分充実されて来たように感じられます。

1. 課題研究部門（5件の応募）

- (1)「研究奨励賞」：「人との関わり」について、「人権に配慮した子どもへの関わりについて～保育者の言葉の力を考える～」
- (2)「実践奨励賞」：2件 ①遊びと学びとして「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」、②人との関わりとして、「ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション」
- (3)「奨励賞」：2件 ①子どもの健康・安全として「保育施設におけるリスクマネジメント～ヒヤリハットを迅速に共有する～」、②遊びと学びとして「0から始まるド・レ・ミ♪」

2. 実践報告部門（14件の応募）

- (1)「優秀報告賞」：2件 ①石川県清和保育園：「H男の発達を求めて～音楽遊びを通して～」、この研究は、集団生活、友達との交流不得意なH君の発達支援について、マーチング遊び等を通してコミュニケーション力を始め、発達支援に取り組んだ研究報告。
②沖縄県第2愛心保育園：「食物アレルギー児の健康と安全について～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたもの」、アレルギー児対応して、エピペンの使い方勉強会の開催、対応マニュアルの作成、緊急時対応、職員、保護者アンケート調査等多面的な取り組み。
- (2)「実践奨励賞」（8件）：①「遊びの発展に必要な援助～友達の間から見えてきたもの」、②「英語で遊ぼう～Let's play in English」、③「保育環境を考える～異年齢保育の視点から～」、④「作って遊ぼう～できたことの達成感から次への探求心へ～」、⑤「子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて」、⑥「アレルギー代替食の対応について～アレルギー対応マニュアル作成を経て～」、⑦、「このことの大切さ～這い這い遊びを通して運動機能を高めよう～」、⑧「体づくりと心を育む食育活動～食育活動から見えてきた子どもたちの育ち～」
- (3)「奨励賞」（4件）：①「異年齢交流から見えてくるもの～3歳未満児と3歳以上児～」、②「社会福祉法人都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」、③「地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを～」、④「水・砂・土と触れあいの中で見えてくる子どもの思い～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりとして～」

以上が平成27年度保育実践研究・報告審査の概要です。保育の専門性の向上に向けて、各園とも日頃から努力されておられますが、その成果をまとめ、検証し改善につなげることは、保育の専門性の向上、保育内容の充実・向上のために大切なことです。保育を科学する心をもって取り組むと、新しい発見もあり、保育に寄せる夢も広がります。次世代の子ども達の健全な生活習慣の育成、保育環境の改善に向けて、調査研究の輪を広げましょう。

2. 入賞作の紹介及び講評

(1) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究①人との関わり

「人権に配慮した子どもへの関わりについて

～保育者の言葉の力を考える～」

浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）

課題研究① 人との関わり 人権に配慮した子どもへの関わりについて ～保育者の言葉の力を考える～

石川県・大徳保育園 浅香 聡彦

問題提起と目的

OECDはStartingStrongⅢにおいて、保育・教育に対する投資は「質」が担保されなければ無駄になり、子どもの育ちも阻害されると提言している。OECD教育局の田熊美保氏は、今後プロセスの質に関して調査やデータ収集を予定しているということで、それは①保育者と子ども②子どもと子ども③保育者と保護者の関係について行うとのことである。

自園においては、『すべては子どもの幸せのために』をスローガンに行動指針として、保育者は子どもに対して、小さな声で話す・子どもの目線に下りて接する・言葉をかけて子どもの気持ちが動いてから行動する、のものと保育をしている。

しかし保育者の子どもへの接し方、言葉のかけ方には個人差があり、「子どもには厳しく言うべきだ。」「そこまで言わなくても。」など職員間で相違があった。時に保育者が、子どもへ勇気づけとは反対の言葉をかけたり、子どもが否定的な感情を持ってしまう行動をとったりする場面があり、保育者同士が保育の価値観にズレがあるように感じていた。

近年虐待について気を遣う中、改めて保育の中でも、子どもの権利や人権について配慮することを前提として、エピソードを記録し、特に言葉を通した保育者と子どもの関わり、気持ちの分析を職員間で行い、保育者と子どもにどのような変化が起こるのかを明らかにしてみたい。

方法と期間

常勤保育者20名で、エピソード記述を用いて保育者と子どもの関わり、気持ちを分析する。

平成26年5月から平成27年5月まで、毎月1回園内研修時、約1時間を使って行う。

大徳保育園の概要

設置主体 社会福祉法人 大徳福祉会

設立年月 昭和53年4月

所在地 石川県金沢市畝田中1-97

定員 150名

園児数 0歳児 10名 1歳児 33名 2歳児 32名

3歳児 35名 4歳児 28名 5歳児 34名

合計172名

職員数 園長1名 主任保育士1名 副主任保育士1名

保育士28名（うち臨時・パート10名）

栄養士2名 調理員2名（うちパート1名）

事務員1名

（平成27年10月現在在籍）

子どもの人権について

研究の基盤となる子どもの人権について、「児童の権利に関する条約」を職員間で確認した。（表1）その後自分たちが保育の中で考える「子どもの人権」について、KJ法を使い話し合いを行った。それをまとめたものが（表2）である。

（表1）

「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」は、子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約である。18歳未満を「児童（子ども）」と定義し、国際人権規約（第21回国連総会で採択・1976年発効）が定める基本的人権を、その生存、成長、発達の過程で特別な保護と援助を必要とする子どもの視点から詳説。前文と本文54条からなり、子どもの生存、発達、保護、参加という包括的な権利を実現・確保するために必要となる具体的な事項を規定している。1989年の第44回国連総会において採択され、1990年に発効した。日本は1994年に批准した。

「子どもの権利条約」4つの柱

- 1：生きる権利 子どもたちは健康に生まれ、安全な水や十分な栄養を得て、健やかに成長する権利を持っている。
- 2：守られる権利 子どもたちは、あらゆる種類の差別や虐待、搾取から守らなければならない。紛争下の子ども、障害を持つ子ども、少数民族の子どもなどは、特別に守られる権利を持っている。
- 3：育つ権利 子どもたちは、教育を受ける権利を持っている。また、休んだり遊んだりすること、様々な情報を得て、自分の考えや信じる事が守られることも、自分らしく成長するためにとっても重要である。
- 4：参加する権利 子どもたちは、自分に関係のある事柄について自由に意見を表したり、集まってグループを作ったり、活動することができる。その時には、家族や地域社会の一員として、ルールを守って行動する義務がある。

子どもの権利には、二つの「選択議定書」が作られた。「子どもの売買、子ども買春及び子どもポルノに関する選択議定書」と、「武力紛争への子どもの関与に関する選択議定書」である。「選択議定書」は、ある条約に新たな内容を追加や補強する際に作られる文書で、条約と同じ効力を持つ。両選択議定書とも2000年の国連総会で採択され、2002年に発行された

(表2)

人権の柱	必要なこと	具体例
生きる権利	食事	・温かくておいしい食事を提供する。・その子に合った食事形態を考え用意する。・楽しい雰囲気の中で食べる。・宗教に応じた食の対応をする。・子どもの口に合った大きさに食べ物をカットする。・アレルギー児の除去食の対応をする。・子どもの体調に合った食事を用意する。・個々の好き嫌いの把握をする。
	排泄・着脱	・子どものペース、成長に合った援助を行う。・着替えや排泄は人から見える場所ではない。・汚れた服をすぐに着替える。・排泄を失敗した場合、他の人に気づかれないように処理する。
	美しい環境・快適に過ごせる環境を守る	・清潔で綺麗な環境を用意する。・おもちゃや机、椅子などの整頓を行う。・声をかけてから鼻を拭く。・適度な室温調節を行う。・おしぼりを温める。・衛生面に気を配る。
	生命保持	・こまめな水分補給を行う。・十分に休息をとらせる。・体の異変にすぐに気づく。
	子どもの成長	・大きく育ったことを喜ぶ。・1人ひとりの成長を喜ぶ。・その子の成長を知る。・他の子の成長と比較しない。
	情緒	・1人ひとりの表情から思いや体調の変化をすぐに読み取る。・その子の表情の変化に気づく
守られる権利	感謝	・子どもにお願いをしたら最後まで見届ける。・「ありがとう」の言葉で感謝の気持ちを伝える。 ・協力してくれたことへのお礼を言う。
	安心	・気持ちを受け止めてもらえる。・笑顔で関わる。
	安全	・子どもの安全を守る。・危ないことをみんなで知る。・安全な過ごし方や道具の適切な使い方を知らせる。・怪我をしたときにどんな小さな怪我でも受け止め処置をする。・窒息死を防ぐため、うつぶせ寝をさせない。
	行動を認める	・努力を認める。・一緒に喜ぶ。・自分で行動できたことを認める。
	その子のプライバシーを守る	・容姿を悪く言わない。・1人ひとりが違う人間であることを知る。・友達と比較しない。・オムツ交換コーナー以外で、オムツ交換をしない。・人前で裸になったりオムツを換えることは恥ずかしいことだと伝える。・排泄の失敗をこっそり始末する。・家庭の事を根ほり葉ほり聞かない。
	個性を守る	・キャラクターを使用しない。・名前を呼び捨てにしない。・男女差別をしない。・誕生日会をその子の誕生日に行う。・1人ひとりを知る。・思いを聴く。
	待つ	・子どものことを信じて待つ。
	人との関係	・目を見て話す。・視線に下りて話す。・名前を呼ぶ。・友だちとの関わりが上手くいくように仲立ちする。
	快適に過ごせる環境を守る	・清潔で綺麗な環境づくりをする。・おもちゃや机、椅子などの整頓をする。・声をかけてから鼻を拭く。・室温の調節をする。・おしぼりを温める。・衛生面に気を配る。・いつも同じ生活リズムがある。

育つ権利	意欲を引き出す	・今したいことを出来る限り尊重する。・選択肢を作る。
	伸びようとする力を助ける	・出来た時にたくさんほめる。・個々の発達に合ったおもちゃを用意する。
	子どもの力を信じる	・ありのままの姿を認める。・気持ちが動くのをゆっくりと待つ。
	肯定的な言葉をかける	・丁寧な言葉がけをする。・言葉をかけてからその子への援助をする。
	温かい笑顔	・笑顔で接する。・笑顔で思いを受け止める。
	気持ちに寄り添う	・先入観で決めつけない。・気持ちを受け止める。・嫌なことややりたくないことも認める。
	個々の尊重	・抱っこしてほしい時に抱っこする。・不安定な時に抱きしめる。・その子の性格や思いを否定する言葉がけはしない。
	共感・共有	・子どもの気持ちを大切に。・喜びや感動を共にする。
	自分で決める	・思いを聞き、本人が決断できるようにする。
参加する権利	経験を豊かにする	・友だちと同じ経験をする。・自分のしてみたいことをチャレンジする場がある。・選ぶことができる。
	社会のルールやマナーを伝える	・集団の中でのルールやマナーを伝える。
	あそびを伝える	・あそびへ誘う。・大好きなものが増えるように誘い掛ける。・一緒に遊ぶ。

事例と考察

【事例①】

人権に配慮した保育とはどのような保育なのか、自分の保育をエピソード記録し、自分自身の保育を振り返る。

(ねらい) 保育の中で、自分自身がどのような言葉をかけて子どもに関わっているかを振り返る中で人権に配慮した保育とはどのような保育なのかを考察していく。

(方法) 1つのエピソードに対しグループ討議を行う。

- ・グループ討議は6～8人のグループを作り、司会進行役、書記を決める。

(エピソード記録用紙)

記録者

背景 (子どもの状況・家族構成)	
------------------	--

題名 ()

子どもの姿・保育者の関わり	保育士の思い
考察・振り返り	

- ・グループのメンバーは担当年齢や保育経験年数は関係なく、できるだけ幅広い視点から意見が出されるように構成する。なお、グループにはエピソード記録者(以下、記録者)は所属しない。
- ・記録者がエピソードを読み上げた後、人権に配慮していると感じられる関わりや言葉がエピソードのどの場面から読み取れるかを意見として挙げていく。感じられる文章に下線を引く。
- ・意見をまとめ、グループごとに代表者が発表する。
- ・発表から得た学びや今後の課題を記録者が発表する。
- ・記録者の振り返りのみにならないように、主任保育士が園全体の保育の課題として捉え、まとめを述べる。

<エピソード①>

背景（子どもの状況・家族構成）Aちゃん4歳児女児（3、4、5歳児異年齢クラス）

家族構成…母、兄(小学3年生)、兄(小学1年生)、本児。母子家庭。

いつも一緒に朝、食事をしたり、登園したりしてきた兄が4月より、小学生になることで生活リズムが変わり、本児1人での朝食や登園になる。『Aちゃん頑張る。』と心に決め、登園してきているが、やはり、不安やこころの支えが実際少なくなっているところに、1年生の兄が交通事故に遭い（幸いけがも小さく、入院の必要はない）、母は小学校への送り迎えもしていたり、生活が変わった次男が中心の生活になったりしている（保護者から現在の生活や心のケア等の相談の話が何件かある。）。そんな中、保育園のクラスでも初めて年上の年齢になり、甘えたくても保育者が年下児の援助をしていたり、かまったりしており、以前自分がいたひざの上の時間や抱きしめてほしい瞬間に甘えられる時間が減ってきている現状の中、Aちゃんとの食事前の関わり。

前日には私がAちゃんを抱きしめていることを年下児に見られ、その後、年下児が「あたしもっ。」と言い、私が年下児Hちゃんを抱きしめた姿をさみしそうな表情でAちゃんが眺めていた。

☆エピソード① 題名「私を見て。」

（子どもの姿・保育者の関わり）

食事前に絵本を読み終わり、私が手洗いを促していた時、Aちゃんが私の顔を見て、もじもじとしながらなかなか手を洗いに行こうとしない。以前は毎日、手洗いの前に必ず抱きしめる時間を欲していたので今日もと思い、「Aちゃんおいで。」と手を伸ばし、歩み寄ると、「Bさん（保育者の名前）。」と笑顔で歩み寄ってくるのだが、抱き着いては来ない。私が「Aちゃん、ごはん食べてきてね。」とにっこりと笑い手を握ると、「うん。Aちゃんいっぱい食べるね。」と更に笑顔になる。「ここ、かたい。」と左袖を上げられない様子だったので、「くるくるってするげんよ。」と話し、やってあげると、「ありがとう。」と言い、手を洗いに行く。翌日も同じように、手洗いの前に「Bさん。」と歩み寄ってくるが自分から抱き着くことはなく、左袖を出し、にっこりと笑ってくる。「Aちゃんの服濡れたらいやもんね。上手に手を洗う時には、しっかり、まくらんなんもんね。」と言いながら、袖をまくっていくと、「Aちゃん、12345って上手に洗えるげんよ。Bさんに教えてもらった。」「Aちゃんできるよ。」とにこにこしながら話し、手を洗いに行った。その後ろ姿を見て、無性に抱きしめたくなくなった。

（保育者の思い）

毎日の習慣でもあったが、昨日、年下児に真似をされ、何か心にひっかかったのかな?と思い、私の方から、『あ

なたはあなたのままで変わらなくていいよ。』という気持ちを込めて、「おいで。」と呼びかけ、歩み寄った。そのことに安心してくれたのか、いつもの笑顔と声で、駆け寄ってくれたことを嬉しく思いながらも抱き着いてこない姿を見ると、何か気持ちが晴れない部分もあるのかなあと感じた。翌日の行動の変化言葉は自分だけの行動を探し、特別な時間を欲している事と、Aちゃんが自分の力でいろいろとがんばろうと思ったり、私との関わりを持ってきた時間を大切に思ってくれているのではないかと感じた。でもまだ、自分を見てほしいから、自分だけの特別を探しているのではないかと感じた。

（考察・振り返り）

様々なことが重なって、Aちゃんなりに抱えているけれど、それでも、心のどこかで保護者の事、家族の事、そして保育者の事を信じていてくれるからこそその行動や言葉だと感じた。しかし、Aちゃんに多少なりとも不安を持たせてしまっていた自分を改めて認識し、もっと1人ひとりに適切、かつその子の特別なものになるように、心を開ける行動や言葉、気持ちをその子にわかるように伝えていかなければならないと感じた。

（グループ討議で出た意見発表）

袖をめくりあげることを本当は自分でできるが、保育者に手伝ってほしいという本児なりに関わりを求めている。保育者は本児が袖をめくりあげることは自分でできると知っているが、「自分でできるでしょ。」といった言葉がけをしていない。励ましの言葉は必要だが、本児が保育者との関わりを持ちたいことが目的で、出来ることでもできないとアピールしてきていることを日々の中で見逃していないかということそれぞれの保育の中で振り返っていきたい。

（グループ討議後の記録者の気付き）

自分の保育を振り返り、これまでは「出来るよね。」という言葉がけを行ってきた。出来るけれどもAちゃんの「かたい。」という言葉の裏の思いを私はいつも探っていかなければいけないと気付かされた。

「出来ない。」の子どもの言葉に対しては、「出来ないの?」とは言わず、「くるくるってまげるんやよね。」とわかっていることを確認、その言葉の本当の意味、その子のその言葉を発している時の子どもの表情を見逃さずに関わりたい。

「これBさんに教えてもらったよ。」の言葉に対しては、私はこんなふうに見えるようになったよというアピール。私との触れ合い、関わり、私への思い、を求めているのだと感じた。

（今回のグループ討議を行って）

子どもが自分の力でできると判断して「出来るでし

よ。」という言葉をかけてはどうかということに対して、子どもの発達やその時の状況を見極めることが必要ではないかという意見が挙がった。

「できない。」「やって。」という子どもの言葉に対して、保育者は「きっとできるからやっごらん。」「前もできたからできるでしょ。」といった言葉をかけがちである。しかし、その子どもの姿から本当にできなくて困っているのか、やりたくなくて行動に移せないのか、今回のように保育者との関わりを必要として次の行動へと気持ちがなかなか動かなかったのか、それぞれの子どものその時の状況によって全て異なる。子どもが保育者との肌の触れ合い、心の触れ合いを求めてきているのに、保育者はその子のできるという結果を求めている場合、気持ちはかみ合わず、思いが通い合うことは難しいと考える。

【事例2】

(ねらい) 保育者の言葉の意味や、その言葉の奥にある

(書記用の用紙)

保育者の言葉	保育者の気持ちと所感	子どもの気持ちと所感

変更点③

保育者と子どもの気持ちを理解するために、エピソードの内容を保育者役、子ども役に分かれ、グループの中でロールプレイングを行う。

(ねらい) と (方法) はこれ以降同じとした。

<エピソード②>

背景 (子どもの状況・家族構成) Hくん 4歳児男児 (3、4、5歳児異年齢クラス)

家族構成…母、妹 (2歳児)、祖母、叔母、本児、再婚した父。

最近母親が再婚し、新しい父親とよく出かけたことや、一緒に遊んだことを嬉しそうに話す姿がみられる。母親の話では、家ではふざけて周りの大人が「おもしろい子やね。」と言って笑うのを喜んでか、ふざけることが多いとのことだった。保育園でのふざけがエスカレートしてしまふことがあり、年上児や保育者から声をかけられても、なかなかセーブできない場面もみられる。一方、年下児を気にかける姿も見られ、特にNちゃん (3歳児女児) の様子を気にかける姿がある。ただ、強く言いすぎたり、無理に手を引いたりしてしまふことがあり、トラブルとなってしまうことも多い。

保育者の思いや考え、そしてその言葉から子どもはどのような影響を受け、どのような思いでいるのかを考察する。

(方法) エピソード①のグループ討議では良い保育者の関わり、言葉、子どもとの人間関係がエピソードに表れていたにも関わらず、あまり多くの意見が挙がってこなかったため、グループ討議の仕方を変えることにした。

変更した内容は以下の3点である。

変更点①

保育者の言葉の力に重点に置き、保育者の言葉の部分に下線を引きその言葉の奥にある保育者の思いや考え、下線部の保育者の言葉を受けての子どもの気持ちを考える。

変更点②

書記は白紙にグループで出た意見を記載していたが、書記用の用紙を作成し記載していく。

☆エピソード② 題名「Hじゃないよ！」

(子どもの姿・保育者の関わり)

室内あそびの時間にわらべうたコーナーの方から、Nちゃんの泣き声が聞こえる。周りの子どもたちもその声に気づき、近くの子や気づいた子が数人「Nちゃん、どうしたん?」「大丈夫やよ〜。」と言いながらNちゃんのほうへ集まってくる。保育者もすぐにNちゃんの近くに行くと、NちゃんのそばにHくんが立っている。①「Nちゃん、どうしたの?」と保育者が聞くと、すかさずHくんが「Hなんもしてないよ!」とNちゃんに向かって強く言う。②「Hくんにも順番に話さくね。」と伝えると少し落ち着くが、Nちゃんが「Hくん〜。」と言って泣く姿を見て「Hなんもしてないし!」と怒っている。「Hくん、こわい。」とNちゃんがずっと言っているので、③「Hくんのこと怖いって言っとるんやけど、なんでかわかる?」とHくんに尋ねる。Hくんは「Hなんもしてないし!」と何度も言う。「んー、でも怖いって言われたまんまやったら嫌じゃない?もしかしたら、HくんがいじわるしたつもりじゃないことでもNちゃんは嫌やたんかもしれんし。」と話す。「Hいじわるなんかしてないし!」「Nちゃんが悪いことしとってんよ!」とヒートアップしてくる。「Nちゃんが悪いことしとって何しとってん?」と尋ねると、「ここ (じゅうたんの上)

に寝とった。「やから、ダメだよって言ってんに聞いてくれなかったし。」「Hはここでこがねのゆうししたかったんに。」と話し出す。「そうなん。Nちゃんに教えてくれたのは嬉しいけど、強く言ったらNちゃんがどう思うか前話したことあったよね。」④「これからどうしたらいいと思う？」と言うと「やさしく話す。」と答える。⑤「そうやね。こがねのゆうししたいから場所あけてって言ってもよかったかもしれんね。」と保育者が話す、「いっしょにするのは？」とHくんからの提案もある。「それもいいね！そしたらNちゃんも嬉しいかもしれんね。」と伝える。最後に⑥「Hくんが怒らんなんくなる前に助けに行ったらよかったね。ごめんね。」と言うと「ううん。」と答え、「もうごはんの時間になってしまったわ。」と言うと「ごはんやってー！」とクラスの子たちに呼びかけに行く。

(保育者の思い)

以前から毎日のように同じようなトラブルがあり、直前までHくんとNちゃんがいっしょに遊んでいたのに、Nちゃんの泣き声が聞こえたときに、『もしかするとまたHくんかな？』とってしまう。Nちゃんは、声をかけることで落ち着くときもあるので、まずNちゃんから声をかける。以前、本児に話を聞かず、Nちゃんの言葉から一方的に本児を疑ってしまったことがあり、本児には「ちゃんと聞くからね。」と伝えることで、少し落ち着いてもらおうと考えた。

はじめ、本児に尋ねた時、心の中で『Nちゃんに本当は何かしたんじゃないかな。』という思いを持ちながら話す。本児がずっと「Hじゃないし。」という姿を見て、疑っている気持ちを無くして話す。話を聞いて、まずは本児が良かれと思ってしたことを受け止め、どうしたらいいのかもう一度話す。本児からの提案があったことを嬉しく思い、「いいね！」と伝えた。

<グループ討議でエピソードから拾い上げた保育者の言葉>

保育者の言葉	保育者の気持ちと所感	子どもHの気持ちと所感
①「Nちゃん、どうしたの？」	◆以前からHとNの間でトラブルがあったので、Nちゃんの泣き声が聞こえた時に『もしかするとまたHくんかな！？』とってしまうその気持ちで関わっている。	◆「Nちゃん、Hくんどうしたの？」って2人に向けて聞いてほしいのではないかな。
②「Hくんにも順番に話さね。」	◆普段から、『Hくん何かしたんやろ！？』というような関わりがある様子がうかがえる。 ◆Hを受け止める言葉があるともう少しHの気持ちも落ち着いたのではないかな。	◆『また怒られる！』『また何か言われる！』というHの焦りのようなものもうかがえる。 ◆『またか。』と思っている保育者の気持ちはHに伝わっていると思う。
③「Hくんのこと怖いって言っとるんやけど、なんでかわかる？」	◆Nの思いになって表現する保育者の言葉。Nの方が大事に思われている言葉に感じる。 ◆保育者の誘導する言葉が気になる。Hの言葉や表情を見て、言葉に換えてあげたらよいのではないかな。 ◆保育者は、もっとHの言葉や表情からいいところを見てほしい。 ◆「Nちゃん、Hくん怖くないよ。大丈夫だよ。」とNに伝えることもできる。	◆Hくんの心境としてはとても辛い立場。『自分を分かってほしい。』『話を聞いてもらえない。気持ちを聞いてもらえない。』 ◆『自分より他の子の方が大切なんだ…。』という思い。『自分のことも受け止めてほしい。』
④「これからどうしたらいいと思う？」	◆H自身が考えられるような言葉ではあるが、Hを責めながらの問いかけ。どう答えてほしいのか保育者の思いがHに敏感に伝わっている。	◆Hを責めている口調で、どう答えたら許してもらえるのかと顔色をうかがってしまう。
⑤「そうやね。こがねのゆうししたいから場所あけてって言ってもよかったかもしれんね。」	◆少しずつ、気持ちがHの立場に向いてきているように感じられる。高ぶっていた保育者の気持ちも少し冷めてきている様子。	◆保育者の提案によって本児の中で、関わり方が明確になった。 ◆HくんのNちゃんと一緒に楽しく遊びたいという気持ちが膨らんでいく。
⑥「Hくんが怒らんなんくなる前に助けに行ったらよかったね。ごめんね。」	◆Hのことを思ってHに向けて保育者の思いを伝えている。	◆なんとなく納得もいき、なんとなく心も晴れた。

(考察・振り返り)

以前も本児を疑ってしまったことがあったのにもかかわらず、今回はじめ『何かしたんだろうな。』という思いをもって関わったことが本児にも伝わっていたのではないかと思い、反省する。何度も同じことが続き、「やさしく言わんなんよって前も言ったやろ？」と話を終わらせてしまうことが多かったなと思った。毎日のように起こっていることでも腰を落ち着けて話すことで、本児もすっきりした表情となり、向き合う姿勢をみせる大切さも改めて感じた。同時に、本児が怒らなければならなくなる前に気づいてあげられなかったということも本児と話している間に気づくことができた。

(グループ討議で出た意見発表)

保育者の言葉がけ、Hの発言から、Hがいつも疑われているような感じがする。Hの寂しい思いが伝わってくる。Hが本当に伝えたい事をしっかり聞いてあげる必要があるのではないか。保育者の誘導するような言葉がけが気になる。誘導尋問のような言葉がけではなく、Hの思いを聞かせるような言葉がけの方が良いのではないか。保育者はもっとHの言葉、表情からいいところを見てあげてほしい。

(グループ討議後の記録者の気付き)

本児に対して厳しい自分に気づかされた。本児の立場になって自分の考えも交えて話をしていきたい。自分が固い表情や体の動きになっていたと感じる。もっとやわらかい表情で関わっていきたい。

(今回のグループ討議を行って)

保育者の言葉を1つずつ拾い上げることで、前回のグループ討議よりもその言葉にある保育者の気持ちを保育者1人ひとりが考えたり、その保育者の言葉に対する子どもの気持ちを丁寧に分析したりすることができた。また、保育者と子どもの立場になって実際にエピソードをロールプレイングすることで、その時の保育者の表情はどうであったか、声の大きさやトーンはどうであったか、言葉と共に表情・声色・保育者の身の構え方などはどうであったかという分析にもつながった。ロールプレイングでは、優しい声色でゆっくり話す場合と、冷たい口調で早口で話す場合といったようにパターンを変えることで子どもはどう感じるか、などと実践する姿も見られた。また、保育者の言葉を1つひとつ拾い上げ考察することやロールプレイングをすることで「自分だったら別の言葉で対応した。」という意見や、「この言葉は子どもにとって否定的な感じがする。どういう対応が良かったのだろうか。」など、これから改善する必要があるのではないかといった内容の指摘をし合うきっかけとなった。また、一緒に悩んで自分だったらどうするかと自分の保育と照らし合わせながら考える姿も見られた。グループ

発表の際には、良かった所だけではなく、グループ討議で出たこれから改善していく必要がある点についても発表し合ったため、その意見を受けショックを受ける場面も見られた。しかし、一緒に良くしていこうという思いが他の保育者の温かいまなざしや姿勢から感じ取ることができ、記録者も素直に受け止め、今後の課題をみんなの前で発表することができた。

子どもの人権を守りながら保育をしたいという思いを保育者間で共有することで、まずは記録者の良い所を見つけそれを意見として発表するというのがグループ討議の回数を増すごとに、上手くなっている。

また、良いところのみならず、それぞれが相手とは違う意見を述べたり、改善策を提案したりする姿が見られ、グループ討議や意見発表をしている雰囲気はどんどん良くなっている。

<エピソード③>

背景(子どもの状況・家族構成) Yちゃん 1歳児女児(1歳児クラス)

家族構成…父、母、本児。

何事に対しても意欲的で活発に遊ぶ。最近少しずつ自我が芽生え、自分の思い通りにいかないと怒る姿が見られる。

☆エピソード③ 題名「見て！」

(子どもの姿・保育者の関わり)

お部屋で遊ぶ。パズルをしているSちゃん(1歳児女児)のパズルをやりたかったようで、強引に無理矢理、横からYちゃん取る。Yちゃんに①「Sちゃん、今このパズルしているみたいだよ。」と声をかけるが、怒って大きな声をあげる。②「Yちゃんもこのパズルしたいね。」③「でもSちゃんが今このパズルしているから、ちょっと待ってよう。」と話す。「うん。」とうなずく。待っている間、他のパズルに誘うと首を横に振り、嫌がる。自分で他のあそびを探し始めるが、見つけることができずマグネットを口の中に入れる。④「Yちゃん、ペしてくれる。」と声をかけると、口からマグネットを出してくれる。⑤「Yちゃん、何して遊ぶ？」と聞くと、自分から「これ！」と言いパズルを持って来て椅子に座り、パズルを始める。保育者はYちゃんの隣でパズルをする姿を笑顔で見守る。自分で向きを考えながらピースを型にはめていき、パズルが完成すると「できた。」と嬉しそうに見せてくれる。⑥「Yちゃんできたね。すごい！」と認めると嬉しそうに笑う。パズルを元の場所に戻す。⑦「ありがとう。」と伝えると保育者の目を満足した表情で見て、他のあそびを再び探し始める。

(保育者の思い)

最近、友達が遊ぶ玩具を横から取る姿が見られるようになってきているので、『またしている。』とマイナスな

感情でYちゃんの姿を見てしまう。少しSちゃんとのやりとりを見て、エスカレートしそうになったため声をかける。Sちゃんの気持ちを始めに代弁したのでYちゃんが更に声をあげたのかなと思い、Yちゃんのやりたい気持ちを受け止める。先にパズルをしていたSちゃんの気持ちを大事にしたいのでYちゃんに気持ちを切り替え出来るよう他のあそびに誘う。自分からあそびを探し始めたので見守っていると口の中にマグネットを入れるという注目行動を始めたのでYちゃんに優しく声をかける。Yちゃんがやりたいと思ったパズルを持って来たので、Yちゃんのそばで笑顔で見守る。パズルが完成した時には十分に認め喜びを共有する。1対1でゆっくり保育者

と遊ぶことができ、満足したから再びあそびを探し始めたように思う。

(考察・振り返り)

友達と玩具の取り合いをしている姿を見て、私がマイナス感情を持ってしまうので、これからは友達に興味を持ち始め関わろうとしている、あそびに意欲的なのだとプラスに捉えていきたいと思う。また、最近保育者に対する注目行動が見られるので、ゆったりと関わりながら1対1の時間を大切にし、肯定的な言葉をかけていきたい。また「大好き」という気持ちを伝えていきたいと思う。

<グループ討議でエピソードから拾い上げた保育者の言葉>

保育者の言葉	保育者の気持ちと所感	子どもYの気持ちと所感
①「Sちゃん、今このパズルしているみたいだよ。」	◆Sちゃんの気持ちを先に代弁してしまったと気づいている。	◆保育者のやめてほしいという気持ちが伝わっている。もっと私を見てほしいという気持ち。
②「Yちゃんもこのパズルしたいね。」	◆Yちゃんの気持ちを理解しており、次の行動へとつながる。しかしこの時のSちゃんの気持ちはどうなのか。	◆気持ちを分かってくれた。Dさん(保育者)は仲間。
③「でも、Sちゃんが今このパズルしているから、ちょっと待ってよう。」	◆「待ってよう。」の言葉の語尾の「いよう。」から発言の強さを感じられる。この時の語尾の言い方、表情、子どもに対する姿勢はどうだったのか。	◆待ってたくないが待ってようと強制され、気持ちを押し付けられている感じがする。
④「Yちゃん、べしてくれる。」	◆肯定的な気持ちで優しく言葉をかけている。	◆優しく言葉をかけてくれたので素直に吐き出した。
⑤「Yちゃん、何して遊ぶ?」	◆一緒に探そう、Yちゃんの思いに耳を傾けよう、Yちゃんをそばで見守りたいという思い。保育者自身がゆったりとした心構えでいる。	◆一緒に探してくれて、そばで見えてくれて嬉しい。Dさん(保育者)大好き! Yちゃんもゆったりとした落ち着いた気持ちになる。
⑥「Yちゃんできたね。すごい!」	◆Yちゃんと同じ気持ちでできたことの喜びを感じている。	◆達成感を感じており、共感してもらえたことで、より喜びの気持ちに変わっていく。嬉しさでいっぱい
⑦「ありがとう。」	◆Yちゃんが楽しく最後まで遊べたことに対する喜びの気持ち。そして、あそびを満足して終えることができ自分で元の棚にパズルを戻すことができたことを褒めて認めてあげたいという気持ちから感謝の言葉が自然と出た。	◆大好きなDさん(保育者)に感謝の気持ちを言われとても嬉しい。自分の存在を認めてもらった感じ。あそびを満足して終えることができ、達成感であふれている。

(今回のグループ討議でのロールプレイング)

エピソードの中にある①「Sちゃん、今このパズルしているみたいだよ。」という保育者の言葉の裏には、『またしている。』というマイナスの感情があるという意見

が出た。同じ言葉であっても、保育者のその時の心持ちで子どもへの伝わり方は変わるという意見から、様々な心持ちで同じ言葉を子どもに伝えるというロールプレイングをグループで行った。そして、Yちゃんになってみ

	保育者の心持ち	子どもYの気持ち
1	Sちゃん、楽しそうだねということをYちゃんに伝えたい。	保育者の笑顔から自分の気持ちも守ってくれていると感じる。自分の気持ちもきっと分かってくれる。
2	Sちゃんのパズルを取らないで！	あなたが悪いでしょという保育者の気持ちが伝わってくる。
3	またしてる！！しないで！！	2で感じたよりも、より強く言われた気持ちになり、叫びたくなる。

てどのような気持ちになったかを話し合った。保育者の心持ちは以下の3パターンで実践した。その結果以下のような子どもの気持ちが推察された。

また、①の下線の言葉を1～3の心持ちで表情を変えて話すということも行ってみた。笑顔なのか無表情なのか、困った表情なのか、怒りの表情なのかでもずいぶん心持ちの伝わり方が変わった。

ここでは、言葉、保育者の心持ち、表情をリンクさせることが重要であり、どれか1つでも一致しないと、保育者の心持ちは伝わらず、子どもは混乱し不安になることが分かった。

(グループ討議後の記録者の気付き)

子どもは物事を敏感に捉える力があり、保育者の心持ちも敏感に読み取るということを感じた。保育者の表情が険しいと、子どもはDさん(保育者)に嫌われているのかもしれない、好きって思ってもらえていないと不安な気持ちになるのだと分かった。言葉がどんなに肯定的であっても、子どもは保育者の表情ひとつでその時の保育者の気持ちを察するということを学んだ。言葉も心持ちも肯定的に、子どもたちと関わっていけたらと思った。

(今回のグループ討議を行って)

グループ討議の回数を重ねるごとに、意見を言うことが苦手な保育者も自分なりの考えを述べる姿が見られるようになり、討議が盛り上がりつつあった。保育者の言葉を1つひとつ拾い上げ、その言葉の裏にある保育者の心理面を探った。同じ言葉でもその言葉を述べる時の保育者の表情、視線、声色、身の構え方は言葉と同様に子どもの心に伝わり、子どもの気持ちは大きく変化するということがロールプレイングの中で実感した。また言葉の裏にある保育者の心持ちは敏感に子どもに伝わるものであると1人ひとりが実感する姿が見られた。

<エピソード④>

背景(子どもの状況・家族構成) Iくん 3歳児男児(3、4、5歳児異年齢クラス)

家族構成…父、母、本児。

普段から食べたくないものには手をつけず、泣いて訴

えて意見を通そうする。

☆エピソード④ 題名「何になる？」

(子どもの姿・保育者の関わり)

昼食時にご飯と味噌汁の汁しか手をつけていないIくん。ご飯が終わる、と下をむく。①「Iくんご飯たべて。」と声をかけるがうつむいたままのIくん。他の子に声をかけられその子と話し、再びIくんの方を見ると私のほうをちらっとみてスプーンを床に落とす。②「スプーン落ちたよ。」と声をかけるが下を見つめたまま。③「スプーンなんで落とすん。」④「もうご飯いらんの。」と聞くと「いる。」と答えたため「そしたらスプーンひらって洗ってきてね。」と伝えるとIくんが洗いに行く。帰ってきたIくんに⑤「スプーンを落とすのはやめてほしい。」と伝えると顔をうつむいたままうなずく。私が⑥「何食べる？」と聞くと「お味噌汁。」とIくんが答えて自分で食べだす。Iくんに⑦「人参食べたらず速くなるげんよ。」と話すIくんは「なんで。」と聞く。「馬って速いやろ。」「それは人参たくさん食べているからねんよ。」と伝えると人参をじっと見つめた後、自分で口に入れる。食べ終わると「速くなってきた。」と笑顔で話す。私は⑧「やろ。」と答える。一口食べるごとに「速くなってきた。」と話すため嬉しくなり私も笑顔になる。お味噌汁を全部食べ「食べたよ。」と笑顔で話す。⑨「食べられたね。」と言う。まったく手をつけていないおかずを指さし「きゅうりのあんかけだよ。」⑩「食べてみ。」⑪「お汁じゅってでてくるよ。」と伝えIくんに食べさせず。少し眉にしわをよせた後「お汁でてきた。」というIくんに「やろ、たくさんでてくるやろ。」と答える。その後あまり美味しそうな顔をしないが、自分からきゅうりのあんかけを食べる。全部食べられた後「食べられた。」「ごちそうさま。」と笑顔になる。

(保育者の思い)

いつも素直にご飯を食べてくれないIくんに正直苛立ちを感じる時もあるが、この日はIくんとじっくり関わってみようと思えるべく怒らずに関わることを心がける。スプーンを落とした時にわざと落としたと心の中で思った。しかしスプーンを落とすことはどうしてもしてほしくなかったためそのことはIくんに伝えた。気持ち

を切り替え食べさせるように声をかけ、食べ物に興味を持ち、食べるきっかけになってほしいと思い声をかけてみる。あんかけを食べた後あまり美味しそうな顔はしなかったが、否定的な声かけよりもっと興味をそそって

いきたいと思い、笑顔で「でてくるやる。」と共感した。Iくんが食べてみようというきっかけになったらと思いをかける。

<グループ討議でエピソードから拾い上げた保育者の言葉>

保育者の言葉	保育者の気持ちと所感	子どもの気持ちと所感
①「 <u>Iくんご飯食べて。</u> 」	◆もっと食べてほしいという気持ち。 「○○食べられたね。」「もうお腹いっぱいなの?」と言う言葉の方が良いのではないか。	◆保育者の気持ちを押し付けられているような感じ。
②「 <u>スプーン落ちたよ。</u> 」	◆自然の成り行きで起きたかのように伝えているのは、Iくんプラスの気持ちで食事の時間を過ごしてほしいという思いがあるから。	◆自分のことを見てくれたんだという嬉しい気持ちと、もう食べたくないという気持ち。
③「 <u>スプーンなんで落とすん。</u> 」	◆下をみつめたままのIの姿に少し苛立ち、「なぜ落とすのか」という問いかけに変わっている。	◆大好きな保育者に声をかけられて嬉しい。でももう食べる気持ちがない。問い詰められて食べたい気持ちが更になくなっていく。
④「 <u>もうご飯いらんの。</u> 」	◆食べてほしいという気持ちと苛立ちが伝わってくる。	◆大好きな保育者に声をかけられて嬉しい。食べてほしいという保育者の思いが伝わるからこそ「食べなきゃ。」という気持ちもあるが保育者の苛立ちの様子も伝わり少し不安。
⑤「 <u>スプーンを落とすのはやめてほしい。</u> 」	◆マナーをしっかり守っておいしく食べてほしいという気持ち。	◆だんだん強く責められ、大好きな保育者の顔を見ることが出来なくなってきている。自信がなくなっていく。
⑥「 <u>何食べる?</u> 」	◆気持ちを切り替えようという前向きな言葉。やっぱり私はIくんに楽しい雰囲気の中でおいしくご飯を食べてほしいという本来の気持ちに戻る。	◆大好きな保育者の表情や言葉が明るくなったので、Iの気持ちも気分転換される。
⑦「 <u>人参食べたなら足速くなるげんよ。</u> 」	◆楽しくおいしく食べてほしいという保育者の肯定的な思いが感じられる。 Iくんがイメージしやすいように話をしている。	◆大好きな保育者と一緒に楽しく会話しながら食べることで気持ちも楽しくなってきた。『食べようかな』から『食べたい』という気持ちに変わりつつある。
⑧「 <u>やる。</u> 」	◆Iくんとのお話や食事が楽しいと保育者自身が感じている。食べてくれたこととても嬉しく言葉もはずんでいる。	◆大好きな保育者が喜んでくれていることが嬉しい。 しかし、少し押し付けられている気もする。
⑨「 <u>食べられたね。</u> 」	◆自分の言葉がけでIくんの気持ちも変わり、食べてくれたことがとても嬉しい。	◆大好きな保育者に食べられたことを認めてもらい嬉しい。
⑩「 <u>食べてみ。</u> 」	◆食べてほしいという気持ちがまた強く表れている。この調子で完食してくれたら嬉しい、という思いが伝わってくる。	◆あまり食べたくないが、どうしようかなという気持ち。大好きな保育者がずっと見ていてくれて嬉しいという気持ちも大きい。
⑪「 <u>お汁じゅってでてくるよ。</u> 」	◆食べたいという気持ちになるように、興味を持ってもらえるように言い方に工夫をしている。	◆心が動き、少し興味を持って食べてみようと思う。大好きな保育者が関わってくることが嬉しい。

(グループ討議で出た意見発表)

エピソードの前半では、保育者の思いを押し付ける感じや子どもを責める関わりが見られるが、後半からは、保育者の『楽しくおいしく食べてほしい。』という思いによる関わりへと、大きく変わっていくのが読み取れるという意見が挙がった。子どもは大好きな保育者に関わりを持ってもらうことでおいしく食べる事ができ、Iくんも保育者との関わりを求めているのかもしれないという意見も挙がった。Iくんの姿から、大好きな保育者にもっと見てもらいたい、もっと関わってほしいという思いがうかがえる。そして子どもは、保育者から問い詰められたり、責められたりするようなことを意図的にすることで、自分を見ていてくれる、大好きな保育者が関わってくれるということを学習し、今後不適切な行動（スプーンを落とすこと）が、繰り返されることも予想されるという意見も挙がった。今後保育者の行動がパターン化しないために、自分の癖やパターンを見直し、子どもとの関係がより良いものになるにはどうしたらよいかということを考える必要があるという意見も挙がった。

(グループ討議後の記録者の気付き)

楽しくおいしく食べてほしいという思いがありながらも、やはり出されたものは全部食べてほしい、完食してほしいと自分は強く思っていた。この日はIくんとじっくり関わろうと思っていたが、エピソード前に手伝いに入ったフリー保育者が「食べられないなら残してもいいよ。」という言葉をかけており、そうすることで明日からも食べてくれなくなるのではないか。このような関わりによって残すことが癖になるのではと不安に思っていた。

(意見交換)

ここで私たちの園では、食事の時間はどうありたいかという話になり、保育者から次の意見が挙がった。

- ・体を作る大切な栄養をとってほしい。
- ・食べることが好きになってほしい。
- ・楽しい食事の時間を一緒に過ごしたい。

そして、上記のような食事の時間をもつためにはどうしたらいいかという話し合いをした。今回のエピソードでは、『食事は正しく座って時間内に盛り付けられたものは好き嫌いなく残さず全部食べてほしい。』という理想像が見えるという率直な意見が挙がった。一方で次のような意見が挙がった。今、好き嫌いがあっても好き嫌いは徐々に減っていくので、今食べられなくても大丈夫。将来的に薄れていく行動は、今注目しない。保育者の言葉がけで、食べることに興味や関心、意欲を持てるようにすることは大切であるが、強制はせず、最終的には食べるか食べないかは子どもが決めることであり、長い時間をかけて食べ終わるのを促しても本当の食べる意欲に

はつながらないのではないだろうかというものである。

(今回のグループ討議を行って)

これまでたくさん食べてほしいという保育者の思いから、長い時間をかけて食事をする場面がいくつか見られた。時間が長くなればなるほど食事は冷たくなり、その後の午睡時間や日課も崩れていた。そこで、もう少し具体的な基準というものが必要なのではないかと考えた。今回の幼児クラスでいえば、食事終了時間は遅くても13時までにするといった、具体的な数字や目安を挙げ、子どもに伝えることで、子どもたちがより安心して過ごせるようになるのではないかとということである。

総合考察

保育者と子どもの関わりをエピソードに記録することを繰り返し、保育者の関わりの中でも、特に保育者の言葉に注目をしグループ討議を行い、分析することで、保育者の言葉の裏にある思いや、その言葉を受けての子どもの気持ちを考えることができた。そしてこの研究を通して、保育者と子どもに以下の3つの変化が表れた。

①保育者と子どもの関係から見えてきたこと

研究前の保育者と子どもの関係	◆子どもの困った行動にすぐに目が行き、それを指摘しがちであった。子どもが主体と言いながらも、保育者の思いを伝えたいという強い思いから強制する場面も見られ、保育者主体といった上下関係が見られていた。
研究後の保育者と子どもの関係	◆子どもの気持ち、子どもの立場に立って考えることを意識するようになり、子どもの行動を肯定的に捉え関わるが増えた。子どもの1つひとつの行動に喜びや感謝の気持ちを持てるようになり、「助かったよ。」「嬉しいな。」「ありがとう。」という言葉が増え、保育者と子どもの関係が「人」対「人」の対等な良い人間関係に近づいてきている。

保育者は、子どもを変えようとするのではなく、自分自身が変わろうとし、考えながら関わり方や言葉の使い方を変えたことにより、子どもとの関係が上下から対等に変わっていったと考えられる。

②子どもと子どもの関係から見えてきたこと

研究前の子ども同士の関係	<p>◆友だちの悪い所を指摘し、責めたり、不適切な行動をしたことを、近くにいる保育者に何度も報告にきたりする姿が多く見られた。</p> <p>相手の不適切な行動を見つけたことに自信を持って伝えにくる姿から仲間関係はあまり良いとはいえなかった。</p>
研究後の子ども同士の関係	<p>◆大きな声で暴れて泣いている子に対して「どうしたの？何が嫌だったの？」と相手の気持ちを優しく確認したり、「みんな待っているよ。一緒に遊ぼう。」とその子の気分が変わるような言葉をかけたりする姿が多く見られるようになり、仲間意識が高まっている。年上児は年下児が困った行動をしても叱るのではなく、どうしたら自分の気持ちが伝わるのかを年下児の気持ちを考えながら関わる姿が見られるようになった。異年齢児が相互に育ちあっている。</p>

子どもは相手の子のことを変えようとするのではなく、どうしたら相手に伝わるか考え、自分の関わりや言葉の使い方を変えることで、相手に伝わる体験をした。周りにいた子は、どうしたらうまくいくか、その過程を見ることで、自ら試行錯誤しうまくいく体験をした。そしてその輪が広がっていったと考えられる。

③保育者と保育者の関係から見えてきたこと

研究前の保育者同士の関係	<p>◆相手の不適切な行動に目がいき、それを指摘し合うことが多かった。疑問に思うことがあって話し合っても相手を傷つけてしまったり、自信をなくしてしまったりと良い関係であるとは言えなかった。</p>
研究後の保育者同士の関係	<p>◆相手の立場や気持ちになって、相談を聞いたりこちらから話したりできる関係になってきた。相手の良い所に注目し、尊敬し合い一緒に保育を良くしていこうという思いが育ち、お互いを支え合える関係になってきた。</p>

保育者自身が自ら行動と言葉の使い方を変えたことで、お互いに話がしやすく、相互理解が深まり、相互信頼にまで発展していった。相手への萎縮から、自らを開放す

ることで互いの良さが見え、ますます開放することで信頼感が大きくなったと考えられる。

まとめと今後の課題

保育者は、たとえ子どもが言葉を話せなくても、障害をもっていても1人の人として尊重した関わりをしなければならない。では、人として尊重するとはどういうことなのかと考えた時に、保育者間で人権という言葉が挙がった。しかし、人権といってもなんとなく分かった気持ちで、理解していなかったため、自分たちで調べてみた。そして保育をする中で子どもの人権とは何か、具体例を挙げることで明確にした。

これを基にして、エピソード記述をし、分析をしていく中で、保育者と子どもに3つの変化が表れたことが分かった。最初が変わった、変わろうとしたのは保育者であった。保育者の変化が子どもへ変化を及ぼし、子ども同士や保育者同士の関係が変化するところにまで及んだ。

これまでも、保育者と子どもあるいは保育者同士で良い人間関係を作りたいと思っていたが、どうしたら相手が変わるか、変えることができるかを考えていて苦慮していた。先に変えるべくは自分だったのである。

自分を変えることは容易なことではないが、エピソード記述を通して、自己と他者を客観的に見て、とことん考えることで、自己と他者は改めて違う人であり、違う考えの持ち主であるということを認識し、尊重することへつながっていった。そして、自分をより良くしようと、自ら変わろうとすることで、自分だけではなく周りとの関係性も変化していったのである。

今後、引き続き研究を進めることで、子どもと保護者、保育者と保護者の関係にどのような変化が起こるかを明らかにしていきたい。

講評：「人権に配慮した子どもへの関わりについて～保育者の言葉の力を考える～」

評者：石川 昭義

保育士自らの言葉づかいを振り返り、人権に配慮した保育について考察する試みの経緯がよく伝わってくる。

園では、まず、児童の権利に関する条約を題材にして人権について話し合い、「人権」の4つの捉え方（柱）に対して、26項目の「必要なこと」を設定し、その一つ一つに保育の具体的な行為や場面を当てはめて、人権の意味を確認している。たとえば、「育つ権利」の柱では、「自分で決めること」を「必要なこと」とし、「思いを聞き、本人が決断できるようにする」を具体例としている。このようなまとめ方は、日常の保育の行為を振り返る視点にもなり、今後さらに「必要なこと」や具体例を積み重ねていくことが期待される。

また、エピソード記録を題材にしてグループ討議を行ったり、そのグループ討議のやり方を変更する試みも描かれている。エピソードをもとにロールプレイングする試みもユニークであった。考察の対象となった子どもに対する言葉の使い方や接し方が、討議のあと、実際にどのように変化したかについての記述がなされていると充実した報告になったと思われる。

評者：岡田 澄子

行動指針があるが、保育者の子どもへの接し方や言葉のかけ方に相違や、価値観にもズレがあるというのは、どこの保育園でも気になる点で、それをどのように改善していくのか、興味を持って読ませていただきました。まず「児童の権利に関する条約」を表にしたことは、理解しやすくなり良かったと思います。

その後自分の保育をエピソード記録し、自分自

身の保育を振り返り、さらにグループ討議を行いました。人権に配慮していると感じられるかどうかを意見として挙げていきました。それにより、保育者の変化が子どもへ変化を及ぼし、子ども同士や保育者同士の関係も変化していったと記されています。何かを変えたい時は、まず自分自身を変えていくことがこの研究から読み取れました。

今後は、子どもと保護者、保育者と保護者の関係にどのような変化が起こるかといった研究が継続されることを望みます。

評者：酒井 かず子

『すべては子どもの幸せのために』をスローガンに、①小さな声で話す②子どもの目線に降りて接する③言葉をかけて子どもの気持ちが動いてから行動する の三つの行動計画のもと保育を進めていたが、職員間の相違がみられることから、子どもの権利や人権を前提とした上で、言葉を通した保育者と子どもとの関わりや気持ちの分析をすべく研究を進めたことに対し、大変に興味を持ちました。

子どもにとっての良い環境の中で保育士の所作や言動等、人的環境は最も重要であると考えます。KJ法を使い、日常の中で気が付いたことをカードに記入し、仕分けし、まとめ上げていく作業は相当に時間がかかったことと思われます。しかし、その作業を進めていく過程で気付く事も沢山あったのではないかと思います。結果、保育士自身が変わらなければならないと気付いたことから他者への尊重や理解につながったことは大変に良かったと思います。保育士の皆様が生き生きと保育をされている様子が目に浮かぶようです。

(2) 優秀報告賞

〈実践報告部門〉

- ・「H男の発達を求めて～音楽遊びを通して～」
東田 結佳（石川県・清和保育園）
- ・「食物アレルギー児の健康と安全について
～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたこと～」
玉城 久美子（沖縄県・第2 愛心保育園）

H男の発達を求めて ～音楽あそびを通して～

石川県・清和保育園 東田 結佳

1. はじめに

H男は、父・母・祖母・妹の5人暮らしで、日中は、祖母と妹と過ごしていた。2歳5ヶ月で入園する。入園当初は、自分では身の回りのことが全くできなかったが、園生活に慣れてくると、保育士の言葉がけがあれば、できることも増えてきた。しかし、友だちへの関心の薄さや、様々な面で発達の遅れを感じ、市の機関に相談し、3歳7ヶ月より『子ども育成相談センター』へ月2回通うことになった。

3歳児クラスになり、音楽あそびが始まると、目覚ましい発達を見ることができた。ピアノで「メリーさんの羊」を、すぐに覚えて弾くことができた。しかし、ピアノのホースを口に入れることを嫌がるので、保育士が息を入れ、H男が弾くというかたちをとり楽しんだ。

4歳児クラスでは、11月現在、25名の友だちと、2名の保育士と生活している。集団生活への関心は薄く、目を合わせ、言葉で意思疎通を図ることは難しいが、簡単な日常生活のことであれば、理解し行動することができる状態である。英語への興味はとて深く、物の名前を英語で言う、アルファベットを並べて単語にして読むなどして一人遊びを楽しんでいる。

そこで、担当保育士と相談し、「自分の気持ちを言葉にして、コミュニケーションができるようになってほしい。」
「友だちと一緒に遊ぶって楽しいなと感じてほしい」というねらいをたてた。

・マーチング遊び【ピアノ演奏・リズム遊び】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノでキラキラ星を上手に弾くが、無表情である。 ・手拍子でリズム打ちをするが、興味がなく、ぼーっとしている。 <p>4/4 ♪♪♪ ♪♪♪ ♪♪♪ </p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ホースを口に入れることを嫌がるので、保育士が息を入れる。 ・全くしようとならないので、H男の手をとり、顔を見合わせ一緒にリズムを打つ。

◎5月

園庭の固定遊具に自分から登ったり降りたりする。虫を見つけて、つまんでみるが、力の加減ができなくて潰してしまう。当番活動では、自分の名前を友だちの前で発表ができ、自然と、友だちから拍手が起こるが、H男は表情を変えない。しかし、以前に比べ一つ一つの行動に活発さが出てくるようになった。

H男が、音楽にとて興味を示すことから、毎年、3、4、5歳児で行っているマーチング遊びを通してどのような発達を遂げていくか、また、どのようなはたらきかけをすることにより、ねらいに近づいていけるかを研究することにした。

2. 研究方法

- ・H男の実態を把握する。
- ・H男の状況に応じた適切なはたらきかけを考える。
- ・担当保育士との共通理解を図る。
- ・期間・平成27年4月～10月

3. 経過と考察

◎4月

担当保育士は昨年度からの持ち上がりであるが、保育室、担任ともに新しい環境になる。しかし、比較的落ち着いて過ごすことができるようである。行動範囲が広くなり、時々部屋から出て行き、保育士や、友だちに呼び戻されることがある。嫌なことは「いや!」と言い、身振りや、表情で少しずつ気持ちを表すようになる。保育士の誘いがあれば、一緒にトイレへ行く。保育士がそばにつき、便座に暫く座っていると排尿をすることができるようになる。M子が、H男を、なでまわすように触ったり、顔を近づけたり話しかけたりすることで、少しずつH男の表情が明るくなっていく。

◎6月

H男からM子へゆっくりと抱きついて行ったり、顔に触れたりし、顔を見合わせ微笑み合う。痛い時、悲しい時など「だいじょうぶだいじょうぶ」と自分に言い聞かせるように言う。保育士に「おしっこ」と、尿意を報せ、自分でトイレへ行き排尿をすることができるようになる。箸を使って給食を食べる練習をする。

・マーチング遊び【マーチングの曲を聴く・ピアノでメロディを弾く】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・毎日曲を聞くことで、覚え、日に日に歌を口ずさむようになる。 ・少しずつピアノで、メロディーを弾けるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲を口ずさんだ時には、一緒に歌い、楽しめるようにする。 ・ホースを差し出してくるので息を入れ、一緒に演奏することを楽しむ。

・マーチング遊び【楽器選び・パート練習】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・キーボードに興味を示す。 ・パート練習に喜んで参加するが、飽きてくると「おーしーまい」と言う。 ・保育士の弾き方を真似たり、音を探りながらメロディーを弾いていく。 ・キーボードを担ぐと重くて前に倒れそうになるが、担ぐ練習を重ねると、担いでゆっくり歩けるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・H男の興味のあるところからマーチング遊びに入ってほしいと思い、キーボードの担当に決定しキーボードにH男の名前シールを貼ると喜んで弾く。 ・パート練習はH男のペースに合わせて行う。 ・身体全体の力が弱いので、キーボードが重くて立ってられないので担いだときには、手をつなぎ担いだまま歩く練習をする。

・考察

楽器選びをしているとき、いろいろな楽器がある中で、キーボードに興味を持ったので担当楽器をキーボードにすると、それを毎日楽しむ姿を見ることが出来ました。今、H男が興味を持っていることは何かを考え、その気持ちに合わせて工夫をし、それを喜んで取り組む姿を見たとき、言葉には出さない気持ちが伝わってくるものが多くなってきたように思いました。

◎7月

箸で食べることに疲れきたらスプーンを指差し、受け取ると、スプーンで食べる。自分のクラスの保育士でなくても、「おっこ」と報せる、服を引っ張るなどして尿意を伝える事ができる。シンデレラの絵本に興味を持ちA子と一緒に見る。寝そべて、おもちゃを眺めて遊ぶ姿がみられる。

・マーチング遊び【パート練習・アンサンブル練習・発表】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・「キーボード」と言い、練習したい気持ちを伝える。 ・アンサンブルでは、カウントに合わせて弾くことが出来るが、時々、話を聞くときにも弾いてしまう。 ・担いで演奏する時間が長くなると「エンド」「おまい」と、保育士の顔をみて言う。 ・地域の神社境内での発表では、落ち着いて弾くことが出来る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パート練習はH男のペースに合わせて行う。 ・弾けたことを十分に褒める。弾いてはいけないときには「みんなといっしょ」と繰り返し伝え、すぐにやめることが出来る。 ・嫌がっているときには、共感した上で、励ます。 ・発表では「せんせいここにいるね」と伝え、見守る。応援に来ている両親のほうをみているが、はじまると弾くことが出来たので十分に褒める。

・考察

キーボードの練習がしたいと伝えるために「キーボード」と言い、保育士の服を引っ張ったり、保育士がキーボードを弾くのを見て、真似たり、やりたくなくなったときには、「エンド」や「おーしーまい」と言う姿を見て、徐々に言葉の表現が増えてきたなと思いました。その頃から、生活面でも「おっこー」と尿意を知らせてくれるようにもなりました。いろいろな場面で、言葉の表現は勿論ですが、表情や、指差しなどで、気持ちを表すケースが増えてきました。しかし、まだまだH男の気持ちがどこに向いているのか、理解し難いこともあるの

で、より寄り添い、より向き合うことが大切だと感じました。

◎8月

泣いている子を見て「ないとる」と言い肩を触ったり、A子に好意を示し、H男から寄って行き、抱きついたり、頬を触ったりし、目尻が下がり、心から嬉しそうな表情をする。保育士のそばで「ばーちゃんびょういん」と言う。当番活動で、名前の付いたタオルを配る時、友だちの名前は読めるが、名前の書いてある子を探して配ることが難しく、保育士と一緒に配る。友だちとブロックの取り合いをする。

・マーチング遊び【パート練習・アンサンブル練習・隊形移動練習】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・アンサンブルでは、テンポが上がっても、上手に弾く。 ・練習が長くなると、弾かなくなり、時に、違う曲を弾くなど、集中できなくなる。 ・隊形移動では、移動する場所に目印をつけて移動する。 ・最後に移動する場所に「END」と、目印をつけると、小躍りして喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指揮者が「よいい」と言ったらスイッチを入れることを繰り返し伝える。 ・弾いてはいけない時に弾いたら「だめよ、みんなといっしょ」と伝える。 ・手をつなぎ、隊形移動を繰り返し、徐々に、手を離しても、一人で隊形移動ができるようになる。必要に応じて援助する。

・考察

隊形移動には、参加できるだろうか。固定楽器と一緒に演奏していたほうがよいのではないかと考えていましたが、担当保育士との話し合いの結果、H男に聞いてみよう、聞いてみんなと一緒にやってみようということになり「弾くのが上手になったから、歩いてやってみようと思うのだけどいいかな?」と聞き、移動する場所に①②③と、目印をつけ、手をつなぎ、歌をうたいながら、移動の練習を繰り返しました。何回もやっているうちに、手をつながなくても、歩けるようになりました。その都

度、「上手に出来たね!」とスキンシップに心がけると、嫌がることなく練習ができました。

◎9月

保育士に言われなくても、のどが渇くと、自分でお茶を飲むようになる。指先で箸を開くことは出来ないが、力を入れて、握ることが出来るようになり、食べるのが上手になる。鉄棒を極端に嫌がる。運動会のダンス練習を喜んで取り組む。尿意の表現に保育士が気づかない時には、大きな声で「おしっこー」と言い保育士から「行っておいで」と言われてからトイレへ行く。

・マーチング遊び【パート練習・アンサンブル練習・隊形移動練習・発表】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・隊形移動が上手になり、向きを変えるタイミングも合うようになる。 ・移動する場所が一つ増えるが、すぐにできるようになる。 ・キーボードを自分で担ごうとせず、保育士が担がせてくれるのを待つ。 ・練習に飽きてくると「おしっこ」と言い、キーボードを降ろそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動する場所が増えたことを説明し、手をつなぎ一緒に行く。 ・上手に出来たことを十分に褒める。 ・自分でキーボードを担げるよう声かけを繰り返し、手助けをしながら、励ますが、自分でやろうとしない。 ・飽きてきたのだと分かるが、無理強いせず、H男の気分転換にトイレへ連れていく。

・考察

隊形移動の際、リズムと歩数を合わせて移動することも伝えましたが、これは理解できなかったようで、H男なりの歩数で歩いていました。日に日に移動にも慣れ、移動の場所を一箇所増やしても出来るようになりました。

◎10月

当園では、4・5歳児で、体力づくりとお散歩を兼ねて、市営の温水プールに週一回通っている。春からみる

と、プールに、自ら喜んで入るようになった。着替え、身支度などは、保育士が声をかけてもしなかったり、違うことをはじめたりするようになる。S男のそばに座り、オセロで遊んでいるのをじっと見ている。運動会では、友だちの助けを得ながら、いろいろな種目に喜んで参加することができた。氷鬼をしていると、ルールはわかっていないが一緒に走り、嬉しそうにしている。

・マーチング遊び【パート練習・アンサンブル練習・隊形移動練習・発表】

マーチング遊びにおけるH男の様子	保育士の考察・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の発表では、保育士の誘導がなくても、演奏・演舞を行うことが出来た。 ・お祭りでの発表では、いつもと違う空間に気分が高まり、落ち着きがなく「ブラボー」などと言いはじめ、演奏では、隊形移動はするものの、キーボードは弾かない。 ・ダンスでは、待っている間に前へ出て行ってしまふ。保育士に自分の場所へ誘導されると、嬉しそうに踊りだす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会では「せんせいここにいるね」と声をかける。落ち着いて、演奏・演舞ができる。 ・お祭りでは、カラガーズの衣装についている星に興味を示し、出発までずっと触っているが、落ち着くようなので、そのままにしておく。 ・会場にて、演奏前に「がんばろうね」と声をかける。 ・2曲目では、地面が少し前下がりになっていたためH男が前に歩き出してしまったので、H男の場所へ手を引き「きをつけしててね」と声をかけ、ダンスへの参加を促す。

考察

演奏しながら隊形移動をしていく中で、H男の隣に小太鼓のお友だちが来ると、うれしそうにその子に触れる場面も見られました。生活面でも、A子に好意を持ち、H男から寄って行き、抱きついたり、頬を触ったりする、姿も見られました。一方的ではなく、A子と目を合わせて、柔らかな表情をし、心通わせているような場面も見られるようになりました。また、お友だちが、鬼ごっこをしていると、保育士の誘いかけが無くても、自分の意思で一緒になって走ることを楽しむ姿も見られました。

周りの子のしていることには無関心で、自分の世界の中にいたH男が活き活きとした表情で、友だちと同じことをしようとする姿を見たとき、H男の大きな成長を感じました。

4. まとめ

多くの子は、マーチング発表を経験するたびに沢山のお客さんを見て、恥ずかしそうな表情をします。そんな気持ちの中で、演奏・演舞し、大きな拍手をもらった後は、達成感や充実感を味わい、誇らしく、嬉しそうな姿で帰ってきます。しかし、H男は、お客さんがいてもあまり興味はなく、自分の世界を楽しみ、演奏・演舞しているように見受けられました。H男には「友だちと心をひとつにしてがんばる」「演奏してお客さんに喜んでもらいたい」などの気持ちはなく「自分の好きなことだから演奏する」「自分が楽しいから演奏する」という気持

ちで発表の場に立っているのだと伝わってきました。

H男がマーチング遊びを通して、言葉だけでなく、いろいろなかたちで、自分の思いを表現する姿が増えてきたように思います。「自分の気持ちを言葉にして、コミュニケーションができるようになってほしい」というねらいをたてましたが、実態を把握すればするほど、H男のコミュニケーション力は、言葉だけにこだわる必要がないのではないかと思います。

また、友だち・集団への興味も、垣間見えるようになってきたことから「友だちと遊ぶって楽しいな」と、少しずつ感じてきているように思いました。

また、クラス全体として、H男の成長を、友だちが驚き、喜んでいる様子、H男の存在を自然と受け入れ、必要に応じて手を差し伸べる様子を見て、H男の存在が友だちの温かい心を育み、互いに良い関係性を築くことができていると思いました。

これからも音楽遊び・マーチング遊び・友だちとの保育園生活を通して、H男らしい発達をしていけるよう、援助していきたいと思ひます。

今回の研究をさせていただくにあたり、H男の姿を追っていくことで、H男の発達を理解しようと努力し、保育してまいりました。個々と、心から向き合い、その発達をより深く感じ、受けとめて保育していくことが、子どもの発達を促していくために大切なことなのだと再認識でき、今後の保育に、活かしていきたいと思ひました。

講評：「H男の発達を求めて～音楽遊びを通して～」

評者：小林 芳文

この研究は、特別な配慮の保育（支援）を必要としている子どもの保育所での保育、在り方について、どうすれば子どもが生き生きと元気に保育に入れるか、どのように発達を遂げていくか等まとめられた素晴らしい実践報告として読ませていただきました。報告者の優れた所は、本児の「できないところ」を知りながら「できるところ」「好きなこと」をどうすれば活かせるか、子どもの弱いところに目を向けていると、発達の好循環が生まれません。実践では、ポジティブな保育（マーチング遊び、キーボード）に、絶えず目を向けて保育をされていることであります。発達障害児と思われる本児、特にASD(自閉スペクトラム症)は、コミュニケーションの発達に弱さが目立ち、いわゆる言葉でのそれは上手く使えないことが一般です。この報告者は、その点で「言葉だけにコミュニケーション」をこだわる必要はないとしています。私はムーブメント教育という「動きを通して教育を育む」支援を長年続けています。この研究では「身体の動きのことば」の大切さを報告してくれました。今後の取り組みを願っています。

評者：酒井 かず子

集団生活や友達への関心が薄く、目を合わせて言葉で意思の疎通を図ることが難しい反面、英語と音楽には興味があり、その能力も身を見張るものがあるH男の対応について報告され、H男が大きく成長している様子が伺われ、感動しました。特に日常生活の中で、保育士との関係が良くなるにつれて、簡単なルールも理解し、守れるようになり、次第に友達にも関心を示していく。H男自らが行動したりと自己表現をするようになり、大

きな成長が見られた。そして、テーマに掲げられている音楽遊びを通して、友達と一緒に活動ができるようになったり、表情が豊かになったH男の成長に加え、クラスの子どもたちの温かい眼差しやまとまりが感じられた。そして、保育士の的確な観察力とその対応には素晴らしいものを感じました。

評者：岡田 澄子

H男くんが興味を持っていること、困っていることなどを理解し受けとめて保育している保育者と、H男くんに抱きつかれたり顔に触れられたりしても嫌がったり、特別扱いしない子ども達。保育園ならではの光景です。

音楽活動を通し、少しずつですが体力がついていたり、ダンス練習を喜んで取り組んだり、言葉がでてきたりと成長の様子が簡潔にまとめられた報告書から窺えます。

しかし、保育者と子どもの関係は記されていますが、保護者の子どもへの関わりや保育園に対しての思いが分からないのが残念です。保育者と保護者との関係性がとても重要だと思います。

5歳クラスになったH男くんの更なる成長や、お互いに支え合う友だちとの関係性も知りたくなくなりました。ご報告を楽しみにしたいと思います。

食物アレルギー児の健康と安全について ～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたこと～

沖縄県・第2 愛心保育園 玉城 久美子

1. はじめに

保育園での食事時間は、子ども達にとって食を学ぶ大切な場であると共に、コミュニケーションを図る為の貴重な時間である。子ども達の健やかな心と体を育み、成長にかかせない食生活において、近年、食物アレルギーを持つ子が増加傾向にあり、当園でも年々アレルギー除去食を提供する乳幼児が増えている。アレルギー除去食への対応は、大切な命を守ることにまつながり、非常に慎重な取り扱いが必要になる。そのような現状の中、ア

レルギー症状が重篤になる幼児が今年度新たに入園したことをきっかけにアレルギー除去食への対処方法をもう一度見直す機会を持つことにした。その中で、これまでに出てきた課題や改善点などを全職員で周知徹底すると共に、食物アレルギーを持っている幼児も他の幼児と同じように、食事時間を有意義に楽しく過ごして欲しいという願いも込めて、学びのプロセスを考え実践していく事にした。

2. 食物アレルギー児のクラス状況

平成27年11月1日現在

年齢 在籍数	食物アレルギー児 の人数	除去食品	主な症状
0歳児 18人	0名	食物アレルギーの症状で除去を行っている子はいない。 *離乳食は、家庭で食べさせた事のある食材のみ使用。	
1歳児 23人	5名	卵3名・卵、ピーナッツ1名 卵、大豆、乳製品1名	・発疹（蕁麻疹）
2歳児 23人	1名	卵、牛乳の両方1名	・発疹（蕁麻疹）
3歳児 23人	2名	卵のみ1名 メヌケ魚のみ1名	・発疹（蕁麻疹） ・発疹、目の周りが赤くなる状が出る
4歳児 22人	1名	卵のみ1名	・発疹（蕁麻疹）
5歳児 19人	2名	ピーナッツのみ1名 卵、乳製品の両方1名	・発疹（蕁麻疹） ・唇の腫れ、発疹（蕁麻疹）、下痢、目の充血等
計128名うち食物アレルギー児11名		*エピペン所持児：1名 *誤食時服用薬携帯児：1名	

3. 目的

食物アレルギーを持つ乳幼児が安全な環境の中で楽しい食事時間を過ごすことができるよう、日頃の保育を振り返ることで見えてくる安心安全な食事を提供するための留意点を再確認し、共通理解を図るとともに、食とアレルギー疾患の学びを深める。

4. 前年度までの食物アレルギー児への対応と課題

～対応～

- ①除去食の子のカード作成（除去の有無を表示）
- ②食事を調理室に取りに行く時、除去の有無を確認。
- ③食器を分け、トレーを使つての配膳。
- ④食事の時の除去の有無を確認表にチェックする。

⑤テーブルを分けて座らせる。

～課題～

1. アレルギー児の担当職員が不在時の対応のあり方。（担当者の負担が多い）
2. 除去の有無の確認不足。（誤食があった）
3. 食物アレルギー疾患についての認識不足。

5. 今年度の実践研究の方法

- ・各月の園内勉強会にて、実践の話し合いを持つ
- ・各クラスの食物アレルギー児の状況確認（現在の対応について→今後の取り組み）
- ・各クラスでの実践と今後の計画の周知

- ・保護者や職員にアンケートを実施
- ・園内勉強会において、実践内容の報告、検討

* 4月～10月までの取り組み

月	内 容
4月	アレルギー児の現状確認（アレルギーの頻度・環境状況・保護者のアレルギーの有無など）・アレルギー除去食一覧表作成
5月	各クラスからの事例報告（食物アレルギーの子の現在の状況やその対応の仕方・保護者のアレルギーの有無などを調べたこと）
6月	過去のヒヤリハットを持ち寄って、話し合う。
7月	ヒヤリハットの掲示板を作って職員の意識を深める 職員の意識の確認⇔アンケートをとる（職員）
8月	アレルギーについてのアンケートをとる→（保護者）共通理解を深める
9月	実践して見えてきたこと（課題など）を話し合う
10月	ヒヤリハット等の報告をふまえ、今後の対応についての話し合いを持つ
・毎食事後に、各クラスにてアレルギー除去チェック表をつける	

6. アレルギー児への対応と対策（今年度新たに行った取り組み）別紙1

- ①園独自のアレルギーマニュアルを作る。
 - ②ヒヤリハットの掲示板を作る。
 - ③アレルギー一覧表に顔写真を入れた。（前年度までは名前だけの表示だった）
 - ④エピペンの使い方の勉強会を開く。
 - ⑤各クラスへの緊急時の対応表を作り配布。園だよりに食物アレルギーの子がいることを知らせ食物アレルギーについての理解を求める。
- ・調理員の除去食への対応（調理、配膳、メニュー等における配慮・工夫）
- ①除去は食最初にする。
 - ②職員への除去についての声かけ。
（今日のメニューには卵が入っています。○○ちゃん
は除去食です）
 - ③アレルギー児への食事をワンセットにして、他児との食事と混ざらないようにした。
 - ④食品成分表をチェック。初めて使う食品は、製造元へのアレルギーの確認。

7. 事例と考察

【事例1】

*エピペン所持する幼児への対応（A子さんについて）
（H27・4月入園 5歳の女子：卵、乳製品のアレルギー有り。製造ラインの摂取も不可。アレルギー食品に触れるだけでもアレルギー症状を起こす。以前在籍していた保育園で、アナフィラキシーをおこした経験有り）

◎職員の関わり

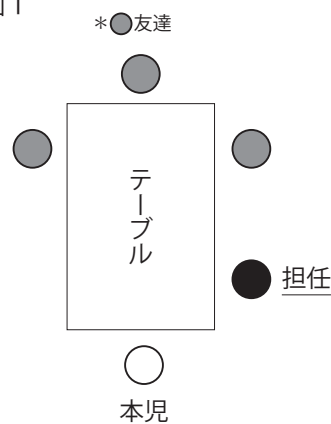
1. 入園前の面談にて、アレルギーの有無の確認とその対処を聞く。
2. 全職員で疾患状況や症状が出た時の対処法を学ぶ→エピペン講習を受ける。
3. クラスでの食環境を考える。

○配慮事項

- ・他児の食事に触れない座席の位置工夫
- ・友達とも関われる食環境づくり

図1

図1



- ・配膳時における配慮 → 一番に配膳する
分け隔てなく楽しめるバイキング
↳ みんなで楽しめるようアレルギーを排除した除去食での献立でバイキングを行う
 - ・片付け時の注意
残飯への接触 → 本児の片付けの場所を変える
落ちた物への接触 → 常に上履きを着用する
4. クラスの子ども達への声かけと周知
（アレルギーの説明や食事の時のA子さんとの関わり方を知らせる）
 5. 保護者とその日の体調などを連絡帳や口頭で細めに確認。

事例1の評価：アレルギー食物との接触がないように食環境を工夫したことで現在は、本児も友達と一緒に楽しく食事を摂ることができている。

課題：食事時間の子ども同士の突発的な接触も見られたので（お友だちの使っていた箸を本児が触れそうになるヒヤリハットがあった）、食物アレルギーに対する子ども達の理解と子ども達同士の関わり方を見直すとともに、戸外活動先（お泊り保育など）での除去食の準備、対応ができないという現状もあり、園外での課題点も見られた。

<考察>

今回の実践で、食物アレルギーを持つ子においては、本人・周囲の意識の持ち方がとても重要だということを再認識することができた。食物アレルギーを起こさないための配慮において、これで十分、大丈夫という考え方は危険である。その子を取り巻く周囲の環境整備や関わる全ての人の食物アレルギーにおける認識と配慮の構えが、事故（誤食など）を起こさないための必要条件だと思う。また園内外においても、誰もがすぐに本児の食物アレルギーにおける症状・対応・連絡事項などが一目でわかる個々の緊急管理指導表などが整理されていると、より素早く対応できると感じた。

【事例2】

*園行事の際に起きてしまったヒヤリハットから学ぶ（Bくんについて）

（H26・4月入園 1歳の男の子：卵、ピーナッツのアレルギー有り。製造ラインの摂取も不可。）

◎職員の間わり

- (1)入園前の面談にてアレルギーの有無の確認を行う。除去依頼書を提出してもらい、家庭と常に連携を図り、離乳食を進め幼児食へと移行した。
- (2)全職員で疾患状況（アトピー皮膚炎もある為）についても塗り薬を塗るなどの対応を周知する。
- (3)クラスには、他にも4名の卵アレルギーの児がおり、テーブルを別にして配膳時には、名前と除去の有無チェックを行い食事を与えている。

◎ヒヤリハットの状況

・入園当初から卵・ピーナッツアレルギーのため、除去食を準備していたBくん。食事の際は席を分け、担任が確認し食べさせていたのだが、その日は午後から行事があり、クラス担任が行事の準備に入ったため、他クラスの職員が代わりに入っていた。行事中のあわただしい中で、日常、気を配っていた除去食の対応がおろそかになり、除去食ではないおやつを与えてしまった。本児が一口食べてしまった時に気づき、口から出し、口をすすぎ様子を観察。保育士はすぐに園長、主任、看護師に報告し、保護者へ状況を知らせる電話を入れ対処した。

(原因)

通常は、午睡時間を利用して、子ども達の健康状況や

おやつが除去なのかの有無を確認しているが、当日は話し合いの場がなく、調理員が各クラスに口頭で知らせたが、担任以外の職員も手伝いに入り連絡が不十分だったこと、子ども達の席を分けずに座らせたこと、顔を確認せずにおやつを配膳したことにある。

<考察>

行事の時など、いつもと違う状況（慌しい中）で、よりいっそう注意が必要であり、職員間の連携（声かけ）が必要であった。誤食を全職員に知らせることで、意識のあり方を考えることができたが、常に“万が一”という思いを持ち続けることの難しさを知る。

誤食防止のための名前カード（写真入）をつくり、除去のない日も本児専用トレーに入れてもらうなどの対応を行い、再発防止に心がける。

【事例3】

*アンケートの実施（職員・保護者）

食物アレルギーを持つ子が増えていく状況の中、今一度、食物アレルギーについて考え、職員一人ひとりがどのように対応や対処のあり方を考え行っているのか、また保護者の方が、食物アレルギーに対する興味や関心があるのだろうか、食物アレルギーについての認識度を理解する上でアンケートを実施する事にした。（7/21アンケート配布 別紙2～4）

*保護者107名/82名 回収率77%・職員23名/23名 回収率100%

<考察>*アンケートを通して

保護者：保護者自身や身近な人にアレルギーを持つ方が増えていることがわかった。しかしアレルギーを持つ人への対応などをもっと知りたいという意見も多く、アレルギーに対する研修を開催するとしたら受講したいかという問いに、半数以上の保護者の方が受講したいという回答が得られ関心の高さが感じられた。今後も情報を共有し、アレルギーを持つ子に対しての協力と配慮をしてあげたいとの思いが伝わった。

職員：食物アレルギーを持つ子への一人ひとりの把握に曖昧な点がみられた。またアレルギーにおいて、自身の知識不足への不安や、対応時の不安が見られ、自らの課題にして、アレルギーについての学びを深めたい気持ちがある。

・全体を通して、食物アレルギーについてある程度の知識を持ち、今後も食物アレルギーについて学びたい気持ちはあるが、その術がわからない等という意見が多かった。また、食物アレルギーについて普段から気にかけているようだが、関係機関との連携が図れたらもっとよいと感じているようである。

8. 今年度の取り組みを通して見えてきたこと

①マニュアル作りを通して

食物アレルギーを起こさないための対応、対処法を再確認するとともに、アレルギーを持つ乳幼児に対する、全職員の共通理解を図ることができた。

↓

課題) 全職員が確実にマニュアルを把握することは難しい状況だが、マニュアルを意識付ける為にも、目を通す機会を作る必要がある。(毎月の勉強会などで)

②ヒヤリハット掲示板を設置

ヒヤリハットが起きた事をすぐに知ることができ、職員全員で周知できた。また、なぜ(ヒヤリハットが)起きたのか?起こさないためには?と考えることで、リスクについての見直しができ、リスクを起こさないための予測を気に留める事ができた。

③アレルギー一覧表に写真を入れる

写真や名前カードを入れた事により、確認の回数が増え、より安全性が増した。

④食事をワンセットにする

担任以外の職員でも、ひと目で食物アレルギーを持つ子の食事だと把握する事ができ、誤食を防ぐことができる。

⑤エピペン講習の開催

エピペンの使い方がわかり、緊急時の対応を知ることによってエピペンに対する不安が少なくなり、職員の意識の向上につながった。

⑥緊急時の対応表作りと園だよりでのお知らせを通して

保護者や職員に食物アレルギーを持つ子の状況を知らせ、注意を呼びかけた事で、食物アレルギーについての危機意識づけを行うことができた。

9. まとめ

今年4月に入園した食物アレルギー児の状況を受け、これまで行っていた対応のあり方を見直し、いろいろな視点から考えるアレルギーへの対応、対処法を探り出しながら行動に移せたことは評価できる部分だと思う。また、前年度まではアレルギーを持っている子の対応について“これで十分だろう”という漠然とした認識があり、その結果、誤食やヒヤリハット等、職員の食物アレルギーにおける知識不足・認識不足などが、アンケートを通して見えてきた。そのような課題を改善するために、“個々にあった配慮の仕方を考える”“アレルギー疾患についての理解のあり方を学ぶ”など、一つ一つを見直し、確認していくことができた。

特に実践を行う中で、ヒヤリハットなどの偶発的な事故が起こりえる可能性が常にあるということを痛感した。また、疾患の状況を知ること、子どもの成長と食についての関係性や環境面における工夫のあり方などを考えさせられた。保育士のアンケートの結果を見ても、安全

に安全を重ねる事は、保育園という組織の中において、とても重大なことであると理解しているつもりだが、それを実際に行うことは、“一人の子どもの大切な命を預かっている”という保育士の認識に委ねられていることが感じられた。

食物アレルギーを持つ乳幼児の対応について、何が重要か、何を求めているのか?どのようにしていけば誤食は防げるのか…常に考えていかなければならない課題である。例えばアレルギーが同じ食材の子の対応においても、その子の疾患の状況、家族構成、環境、成長状況、友達関係、地域との関わりなど、食事や環境面で、様々な対応が今、現場に求められている。そのニーズに応えるためにも、職員の意識の向上と更なる学びの必要性を感じるとともに、ますます増えていくアレルギーについての対応などを地域社会へ発信していくべきだと思う。

今後も、生きる力の源である「食」について、職員一人一人が今一度、意識の持ち方を見つめ直し、今できることは何か?を考え、「食物アレルギーについて正しく知ること」「正しく伝えること」そして、すべての子が食を楽しめる環境づくりを心がけていきたい。

10. 今後の取り組み

- ・食物アレルギーを持つ乳幼児の食のすすめ方を把握する上で、園(保育士・調理師・栄養士)と保護者との連携のあり方を見直し、それぞれの立場による横のつながりの強化を図る。(栄養士、調理師と保護者・保育士と保護者・調理師と保育士など)
- ・誤食を起こさない為の職員の意識向上
- ・戸外活動(お泊り保育時の食事の提供)や地域活動(交流会でのおやつ等の試食)での配慮
- ・保護者(アレルギーを持たない子の)やクラスの子ども達へのアレルギーにおける理解
- ・地域社会への啓発活動(食物アレルギーを持つ乳幼児への理解等)

*** 今年度行った主な活動 ***

*緊急時の対応表とヒヤリハット掲示板



緊急時における対応表と食物アレルギーマニュアルは、各クラスに配布されており、対応表は、すぐ目につく場所に置かれている。また、ヒヤリハット掲示板は事務所の入り口横に設置して、出勤すると一番に目につくところに掲示し、職員が確認しやすいようにしている。

*ひとつのトレーに配膳された食事



個別に準備し、ワントレーにした食物アレルギー児用の食事（顔写真入りの除去カード付）

*個人情報保護のため、名前と顔には横線を引いています。



*6月の園だよりに載せた食物アレルギーへの理解を求める文面。

***食物アレルギーについて**
 ~みなさんも理解を深めましょう!~
 当園には、桜組に5名・菊組1名・梅組2名・百合組1名・桃組2名の食物などのアレルギーを持つ子がおり、保護者と担任、調理員が連携しながら、除去食を提供しています。11名の子どもの状況はそれぞれ異なりますが、反応が強く出る子もあり、その食べ物を触っただけでもじんましん等が出る場合もあります。

そこで保護者の皆様にもご理解とご協力をお願いがあります。

※朝の登園時に時々、パンやおにぎりなどを手にしたまま登園する子を見かけます。もし、そのクズが落ちて、アレルギーを持つ子がさわったり、少しでも口にしてしまいますと、たいへん危険です。朝食は、ご家庭でしっかり食べて登園するようご協力お願いします。

(ご家庭での朝ご飯は、1日の元気な活動源です!)
 また、誤食を防ぐためにも、保護者の確認がないまま、お友だちにお菓子等をあげたりしないように、子どもたちにもお話していただきたいと思えます。どうぞご理解の上、ご協力くださいませ。

学年	名前	除去食材	学年	名前	除去食材
桃組	[顔写真]	ピーナツ	桃組	[顔写真]	卵・牛乳 乳製品 (アイス・ヨーグルト)
百合組	[顔写真]	卵	梅組	[顔写真]	卵・牛乳
梅組	[顔写真]	大豆・魚	梅組	[顔写真]	卵
桜組	[顔写真]	乳製品 卵 (アイス)	桜組	[顔写真]	ピーナツ 卵 (アイス)
桜組	[顔写真]	卵	桜組	[顔写真]	卵
桜組	[顔写真]	卵	桜組	[顔写真]	卵

*顔写真入りの除去確認表



*エピペン講習

看護師より、エピペンの使用方法や取り扱いの注意点などを学び、練習用エピペンを使って、実際に行ってみた。



食物アレルギーについてのアンケート結果 (職員用)

別紙2

職員の皆さんに食物アレルギーについて下記の質問に丸をつけ答えてください。

①各クラスにアレルギーを持っている子は、何名いるか記入をしてください(11名)全員回答正解

②食物アレルギーの症状について

(アレルギーの症状にはどのようなのが、ありますか？丸をつけてください。複数回答可)

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1、じんましん・かゆみ・むくみ (22人) | 2、湿疹・アトピー性皮膚炎 (12人) |
| 3、呼吸困難・喘鳴(ゼーゼー) (23人) | 4、くしゃみ・鼻水 (5人) |
| 5、眼の腫れ・かゆみ・結膜充血 (18人) | 6、口の腫れ・かゆみ (19人) |
| 7、腹痛・嘔吐・下痢(15人) | 8、意識障害・血圧・虚脱状態 (8人) |
| 9、その他 | |

③現在、当園ではエピペンを処方されている子がいますが、エピペンの現物を見ましたか？

- | | |
|------------|--------------|
| 1、見た (13人) | 2、見ていない (8人) |
|------------|--------------|

園内でエピペンの講習を受けていますが、1回だけの講習で理解できたと思いますか？

- | | |
|--------------------------------------|-------------------|
| 1、理解している (1人) | 2、理解するのには不十分 (1人) |
| 3、理解はしているが、振り返りのために定期的に講習を受けたい (18人) | |

*エピペンとは何ですか？

- ・アナフィラキシーショック症状を和らげるための薬剤が入った注射 (22人)

④保育園で、アレルギーを持つ子に対して、現在取り組んでいる対応について答えてください

(複数回答可)

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1、原因となる食品を除いている (22人) | 2、弁当を持参してもらっている(1人) |
| 3、献立表に使用食品を表示する (16人) | 4、調理器具を分けて調理している (4人) |
| 5、アレルギーを持つ子は、食器を分けている (19人) | |

⑤アレルギーを持つ子への問題・課題について(複数回答可)

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1、主治医の判断・考え方に差がある (8人) | 2、施設・設備・調理員数などにより困難 (5人) |
| 3、症状が不明瞭・判断も曖昧 (16人) | 4、好き嫌いとの判断が難しい (8人) |
| 5、保護者の意識が薄い (8人) | 6、対応の為の手順が不明瞭 (4人) |
| 7、栄養の偏り・体と心の負担が心配 (6人) | |

⑥食物アレルギー児に対応した給食を提供するために何が必要だと思いますか？(複数回答可)

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------|
| 1、医師の診断(指示書) (17人) | 2、専門的知識をもつ職員 (4人) |
| 3、給食に関わる職員の食品の知識、調理技術の向上 (8人) | |
| 4、保護者との密接な連絡 (14人) | 5、保護者へ配布できるパンフレットなどの充実 (0人) |
| 6、職員間の連携 (16人) | 7、施設間・地域との連携 (0人) |
| 8、予算措置 (アレルギー対応給食の材料費、調理器具の購入など) (0人) | |
| 9、緊急時の対応など管理体制の整備 (0人) | |

⑦その他、意見や質問などがあればご自由にお書き下さい。

- ・ エピペンや実際に症状が出た時、うまく対応ができるか不安がある。食物アレルギー児がいることをもっと他の保護者にも理解してもらい、登園時やお迎えの時など食べながら来る事をやめもらうようにしていく。部屋の前まで食べ物を持ってきて部屋の中に子どもから受け取る保護者がいたり、口の周りや服に食べこぼしがついている子もいるので、気になっている。
- ・ 調理室内の設備や器具などについてなどの状況を知っていることが少ないと思う。調理師が調理する上で、大変なこと、困っていることなどを共通理解することも必要なのかなと思う。
- ・ いろいろ勉強になり、声をかけあいながらしっかり意識していかなければならないと思った。
- ・ アレルギーの講習などがあれば参加させていただきたいです。
- ・ アレルギーを持つ子に食事をあげる時は、職員が必ずそばについて誤食がないよう気をつけることの大切さを実感しています。

(H27 7月21日配布・即日回収 回収率100%)

食物アレルギーに関するアンケートのご協力お願い（保護者用）

近年、食物アレルギーを持つ子が増えてきました。当園でも5、6年前まで2～3名だったアレルギー児が現在は11名の子のアレルギー（除去食等）対応を行っています。これまで、いろいろな対応を通して食の安全性に努め、食事の提供や食育を行ってきました。そこで食物アレルギーについてアレルギー児やそのご家族様以外の保護者の皆様にもアレルギーについて理解を深めていただき、これからも家庭と連携しながら子ども達の安全面の配慮をしていきたいと思っておりますので、アンケートにご協力お願い致します。

H27 7月21日配布 107人中82名回収・回収率(77%)

回答結果

1、食物アレルギーについてご存知ですか？

ア、よく知っている（21人） イ、なんとなく知っている（54人）

ウ、あまり知らない（6人） エ、知らない（0人）

2、1でアまたはエと答えた方にお聞きします。なぜ、アまたはエの方に○印になっているのでしょうか？

簡単にご記入下さい。

（アの例:自分自身がアレルギーだから。エの例:身近にアレルギーの人がいない・・・など）

- ・ 子どもが、アレルギーだから。（6人）
- ・ 身近な人がアレルギーをもっていた。（5人）
- ・ 自分と子どもがアレルギーだったから。（3人）
- ・ 仕事で学ぶ機会が多い。（2人）
- ・ 詳しいわけではないが、自分自身に出る症状として、気管支が腫れて苦しくなる感覚はわかる。
- ・ 以前子どもがアレルギーだったから。
- ・ アレルギーについて勉強をしたことがある為。
- ・ 職場で研修を受けた。
- ・ 子どもが3歳まで食物アレルギーがあり、除去していました。
- ・ 本など
- ・ ネットやニュースでみたり、職場にエピペンを使用している人がいる。
- ・ アにはしましたが、自信はありません。職場でアレルギーを持つ子に対応している。

3、現在お子さんのクラスにアレルギーを持つ子がいるかどうかご存知ですか？

ア、知っている（35人） イ、知らなかった（43人） ウ、その他（2人）

4、食物アレルギーは、口からの摂取だけではなく、皮膚に触れるだけでもアレルギーを起こす場合もある事をご存知ですか？

ア、知っている（64人） イ、知らなかった（16人） ウ、その他（1人）*複数回答

5、身近な人(身内)の方にアレルギーを持っている方がいますか？

ア、はい（34人） イ、いいえ（48人）

どなたでしょうか？

母親	子ども	従兄弟	祖父	姪	叔母	姉	甥	祖母	妹	父
5人	9人	4人	3人	4人	2人	1人	3人	5人	2人	1人

何のアレルギーですか？

卵	牛乳	ピー ナツ ツ	小麦	ナツ ツ類	米	麦	納豆	マン ゴ	乳製 品	大豆	甲殻 類	魚介 類
15人	4人	2人	2人	1人	1人	1人	1人	3人	2人	1人	11人	6人

2枚目へ

6、5で(はい)と答えた方にお聞きします。アレルギーを持っている人に対して気をつけていることがあれば教えてください

- ・ 子どもに関しては、とにかくアレルギーを引き起こすものを寄せ付けないことだと思う。周りの人への周知、理解が不可欠。
- ・ 一緒に食事をする際、メニューを見るようにしている。
- ・ 卵が入っていきそうな食品をさわらせないように気をつけている。
- ・ 大人なので、特にありません。
- ・ アレルギー食品を控える。
- ・ 食事・環境の工夫
- ・ 食べ物を与える際には、親に食べられるのかを確認をしている。
- ・ 重度は個々で異なる為、絶対に勝手な判断はしない。
- ・ アレルギーを引き起こす物が入っていきそうなメニューには表示を見るようにしている。
- ・ 食事のみ気をつけている。
- ・ えび、アサリなどは、夫(甲殻アレルギー)のいない時に食べ、ゴミは、その日のうちに捨てます。
- ・ 初めて食べる物は、気をつけてみるようにしています。
- ・ 食べ物のカスをおとさない。
- ・ 一緒に過ごす時はアレルギーとなる食物を使った料理を作らない。

7、今後アレルギーに対しての研修などがあれば、参加したいと思いますか？

ア、はい(65人) イ、いいえ(13人)

8、食物アレルギーに関しての質問やその他、何かあればご自由にご記入下さい。

- ・ “おいしい会”などで食物アレルギーについて学ぶのも良いと思う。好き嫌いせず食べることは大切だが、中には制限せざるを得ない子もいる。娘が「〇〇は、アレルギーがあるから〇〇と〇〇は食べられないんだよ」と話していた。周りの子も気にかけて、不思議に感じているところなど関心はあると思う。
- ・ アトピー性皮膚炎と食物アレルギーの関連性など、どの程度あるのか？
- ・ アレルギーを持っていない人も知識はあった方がいいと思うので、アレルギーの危険性の研修などがあればいいかな？と思います。
- ・ 普段は食べている物でも体調が悪いと急にアレルギー反応が出ると聞くので怖いです。出た時の応急処置など習いたいです。
- ・ アレルギーを起こしやすい(重度の症状が出る)と言われているピーナッツや日本そばを始めて食べさせるタイミングが分からない。怖いので与えたことがないです。
- ・ 自分の子どもは、今のところアレルギーはないようですが、アレルギーを持つ子側から周囲への要望や気にかけてほしいことなど教えてほしいです。
- ・ 食物アレルギーはどうしたらなるのか(原因)知りたいです。
- ・ アレルギーの研修を受けたので知ってはいますが、やはり知らない人も多いと思うので、研修をすることで、親の考え方や協力の仕方も変わってくると思う。
- ・ 周りの子の協力(エピペンを持っているなど)や理解が必要な子がいる場合、保護者にも知らせてくれると家庭でも気をつけるよう話ができます。
- ・ 0歳児保護者です。入園時にアレルギーチェック(離乳食チェックリスト)に記入し、その後は、進んだ物は、口頭でということでしたが、どこまで報告するべきか不明です。7大アレルゲンだけで良いでしょうか？
- ・ 以前園便りにアレルギーのことについて書いてあるのを見てはっ！？とさせられたのをこのアンケートを記入して思い出しました。身内にアレルギーの人がいないので、注意が薄れてしまうため、時々園だよりにお知らせ頂ければと思います。

～ご協力ありがとうございました～

講評：「食物アレルギー児の健康と安全について
～食物アレルギー児の対応を通して見えてきたこと～」

評者：藤澤 良知

日頃から保育所の食事、食育についての熱心な取り組み、感激です。数年前には食物アレルギー児は2～3名であったのが、今年は園児128名中アレルギー児11名で食事の個別対応大変ですね。前年度までの食物アレルギー児の対応の反省に立って、アレルギー児の担当職員不在時の対応、除去の有無の確認、食物アレルギーについての認識不足の課題解決に向けて、本年は月別に対応策を検討され、現状確認、事例報告、過去のヒヤリハットの検討、掲示版による確認、職員の意識向上、アンケート調査等しつかりとした取り組みをされています。

また、本年度は園独自のマニュアルの作成、ヒヤリハット事例の掲示板、アレルギー一覧表に顔写真を入れる、エピペンの使い方勉強会、各クラスへの緊急時対応表の配布など、総合的な素晴らしい対応をされています。調理員の除去食対応として除去食は最初につくる、職員への除去への声かけ、アレルギー児の食事はワンセットにし、他児の食事と混ざらないようにする、食事時の座席の配慮、保護者との連絡帳による連携等しつかりした対応等素晴らしいことです。益々の発展を期待します。

評者：小林 芳文

この実践研究の背景は、当園で年々増えている食物アレルギー児の保育園での安全な食環境の維持、対応について保育士ら全職員による学びのプロセスを考える点にあったこと、ヒヤリハットの偶発的な事故等を起こさないためにも、「食」について正しく知ることの大切な事を示唆した素晴

らしい研究でした。

この実践研究は、研究の課題、方法、事例の取り組み、考察、今後の課題を大変要領よく整理、展開されています。食アレルギーで援助したいとする根拠を持った3事例児を取り入れたことで、実践研究に深みが生まれました。別紙として添付した資料で行った主な活動が保育士の学びの成果として形になって見えており良かったと思います。同じように添付されたアンケート調査（職員用、保護者用）、および結果も今後の取り組み実践の上で役立つものとなっております、見事な実践研究となっています。

評者：酒井 かず子

食物アレルギーの有症率が高まっていることを受け、大切な命を守ることを第1に考え、改めて見直し、全職員の知識と理解を深め、安心して安全な食環境を維持していくために、過去の課題や改善点の周知徹底に取り組んだ中で、新たに見えてきたことがあり、興味を持ちました。過去の方法に加え、新たに5項目が加わり、さらに調理員の対応も4項目が加わり、今後の検討課題も出てきた。それに対し、保護者用と職員用のアンケートを取り、それぞれの実態を把握されたことも素晴らしいと思いました。特にエピペンの研修を受けることにより、職員が自信をもって食物アレルギー児と向き合えることはとても大切なことと思います。また、保護者への理解を得るための情報提供や地域への情報の発信等、食物アレルギー児を取り巻く地域社会にまで、広く理解と協力が得られるよう活動されたことには感心しました。

(3) 実践奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・課題研究①人との関わり
「ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション」
武元 善輝（鹿児島県・認定こども園つるみね保育園）
- ・課題研究②遊びと学び
「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」
榎本 侑季帆（東京都・砂原保育園）

〈実践報告部門〉

- ・「遊びの発展に必要な援助～友達の関わりから見えてきたもの～」
松田 陽央子・高野 里沙・倉内 麻衣子
（北海道・公益財団法人鉄道弘済会釧路保育所）
- ・「英語で遊ぼう～Let's play in English～」
佐藤 友美・石井 智子・片岡 祐子
（秋田県・公益財団法人鉄道弘済会秋田保育所）
- ・「保育環境を考える～異年齢保育の視点から～」
大森 葵（東京都・砂原保育園）
- ・「作ってあそぼう～できたことの達成感から次への探求心へ～」
石坂 由香・市川 千寿子
（長野県・公益財団法人鉄道弘済会長野保育所りんどう保育園）
- ・「子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて
～お泊り保育から運動会、生活発表会へとつながる心の育ち～」
一谷 あす香（和歌山県・れもん保育園）
- ・「アレルギー代替食の対応について
～富士保育園アレルギー対応マニュアル作成を経て～」
殿山 明子・佐々木 美佳・本田 幸奈・村尾 千景
（広島県・富士保育園）
- ・「このことの大切さ～はいはい遊びを通して運動機能を高めよう～」
山崎 千尋（鹿児島県・建昌保育園）
- ・「体づくりと心を育む食育活動
～食育活動から見えてきた子ども達の育ち～」
仲宗根 綾乃（沖縄県・愛心保育園）

課題研究① 人との関わり

ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション

鹿児島県・認定こども園つるみね保育園 武元 義輝

1. はじめに

「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」を合い言葉に、3年前からICTを活用した保育を行っている、つるみね保育園。今までの自然豊かな環境での保育に、デジタル技術を取り入れ実践的な研究を進め、保育の幅が広がり、子どもたちの興味関心意欲が向上してきている。

アナログ保育とは、園庭を駆け回ったり、自然と触れ合ったり、運動遊び、音楽遊び、製作遊び、わらべ歌遊びなど従来の保育である。デジタル保育とは、デジタル機器を活用した保育であり、つるみね保育園では、5つの特色に分類して実践的な研究を進めている。

- ①グローバルな感覚を磨く、コミュニケーションを楽しむ。
- ②正しい知識を深める。
- ③表現力・思考力・発表力を高める。
- ④社会性・道徳心を高める。
- ⑤先進性・創造性を楽しむ。

この5つの取り組みは、すべて1台のタブレット機器を工夫して活用している。デジタル保育専用の部屋に、短焦点プロジェクターを使って、壁一面にタブレット機器の画面を投影して、みんなで共有して使えるようにしている。

今回の論文は、このデジタル保育の中の、「③表現力・思考力・発表力を高める」に分類されるプレゼンタイムの実践をまとめたものである。プレゼンタイムとは、主に4・5歳児が取り組み、家庭から送られてきた写真をスクリーンに映し、それを子どもたちが自分でプレゼンテーション（以下プレゼンと表記する）する、という内容である。

2. プレゼンタイムの取り組み

①初めてのプレゼン

子どもたちが、初めてプレゼンタイムをするときに、いきなりプレゼンするのは、さすがに難しいので、保育者がある程度、言葉と流れを決めて教えながらするようにした。

- ・スクリーンの横に立ち
「僕の名前は〇〇です。」
「この写真は〇〇したときの写真です。」
「何か質問はありませんか？」

- ・聞いていた子どもたちが手をあげる。
「〇〇くんどうぞ」と、発表者が選り質問に答える。
- ・2、3個質問に答えると、保育者が発表者の評価をして、拍手をもらい終了。

最初の頃は、恥ずかしがりながら発表したり、うまく質問に答えられなかったりすることがあったので、保育者が援助しながら取り組んだ。子どもたちの質問は、単純なもので、「ここはどこですか?」「誰と行ったのですか?」「誰が写真を撮ったのですか?」などが多かった。発表の仕方は、回数を重ねていくうちに上手になり、意欲的に取り組むようになった。そこで、発表の仕方を工夫していくことにした。

②写真を拡大して紹介

最初の頃の発表の仕方を基本とし、質問の前に、紹介する写真のどこを見てほしいのか伝えることにした。その際、自分でタブレット端末を操作し、自分のみせたいところをピンチし、拡大する。(ピンチ：2本の指を画面において指を広げる)

- ・スクリーンの横に立ち
「僕の名前は〇〇です。」
「この写真は〇〇したときの写真です。」
「ぼくの1番見てほしいところは」
- ・自分でタブレット端末をピンチ操作し写真の見てほしいところを拡大する。
「この〇〇です。」
「何か質問はありませんか？」
- ・聞いていた子どもたちが手をあげる。
「〇〇くんどうぞ」と、発表者が選り質問に答える。
- ・2、3個質問に答えると、保育者が発表者の評価をして、拍手をもらい終了。

発表に工夫を加え、自分でタブレット端末を操作できるということで、子どもたちの発表意欲がさらに高まった。ピンチ操作にも最初は慣れない様子だったが、数回の練習で上手にできるようになった。また、質問にも変化があらわれ始めた。「楽しかったですか?」「こわくなかったですか?」などの気持ちを聞く質問や、「その足

下にみえている白いものはなんですか？」「後ろにみえている小さいものはなんですか？」などの細かいところに目を向けた質問などもでてきた。子どもたちの発表や質問が成長していくことが、保育者としてもうれしく思った。もっと発表意欲が高まるように工夫していくことにした。

③一番見てほしいところの理由

写真の1番見てほしいところを伝え、それに対して、なぜそこを見てほしいのか理由までいうことにした。また、発表するときに、腕を伸ばしてスクリーンを指す、質問の時間に友達を当てるときに、腕を伸ばして当てる、などの動作も加えた。

- ・スクリーンの横に立ち
「僕の名前は〇〇です。」
- ・腕を伸ばしスクリーンを指す。
「この写真は〇〇したときの写真です。」
- ・腕を下ろす
「ぼくの1番見てほしいところは」
- ・自分でタブレット端末をピンチ操作し写真の見てほしいところを拡大する。
- ・再び腕を伸ばしスクリーンを指す。
「この〇〇です。」
理由「それは、〇〇だからです。」
「何か質問はありませんか？」
- ・聞いていた子どもたちが手をあげる。
- ・友達を当てるときに腕を伸ばして当てる。
「〇〇くんどうぞ」と、発表者が選び質問に答える。
- ・2、3個質問に答えると、保育者が発表者の評価をして、拍手をもらい終了。

発表者が見てほしいところを選んだ理由を考えると、思考力が高まっていった。また、発表をするときに動作を取り入れることで、よりプレゼンらしくなり、聞いている他の子どもたちもよく注目して取り組むようになった。

④写真を複数枚使ったプレゼン、動画を使ったプレゼン

発表に使う写真を1枚だけ使うのではなく2・3枚使ったり、写真と動画を使って紹介したりすることにチャレンジした。例えば、

- 1枚目「鮎のつかみ取りをしている写真」
- 2枚目「鮎をつかんで笑顔の写真」
- 3枚目「鮎を炭火で塩焼きにしている写真」

複数枚使うことで、分かりやすく、見ていておもしろい発表となった。また、自分でタブレット端末を操作し、写真をスライドさせて説明を加えていくので、思考力の向上にもつながった。

動画を使う場合は、

- 写真（自転車にまたがっている写真）
- 動画（実際に乗って動いている映像）

他にも、

- 動画（ストライダーのレースの映像）

写真（表彰台ののってトロフィーを持っている写真）
動画を使うことで、本当に自転車に乗れるようになったという、何よりの証拠にもなり、レースの様子では、みんなまで応援する場面も見られ、プレゼンの幅も広がった。

⑤評価、感想を言う

プレゼンの後に、保育者が子どもたちに、発表の仕方への評価、写真やプレゼンの感想を聞く時間を設けた。

最初の頃は、「〇〇くんの行ったところに行きたくなかった」「〇〇さんと一緒にすることをしなくなった」という感想が多かったが、慣れてくると、「お友達が笑顔で楽しそうだった」「そういうことができすぎてすごいなと思った」などの、少し気持ちにふれる感想が出るようになってきた。

また、「発表するときの声が大きくて聞きやすかった」「姿勢がよかった」など、友達の発表を評価する声もでてきた。子どもたちなりにいろいろ考えるようになった。

⑥いろんな交流

このプレゼンタイムを通して、様々な人たちと交流することができた。

つるみね保育園の「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」を見学に来る、年間100人以上の視察者に対しても、毎回プレゼンにチャレンジし、堂々と発表することができた。また、視察者の方が、子どもたちに対しプレゼンを行うこともあり、そのときは、たくさん質問を行う姿が見られた。

祖父母との交流も行った。孫のプレゼンする姿に、驚きとても喜んでいた。また、祖父母の方もプレゼンにチャレンジした。自分の若い頃の写真を、少し照れながらだったが、子どもたちに分かるように言葉を選び、丁寧にプレゼンしていた。それに対し、孫が質問し、にこにこ笑顔で答えていた。またやりたい！！と言っていた。

はっぴょう会という大きな舞台でも子どもたちはプレゼンにチャレンジした。200人の観客の前でも、大きな声で堂々と発表することができた。「もっとたくさんの人前で発表したい！」という子もいた。

地域の行事にも参加。空き店舗を利用し、プレゼンし、地域の方たちとも交流することができた。

3. プレゼンタイムのメリット

プレゼンタイムを実践していき、子どもたちの人前での発表力が身についた。普段は大人しい子どもでも、プレゼンタイムでは、元気よく発表することができた。運動会やはっぴょう会などの行事でも、堂々と自分を表現

することができるようになった。

また、思考力の向上にもつながった。自分の写真を説明するときや友達からの質問に答えるとき、感想を言うときなどに、よく考えて発言する姿が見られた。

そして、人との関わりのきっかけとなった。子ども同士での関わり、交流を通して、知らない大人との関わり、保護者や祖父母、地域の人など、たくさんの人と関わる事ができた。

4. まとめ

プレゼンタイムに取り組む中で、子どもたちの興味関心意欲を高める工夫をしていくことで、子どもたちの発表力や思考力が成長していくことが、保育者としてもうれしく思った。その成長のおかげで、子どもたちは、いろんな人との関わりが生まれ、もっとプレゼンをしたいというモチベーションにつながった。その子どもたちのやる気が、私たち保育者の意欲にもつながり、このプレゼンタイムという取り組みをよりよいものにしようという気持ちになった。これからも実践を続けていきたい。

プレゼンタイムの様子 大きく手を伸ばし、大きな声で発表！



みんな質問も大好き！



講評：「ICTを活用した子どもたちによるプレゼンテーション」

評者：石川 昭義

当園では、「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」を合い言葉に、3年前からICTを活用した保育を行っている。その一環として、ICTを活用した「プレゼンタイム」の実践はユニークである。

研究課題の設定がやや不十分な面もあったが、プレゼンタイムのメリットは、「表現力、思考力、発表力を高める」ということは大変分かりやすく、発表に至るまでの手順は他の保育所にとって参考となるであろう。このプレゼンテーションは、発表者だけでなく、見ている子どもたちにも、写真や映像をみて気づいたり、質問したりする力を付けたに違いない。この実践が、保護者や祖父母との交流及び地域の行事への参加につながったという点も評価できる。

この実践の実施上の問題点や課題についても考察がなされるとより効果的であったと思われる。今後は、一人の子どもに焦点を当てて、その子の「変化」を追跡するような分析が可能であるし、4歳児と5歳児においてどのように表現方法が違うのか等、比較の視点で考察を進めることが期待される。

評者：小林 芳文

本研究は、「人との関わり」の課題研究部門、ICTを活用した子どもの活動でこれからの幼児保育・教育の方向性に向けての興味ある取り組みでした。当園はこの試みを3年前から進めているとのこと、4、5歳児を対象に家庭での写真を活用し、子ども自らがICTの活用でプレゼンするという研究でした。この発想が素晴らしくそれらを使った保育も見事でした。子どもはタブレット端末を操作、保育者は少しそれを援助する。次なる活

動がそこから生まれ、それを通して他の子どもとのつながりも膨らみ、人前での発表力が身に付いていくことが解ったとしています。

今後も「表現力・思考力・発表力を高める」活動に視点を向けて、当園で言う「アナログ保育とデジタル保育」の良いバランスを維持して保育研究を継続して下さい。テーマであげた子どもの育ちを、もう少し他の指標も加えて分析すると、研究としてさらに重みを増すと思います。

評者：日吉 輝幸

人前でプレゼンテーションをするということは、大人でも消極的になったり、緊張したりして思うようにいかないこともあり、上手くプレゼンテーションを行うためには、様々な場面での経験が必要なのではないだろうか。

つるみね保育園では、これまで継続的に実践しているデジタル機器を活用した保育において、子どもたちが写真や動画を使ってプレゼンテーションを行うという実践を行っている。ICTを保育に活用している事例は増えていると聞かすが、つるみね保育園は既に3年余りの実績があり、その取り組み内容も吟味されており他の模範になると思える。今回の研究については、スクリーンに投影される自分の思い出の写真を使って発表したり、友達の質問に答えたりする中で、発表する力や思考力が高まり、友達との関わりも深まったとある。これは心情・意欲・態度を高めるといふ、教育的要素が十分発揮されていると考えられ、とても興味深い取り組みだと言えよう。欲を言えば研究レポートとして、研究者の考察と今後の実践についての思いを、まとめの部分でももう少し詳細に記述していただきたかった。今後も保育におけるデジタル機器の持つ可能性を探求され、更なる先駆的な実践を期待している。

課題研究② 遊びと学び

1 歳児の遊びの深まりと心の成長 ～青虫の飼育・観察を通して～

東京都・砂原保育園 榎本 侑季帆

1. はじめに

1) 2014年度の子どもたちの姿、保育士の願い

2014年度の1歳児クラスは、男児11名、女児7名の計18名である。とても明るく好奇心旺盛で、様々なものに興味を持ち、日常の中で楽しいものをキャッチする力が豊かな子どもたちであった。しかし、そのために遊びや興味が持続せず散漫になることもあり、ひとつのことになかなか集中できない姿も見られていた。様々なモノやコトに興味関心が向くことはとても良いことである。

保育士達はこの子ども達の持っているエネルギーを活かし遊びを深めていきたいという願いを持っていた。



2) 青虫の飼育観察を始める —幼児クラスの姿から—

そんな時、幼児クラスから青虫がやってきた。砂原の幼児クラスでは、毎年生き物の飼育活動をしている。1歳児は幼児のような活動をするのは難しいが、1歳児なりの、楽しみながら興味を持って取り組める生き物の飼育観察が出来るのではないかと考えた。

飼育観察を『1歳児の生活に根付いた遊び』と捉え、子どもたちの興味関心を深めながら楽しめるように環境を用意することにした。導入の仕方や、観察や触れ合いの時間をどのように設けていくか等保育士間で話し合いながら、青虫の飼育活動を開始した。

今回は、青虫の飼育活動を通して子どもたちが見せた心の成長を記録し、保育士の働きかけや保育環境等を踏まえながら、1歳児の子どもの遊びの深まりと心の成長について考察していく。

2. 青虫と子どもたちの出会い

おやつ後の集まりの時間、1歳児保育室に青虫がやってきた。子どもたちは、初めて見る青虫に興味津々。保育士が、青虫が成長して蛹になり蝶になること、柑橘系の葉っぱを食べることなど青虫について話をすると、とても真剣な眼差しで聞く姿があった。また、言葉で伝えるだけでなく、葉っぱの香りを嗅いでみたり、触り方を

教えたり、青虫にじかに触れてみたりした。子どもたちの青虫に対する興味や愛着は、実際に自分で見たり触れたりすることで、ぐっと湧いたように感じられた。子どもたちは怖がることもなく、手のひらに青虫を乗せじっくり見ている。1歳の小さい子が手に乗せてみるができるなんてすごいなあ、と驚かされた。



この日から子どもたちの青虫の飼育観察がスタートした。子どもたちが何を感じ、どんな反応を見せてくれるか、保育士にとってもわくわくドキドキの日々が始まった。



エピソード① 「ちょうちょになるんだよ」

—発信・共有しようとする気持ち—

こうた（仮名）は1歳10ヶ月。引っ込み思案というわけではないが、恥ずかしがりやな一面があり、積極的に関わりを持ったり気持ちを表すよりも自分の世界で遊ぶことが好きな子である。

クラスで青虫を飼い始めて間もない日、保育室に入った他のクラスの保育士が虫かごを見つけ「あれ？何飼っているの？」と何気なく1歳児の担任に尋ねた。それを聞いていたこうたがすぐにその保育士に駆け寄ってきた。そして両手を蝶の羽のようにパタパタとさせながら「ちょうちょ！ちょうちょ！」と何度も言って教えようとしている。普段自分から気持ちを出したり思いを主張することが少ないのだが、積極的に青虫が蝶に



なることを伝えようとしている。青虫が初めて保育室にやってきた日も、とても興味を持って集まりに参加していた。青虫の存在がこうたの心の中にしっかりとこっているようであった。



こうたはクラスの中でも特に色々な物に興味に移りやすく、保育士間でも少し気になる子であった。しかし、青虫の観察になると毎日とても積極的で、友だちに交ざり自分から活動に参加する姿が見られていた。そのような姿を見て、こうたは青虫の飼育観察を通し、継続した遊びの楽しさを体験することができてきたように感じる。それは、保育士が青虫の成長を1歳児なりにわかる形で伝え、その時、その時間だけ青虫を見るという誘いかけでなく、期待や簡単な見通しを持って活動に参加できるよう働きかけたことが、こうたの興味の継続にとって必要な事であったように思った。

この活動とこうたの成長の姿から、保育士達はこうたは本当に気になる子だったのだろうか、ということを感じた。興味を持って活動に参加する姿が本来のこうたの姿、こうたの持つ力で、そこに保育士が気付かなかっただけではなかったのか。保育士のこうたに対する見方を変えるきっかけとなった。

この活動を通し、一人ひとりの興味を見極め、適切な環境を提供することの大切さを改めて気付かせてもらうことができた。

エピソード② 「あおむし見ようよ」

—自発的な遊び・学び—

青虫がやってきてから、毎日の観察は子どもたちの日課になっていった。それは保育士が誘いかけしているからだけではない。子どもたちの声でしぜんと観察が始まることもしばしばであった。特になつみ（仮名）は毎日青虫を見ることをとても楽しみにしていた。



なつみは2歳1カ月。とても活発で明るい子である。なつみは、園庭遊びやおやつ後に保育室に戻ると、いつも一番に「あおむし見ようよ！」と話していた。その声に他児からも「あおむしさん見る！」と声があがり観察の時間となるのが、クラスの恒例となっていた。

なつみは保育士から聞いたこともとてもよく覚えていて、「あおむしさん、ちょうちょになるんだよね」「葉っぱを食べるんだよね」と毎日嬉しそうに話しながら、じっくり青虫を眺めている。そして、その声や姿にしぜんと他の子どもたちも集まるのである。

保育士が中心でなくても「いないね〜」「どこかな」「あっ！せんせいここにいたよ！」と子どもたち自らが熱心



に虫かごを覗き込む姿があった。遊びが子どもたちの中にしぜんに入っていく、興味や関心が継続することで自発的な遊び・学びが生まれていくのだと感じられた。

環境を設定する時、その時期の子どもたちの発達に沿った積み木やパズルなどの教材を用意するこ

とが多い。しかし、青虫の観察のように、発達とはまた違った視点からの働きかけが、子どもたちに大きな成長をもたらすことを学ぶことができた。

今回の活動を通して得られた学びや気づきを活かし、飼育観察を楽しいだけの活動として終わらせてしまうのではなく、『飼育という教材』としてきちんとカリキュラムに取り入れてねらいや目的を明確にすることで、より深まりのある活動にすることができると感じた。



3. 青虫の成長と子どもたちの姿

1) 蝶になるまで

観察を続けていたある日、一匹の青虫が蛹になった。青虫から姿形が変わった蛹を見て、子どもたちはとても不思議そうな表情を見せている。青虫が蛹になる、ということは、1歳児にはまだ少し難しかったようだ。しかし、「蛹さんが今度は蝶になるんだよ、楽しみだね」という保育士の言葉を聞いて「ちょうちょになるんだ！」と改めて理解し、蛹の姿を食い入るように見つめている姿があった。蛹が蝶になった時、子どもたちの反応はどのようなものだろうか。そんな期待をしつつ、保育士も子どもたちと共に活動の楽しさを感じる毎日であった。



その後も観察を続けていき、ついにそのうちの一匹が蝶になった。午睡から目覚めた子どもたちと一緒にそっと覗くと、初めは虫かごに張り付きじっくり見入っている。「ち

ょうちょ！ちょうちょ！」「ちょうちょになったよ！」しだいに大興奮。「おやつを食べたらさようならしよう」と約束をして、羽が乾くまでの時間を過ごした。やっとちょうちょになった、という嬉しさや驚きを全身で表現する子どもたち。『青虫が蝶になる』というしぜんの成り行きが、子どもたちにとっては、保育士が思っていた以上の期待感として育っていたのだ。継続した活動だからこそ、期待が生まれ、それが意欲に繋がっていたのだと感じられた。

2) 蝶とのお別れ

おやつ後、蝶を空に放す時がやってきた。かごの蓋を開けると、パタパタと羽を動かすついに蝶が空に飛んでいく。その様子を子どもたちは一生懸命空を見上げて見つめていた。「ばいばーい！」と手を振る子、じっと見つめる子、「また遊びにきてねー」と蝶に声を掛ける子。反応は様々であったが、どの子も一生懸命蝶の行方を目で追いながら遠くに飛んで行くまで見続けていた。毎日育ててきた蝶との別れに、1歳児なりに何かをきっと感じていたにちがいない。そんな思いが蝶に届いたのか、不思議な事に、一度は見えなくなった蝶がもう一度子どもたちの元へ戻ってきた。放したらそれで終わりではなく、遠くへ飛んで行ってしまっても見えなくなってもずっと空を見上げている子どもたちの真剣な表情がとても印象的であった。



エピソード③ 「ここにちょうちょさんいたよ」

—活動が終わった後にも続く興味関心—

あかね(仮名)は1歳8か月。新入園児で、入園当初からなかなか遊びが見つけれず、フラフラしている姿が多かった。しかしあかねは、この活動を通し人一倍ちょうちょが大好きになっていった。

最後の一匹の蛹も蝶になり、1歳児クラスでの青虫の飼育観察が終わって数日後。絵本を見ていたあかねが、突然嬉しそうに「ちょうちょ！」と指さし保育士を呼んだ。見ると、そこにはアゲハ蝶の写真があった。指さしながら見せるあかねの表情はとても嬉しそうであった。あかねは絵本で蝶を探すことが好きになり、だんだんと絵本の面白さを感じるようになっていった。

なかなか遊びが見つけれなかったあかねであったが、この頃から一人でじっくり絵本を見て遊ぶ姿が見られるようになっていった。また、クラスの集まりでは、歌や手遊びに加えて、絵本を楽しむということができるようになった。今まで遊びを見つけれずフラフラしていた

あかねの姿が変わってきたことで、クラスの集まりにも良い変化が見られるようになったのである。

一人ひとりの心の成長が集団を育てるきっかけになり、個が集団の質を高め、また、良い集団が個を育てるということを1歳児の保育の中でも感じる事ができた瞬間であった。

あかねのように活動後の興味の継続は他児にも見られ、「ちょうちょさん、さようならしたよね」「ちょうちょさんいたね」などの言葉が多く出てきた。お別れをした後で



も、子どもたちの中には蝶を育てた時に芽生えた『コト』がはっきり心に残っているようであった。このような姿に嬉しさと共に子どもたちの持つ力を感じた。

4. 保護者にも伝えたい

私たち保育士は、青虫の観察活動を通しての子ども成長をぜひ保護者に伝えたくて、幼児クラスで発行している葉通信(※1)の1歳児特別号を作った。

「家庭ではなかなかできない経験を保育園でさせてもらってありがたい」「子どもがとても興味を持ち毎日見ている」などの感想があり、普段の保育の様子を知ってもらう良い機会となった。

1歳児の保育は、着替えや食事、排泄の介助など生活面に重きのある印象を持っている保護者も多いが、このような発信をしたことで、1歳児には1歳児なりの『遊び』、そこからの『学び』があるということを知ってもらえるきっかけとなった。また、日々の保育を保護者に知ってもらうことの大切さを改めて学ぶことができた。

朝の分離の際には泣いている子も「青虫さんに会いに行こうか」「今日も元気か見に行こうよ」と誘いかけると、泣き止み笑顔で親から離れられる姿を見て、保護者は、青虫の活動が子どもたちにとって期待があり、楽しい活動であるということを感じていたように思う。しかし、子どもの姿を発信するだけでなく、登降園時に、親子で観察ができるコーナー作りをするなど、もっと工夫を加えても良かったと思う。親に子どもが実際に観察する姿を見てもらうことや一緒に観察することで、我が子の成長を知ったり、心の育ちを感じてもらえる機会になっただろう。

今回の活動に限らず、普段の保育を『親子で一緒に』体験するきっかけづくりがさらに工夫されることで、保護者理解になったり保育を知ってもらうことにつながっていくと感じられた。(参考資料添付)

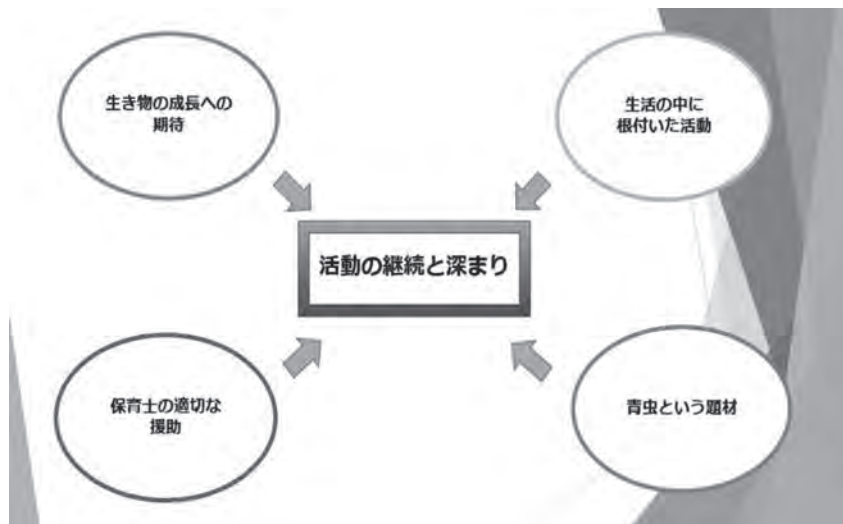
5. 考察 —活動の深まりと継続—

1歳児クラスの青虫の飼育観察を通し、子どもたちは保育士が思っていた以上に様々な思いを抱き、日々多くを吸収しているように感じられた。生き物を飼うという

経験がこの時期の子どもたちにとってここまで意味を持つものになったことに保育士も驚きを感じている。

1歳児であっても、青虫が蝶になるという生き物の成長の期待を持つことができ、その期待があることで活動が継続していく。それは時間毎に提供された遊びではなく、青虫の観察・飼育のように、生きていて日々変化する、生活の中に根付き継続していく活動だったからこそ

見られた成長だったのだと思う。そして、ただ観察するだけでなく、目的や願いに沿った保育士の適切な援助があることで、より深く子どもたちの中に入り、積極性や自発性、探究心が育まれたのではないかと推測される。また、生き物の中でも、幼虫、蛹、蝶と短い期間に大きく変化していく青虫という教材は、1歳児の子どもたちにとって適していたように感じた。



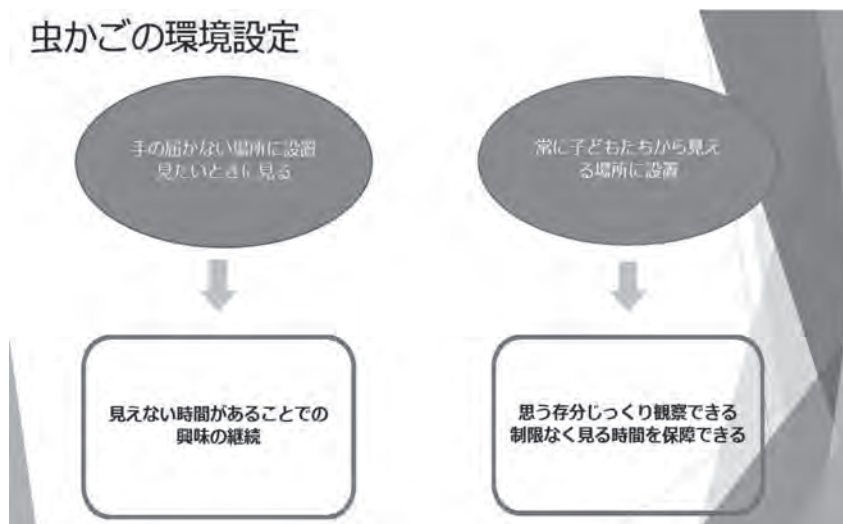
1) 環境 (2014年度と2015年度の違い)

青虫の観察の環境設定について、2014年度は、柵の上に虫かごを設置し、子どもたちの声や保育士の誘いかけて観察の時間を設けていた。常に置いておくのではなく、また明日も見たいという期待や、『見えない時間』があることが1歳児にとっては適当で、興味の継続につながったのではないかと考えている。

2015年度の1歳児クラスでは、いつも見える場所に虫かごを設置し、保育室の環境の一部にした。初めは虫かごをたたいてしまう姿などもあったが次第にあることが当たり前になって、虫かごを常設することができている。虫かごがそこにあることが当たり前になり、期待や継続

という点では薄れてしまった部分はあるが、興味のある子は心いくまで観察することができ、自分の世界で楽しむことができている。そのことで、ある男児はしぜんとじっくり観察する楽しさを知り、幼児テラスに虫かごがあると飽きることなく眺めたり、探究心を持って図鑑を見る姿も見られるようになっていった。

同じ教材でも環境設定や提供のしかたによって子どもたちに与える影響は様々であり、色々な方法ややり方があることを改めて学ぶことができた。答えはひとつではなく、目の前にいる子どもたちに、また、一人ひとりにとって適しているものを見極め提供することが必要であると感じている。



2) 実際に触れて体験する（観察のしかた）

子どもたちは今回の活動の中でたくさん青虫に触れた。動く姿を外から見るのではなく、生き物が動くということを感じてみる経験もまたとても大切なことであった。保育士は、子どもたちに青虫を見せる時には毎回手に乗せていた。子どもたちに不思議さや面白さを伝えるには、まずは保育士が生き物が好きであること。虫かごの外から一緒に眺めているだけでは、きっとここまでの興味関心が湧くことはなかったように思う。



3) 日常の保育とのつながり（保育室・園庭の環境）

日常の保育環境についても考えてみる。

2014年度の1歳児クラスは、子どもたちが季節を感じられるような保育環境を心掛けていた。春にはペーパークラフトの蝶を天井から吊るしたり、季節の歌や絵本を取り入れていた事で、低月齢の小さな子どもたちも青虫から『ちようちょ』をイメージしやすかったのだろう。

また、園庭に雑草山（※2）があること。子どもたちは、春になり暖かくなってきた頃からずっと虫探しをしていた。このように自然と触れ合う機会が日常の保育の中に



あることで、子どもたちの興味関心がますます深まったのではないかと思う。一見すると、青虫の飼育は日常の子どもたちの生活や遊びとは別の活動のように思えるが、振り返ってみるとそれまでに行われていた日頃の保育、保育環境の設定が大切であることに気付かされる。日常の保育が活動の深まりにつながり、活動の深まりがまた、日常の保育にわくわく感をもたらしてくれた。そして、このような遊びの深まりが、1歳児の『学び』につながっていった。



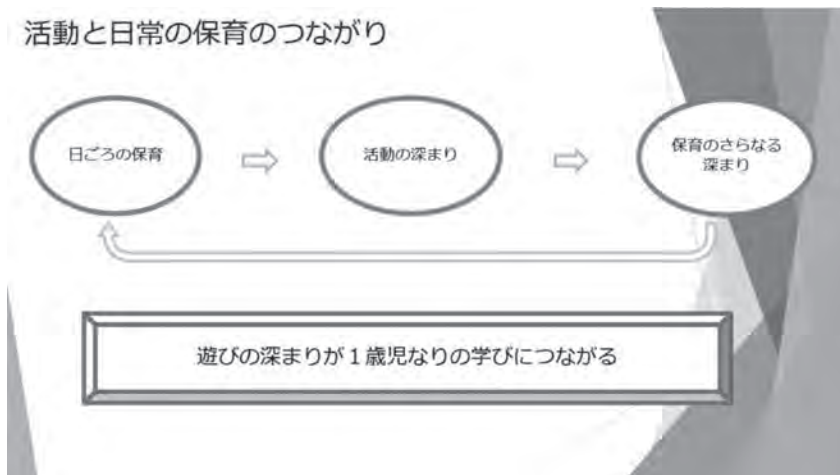
6. 今後の課題

この活動を経験してからの子どもたちは『楽しい』だけでなく、それを保育士や友だちに伝えようとしたり一緒に楽しもうとするなど、1歳児なりの探究心を持って遊び込む姿が見られるようになってきた。『遊び』が深まることは『学び』につながり、『意欲』につながっていくということを、子どもたちの姿を通して実感することができた。

また、伝えたいという子どもの自発的な思いや、それを受け止めてもらうことで芽生えた自尊感情は、2歳児や幼児になった時の日常生活の中にある、さらなる探究心につながっていくように思う。乳児でのこのような活動や経験が土台となって、幼児クラスでの学びへ発展するのではないだろうか。そのためには、2のエピソード②「あおむし見ようよ」の考察でも触れたように、継続性のあるカリキュラムが重要になると感じた。最初に活動有りきで子どもにさせるということではなく、その時々の子どもの興味や関心を捉え、より深く子どもたちの気持ちに沿った遊びの提供のしかたができるようにしたいということである。

今回の活動も、保育士の思いや目的を持って始めたものであったが、活動が深まるにつれ、子どもたちから気付かせてもらったことも多かった。それを毎日保育士間

活動と日常の保育のつながり



で共有しながら進めていたものの、カリキュラムにおろし、より見通しを持った活動にすることまではできていなかった。カリキュラムを作成し、月ごとの子どもたちの姿をより細かく捉え、飼育活動を通してのねらいや目的を明確にしていくことが、さらなる子どもの豊かな心の育ちにつながるのではないかと感じている。また、飼育活動を通しての1歳児から2歳児、幼児クラスへと続く長期的な子どもの心の育ちを園全体で考え共有していくためにも、年齢をこえたカリキュラムも必要なものであると思う。

1歳児クラスでの今回の経験が幼児になった時、どのように花開くのか今からとても楽しみである。今回気付いた課題を今後に活かしながら、これからも毎日の保育

を楽しみたいと思っている。そして、改めて『子どもから学ぶ』という気持ちを忘れずに、日々丁寧に子どもたちと寄り添っていきたい。

参考資料

・ひこばえ通信 ～あおむしが蝶になったよ～

※1…幼児クラスで特別な活動があった日に、その日のうちに発行し保護者に向けて子どもたちの姿を発信しているもの。

※2…園舎の建替えの時に出た産業廃棄物の砂で園庭の真ん中に盛り土し作った小さな山。保育園にも草木が生え虫が集まる自然を作りたいという思いからみんなで雑草を植え作った。

参考資料

ひこばえ 薬通信

～あおむしが蝶になったよ！～

かりん・あなず特別号 2014. 10 砂原保育園

この夏、かりん組では青虫の飼育をしました。まだまだ小さなかりん組の子ども達ですが、生き物を飼う経験の中で様々な思いを抱き、青虫の成長に日々期待を持って過ごす姿が見られました。そんな子ども達の成長の姿をお届けしたいと思い、今回かりん特別号が誕生しました！

あおむしがやってきたよ！

おやつ後のお集まりの時間、かりん組に青虫がきたことを子ども達に伝えました。初めて見る青虫に興味津々の子ども達。これから飼うにあたって、青虫が成長して蛹になり蝶へと成長すること、柑橘系の葉っぱを食べることなど青虫について話をすると、保育士の話をとても真剣な眼差しで聞いてくれました。この日から子ども達の青虫のお世話が始まりました！子ども達がどんな反応を見せてくれるか保育士にとってワクワクドキドキの日々が始まりました☆

エピソード1

「ちょうちょになるんだよ！」

かりんのお部屋に入った他クラス職員が、虫かごを見て「あれ？何飼っているの？」と何気なく職員に尋ねると、急に職員の前へ来て「ちょうちょ！」と答えるAくん。両手を蝶のようにバタバタさせながら「生懸命教えてあげる姿がありました。先日のお集まりでの保育士の話をきちんと覚えているんだと驚かされました。ただ青虫を見て楽しむ、触ってみる、というだけでなく、子ども達のなかに蝶になるんだという期待があることが感じられた場面でした！



青虫さんは柑橘系の葉っぱを食べるんだよ☆

蝶は青虫さんかごのなかだよ！

触ってみよう！

ついに蝶になりました！！

毎日観察を続けていたある日、ついに一匹のさなぎが蝶になってしまいました！保育士が見つけ早速子ども達に伝えて見せると、皆近くで見たい一心で虫かごに張り付き夢中で見つめています！そして、じっくり見た後には「ちょうちょ！」「ちょうちょになったよ！」と今度は大興奮の子ども達です☆羽が乾くまでもう少し。蝶とお別れの時間が迫ってきました。



見せて！見せて！

羽を乾かして飛ぶ準備をしているよ！



あっ！羽がバタバタ動いてる！！

蝶とお別れ

おやつ後、蝶を空に戻す時がやってきました。かごの蓋を開けるとバタバタと羽を動かし、ついに蝶が空に飛んでいきました。その様子を子ども達は一生懸命上を見上げ見つめています。はいばーい！と手を振る子、じっと見つめる子…反応は様々でしたがどの子も一生懸命蝶の行方を目で追いつつながら遠くに飛んで行くまで見届けていました。毎日育ててきた蝶とお別れに、さっと小さいなりに何かを感じていたことでしょう。

全部で4匹の蝶を育てた子ども達。しかし、何故目であってもお別れの時はいつも真剣で新鮮な表情を見せていました。



蝶々さん、元気でね～♪

エピソード2

「あおむし見ようよ」
 日中は子ども達のなかでも特に青虫に興味を持っていた女の子。毎日おやつの後や園庭からお部屋に戻った時には「せんせい、あおむし見る！」という言葉が聞かれていました。保育士から声をかけずとも、子ども達の心のなかには青虫のことがあるようでした。★Bちゃんの言葉に周りの子どもたちも集まって毎日じっくり青虫の観察、子ども達の目はキラキラ輝いていました！



青虫さん、赤ちゃんをおんぶしているのかな？

青虫からさなぎへ・・・

毎日青虫の観察を続けていると、ある日1匹がさなぎになっていました！青虫さん、さなぎになったよと伝え一緒に見ると、子ども達は目が点に！！さなぎになる、という事は子ども達にとってまだ難しくなりました。ただただびっくりした様子でした。しかし、その後はまた、他の青虫と一緒にさなぎも観察！保育士の「早く蝶々さんになってほしいね。」の言葉に顔ききするように見つめる子ども達です。さなぎが蝶になった時、子ども達はどんな反応を見せてくれるのでしょうか・・・★



青虫さんどこにいるかな～？



あっ！せんせい！ここにいたよ！！



遠くに飛んで行ってちゃったよ！！

蝶々さん、バイバイ！元気でね！！



蝶々さん、また飛んできてくれるかな～？



エピソード3

「ここにちょうちょさんいたよ！」
 最後の一匹も蝶になり、かりんでの青虫の飼育が終わって数日。絵本を見ていたDちゃんが突然嬉しそうに「ちょうちょ！」と指さし保育士を呼びました。見ると、そこにはアザハ蝶の写真が、指さしながら見せるDちゃん表情はとも嬉しそうでした。そのほかにも、「ちょうちょさんさよならしたよね」「ちょうちょさんいたね」などの言葉も子ども達から聞かれており、さよならをした後でも子ども達のなかには蝶を育てた時に芽生えたものがきちんと心に残っているようです。そんな姿に嬉しさと共に子ども達の方を感じました。

・・・おわりに・・・

今回かりん組で初めて青虫の飼育をし、保育士が思っていた以上に子ども達は様々な思いを抱き、日々多くを吸収しているように感じられました。生き物を飼うという経験がこの時期の子ども達にとってここまで意味を持つものになったことに保育士も驚きを感じています。青虫を飼う経験が生き物への興味関心だけでなく、友達との関わりや深まりや探求心にもつながり、絵本のなかや園庭で蝶を見つけると保育士やお友達に教えてくれる姿や、夢中になって蝶や虫探しに没頭姿も見られる様になりました。この夏の出来事を秋には更に深めていけるよう、園庭遊びやファミリーデイに向けての活動をますます充実させていきたいと考えています！

講評：「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」

評者：井桁 容子

1歳児クラスで飼育することになった青虫との関わりを通して、1歳児の遊びの深まりと心の成長について考察したもので、実践としては大変面白く評価できる。また、子ども一人ひとりが持っている特性を捉えながら、「本当に気になる子だったのだろうか」「保育士が気付かなかっただけなのではないか」と振り返り、「一人ひとりの興味を見極め、適切な環境を提供することの大切さ」に気付いていることも意義深い研究となっている。

ただし、1歳児にとっての『遊びの深まり』『学び』『意欲につながる』ということの具体的な表現が少なく、保育者の解釈が多いために、どのような子どもの行為を学びや意欲と捉えたのかが見えてこなかった。また、「一つのことになかなか集中できない」「集団を育てる」という視点は、1歳児の保育にとって、あまり強調されるとその発達過程を見通された保育からズレが生じる可能性があるので、気をつけたいところである。全体的には、保育者の子どもへのまなざしと保育者としての振り返りは良い実践を物語っていた。

評者：石川 昭義

1歳児の遊びについて、青虫の飼育と観察を通して考察が展開されている。その中で、観察のための環境を工夫する試みや日常の保育とのつながりを見いだそうとする試みの様子が伝わってくる報告である。

3つのエピソードに出てくる「こうた」、「なつみ」、「あかね」の3人の子どもについて、それぞれの成長の様子が描かれている。特に、「ちょうちょ」がきっかけとなって自分の遊びを見つけ出した「あかね」の事例では、「個が集団の質を高め、

また、良い集団が個を育てるということをして1歳児の保育の中でも感じる事ができた瞬間」と捉えており、1歳児ながら新規な視点と受け取れる。

本報告では、「飼育」という教材としての位置づけが説明されているが、その場合、どのようなねらいや内容をもった教材として活用できたのか。これを5領域の観点から考察ができるとよかった。また、1歳児にとって、この学びの「深まり」ということをどのように考えるかについて、園としての見解を練って論述の展開が期待される。

評者：酒井 かず子

1歳児クラスでの取り組みとして青虫の飼育観察に取り組みされたことに、大変興味を持ちました。クラスの雰囲気は、明るく好奇心旺盛で、様々なことに興味を持ち、日常の中でも楽しいものをキャッチする力が豊かな子ども達であると紹介されていますが、集中力や持続性に欠ける点を心配され、あふれるエネルギーを生かし、深められるようにしたいという願いから、青虫の飼育観察に取り組み、課題研究とされました。

青虫のお話を興味深く聞いていたり、葉っぱの香りをかいだり、触ってみたりと、怖くもワクワクしながら興味津々な様子が伝わってきました。最後には蛹から蝶に脱皮し、空に放すまで、みんなで見届けられたことはよい体験であったと思います。

1歳児は物事の意味が分かるようになり、五感を刺激するものに強い興味を示す時期でもありますので、今回は青虫の飼育観察にスポットを当て研究をされた背景には、平素の保育において、子どもの主体性の保障をするための遊具等の環境があり、主体的に取り組める体制が土台にあることを推測し、子どもたちが貴重な経験により、大きく成長し、脱皮していく様子を感じました。

遊びの発展に必要な援助 ～友だちの関わりから見えてきたもの～

北海道・釧路保育所（愛国弘済保育園） 松田陽央子・高野里沙・倉内麻衣子

I. はじめに

遊びが持続出来ないこどもが増えてきたと感じている。子ども同士、遊ぶことは自然なことだと捉えていたので、友だち同士の遊びを深く追求をしたことはなかった。具体的に課題をもって保育士がしかけていく遊び、設定保育の中では、反省や評価をしながら保育を振り返ってきたが、子ども同士の自由遊びについては振り返りをあまりしてこなかったように思う。何かトラブルがあるとその都度保育士が中に入って、解決に導くなど少々場当たり的なところもあった。根本的な解決には、つながっていないと感じながらその場を何となく凌いでいた。

しかし、自由遊びにこそ子どもの姿がよく見えてくる。ごっこ遊びや、工作、かくれんぼなど様々な遊びが展開される中で、すぐふくれる、怒る、威張る、せっかく仲良く遊んでいるのに強引に入ってきて壊すなど、遊びが持続できない、遊びを持続させない子どもがいる。また、混合保育のため、いつも遊んでいる友だちと所属が違うことに納得いかない事例など、日々の忙しさに振り回され、自分の保育が出来ないという悩みを抱えながら、自分はどんな保育がしたいのか、どんな保育を目指しているのか、失敗と反省を繰り返しながら、子どもにとってなぜ遊びが大切なのかをつかんでいきたい。

II. 研究の目的

- ・友だち同士の遊びを通して、子どもが遊びを持続出来ないのは何故か、何が起きているのか原因を探り、子どもにとってどんな保育が必要なのか、本事例を通して明確にしていきたい。

III. 研究の方法

- ・平成25年9月～平成27年1月までの研究
- ・対象年齢：2歳児と5歳児
- ・資料：連絡ノート、保育日誌、保育計画、指導会議録

IV. 事例と考察

【事例1】

（Cちゃん2歳6か月）

〈エピソード1なんでCちゃんうさぎじゃないの？〉

月齢の高いCちゃんは1つ上のクラスの友達と一緒に遊んでいる。

M：「Cちゃんお医者さんしよう！」

C：「いいよ！お腹が痛いです！」服をめくってお腹を見せる。

M：「薬をだしますね」

C：「あ！お熱もあります」

M：「体温計で測りましょう！」

とてもスムーズな流れでお医者さんごっこを楽しみ周りにいるお友達にも声を掛けて楽しんでいる。

M：「今日は〇ちゃんのお誕生日！」

C：「みんなでごちそう作ろうか～！！」

テーブルの上にお皿を並べて食べ物をのせる。

C：「ハッピーバースデートゥーユー♪」

ごちそうを並べ終わると陽気に歌いだす。Cちゃんと2歳児のこども達。お誕生さんの名前を色々変えて、みんなで何度も誕生日の歌を歌いごちそうを食べて盛り上がる。



〈エピソード2：とまどうCちゃん〉

発表会も近くなり保育士が（以下、保）

保：「発表会のお遊戯練習するよー

Cちゃんはこうさぎさん（1歳）で練習しようね！」

C：「Cちゃんは、うさぎさん（2歳）だよ」

保：「Cちゃんは遊ぶ時はうさぎさんだけど本当はこうさぎさんなんだよ」

C：「Cちゃん何でうさぎじゃないの？」

【資料1】

クラス	人数	状況
こうさぎ組（1歳児）	17名	4名がうさぎ組と一緒に保育（Cちゃん含む）
うさぎ組（2歳児）	12名	うさぎ組12名+こうさぎ組4名の計16名と一緒に過ごす

【考察】

いつも2歳児と一緒に遊んでいるのに何で自分だけが違うクラス（こうさぎ組）で発表会の練習なのか全く納得がいかないCちゃん。練習をしても、じっと保育士を見て目で訴えてくる事が多く踊ろうとはしなかった。普段一緒に遊んでいる2歳児の子どもが自分にとっての仲間だと思っていたようである。

そこでCちゃんの所属を言葉ではっきりさせた方がよいのではないかと感じた。所属を明確にしなければ進級の時にCちゃんが1つ上のクラスの子ども達と一緒に進級できないという悲しい思いをしてしまうのではないかと懸念があったからである。その為今まで製作やお絵かきはうさぎ組（2歳児）で行っていたものを、こうさぎ組（1歳児）で行うように今後統一し、自分の所属をはっきりさせていこうと思った。

〈エピソード3：心境の変化〉

お絵かきや製作をする時は、こうさぎ組で一緒に行うようにした。発表会練習も始まって、こうさぎ組のお友達と過ごす事が多くなる。発表会練習ではうさぎ組の踊りが好きだったが、こうさぎ組の衣装を見せると、C：「うわあ！Cちゃんこれ着るの！！」そう言いながら自分の衣装を大事に抱え込んでいた。家庭でも喜んでいて様子があり、C：「ふーわふわのスカートはくんだよ！」と母親に伝えていて家庭でも喜んでいて。Cちゃんも一緒に踊るようになった。

【考察】

こうさぎ組が自分の興味のある事をやっている時は、こうさぎ組である事を喜ぶようになった。発表会はうさぎ組よりも豪華で可愛い衣装になるように工夫した。少しずつ心境の変化が見られるようになった。家庭でもこうさぎ組のお友達の名前が出るようになったと保護者から言われ、Cちゃんがうさぎ組だけではなくこうさぎ組との関わりも増えてきたように感じた。こうさぎ組の保育士にも甘えたりおしゃべりする事が多くなり「自分はこうさぎ組」と手ごたえを感じた。

〈エピソード4：1歳児と2歳児をつなぐCちゃん〉

1歳児はお世話する赤ちゃん。2歳児と一緒に遊ぶ仲間。こうさぎ組と一緒に遊ぶ時間が増えた事によって遊ぶ友達も幅広いものになっていった。Cちゃんと2歳児と一緒に絵本を読んでいる時、C：「さあ絵本読みますよートントントンアンパンマン…」

手遊びを始めるCちゃん。2歳児と1歳児が加わり、一緒に「だるまさん」の絵本を読んで動きを真似して楽しんでいた。Cちゃんの意識の変化でこうさぎ組と関わる事が増え、そこからうさぎ組と自然な流れで一緒に遊ぶ事が多くなってきた。以前は保育士が仲立ちしながら、こうさぎ組とうさぎ組で一緒にごっこ遊びをする事が多

かったが、遊びの始めに「ごはん作るよー」という掛け声で始まるCちゃんの遊びに1歳児も2歳児も加わって遊ぶようになった。



【考察】

仲間意識が芽生えてきたところで発表会練習が始まった。2歳児の仲間とは別々になり納得がいかなかったCちゃんだったが、こうさぎ組である事を受け入れた事によって、結果的にCちゃんがクラスをまとめていき、こうさぎ組とうさぎ組をつなぐパイプになってくれた。4人の複数担任のうち新人2人、パート1人を抱えながらクラス運営をしなければならない状況のもと、新入児が多かったのでクラスが落ち着かず、月齢が低くまだ歩けない子どもや、活動的な子ども、泣いている子どもに手がいてしまい目が行き届いていなかった。月齢が高くしっかりした子に、遊びを保障してあげたくて、うさぎ組へ移動させた結果、本来の自分のクラスがわからなくなり、不安感を与えてしまった。また、Cちゃんと十分に遊んであげられなかった事ですぐにCちゃんの思いに気づいてあげられなかった。これを機会にこうさぎ組17名全員が自分のクラスに戻ってきた。気づいた事として、4月はクラスが落ち着かず子ども達の話しを聞いてあげられる環境ではなかった。発表会練習が始まった11月頃にはクラスが落ち着き自分の気持ちを話せる環境であった為、Cちゃんも自分の思いを話すことができ、私自身も声を拾い上げることができたのではないだろうか。小さい子どもながらに状況を感じ、自分の話しを聞いてほしいと思う時は、保育士が十分に受容し共感と余裕がある環境が大切だと感じた。

5歳児クラス

男児11名 女児11名 計22名

【事例2】

（T君：4歳9ヵ月 F君：5歳1ヵ月）

〈エピソード1：オレが！！〉

F：「にじのへやで鬼ごっこしよ〜」

T：「オレもいれて〜」

F：「いいよ。じゃあ〜鬼決めじゃんけんしよう。」

保：「いいね〜じゃんけんを決めるの〜。誰が鬼になるのか楽しみだね。」

T：「オレがきめてやるよ！！」

F：「じゃんけんで決めようよ。」
 T：「オレが決めるって！」
 保：「じゃんけんで決めようってルール作ったんじゃないの？」
 T：「いいの～オレが鬼やるから～」
 保：「F君良かったの？じゃんけんで決めなくて。」
 F：「いいの！いいの！T君いつもこうだからね。いつまでもゲームはじまらないしね」
 (そして次の鬼決め…)
 F：「やった～F君が鬼だ～」
 (それから何度か鬼決めじゃんけんが繰り返され中々T君に鬼役がまわってこない…)
 T：「飽きた！！オレもうやめるわ。」
 F：「えっ？まだはじめたばかりだよ」
 T：「だってもう飽きちゃった～次はサッカーしようよ」
 F：「オレは鬼ごっこがいいな・・・」
 T：「あっそ～オレはもうやらないから～じゃあね～」
 (そうやってその場からいなくなりました。)
 保：「T君、今のはないんじゃない？F君じゃんけん決めも譲ってくれたんだよね？ゲームは最後まで終わらせようよ」
 T：「わかった～また今度ね～」
 こうしていつもT君のペースで遊びもが中断されてしまう。



〈エピソード2：合体ロボット①〉

みんなで集まり廃材を利用したロボットづくりが始まった。ロボット作りはT君が提案。いつもに増してT君が生き生きしている。
 T：「ねえ～ここに手をつけたらカッコよくなるんじゃない。」
 M：「うわぁ～本当だ！T君すごいね」
 T：「ねえ～H君もロボット一緒に作ろう」
 H：「何つくればいい？」
 T：「H君さぁ～絵を描くの上手だから目を作ってよ。」
 H：「わかった！やってみる！！」
 それから毎日自由時間になるとロボットの共同制作がはじまった。
 どんどん大きくカッコよくなっていくロボットをみんな大切に思っていた。ある日ロボットの手がとれていた…

T：「誰だよ！！これやったの！！」
 M：「ぼくたちじゃないよ…」
 T：「じゃあ！だれがやったんだよ！！M君とH君でしょ！」
 H：「ぼくもやってないよ…」
 保：「もう一回みんなで作ったら??」
 T：「もうやらない！M君とH君で作れよ！」
 M：「そういつているT君が壊したんじゃないの？」
 T：「なんでオレなんだよ！！」
 保：「犯人捜ししないでみんなで作り直そうよ」
 T：「もういい！オレもうやらない…」
 M：「まただ…」
 せっかくみんなで大切にしていたロボットづくりもここで終わってしまった。

【考察】

みんなで何かしなければならぬ時、お話を聞く時間になると決まって途中で腰を折ってしまうT君。みんなの前で注意されることも多く、そうなれば素直に話を聞くことも余計にできなくなり自分の中に閉じこもってしまう。思い通りにならなければその場から立ち去ったり、投げやりになってしまったり、ふくれたりという行動に出してしまう。その度にみんなから「まただ…」とあきれ顔でみられるT君。それが当たり前の日常となってしまった。本当は伝えたい思いや聞いてほしい！気づいて欲しい！という思いはあるはずなのに素直になれず最終的にはふかれてしまう。

〈エピソード3：バザー〉

毎年秋に行われるバザーは、各クラスの食べ物の屋台の出し物や父親クラブによる園庭での子ども縁日、子どもの部屋というリサイクルおもちゃ売りと地域交流の場としても毎年にごわっている。そして今日はバザー当日…
 保：「楽しみにしていたバザーの日だね。欲しい玩具見つかるといいね。たくさんおいしい物も食べて楽しんでね。」
 T：「先生～オレ欲しいものあるんだ～」
 保：「もう見ついているんだね。買えるといいね」
 R：「オレも～」
 T：「R君もしかして〇〇の剣?!」
 R：「そう!!T君も?」
 T：「オレはベルト!でも剣も欲しいな～」
 保：「2人とも欲しい物が買えるといいね。お財布落とさないようにね。楽しんでくるんだよ」
 父親クラブの縁日にて・・・
 T：「ここ何のお店？」
 他父：「おう！T君！くじだぞ！やってくるか？」
 T：「いや！オレスーパーボールやるからいいわ」
 他父：「おお～T君いっぱい買ったな～」

T：「うん。欲しい物全部買ったんだ～」
 それから少し経ち…
 他父：「T！！何やってるんだ？！」
 (売上金の入っている缶の小銭を自分の鞆にザァ～と入れている)
 他父：「こら！どこもってくんだ！！」
 (反応を楽しみながら笑いながら逃走。その騒ぎを聞きつけた父親)
 父親：「お前何してるんだ！！何したかわかってんのか？！」
 T：「いっぱいお金入ってたから…」
 父親：「お財布にお金なかったのか？」
 T：「いや、まだ入ってる…」
 父親：「自分が何したかわかっているのか？ダメだってわかってやってんだろ？！」
 T：「……。」
 父親：「あやまりにたってこい！！」
 T：「…ごめんなさい。」
 (勝手にもってくなよ～。と笑いながら許してくれた他父)

楽しんでいたはずのバザーも最後には父に怒られた事で暗い雰囲気のまま終わった。少し経ち父母揃って保育士と父親クラブの父親たちに謝罪にきた。予想もしなかったTくんの行動に両親も落ち込んでいた。

【考察】

バザー当日を楽しんでいたにも関わらずやってしまうのは何故なのか？人懐っこいT君は行く先々で他父に話し掛けられる事も多かった。T君も他父と遊んだり、話したりするのが大好きだったからである。親しみやすいという事から遊び感覚で売上金を鞆に入れてしまった。叱られる事は承知のうえでおこなっている。両親がいると嬉しさからなのかいつも以上に行動がエスカレートしてしまう。

【考察】「家庭との連携」

(父との面談)

家庭での様子はどうか話を聞いてみると、ふくれるという事は日常の事のように。父母も忙しい為、話を聞いてあげる事が出来ていないと悩んでいた。このままではこの先どうなるかととても心配はしている。T君は父に対して強い憧れを抱いており、保育の中でも父の職業を真似たごっこ遊びをしている。父のように力強くかっこいい男になりたいという思いが強い。そこで、お迎えの時に父親に面談をお願いしてみた。T君の話をじっくり聞いて欲しいという思いから、父と一緒に風呂に入ってもらい話を聞く時間を作ってもらったり、野球が共通して好きな事から一緒にキャッチボールをしてもらったり、戦いごっこの相手役を引きうけてもらい体をたくさん触れ合って遊んでもらえる様提案をした。期間

を短期間にしぼった。T君の変化を見てみたいとの思いと、変化が見られなければすぐに保育プランを変更していけるようにと約二週間に限定してみる。

【考察】「保育の見直し」

家庭での話を聞き保育園でもT君と向き合い方を見直す。T君の行動をよく観察してみる事からはじめる。どういった状況の時にそうになってしまうのか、T君が伝えたい！聞いて欲しいというサインを見逃してしまっているのではないか。自由時間を利用し何気ない会話することからはじめてみた。はじめは長い時間話が持たず、すぐにその場から立ち去ってしまったが根気よく話かける事で日に日に二人で話す時間も長くなってきた。友だち同士のトラブルの様子をみても、気持ちを伝えられないままにしている事が多いため仲立ちに入ったり別室を設け二人で話し向き合う機会をつくったりしてみる事にした。保育を見直す事によりT君に変化は見られないかをみてる事にした。

それから2週間…



〈エピソード4：合体ロボット②〉

T：「H君このロボットもう一回作らない？」
 (思いがけないT君からの提案にビックリした表情をみせるH君。)
 H：「でも、もう壊れちゃっているよ」
 T：「大丈夫！この手とこっちの手つなげて長くして～、こっちの手新しくしよう」
 H：「なんか前より強くなったね！！」
 H：「じゃあ～こっちの手オレがつくる！」
 T：「こっちの手長くしたのオレだからオレがやる！！」
 H：「まだだ…」
 (少し悩んだT君…)
 T：「ねえ、やっぱり一緒にここやろう！H君は絵も上手だからカッコよく色塗りもしてよ。オレも手伝うよ」
 H：「T君すごいね。壊れたからもう直らないかと思ったのに前よりカッコよくなったね。」
 T：「前のとは違うけど変身したみたいじゃない」
 T：「どんどん変身させてってカッコいいロボットにしよう。」

(前よりも大きく変化したロボットをみてみんなが一緒に遊びたいと言い出した。)

T:「じゃあ～みんなでやろう!! M君はここを作ってくれる。H君は顔作ってよ。」

(T君の指示のもとロボットはどんどん変化していった。心なしがT君も生き生きと自信に満ち溢れている。)



【考察】(家庭から)

母から連絡帳を通して二人の変化について綴られていた。はじめは父も手探りの状態でT君もいつも以上に自分に熱心な父に戸惑っていたという。話をする事が出来るのかと心配していたが、父の熱心な働き掛けがT君にも伝わっていき、日を増すごとにお風呂の時間がどんどん長くなっていったという。お風呂から出てくるT君の表情がどこかすっきりしていて、それと同時に父もすっきりした表情を浮かべていたという。お風呂の中で話をする事が二人には当たり前の様になっていったのだと母は嬉しそうに連絡帳に書いてあった。遊びの面でも父からはもちろんの事T君自身が父親という存在がより近いものを感じられたのか自分から体でぶつかっていき戦いごっこをくり広げ二人でどんどん遊びが発展していったのだという。父を通してT君の奥底にある気持ちを母も知ることができ、T君について父母が会話をする事も多くなったという。そして何より、T君が家庭で思いをぶつけるようになり気持ちが満たされ落ち着いてきたように思える。

【考察】(保育の中で)

みんなの前で叱るという行為をやめ、ふたりでゆっくり話す時間をつくるようにした。はじめはそれでも話を聞けなかったり、すぐにふくれていたりしていたが、繰り返し受け止め向き合っていくことで、徐々に自分の思いを話すようになっていった。話をする事で情緒が安定し、友だちとの接し方にも変化が見られた。すぐふくれるT君が友だちの話最後まで聞けるようになり、いつもなら「もういい」と投げやりになるT君が話を聞けるようになった事で最後まで遊びが成立できなかった問題も解決する事ができ、友だちからみるT君の印象も変化してきた。本来遊びをつくりだすのが得意なT君のまわりには自然と人が集まるようになっていった。

V. まとめと考察

自由遊びの時、子どもはよくトラブルを起こす。トラブルの原因は様々であるが、自由遊びの中のトラブルにこそ、子どもの抱えている問題がかくされていると感じた。

事例1は普段遊んでいる友だちとクラスが違うことに納得できない内容である。私たちは問題をよく起こす子どもに注目しがちだが、ここでは逆にしっかりとしているが故に声を聞くことが出来なかった、もっと保育者が子どもの遊びに加わり、話出来る環境を作ることが出来たなら、という思いと、どんなに小さくても4月5月のクラスの落ち着かない状況を感じ取っているのだ、ということに気がついた。なぜ発表会の頃(11月)に言ってきたのか、それはクラスも担任も落ち着いてきたから言えたのではないだろうか。

事例2では主導権を握りたがり、思い通りにならないとすぐふくれてしまい、遊びが続かないという実践内容である。とにかく自分に注目してほしい、自分の気持ちを受け入れてほしい、否定してほしい、という欲求が強く出ている。人を惹きつける力が十分にあり、困っている友だちを放っておけない親分肌だが自分に自信がないT君。何とかしてあげたい、何とかしなければ、という思いから、保育の見直しと家庭への働きかけを実践した。

子どもの発達に応じた様々な遊びを促すことは大事なことだが、ただ与えるだけではなく、周りから受け止めてくれる心地よさを感じさせ、得意な部分を伸ばしていくことが大切だと実感した。やがてそれが自信となり遊びをどんどん発展させていけるのではないだろうか。子どもにとってどんな保育が必要なのか、そのままの子どもを受け入れ、理解し、遊びの中で育てているものを捉えて支えていきたい。自己肯定感を育てていきたい。そのような保育を目指していきたいと感じている。

参考文献

- ・「保育者とこどものいい関係」
加藤繁美著 ひとなる書房 1993
- ・「対話と保育実践フーガ時代と切り結ぶ保育観の研究」
加藤繁美著 ひとなる書房 2009
- ・「エピソード記述で保育を描く」
鯨岡峻・鯨岡和子著 ミネルヴァ書房 2009
- ・「記録を書く人 書けない人 楽しく書いて保育が変わるシナリオ型記録」
加藤繁美著 ひとなる書房 2014
- ・研修会資料より
「実践に生きる保育研究」 大豆生田啓友著 2013

講評：「遊びの発展に必要な援助～友達の関わりから見えてきたもの～」

評者：石川 昭義

「子どもが遊びを持続できないのは何故か、何が起きているのか原因を探る」という問題提起は大変良かった。だからどのような保育が必要なのかを探る報告であった。

思い通りにならないとすぐふくれてしまう5歳児を取り上げた事例2は興味深かった。保育士の働きかけと保護者の協力がうまく呼応して本児の成長につながっていったように思えるが、保護者のわが子への関わりの変化が、保育士の本児への接し方にどのように影響していったのかについて、さらに踏み込んだ考察があると良かったと思う。

最後のまとめにおいて、「自由遊びの中のトラブルにこそ、子どもの抱えている問題がかくされている」とあった。子どもの遊ぶ姿を見つつ、家庭を背負っている姿としても捉えることの大切な指摘である。このような事例を蓄積して、子どもへの接し方や保護者への支援につなげていけるとても大切な視点と思われる。報告では、1年4か月に及ぶ研究となっていたので、対象児の成長ぶりについて新たな考察が進むことが期待される。

評者：岡田 澄子

この報告は、遊びの展開の中ですぐふくれる、怒る、威張る、仲よく遊んでいるところに強引に入ってきて壊すなど遊びが持続できない、持続させない子どもが増えてきたという、どの保育園でも抱えている課題の実践です。

保育を見直すことや家庭への働きかけを実施することは、何より大切なことだと思います。

人前で叱るのではなく、その子どもと二人でゆっくりと話すことにより、信頼関係も築け子どもの情緒も安定していくのでしょう。

情緒が安定すると、友だちも話も最後まで聞けるようになったり、困っている友だちを放っておけなくなったりと、成長の様子が見られました。

文末に「自己肯定感を育てていきたい」と記してありました。そのままの姿を受け入れ、理解する、そのような保育を目指してください。

評者：小林 芳文

本研究は、「実践報告部門」の遊びに視点をおいた実践報告として興味を持って拝見しました。遊びはどの子どもの成長・発達にとって不可欠な栄養素であります。とりわけ、いわゆる「気にかかる子ども」こそ遊びの援助が必要なことが解ってきました。

この実践報告は、遊びが持続できない子どもの事例を取り上げています。どうしたら遊びが発展するか分析しています。もう少し事例対象児の発達や行動面などアセスメント情報があれば、保育園での実際に応用できるものとなっていくと思います。保育園では、もっと、もっとこのような遊びを使った活動、保育援助を必要としています。両事例児の「興味のある事をやっている」時は、喜んで遊びができると考察しているように、この点に絞って他にどんな遊びがあるのか、そのためにどんな状況が作れるのか等組み込んだ事例が作れたらさらに良い報告になったと思います。

英語で遊ぼう ～ Let's play in English ～

秋田県・秋田保育所（ひまわり保育園） 片岡祐子・佐藤友美・石井智子

キーワード：英語に親しむ 異文化への広がり 保護者との関わり

I はじめに

我が園は秋田大学に近いこともあり、これまで様々な国籍の子どもが入所してきた。現在在籍しているオーストラリア人の保護者より、「子どもたちに英語に触れる機会を作ってあげたい」と申し出があり、遊びながら生の英語に触れられればとの思いで実施することとする。

実際行ってみると英語を楽しむだけではなく、子どもの反応や興味関心は保育士の意図する方向とは異なることも多かったが、逆にそれが新鮮であると保育士が受け止め、広い視野を持つことで、子どもの自発的な活動へと展開することができた。

保育士が固定観念を持たず、子どもの発達や興味関心に柔軟に対応していくことで、子ども主体の研究になるのではないかと考え進めていくこととする。

II 研究の目的

- ・英語に自然に親しむ中で、子どもの気づきや発見に共感することで、子どもが主体となった遊びへと広げていく。
- ・子どもの自発的な活動から見えるてくる成長と、保護者の意識の変化に着目する。

III 研究の方法

- ・年に数回、以上児を対象に「英語で遊ぼう」の時間を設け、体を動かしたりゲーム遊びをしたりする中で、自然な形で見たり聞いたりしながら生の英語に触れ親しめるようにしていく。
- ・年齢や個々により、反応の仕方や受け止め方、興味の持ち方などが異なるため、状況をみて柔軟に対応していくようにする。
- ・子どもの自発的言動から疑問や興味関心などを大切に、欲求を満たすことができるよう英語という枠にとらわれず、保育士が援助し環境やきっかけ作りをしていく。
- ・子ども達の姿や気持ちの変化を追いながら、保護者の反応や家庭での様子もまとめていく。

IV 事例と考察

【事例1 ～遊びの中から～】

第一回「英語で遊ぼう」が年長、年中児を対象にス

タート。簡単なあいさつ、自己紹介、その日の天気などのやりとりから始まる。「これから何が始まるのだろう!？」とキラキラと目を輝かせ、好奇心いっぱいの表情で参加していた子ども達であった。

最初は聞きなれない英語に圧倒され、戸惑っていた子どももいたものの、C先生の両手を大きく動かした天気の実現の仕方、また、表情豊かな話し方など全身を使った表現の仕方にどんどん引き込まれていったようであった。初めて体験する世界に、次第に子ども達も手をあげたり、身振り手振りをつけて真似して話すようになってきたりと普段とは違った子どもの一面も見られ、うれしい驚きとなる。1時間程度の短い時間だったが、「たのしかったー!」「またやりたいー!」などの声があちらこちらから聞かれた。



〈エピソード ～くもりって??～〉

「英語で遊ぼう」がスタートしてから、クラスでも朝の会の中で英語での天気の様子をやりとりをしている。

ある日の朝の会での子どもとの会話。

保「今日の天気は?」

K「くも～り～!」

保「そうか…。くもりはまだC先生に聞いてなかったね～。今度、聞いてみようか。」

K「うん!!」

その後、くもりの言い方を教えてもらい、くもりの日には、はりきって「Cloudy!!」と、大きな声で答えるようになった子ども達である。

その後、「かみなりってなんていうんだろう?」「台風は??」など他にもたくさん天気があることに気づいた子ども達だった。

【考察1】

朝の会で毎日天気について話していた子ども達が、「英語で遊ぼう」で天気の言い方を覚え、朝の会でも「sunny」「rainy」と言うようになっていた。くもりの言い方を聞いていなかった子ども達は、英語の言い方を知りたいと思うようになり、C先生に聞く場を設けていった。

英語の言い方だけでなく、天気には色々あることに気づく。雪、台風、雷、大雨など天気に関する興味もどんどん広がっていった。

また、日常の中で疑問に思ったことや、知りたいと思ったことなど、そのままにせず、その都度一緒に話したり調べたりすることで、子どもの探究心を満たしていくことができたと思われる。

【事例2 ～保護者から～】

英語で遊ぼうを始めるようになり、知らず知らずのうちに子どもなりに英語に親しみ、身につけているようで、子どもからいろいろな言葉や発音などを教えられたりと、家庭での話題が増え、やり取りを楽しむ機会が多くなったとの話が聞かれるようになる。また、園でC先生と一緒にどのように遊んでいるのか、実際の姿を見てみたいという声も聞かれていた。

〈エピソード ～スーパーにて～〉

保育園の帰りにスーパーで買い物をしたときのこと。

じゃがいもを見て

T「potatoだ！」と発音したT君。

母「すごい！じゃがいもってポテトって言うんだ～」

T「ちがうよ！potatoだよ！」

英語の発音は、普段私たちが言っている「ポテト」とは、全く違う言い方になる。

その違いを子どもなりに理解し、自信満々に母に発音を教える姿に、ほほえましく思うと同時に、「英語で遊ぼう」を楽しんでいるんだな～ということを実感した出来事だった。

〈エピソード ～クリスマス会にて～〉

「英語で遊ぼう」の日は、家庭でもその話題でもちきりになるとの保護者の声から、実際にその雰囲気をもてもらえたらとクリスマス会で時間を設けることとした。

当日は、いつものようにあいさつから始まり、果物や動物のあてっこゲームや、ジェスチャーゲームをしたりする。

C先生が動物のジェスチャーをすると、ほとんどの子どもが元気よく「はい！！」と手を挙げ答えており、また「今度は、ジェスチャーをしたい人？」の呼びかけにも積極的にやりたいとアピールする姿がみられていた。当てられた子どもは恥ずかしそうにしながらも、保護者の前でも堂々とジェスチャーをし、答えてもらうと喜びとともに、誇らしげにしている、短い時間ではあったが、

親子で楽しいひと時を過ごすことが出来た。

【考察2】

子ども達は何度も楽しみながら繰り返し体験することで、色々な単語を言えるようになっていたり、正しい発音を身につけたりし、いつのまにか成長していることを感じた。そのような姿を保護者とともに喜びあったり、家庭でも会話が増え、親子の触れ合いのひとつのきっかけになっていることを知り、嬉しく思った。

また、クリスマス会では、保護者がたくさんいる前でも、いつの間にか物おじせず話したり、率先して手をあげ全身を使ってジェスチャーをしたりと、子どもなりに様々な表現や意思表示ができるようになっていたことを知った。言葉を覚えるだけでなく、積極性が身に付くなど知らず知らずのうちに成長していることを感じた。

【事例3 ～異文化への広がり～】

「英語で遊ぼう」を楽しむ中で、C先生がオーストラリアにいたことを知った子ども達。「オーストラリアってどこにあるのかな？」という言葉がでてきたことで、保育室に世界の絵本を置いたり、世界地図や国旗、世界のあいさつなどのポスターを貼ったところすぐに興味を示し、釘づけとなった。



〈エピソード ～世界って広い！！～〉

—世界地図を見ながら—

Y「オーストラリアってコアラいるんだよね～」

I「オーストラリアって日本の下の方にあるんだって！！」

—世界のあいさつのポスターを見て—

T「Cちゃんは中国でしょ。こんにちはってニーハオって言うんだね」

「同じこんにちはでもいろんな言い方があるんだね！！」



世界にはいろいろなあいさつがあることを知り、さっそく隣のクラスの中国の子を呼んで「ニーハオ！」とあいさつをしていた。声をかけられた子ども嬉しそうに「ニーハオ！」と返していた。

考察3

子ども達が興味を持ったり、疑問を感じたことを受け、そのタイミングを逃さないよう、こちらからも絵本や地図などを提供し、子ども達自らの「知りたい!!」という欲求に応えていくようにした。

好奇心を持ち、自分から調べることで、子ども達の世界観がどんどん広がり、色々なことに興味関心を持つことができ、異文化への広がりにつながっていった。

【事例4 ～英語だ!!～】

「英語で遊ぼう」をきっかけに様々な形で英語に触れるようになってきた子ども達。日常生活の中でも、遊びや会話の中でなど自然に英語が聞かれるようになり、子ども達を見ていると、英語が生活の中に溶け込んできていると感じられる。

<エピソード ～発見!!こんなところに英語を見つけたよ!～>

給食を食べているときのこと。時計を見た子どもが突然、

H「あ!英語だ!!」と言い出した。

保「どれどれ～?どこに英語?」と尋ねる保育士に、

H「ほら!あそこだよー。」と時計を指差す。

何度見ても数字しかない時計にわけがわからない保育士。

H「ほら!!11のところかさ～、こうやって～。」

と指で時計の長針を真似てジェスチャーすると…なんとアルファベットの「N」に!!

これを見つけたのは、ちょうど12時の5分前。数字の「11」に長針が重なり合うことで、アルファベットの「N」に見えたのだ。アルファベットの読み方は分からないが形で覚えている様子だった。こんな形でも英語に興味を持っていてことに感心するとともに、子どもの発想力にも驚かされた。



考察4

日常の簡単なやり取りに加えて、子ども達は特にこちらから教えたりしたわけではないが、生活の中で視覚か

ら得られる情報も多い。

フラッシュカードや色遊び、フルーツバスケット、絵本、手遊びなどで色々な英語に触れ楽しんでいるが、文字にまで興味を広げていることに驚かされた。

読み方はわからずとも、子どもなりに形で覚え、英語を意識するようになってきていると思われる。

体を動かして遊んだり、話したりするだけでなく、色々な感覚で興味関心を広げている子どもたちに、私たち保育士も柔軟に対応していくことが大切なのではと考えさせられた。



【事例5 ～読み聞かせ～】

C先生が、途中、産休・育休に入ることになり、今までのように「英語で遊ぼう」の時間を設けることが難しくなる。

子どもたち自身、英語に対して興味・関心の幅を広げつつある時期であったので、保育士としてもそんな姿を絶やしたくないとの思いがあった。そんな中C先生より絵本の読み聞かせをしてはどうかとの話があり、喜んでお願いすることにする。

今までの英語を使った遊びに関しても、引き続き保育士と一緒に各クラスで持続していくようにし、子ども達の興味・関心が薄れないよう心がけていくようにする。



考察

これまでやってきた「英語で遊ぼう」が継続できなくなってしまったため、せっかく芽生えた子ども達の英語に対する興味・関心も薄れてしまうのではないかと懸念されたが、日常の遊びや、やりとりの中、また読み聞かせの機会を設けてもらったこともあり、子ども達の意識は変わることがなかったようだ。

読み聞かせでは、「はらぺこあおむし」や「メイシー」また、子どもたちが興味を持ちやすい「大きい小さい」「長い短い」など対照的で簡単な内容のものをを選び、読んでくれたため、子どもたち自身も理解しやすかったと思われる。

C先生のジェスチャーや表情豊かな表現で読む姿に、子ども達もさらに引きつけられていたように思う。

V まとめ

二年目を経過した「英語で遊ぼう」は、当初保護者からの申し出ということもあり、保育士にとってはどのように進めていけばよいか見当がつかず、手さぐり状態でゼロからのスタートであった。

事前の打ち合わせと準備などを通して、子ども達が英語に触れる環境づくりを心がけたつもりだが、子どもの反応や興味は英語のみにとらわれることなく多方面に向いていった。

生き生きとした表情で英語を話したり、日頃消極的な子どもが身振り手振りを交えてジェスチャーで表現しようとする姿を見て、きっかけは英語であったとしても、活動を通して様々な心身の成長を感じられたことは大きな収穫となったと思う。

また、日常生活の中でも英語で遊ぼうで見たり聞いた

りしたことは、子ども同士だけではなく親子の会話へもつながっていったと思う。

現在も継続して取り組んでいる「英語で遊ぼう」は続けてきたことによって、見えてきたものもある。

今後も子ども達の小さな気づきや思い、興味関心を見逃さずしっかりと受け止めていきたい。

そして、英語のみにとらわれることなく、子どもの自主的かつ主体的活動となるよう保育士側が意識しながら、引き続き心がけていきたいと思う。

【使用文献】

- ・エリック・カール著 『はらぺこあおむし』
偕成社（1989）
- ・ジーン・ジオン著 『どろんこハリー』
福音館（1964）
- ・ルーシー・カズンズ著
『メイシーちゃんのおおきいちいさい』偕成社（2007）

講評：「英語で遊ぼう～ Let's play in English ～」

評者：小林 芳文

本研究は、「実践報告部門」のグローバル化社会の子ども支援の方向性に結びつけられる報告として興味を持って拝見しました。

当保育所では、保護者からの子どもに「英語に触れる機会を作ってあげたい」の希望を受け、在籍している外国籍の保護者の協力のもとで「英語で遊ぼう」の保育の実践をされました。間違いなく英語と遊びと結びつけたことが、子どもの気持ちを引き込んだものと思います。さらに継続することによって、この点で保育の中での英語教育の細かな計画や実践の在り方がより固まっていくものと思います。

米国などでは、ムーブメント教育と称して、「動きを使いながら認知（言葉）を育んだり、コミュニケーションを図る」ことが盛んに行われています。実践研究で継続して取り組んで来て「英語で遊ぼうの見てきたものがある」とのこと、今後、このことをもっと膨らまして実践して下さい。

評者：酒井 かず子

保護者からの申し出により「英語で遊ぼう」に取り組まれたことに、柔軟性を感じました。近くに秋田大学があることから、留学等で様々な国の子どもたちが入所しており、その存在そのものが貴重なものと考えます。加えて、保護者からの申し出により、英語に親しむことから発展し、異文化に興味を持ち、子ども自らが調べたり、英語以外の言語にも興味を持ったり、表現をしたりと、保育士が意としないことによりどんどん発展し、保育士がその興味を満たすための準備をすることに追われたことなど、ほほえましい姿が見られ、読んでいて楽しかった。

文中では先生の出産で継続が危ぶまれたが、何とか次の先生に引き継ぐことができホッとした様子も書かれており、継続していくことの難しさも垣間見られた。日本人として、乳幼児期に難しい日本語をしっかりと習得することは最も大切であることを十分に承知をされた上で、次の段階として、英語遊びに取り組まれたことには共感しました。

評者：日吉 輝幸

外国人の保育を行う際、子どものみならず保護者との意思疎通が大切であることは言うまでも無い。言葉や生活習慣、文化の違いなどに十分配慮しつつ、子どもの健やかな育ちを保障するということは、日本人の子どもと同様でなければならない。

鉄道弘済会秋田保育所では、近隣に秋田大学があるという環境のもと、これまでも様々な国籍の子どもを保育してきた経験があるとのことで、外国人と生活することが一般化している保育所と言えよう。そこに、外国人の保護者の方から「英語に触れる機会を作ってあげたい」という申し出があったとは、とても羨ましい限りである。その取り組みについては、指導的なものではなく遊びとしてとらえた上で、子どもの興味や関心を助長し、自発的な活動へと昇華させているところが良いと思われた。

レポートには、いくつかの事例が記されており活動が分かりやすいが、英語遊びを通して園児の外国人に対する関わりが、どのように変化したかという部分を詳細に記述していただくと、更に参考になったのではないかと思われる。国際交流の先鞭として、これからも先駆的な活動をされることを期待している。

保育環境を考える ～異年齢保育の視点から～

東京都・砂原保育園 大森 葵

1 はじめに

砂原保育園の幼児クラスは3歳児から5歳児の異年齢での生活を始めて今年で15年になる。子どもたちは、『家族』と呼ぶ各年齢3～4人ずつで構成する少人数グループでの生活を基本とし、同年齢同士の関わりはもちろん、異年齢同士お世話をしたりされたりしながら、『家族』の中で友だちとの人間関係を築いていく。異年齢保育ならではの友だちとの関わりの中で、子どもたち一人ひとりが大切にされながら成長する。そんな生活を基本とした2014年度の幼児クラスは、3歳児15名、4歳児17名、5歳児15名の計47名でスタートした。

2 あげは蝶の観察



砂原保育園の子どもたちとあげは蝶の出会いは、2013年度の幼児クラスでナミアゲハとジャコウアゲハの幼虫を飼育したことから始まった。蛹から羽化する瞬間を見たくて、ずっと虫かごの前に張り付いている子どもたち。そんな子どもたちの姿を見て、7月上旬、園児の祖父が金柑の苗木を持ってきてくれた。あげは蝶は金柑の葉に卵を産みつけにやってくる。「あっ!あげは蝶が来たよ!」と歓声を上げる子どもたち。金柑があることであげは蝶はより身近な昆虫になっていった。

1) エピソード「ちょうちょになった!」

2014年の春。毎日のようにあげは蝶が金柑にやってくるようになった。金柑で生まれた小さい幼虫をみんなで観察していると、幼虫はたくさんの葉を食べることが分かった。園の金柑だけでは足りず、近所をまわって餌になる葉を探しに行ってくれたのは3歳児の子どもたちだった。なんとか葉の調達をし無事に蛹になったが、なかなか羽化してくれない。テラスに出して数日後「ちょうちょになったる!」という声が聞こえてきた。さっそく4歳児のふみや(仮名)と5歳児のひろあき(仮名)は、蝶の絵本を持ってきてあげは蝶の種類を調べ始めている。「これじゃないな…」「こっちは違う…」と2人で絵本とあげは蝶を何度も見比べる。夢中になって見つけ出したの



は、「ナミアゲハのメス」だった。

2) エピソード「気が付かなかったね」

6月。虫眼鏡と図鑑を持ち、「今日も雑草山を探検しよう!」と保育士に声を掛けてきたのは4歳児のふみや。ふみやや雑草山に入って草を見たり虫を探したりするのが大好きだ。いつものように雑草山探検をしていると、5歳児のこうすけ(仮名)が金柑の葉に付いた卵を発見した。全部で11個の小さい卵を見つけることができた。

ふみやや、卵を発見してから毎日雑草山へ行って観察を続けている。一向に孵化する様子がない卵。しかし、しばらくすると卵が黒くなってきた。「なぜだろう…?」と疑問を持ったふみやや興味をますます募らせていった。

7月。子どもたちが羽化しない蛹について図鑑で調べていると、『ヤドリバエ』という蠅に寄生され、蛹は死んでしまっていることを発見した。「可哀想だね」と5歳児ひろあきの素直な気持ちである。さらに、卵が黒くなってしまったのは『タマゴバチ』という卵より小さい蜂に食べられてしまっていたことも発見した。「卵が死んだのは可哀想だけど、蜂が卵を食べるなんてはじめて知ったよ」とふみや。分からないことを分かるまで自分で調べ続けたふみやだった。



考察) 観察環境

上のエピソードのように最初から子どもたちが主体的に観察を行っていたわけではない。子どもたちのあげは蝶の観察がより深まるよう、観察環境を保育士間で話し合い整えてきた。その結果、2014年度のあげは蝶の観察では、子どもたち自身が熱心に観察をする姿が見られた。

これまでは、虫かごをロッカーの上に置いたり、外に出したりと自由に動かしていたが、室内の中で設置場所を一



定にし、子どもの目の高さになるようにした。生活の中では観察の時間が制限されることは仕方ない。しかし、設置場所を一定にしたことで、生活の合間にあげは蝶を観察することができるようになった。

「着替えが終わったら見てみよう」「あげは蝶、何してるかな?」「ご飯食べ終わったら蝶になっているかも!」と、自由に観察を続ける子どもたちの姿はだんだんと増えていった。

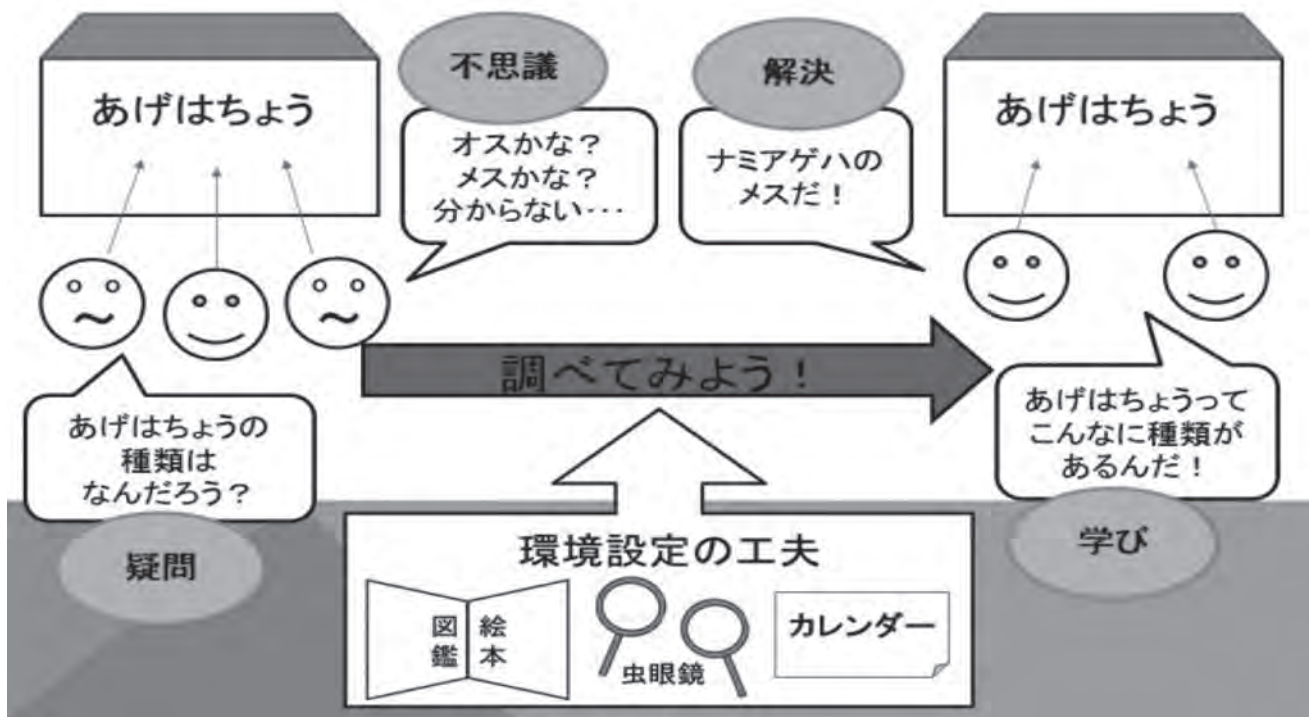
また、子どもの目の高さに虫かごを設置したことで、虫が苦手な子どもたちの視界にも入るようになった。友だちが虫かごをずっと見ていたり集まっていると、気になって覗き込む姿もあった。そして徐々に、虫の変化や観察の面白さを感じ、主体的な観察が始まっていった。さらに、子どもたちが観察しやすいよう虫めがねや顕微鏡などすぐに取り出せるようにした。また、カレンダーを作ったり、写真を掲示したりして、あげは蝶の観察の

経過が分かりやすいようにした。

子どもたちの疑問に保育士が答えるのは簡単だが、子ども自身が自分で問題を解決した方がはるかに面白い。虫かごのそばにあげは蝶に関連する図鑑や絵本を置いたのは、観察の中で生まれた疑問や不思議を本で調べたり、考えたり、解決するためだ。『なぜ』→『知りたい』→〈本を開く〉→『調べる』→『知る』といった問題解決のプロセスを主体的に行うことで、分からないことに出会った時、自分で解決できるようになっていく。また、本を開いてみることは、知りたいこと以外の知識を知るきっかけにもなり、興味や関心の広げてくれる。

保育士が観察環境を整えることで、“幼虫の観察”という活動を通して、子どもたちは、問題解決のプロセスを繰り返し辿り、観察しながら学んでいく。このように、保育士が直接関わらなくても、子どもたちの主体的な観察を促し、興味・関心の継続に繋がっていった。

問題解決のプロセス



3 3歳児がやってきた

4月の3歳児15名は、2歳児の時から一人ひとりの個性が強かったため、友だち同士ぶつかることも多く、なかなかまとまることのできない集団だった。なんとかして、3歳児の集団としての楽しさや、みんなで力を合わせることの面白さを味わい、幼児ならではの遊びや生活を楽しんで欲しいと願っていた。

1) エピソード「餌を探しに行きます」

そんな時、4、5歳児は餌(柑橘系の葉)が足りなく

なることに気が付いた。どうしたらよいかと考え込む4、5歳児。3歳児が明日散歩に出掛ける予定を立てていたので餌探しを頼むことにした。3歳児にも幼虫を飼育する上での役割を任せたいという思いからであった。

4、5歳児から役割を頼まれた3歳児は、「幼虫のご飯を探しに行く」と真剣な表情だ。近所の公園に向かいながら、「これがみかんの木かな?」と探すがなかなか見つからな



い。やっとの思いで、みかんの木を発見。子どもたちも保育士も大喜びだ。園で待つ4、5歳児に「みかんの葉っぱあったよ!!」と嬉しそうに報告する姿を見て、みんなでひとつの目的に向かって取り組んだことが、3歳児同士の人間関係作りの出発点になったように感じた。また、4、5歳児から感謝されたことで、4、5歳児の活動にも少しずつ興味を持つようになっていった。



2) エピソード「うしわかまるくん、いくちゃん、みみちゃん」

3歳児のたかし（仮名）が家からあげは蝶の幼虫を3匹持ってきた。一番大きいのは強そうだから『うしわかまるくん』、中位のは『いくちゃん』、小さいのは『みみちゃん』と3歳児みんなで名前を付けた。餌が少なくなると、「みかんの葉っぱを貰いにみんなでお散歩に行こう」と、2回目の餌探し散歩に出掛けた。いくちゃんの家が汚れていると、4歳児に掃除の仕方を教わりながら、掃除する姿が見られた。



↑ 4歳児に教えてもらいながら虫かごを掃除する3歳児

考察) 異年齢から考えるあげは蝶の飼育

幼虫に名前を付けたことで3歳児のみならず、4、5歳児も幼虫に対する愛着が深まったようだった。名前を付けていなければ異年齢での観察にまで発展していなかったかもしれない。3歳児にとっては、4、5歳児のあげは蝶の飼育を見るといった間接的体験が、自分たちも飼育するという直接的体験に変わり、4、5歳児にとっては、飼育の仕方を教えたり、3歳児の疑問に答えたりする中で、直接的体験を頭の中で整理し、相手に伝えるといった繰り返しの学びになった。

また、保育士が子どもたちと共に驚いたり発見したり、幼虫の成長を楽しみにしたりと、その時の面白さを共有したことで子どもたちの興味や関心が継続したのではなにかと思う。



↑ 幼虫を手に乗せて可愛がっている3歳児



↑ 5歳児が幼虫の観察をしているところを3歳児が見ている



↑ 保育士も一緒に子どもたちと観察を楽しみにする

4 活動の原動力は一人ひとりの気持ち


9月下旬、三匹の蛹があげは蝶になって飛んでいった。これで、あげは蝶の観察は終わりだと思ったのだが、金柑にあげは蝶が飛んでくると、「あっ!あげは蝶! うしわかまるくんたちが戻ってきた」と喜ぶ子どもたちの姿がしばしば見られていた。

1) エピソード「にこにこ会に向けての寄り合い」


10月の終わり、お茶の時間^{*1}を利用し、にこにこ会^{*2}の寄り合いを行った。5歳児のこうたろう（仮名）が「3歳児もうしわかまるくんを育てたから、あげは蝶のお話にしたい」と提案し、幼児クラスで人形劇をすることに決まった。

今日のニュートン

2014年 11月 7日 (金)




段ボールに色を塗って
青虫作り。



段ボールに色を塗って
青虫作り。

「次はどうしよう?」「青虫は散歩にでかきましたっけどうかな。」



身体を塗って体模
作り。青虫が大き
くなる時はこんな
感じかな。」


「お話?人形劇?体操?」

5歳児が青虫のお話づくりをしています。作っている物語を保育士が大きな紙に文字で書いていくと、子どもたちは次々に絵を描き込んでいきます。頭の中にとっぷりイメージが浮かんでいるようです。

そのとなりでは、段ボールをつなげて動く青虫を作る子。そのまたとなりでは、青虫の体操を作っている子も…!

一人ひとりから次々とアイディアが出てきます。「いいね」「面白い」という声が続いてきます。みんなのアイディアが重なって、さらに面白い活動になりそうです。

「小さなお家に青虫の家族が作られてきました。」作った青虫で早速遊んでいこうよー




こなら


2) エピソード「物語作り」

11月11日の『今日のニュートン』※※1では、5歳児の作った物語に更に細かい場面の設定やセリフを考えた。

※図1

今日のニュートン 

2014年 11月 11日 (火)



「もし私がおむしだったら…」

5歳児が中心となり考えていたあむしのお話作り。4歳児も興味が出てきました。ストーリーが出来てきて、次は一つひとつの場面でセリフを考えます。

「かたつむしさん、こんにちは。」「あ～公園楽しかったね。」5歳児の男の子は次々と言葉が思いつきます。

4歳児の女の子は、始め「う～ん、思いつかないよ。」と言っていたのですが、5歳児のセリフを聞いているうちに考えが浮かんだようです。「蝶になれてうれしいな」


「お星さまの階段を降りようっ！」

お話の中の虫になりきって、セリフ作りを楽しんでいます。

こなら

今日のニュートン 

2014年 11月 12日 (水)



「集中してるね…」

劇で登場するアゲハ蝶の人形を作っています。

羽を4枚切り、1枚ずつ模様を描いていきます。絵本に載っているアゲハ蝶の模様をみながら、ひとつずつ模様を描いているのは4歳児の男の子。

「ここは長細くだよ」「ここはこうでいい？」など、胸で梁子はりこをしている5歳児の男の子に尋ねます。気が付くと、模様描きを始めてから30分が経っています。

「○○くん…すごく集中しているね…」と5歳児の男の子が静かに見守ります。

… それから10分後 …

「できたー！」「○○くん、すごい！上手！」と描き上がりを喜ぶ2人。

夢中で取り組む4歳児、見守る5歳児…その姿に成長を感じたぬか漬けでした。

ぬか漬け☆

考察) 子どもたちの意欲を活動に生かす

物語のあらすじは5歳児が考えた。その様子を3、4歳児はよく見ている。

エピソードのように活動に興味を持った3、4歳児がいたら、その都度「一緒にやろう」と声を掛けた。そうすることで、3、4歳児もしぜんと物語作りに参加することができた。その後もう一度、5歳児同士で各チーム(お話作りチーム、体操チーム、人形作りチーム)の進行状況を伝え合い、実際に劇にする場面を家族ごとに決めた。家族で場面の内容を深めながら、異年齢で劇遊びを楽しむ子どもたちの姿が印象的だった。にこにこ会の1週間前になると、家族ごとの劇遊びを繋げひとつの物語として、繰り返し劇遊びを楽しんだ。

保育士の子どもたちの興味に寄り添った活動への誘い掛けや、流動的に参加できる環境を設定、また、保育士間で劇遊びの進め方について共有したことによって、3、4歳児も楽しみながら活動に参加することができた。

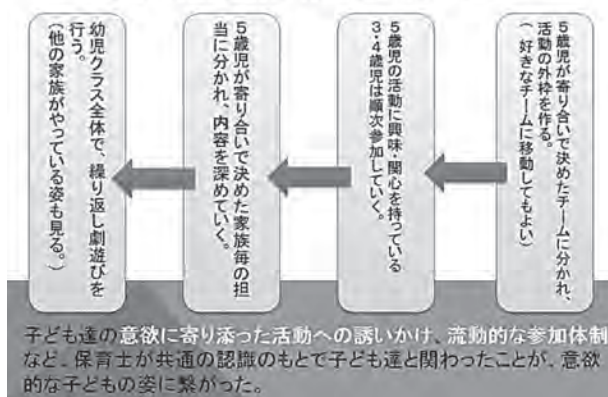
また、劇遊びの場面を家族ごとに考え決めていったことが、子どもたちの人間関係の深まりをも促した。そして、みんなでやり遂げたという達成感や満足感によって、幼児クラス全体がひとつの集団になり、同じ目標に向かう気持ちを感じられた。

そして、保護者や乳児クラスの子どもたち、保育士たちの前で自信を持って演じることができた体験が自信になって、友だちと共有した“楽しい”という気持ちが次の活動へと発展させていった。



↑にこにこ会当日。本番前の寄り合いで気持ちをひとつにしている様子。

子どもたちの意欲を活動に生かす



5 卒園製作で深まった5歳児の人間関係


卒園までのこり3ヵ月となった5歳児の子どもたちは、これまで様々な行事の中で、『みんなで心をひとつする』という目標に向かって取り組んできた。

12月のキャンドルサービスでは、「みんなの声がひとつになったような気がした」とりゅうのすけ（仮名）。日に日に、5歳児一人ひとりの仲間意識が強まり、集団としての力や、まとまりを感じられるようになってきた。

ついに、『みんなで心をひとつ』にできるのは、卒園製作と卒園式で最後になった。卒園製作は劇遊びをした『うしわかまるくんのねがいごと』という絵本を製作することに決まった。

1月。いよいよ、絵本作りの始まりだ。もちろん、最初に行うのは、寄り合い。12月末に行った寄り合いを振り返り、“卒園製作”の意味を考える。「みんなに“ありがとう”を伝えるため」「この絵本を見て自分たちのことを思い出して欲しい」と、それぞれの思いを伝え合う。絵本は紙版画で製作することに全員が一致。これまでの卒園製作は紙版画で思い出を製作していた。それを見ていたので『版画』に強い憧れがあったのだ。一人ひとりがやりたい場面を考え、製作に入っていた（※図2参照）。

※図2


今日のニュートン 

2015年 1月 23日（金）

ぞっせんせいざく

□ えほん『うしわかまるくんのねがいごと』

1. えほんのあらまし
2. えほんのなかの登場人物
3. えほんのなかの場面
4. えほんのなかの言葉
5. えほんのなかの気持ち
6. えほんのなかのねがいごと
7. えほんのなかの思い出
8. えほんのなかの感想
9. えほんのなかの質問
10. えほんのなかの答え



「卒園製作の話し合い」

“卒園”を口にするようになってきた5歳児。先日、1年間を振り返ってみました。お泊り保育、ファミリーディ、にこにこ会、キャンドルサービス…楽しい思い出がたくさん思い浮かびました。キャンドルサービスの時は心がひとつになったね」と男の子が話します。みんなで心をひとつにできる時間もあと少しです……

卒園製作で、どんなものを作ろうか子どもたちと話しました。「みんなで考えた青虫のお話を絵本にしたい!」と女の子。絵本を読んで、自分たちのことを思い出してほしいという思いがありました。それを聞いてみんも賛成します。内容を改めて考え直し、絵本仕立てのセリフや言葉をつけ足しました。来週からはいよいよ絵を描いていきます。みんなと力を合わせて素敵な絵本を作ろうね!ぬか漬け☆

1) エピソード「ただ今版画製作中」

紙版画は細かい作業が多くなる。絵を描く→切る→貼るといった作業を繰り返していく。

みずき（仮名）は、「あげは蝶の家族は金柑の木にいるよね」と言って、園庭の金柑を見に行き、金柑の葉の形を確認している。しかし、実物を絵にするのは難しく、なかなか手が動き出さない。隣でみずきを作っていたたくみ（仮名）が図鑑を見ながら作っていることに気付くと、自分から絵本を探し出し、絵本のみかんを見ながら絵を描き始めた。描き出すと、イメージが膨らみ、あっという間に金柑の版が出来上がった。次の日も、その次の日も「版画やりたい!」と意欲を見せるみずきだった。



版が完成すると、刷る作業が始まった。インキを混ぜ合わせて、イメージに近い色を作り出していく。あかり（仮名）はうしわかまるくんの版を作った。「うしわかまるくんは虹色だから、7色必要!」と意気込むがインキは7色もなかった。保育士も一緒に考えながら、2色と3色のローラーを作り色が重なるように刷ることにした。

完成した版画を見て、3歳児のかえで（仮名）が「あ!これ、うしわかまるくんでしょ」と話すと「そうだよ」と嬉しそうな表情のあかり。順に刷り上がっていく友だちの版画を見ると、“自分も早く版画やりたい”とますます意欲が湧いてくる子どもたちだった。

考察) ホワイトボードや寄り合いの活用

絵本は2ヶ月で完成した。その間、どの子どもも意欲を持って活動に取り組むことができた。



砂原保育園では、活動の始めや終わりの振り返りを『寄り合い』と呼んでいる。卒園製作の中での寄り合いは、どのようにしたいか、方向性や進行状況、予定の確認、感じたこと、考えたことなどをみんなで共有する場として位置付けた。寄り合いで話し合ったことは、ホワイトボードに書いて見える形にした。すると、あまり意欲がなかった子どもボードを見て少しずつ興味が向くようになった。また、子ども同士がボードを見ながら楽しそうに話し合う姿もあった。

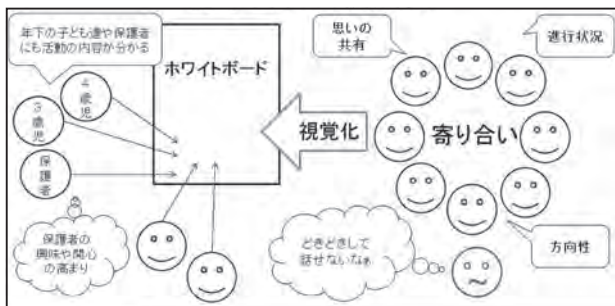
寄り合いでは、輪の中にも発言できない子や輪の中から外れてしまう子もいる。そんな子どもたちにとってもボードに書き留めておくことは、後からでも方向性

の確認や内容の理解、見通しが持ちやすく、意欲的な子どもは、益々興味を示して主体的にこの活動に取り組むことができた。

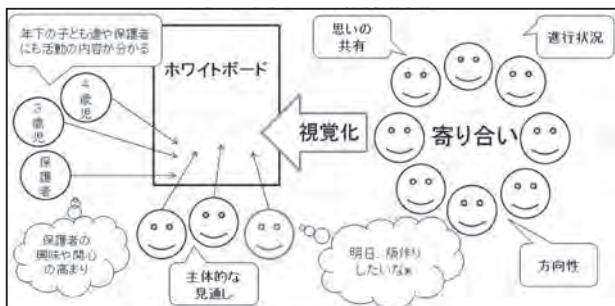
ホワイトボードは、誰でも見られる場所に設置しているので、3、4歳児にも内容が伝わり、5歳児の活動に興味を持って見ていた。また、保護者にも活動の様子が伝わりやすく、集団としての子どもたちの育ちに関心を持ってもらえるようになっていった。

寄り合いや取り組みの状況が見える化することは、子ども自身が見通しを持ちやすく、主体的な活動を引き出し、活動そのものの意欲を継続させる要因になった。このような環境を用意したからこそ、5歳児は卒園製作の紙版画を楽しみ、意欲的に活動に取り組むことができたのだろう。

そして一人ひとりが意欲的に活動したことで、お互いに気持ちを高め合いながら『みんなで心をひとつにする』という目標に向かうことができた。



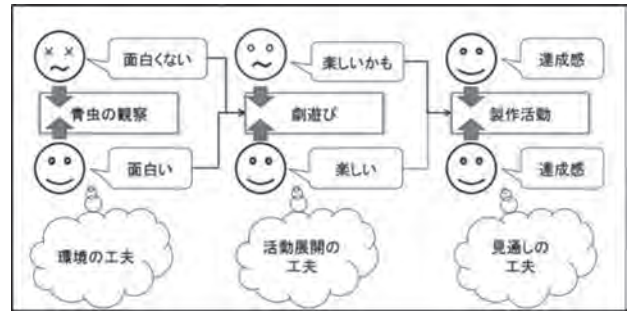
参加出来ない子ども
ボードがあることで



6 一年間の振り返り

主体的な活動の中で生まれた子どもたちの『楽しい』『面白い』『どきどきする』という心の動きが読み取れる一年であった。

はじめから幼虫の観察や物語作りに関心を持つ子どもたちばかりではなかった。虫は嫌い、つまらない、といった素直な気持ちも大切にしたいと思っていたし、そのような子どもたちも巻き込んで、異年齢の中での集団としての活動を高めていきたいとも思っていた。そのために保育士の環境設定が必要なこと、またそれだけでなく、無理強ひせず、その子どもの興味に添った活動への誘い掛けや参加の自由など、活動そのものの展開の工夫も必



要だった。

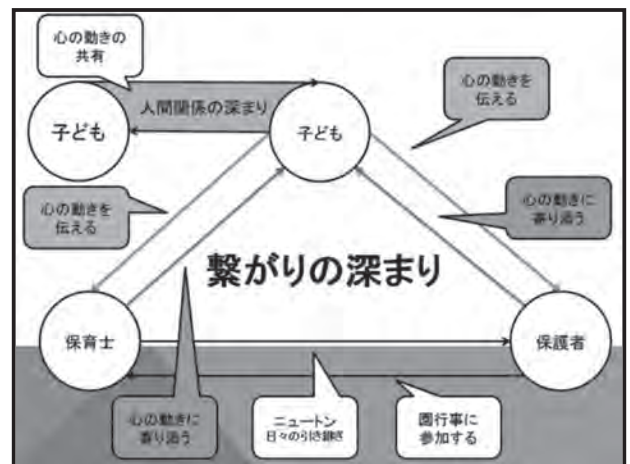
興味が湧けば、次第に活動を楽しむ子どもたちが増えてくる。『楽しい』『面白い』『どきどきする』という心の動きが次の活動や一人ひとりの成長に繋がって、卒園製作の紙版画は、『みんなで心をひとつ』にして取り組むことができたのだと思う。

友だちと力を合わせて成し遂げた時の達成感や通じ合う気持ちは、意見のぶつかり合いや葛藤から生まれてくる。無関心であることや興味がなくて関わろうとしないところからは生まれてこない。子どもたちの主体的で意欲的な活動から生まれた心の動きは、子どもと子ども、保育士と子ども、そして、保護者との関係の深まりにも良い影響を与えてくれた。

『楽しい』『面白い』『どきどきする』という心の高まりや子どもの興味関心、意欲を大切にすることは、子どもたちの主体性や自発性を尊重することへ繋がった。今後も、異年齢の中でのまとまりのある活動へと展開していく中で、みんなで協力することの面白さを大切にしながら、子ども自身の持つ育とうとする力に期待したいと思う。



↑お迎えに来た祖父も関心を持って活動を見守ってくれた



2014年度の幼児クラスでは、あげは蝶の観察から始まり、人形劇、絵本作りに取り組んだ。一年を通して異年齢の子どもたちが意欲的に活動に取り組む姿を見ることができたのはなぜだろうか。

- ①子どもたちが主体的に観察を行えるよう環境を整えたこと
- ②活動への誘い掛けや参加の自由によって子どもの興味に寄り添ったこと
- ③活動を共有できる寄り合いを大事にしたこと
- ④寄り合いを写真や文字を使い、誰にでもその経過が分かるようにしたこと

この4点の保育士の援助で子どもたちの育ちや学びがさらに深まるということが分かった。

また、異年齢で関わり合う生活が子ども同士の育ち合いになり、活動を通して一人ひとりが自信を持てたことで集団の力が高められ、子ども、保護者、保育士、三者の人間関係の深まりをももたらしてくれた。

今後も、子どものそばにいる一人の保育士として、『寄り添う』ことを大切にしながら、一人ひとりが自信を持って巣立っていけるよう援助していきたいと思う。

<注釈>

※1 お茶の時間…朝 (9:30頃)、室内の一角にある和室やテラスにて同年齢又は家族で集まり、お茶とお菓子で一息つく時間。この時間に1日のスケジュールなどを確認する。

※2 にここ会…10月、11月を保育の充実期として捉え、子どもたちがどんなことに興味・関心を持って取り組んでいたのか、そこでどんな学びがあったのかを子どもたち自身が見つけ出し、それを保護者に伝える機会として位置付けている。子どもたちにとっても、保育士にとっても、これまでの取り組みや活動をまとめるよい機会となっている。

※3 今日のニュートン…幼児クラスでは、子どもたちの活動の様子を写真と文章にして、毎日ホームページに掲載している。



← 完成した卒園製作『うしわかまるくんのねがいごと』



← 虹色のうしわかまるくん



← 幼虫から蛹、蝶へ

講評：「保育環境を考える～異年齢保育の視点から～」

評者：井桁 容子

異年齢の子どもたちがアゲハチョウの飼育を通して、“寄り合い”という子ども同士の思いを伝え合うことを大切にしながら、人形劇や絵本作りに意欲的に取り組んでいく。更に「にこにこ会」と称して保護者に子どもたちの興味・関心・学びを伝える場や、「今月のニュートン」と称して、ホームページに活動の様子を写真と文章で掲載するなど保育の可視化を行うという見事な実践の報告であり、内容もよくまとまっていた。保育者がていねいに子どもたちの興味・関心に心を寄せて環境を整えて援助を心がけている様子からも保育の質の高さが伺えた。欲を言えば、子どもたちの体験や考える道筋の図式が行われていながら、『保育環境を考える』というテーマに沿う環境の見える図が無かったのが残念である。また、エピソードが、物語的に語られ過ぎると、子どもの行為の解釈が保育者側の主観で決めつけられてしまっていないかという誤解を生みやすいので注意すると、更に素晴らしい報告になったのではないかと思う。

評者：石川 昭義

3～5歳児の活動の様子が、エピソード記述でまとめられており、それぞれの記述の中に、アゲハ蝶に対する子どもの興味や活動が描かれている。

キーワードは「観察環境」である。観察の面白さを持続して持つために、子どもの目の高さに虫かごを置くだけでなく、虫めがねや図鑑を置いたり、カレンダーを作ったりした。それは、子ども自身の疑問や不思議をもとに、子ども自身が「問題解決のプロセスを繰り返し辿り、観察しながら学んでいく」という保育士の願いが込められていた。こうした環境構成への思いは、観察の場面に限らず、主体的な

学びに向かわせようという思いの中で必ず活用されると思われる。まさにアクティブ・ラーニングを思わせるようである。

一連の流れは、異年齢で劇遊びを楽しむことにつながっていった様子であり、達成感は大きかったと思われるが、報告の全体としては、メインテーマである「保育環境」について、サブテーマ（異年齢保育の視点）の観点からの考察が弱かったように思われる。今後は、子どもたちの「主体的で意欲的な活動から生まれた心の動き」が、どのように保護者や保育士の人間関係に影響を及ぼし、どのように深まったかについて、さらに考察を進めることが期待される。

評者：酒井 かず子

「1歳児の遊びの深まりと心の成長～青虫の飼育・観察を通して～」と同じ保育園での発表で、その幼児版として、大変興味がありました。

3歳児から5歳児の異年齢児クラスでアゲハチョウの幼虫を飼育したことから始まり、金柑の苗木から始まり、エサになる葉を探しに行ったり、アゲハチョウの種類を調べたり、死んでしまった原因を調べたり、また、保育士は観察しやすいように環境を整えたりする中で、子どもたちの主体的な関わりが加速していった様子が手に取るように分かりました。後半ではお話作りや人形作り、絵本作り、そして協力して仕上げた卒業制作にまで発展したことは素晴らしいと思いました。

この観察を進めるためには、保育士が、子どもが主体的に取り組めるような準備と対応が十分にあったことが伺えました。

作って遊ぼう ～できたことの達成感から次への探究心へ～

長野県・長野保育所（りんどう保育園） 石坂由香・市川千寿子

I. はじめに

昨年度、「身近な素材を使ったあそび」をテーマに取り組み最終的に全園児で作上げる作品展「ぼくたち、わたしたちのまち」は子ども達の達成感となった。しかし、作品展など作っての達成感で終わってしまっていた。そこで今回は、自分で作るに加えて保護者・祖父母など色々な方に協力して頂き一緒に作って遊ぶ体験を増やしたいと思った。そして、保育中だけでなく家での遊びに自分で作って遊ぶ感覚のおもしろさが加わればと思い保護者との連携を取り入れながらすすめることにした。

II. 研究の目的

継続的な作ってあそぼうの活動を子ども・保護者・保育士の変化していく様子を明らかにしていく。

III. 研究の方法

- ・アンケート調査から実態状況を把握し「作ってあそぶ」子どもの姿や保護者の関心の変化を検証する。
- ・事例研究

IV. 事例と考察

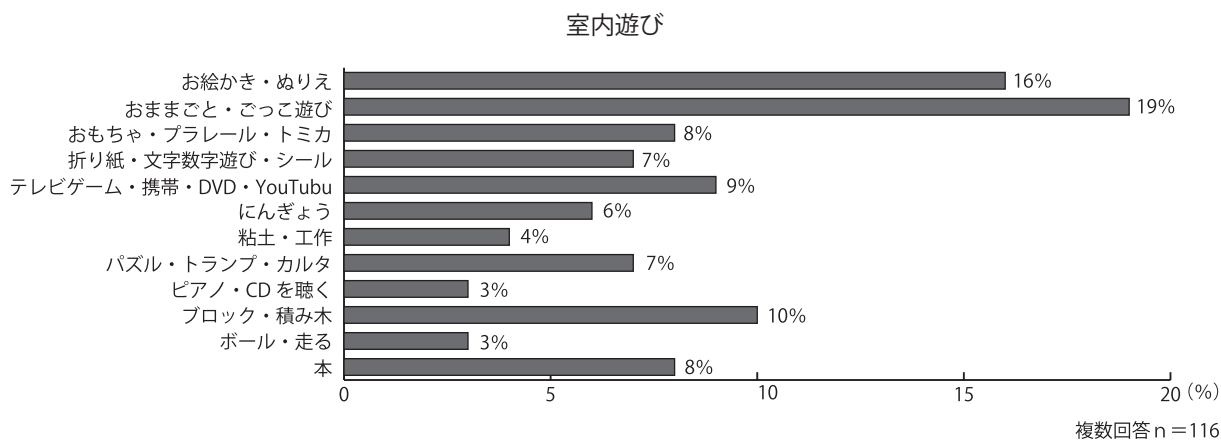
[事例1]

○対象児：年少児・年中児・年長児

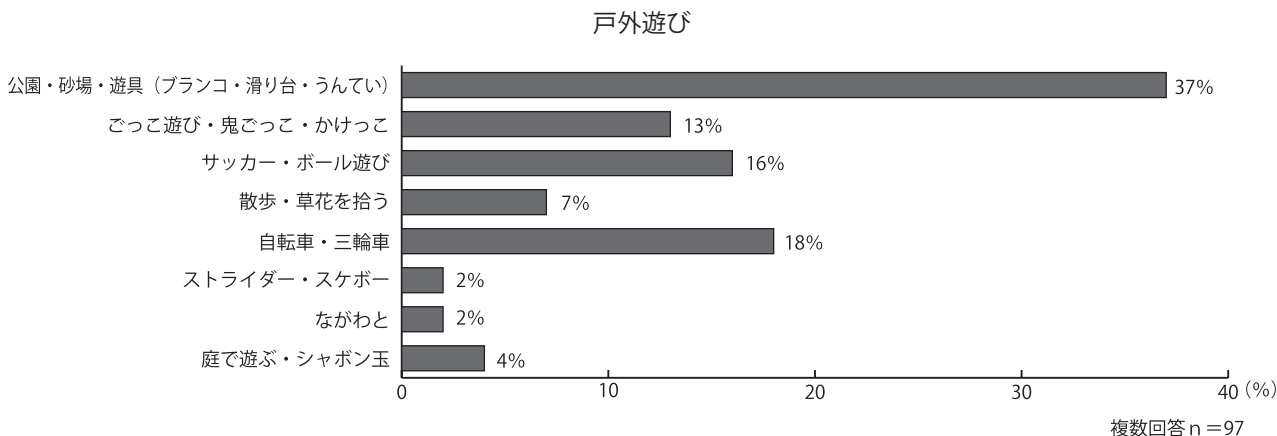
(年長児) Yくん母：「家にいる時は、ゲームをやる時間が多く困っている」との相談があった。

何人かの保護者からも相談があり、今回クラス別懇談会後にアンケート調査をし実態を把握することとした。

○室内では、どのような遊びをしますか？



○戸外遊びでは、どのような遊びをしますか？



<考察>

アンケート結果より

室内遊びでゲーム遊びの子どもは10人。戸外遊びではゲーム遊びをしないということがわかった。同時に家庭での遊びに自分で作って遊ぶ遊びがない事がわかった。どのようにしたら、作って遊ぶ事の楽しさや面白さを伝えられるかが、次回の課題となった。

[事例2]

○対象児：年長児

(掲示方法)

皆で共有できるよう、製作の様子を文字・写真で掲示。そして、掲示板に「みんなのこえ」のコーナーを作り気軽に紙に書いてもらい一緒に掲示することとした。



[4月] (双眼鏡)

春は、散歩を通して自然事象や動植物に触れ合う機会が多くなるため一層散歩が楽しめるようにと、双眼鏡に真似た物を作る事にした。材料は、身近にあるトイレットペーパーの芯・折り紙・リボン(紐)とした。

(年長児)Rさん：普段からあまり自分のことを主張しないが、この日はこれを持って早く出掛けたいと言っていた。後日、作ったもので年少児と一緒に散歩に出掛ける。

(年少児)Mさん：入園してまだ、園生活に慣れずにいたが、年長児に双眼鏡をかしてもらい、嬉しそうに笑った。

(春の時期：4月・5月使用し持ち帰った)

<考察>

4月は新入・進級したばかりで子どもも不安だったり・緊張していたり色々な感情をもっている中、製作を通して年下・年上との交流は良い結果となった。掲示板で作り方を書いたところ年少児・年中児、数人の子どもが家で作ったと次の日に持ってきた。双眼鏡遊びは、自由に取り出し遊べるように個人のロッカーに入れることで好きな時に出し、散歩の時にも自ら持っていく子もいた。保護者との共有は、うまく進まず「みんなのこえ」は、3人の感想のみで掲示板をあまり見ていない様子だった。その場でコメントを書くのに抵抗があるのかもしれないと思った。

[事例3]

○対象児：年少児・年中児・年長児

(掲示方法)

今回は、前回同様掲示の仕方は同じ方法で掲示板を目のつきやすい玄関に飾る。保護者の声をもっときこえるようにポストイットの紙を個人の帳面に貼るようにした。

[6月] (時計作り)

年少児：梅雨の季節で身近に見る生き物(かたつむり)型の時計を作った。かたつむりのはじき絵を楽しみその後、数字と針に見立てたモールで時計を作った。時計について理解は出来ていないが、針を動かして遊ぶ姿が見られた。



保護者からの紙には「これを機会に時計の読み方を覚えていけるとよい」と書かれていた。

年中児：年少児同様、形から楽しんで入れるよう「動物時計」作りをした。数字を読める子が多く、数人で集まり「数字3にしよう」と言い会話を楽しみながら時計遊びをしていた。

保護者に記入してもらった紙から時計を家でも使い「ほら、3時。おやつ時間」「ほら、9時寝る時間」と時間に関心がうまれたとの感想があった。

年長児：腕時計を作り、戸外遊びでもつけたまま遊ぶ事で本物の時計を見比べて合わせてみたり、友達と相談をしたりと普段一緒に遊ばない友達とも会話を弾ませていた。

<考察>

毎年、年齢毎に時の記念日に合わせて時計作りをしてきたが、今年は作った時計で遊ぶようにした。友達同士での会話が弾んだり、遊びの中から数字への興味へとつながりその延長で家庭に持ち帰り親子でのやり取りがポストイットの紙よりわかった。

[事例4]

○対象：年少児・年中児・年長児と祖父母(※一世帯一人)

毎年行う祖父母交流会の行事。今までは一緒に製作のみ行う事が多かった。今年是一緒に作り遊ぶ活動内容にした。

10月 (けんだま)

祖父3人・祖母21人の参加。

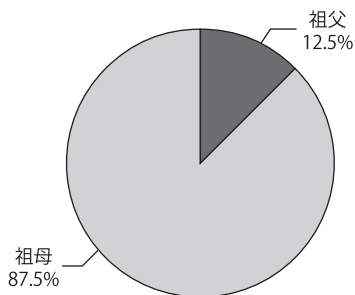
祖父母と園児でけんだま作りを行う。

一緒にのりを塗ったり、笑い声が聞こえてきたりした。祖父母が参加できなかった園児は、一つのテーブルにまとまり保育士と一緒にいった。子ども一人でも作れる簡単なけんだまにしたため、すぐに仕上がった。けんだまに慣れて遊ぶ事を楽しむ子もいれば、難しくて「できない」という子もいた。

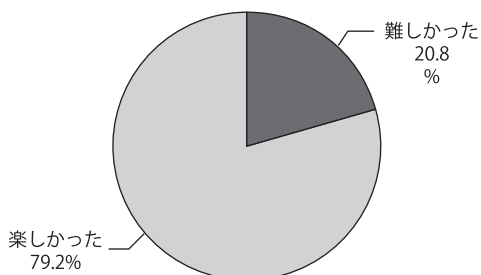


9月12日祖父母交流会 アンケート結果

○参加者 (24人出席)



○けんだまはいかがでしたか



○その他

- ・年長児にはもっと自分で作る部分があってもよかった。
- ・いつも考えられた日程になっている
- ・自分から進んで出来るものだった
- ・作るのは楽しかったが、遊ぶのは難しかった
- ・子どもには難しいようだ
- ・カラーの貼り物が少ない
- ・ひもがもう少し長い方が良かった

〈考察〉

アンケート結果より楽しかったと答えた方19人。祖父母も楽しめるけんだまと設定したが器にボールが入らず難しかったと答えた方5人。今年度は、いなかったが県外からも祖父母交流会を楽しみに参加する方がいる。

来年度はこのアンケートを下に活動内容を参考にしたい。

このように行事がある度、模造紙に写真・文字で記入したものをその日の降園までにつくり掲示をし、保護者等に知らせていた。今回は、その模造紙に「みんなのこえ」の欄をつくり、家に帰っての子どもの声を書いてもらい後日、書かれていた紙を掲示した。

紙への記入の仕方は保護者の方にお任せしている。最初、無記名でとお願いしていたが、名前を大きく書きコメントが記入されていたり、絵入りできれいに仕上げてくる方などそれぞれだった。その半面、書いてくる方はだいたい決っている。掲示される事で、記入しにくかったり、楽しい・嬉しい声ばかりではないと思いつ回、保護者の声を聞く工夫が必要ではないだろうか。

〔事例5〕

○対象児：年少児・年中児・年長児

(縦割り保育 クラスの様子)

保育参観は、毎年2日間あるうちの1日のみ参観する日として選んで参加して頂いている。1日目のクラス別保育では作って遊ぶ内容に設定をした。

11月 たんぼぼ組：スライム遊び

材料は、あらかじめ保育士が準備しておき1人1カップ使用でホウ砂水をカップに半分ほど入れた物を配布し、食紅(赤・黄・緑)好きな色を聞きながら少量カップに入れる。



(年中児) Aさん：ホウ砂水に色が付き「わーきれい」と声を出し喜ぶその後、洗濯のり（P・V・A入り）を少量入れかき混ぜると固まりだす。

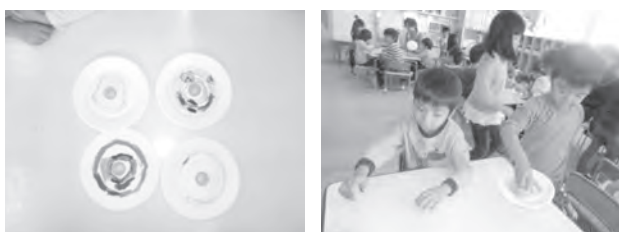
(年長児) Hさん：「何で？」と驚く

(年少児) Tさん・(年長児) Tさん：一緒に自分達なりに「どこまで伸びるかな」と工夫して遊びだす。

ちゅうりっぷ組：こま遊び

事前に紙皿にペットボトルのキャップを固定したものを用意した親子でこまの模様を描き遊ぶと言う簡単な手順にした。

(年長児) Kさん：「回ると、模様が変わる」の一声で周囲の子も、「この模様きれい」と楽しむ。

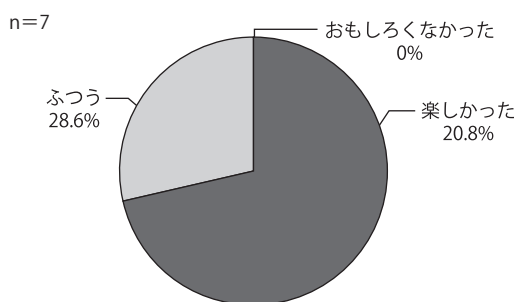


(年少児) Hさん：「どうやって色を塗ったの？」と質問したり、普段関わらないお友達とも交換してこま回しを行う。

保育参観 アンケート結果

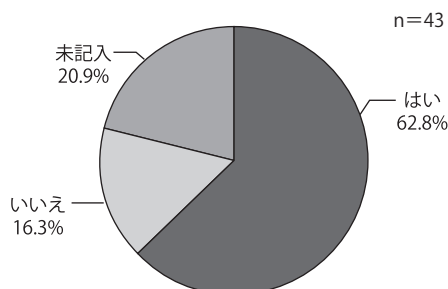
○スライム・こま遊びはいかがでしたか？

(※保育参観1日目 クラス別保育のアンケート)

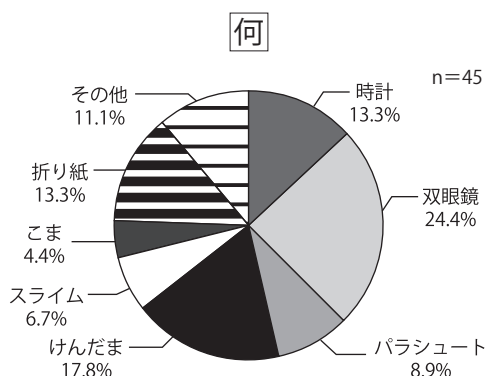
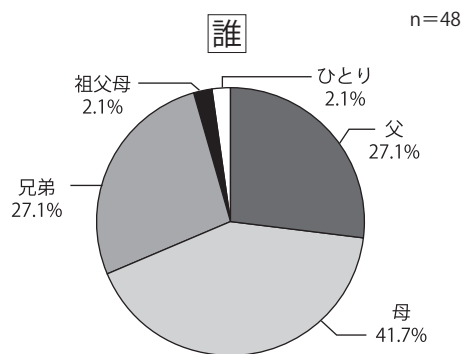


(一日目・二日目のアンケート結果より)

○園でのあそびをお家でも作ったり、遊んでいますか？



○「はい」の方 誰と何遊びをするのが人気でしたか？



○その他

- ・同じものを作ろうと材料をとって置いたりしたが、そのままになっている。
- ・何度かやってみせてくれた後は、とってはおいてある。

<考察>

保育参観一日目、クラス別保育の参加者希望の方が少なかったが、掲示板で作り方・遊び方を紹介したところ「作り方の資料を持ち帰り家で一緒に作ってみた」という方が何人かいた。縦割り保育での製作は、年上の子が年下の子を気に掛け優しく声を掛けたり、喧嘩が多い友達同士が「うまく仕上がったね」と喜びあい一緒に遊びだす姿があった。今回は、紙での感想だけでなく、色々な意見が聞けるようにアンケート調査も同時に行った。

家庭で遊ぶ好きな遊びの中に、作って遊ぶ楽しさも加われればと思い取組んだ。アンケート結果より園での遊びをお家でも作ったり・遊んでいますかで、「はい」と答えた方は27人。(保育参観参加保護者人数43人) 作ってあそぶ事に少しずつ興味を持ち始めた様子である。

[事例6]

○対象児：年少児・年中児・年長児

作品展後より、園で覚えた作り方・作品展でのやり方を真似て家に持ち帰り家庭にある材料・そして園で作ったものを混ぜて一つの作品にして持ってくるようになる。



作品展テーマ（宇宙）後、年長児との会話

Tくん：「エンダーマンって言ってねゲームの世界の人
なんだけれど知ってる？ちょっと、宇宙人にも
似ているでしょ」

保育士：「エンダーマンわからなくてごめんね。うんう
ん、似ているね」

Tくん：「どうやって作ったかわかる？」

保育士：「箱と紙とセロテープを使って作ったんだね。
このエンダーマン皆に見せてもいいかな？」

Tくん：「うん、いいよ でもどうやって」

保育士：「てぐすを使って廊下に飾ろうかと思うんだけ
れど」

Tくん：「先生いいねーそうすれば動かせるもんね」

Yくん：その作品に興味があり「どうやって作ったの？」
と熱心に聞いていた。次の日

Yくん：「先生ぼくも、作ったよ」と嬉しそうに持って
くる。

「先生、ぼくロボットを作ったんだけど 自
分で作るのって楽しいね」

<考察>

Tくんから始まった「お家でも作って遊んだよ」は、
作ることの楽しさを周囲に伝える良い影響となった。Y
くんは、作ることの楽しさを感じ、ロケット・ラジコン
と何作品も作り持ってくるようになった。Yくんはゲー
ム遊びが大好きだった。その後、作って遊ぶ事が増え家
庭での遊びに変化があったかどうか保護者に聞いたとこ
ろ「先生、ゲームの時間が減って、作ることに夢中で材
料ないの？と言われてしまうぐらいで、作って遊ぶって
いいですね。」と嬉しそうに話した。（つくってあそぼう）
の掲示名前を子どもから出た「お家でも作って遊んだよ」
にかえて作品を飾るコーナーとした。



また、クリスマスが近づきトナカイの折り方を園で覚
え、それを家に持ち帰りダンボールで家・庭を作りアレ
ンジし園に持ってきて皆で相談し再び製作を楽しんでい

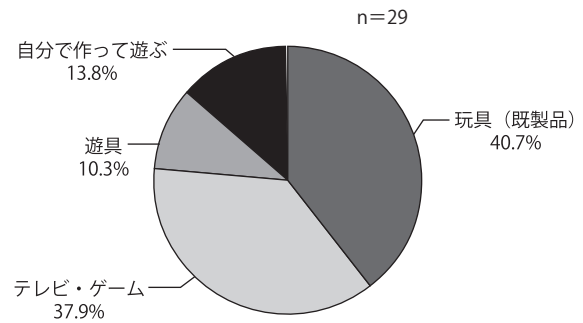
た。楽しさが「一人で」から「皆で」に変わってきた瞬
間だった。

[事例7]

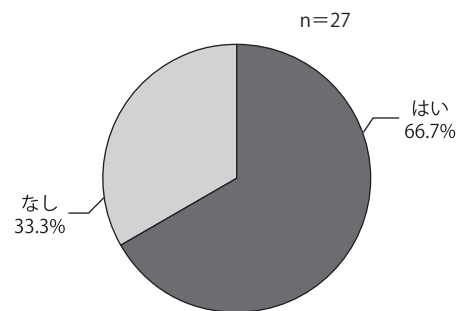
2月 保護者・職員

保護者へのアンケート・ポストイト調査を行い、職
員全員に今後の環境作り・今後の取り組みについて話し
合った。

好きな遊び



「作ってあそぼう」の活動により、お子様の変化はあり ましたか？



「はい」 どんな事ですか？

年少児の保護者

- ・自分で折り紙を折るようになった
- ・家でも積極的に作るようになった
- ・想像力や作ってみようとする気持ちがついてきたと思
う
- ・兄が作っていてもほぼ興味がなかった

年中児の保護者

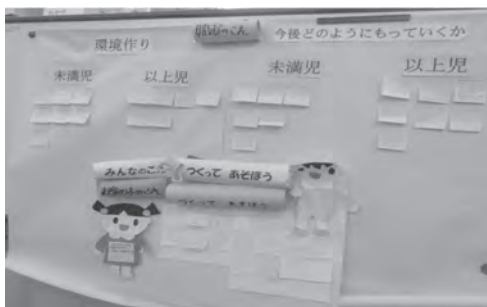
- ・家でも作りたがり折り紙・はさみ等自分から使うこと
が増えた
- ・作ることを楽しんだり、嬉しそうに見せることが増え
た
- ・家にあるいない物で、考えて作り遊んでいる
- ・イメージーションが豊富になった

年長児の保護者

- ・空き容器等で工作することが前より好きになった
- ・毎日何か作り、保育園に持っていくことが嬉しそう
- ・集中して長い時間作れるようになり、細かい部分も自
分でやるようになった

- ・家で作ったり、それで遊ぶ事が増えた
- ・今まで一人で作ることがなかったが必要な物を集め自分で考えて作っている姿を見て成長に驚いた

○保護者のアンケート結果を見て職員で今後の環境作り・今後どのようにもっていくのかについて話し合う。
(その1)以上児クラス・未満児クラスの職員に分かれて紙に記入し一枚の模造紙に貼る。



(その2)その後、以上児クラス・未満児クラスに分かれて職員で話し合い同じ様な内容の区分に分けてペンで囲む。



★環境作り

未満児クラスで出た内容

- 環境作り
- 素材(材料)の工夫
- 親子でのふれあい遊び

以上児クラスで出た内容

- 素材を増やす
- 自由に作れる時間を増やす



(その3)未満児クラス・以上児クラスで共通した内容を更に大きく囲む事で環境作りの見直し部分が現れる。

共通点:素材を増やした環境設定にする

★今後どのようにもっていくのか

未満児クラスで出た内容

- 自ら楽しみをみつけて遊ぶ
- 園と家庭での連携した遊び
- 発達に応じた素材遊び

以上児クラスで出た内容

- 自分で作る経験を増やす
- 自分で作った物で遊ぶ時間を増やす
- 親子で作って遊ぶ

共通点:今後、自分で作る経験を増やす

〈考察〉

紙を利用して全職員での今後の持っていく方について記入し模造紙にまとめた事で今後の内容がはっきりとした。

〔事例8〕

○対象児:以上児クラス(縦割り保育)

素材を自分で選び遊ぶ

Rくん:「先生、ぼくも作りたい」と年少児。今まで全く興味がなく兄が家で作っていても興味もないとの事だったが自分で考え作ることの楽しさを見つけた様子。



(年長児) Tくん:「掃除機作ったんだけど一応どうやればゴミがくっつくのかな」としばらく考えガムテープを裏返しにしゴミがくっつくようにしていた。

(年長児) Aさん:「お家でお父さんと作ったの」と言い靴とランドセルをもってきた。「ひとりで」や「お母さんと一緒」が多かつ

た作品が「お父さんと」の交流も出てくるようになった。

〈考察〉

素材を増やした事で想像して作る内容が以前に比べて本格的になってきた。そして、設定保育以外での自由時間に「作ってあそぼう」の時間を増やす事で作って遊ぶことを楽しみに登園してくる子どもが増えた。想像を膨らませることで集中して取り組む姿がみられるようになった子どももいる。

V. まとめ

今回、作ったもので遊ぶ事・そして子ども達の好きな遊びの中に買った玩具だけでなく作って遊ぶ遊びが加わればと思ひ活動内容を考え取り組んできた。

友達・親子・祖父母と作って遊ぶ体験を増やす事で作って遊ぶ事に楽しさを感じる子どもが増えてきた。まだ、自分から作って遊ぶことに興味をもてない子どももいるが、年少児が少しずつ興味を持ち始めたり、保護者の感想より「作ってあそぼう」の取り組みにより子ども達の姿に変化が見られ、「以前に比べ想像が豊かになった」「集中して遊ぶ」等好評なコメントがあった。

また、掲示板での保護者とのやり取りで園・家庭での

様子が分かり良かった面があった。そして、保育士の間でもこれからの環境作り・時間設定と考える良い機会となった。

保育は、保育士同士の連携と家庭との連携が重要となるため互いに共有できる工夫が必要だと言うことを改めて感じた。

・今後の課題

- 「作ってあそぼう」の取り組みについてはまだ知らない家庭もあるようだ。この取り組みが皆で共有できるようにこれからも工夫をしていきたい。
- 職員間で出た内容で素材を増やした環境の中で自分で作る経験を増やしていきたい。

参考文献・引用文献

1. 保育のとびら4 あそびを育てる
(日本書籍)
2. 遊びが育てる 子どもの心
(PHP研究所)
3. 造形表現
(三晃書房)

講評：「作ってあそぼう～できたことの達成感から次への探求心へ～」

評者：井桁 容子

この実践報告は、家庭での遊びの調査をアンケートで行い実態を把握した上で、保育者側の達成感や自己満足になりがちな作品展から、保護者や祖父母を巻き込みながら、子どもたちに“作ってあそぶ”楽しさにきづかせ、保護者の意識改革にまで及び、保育者の環境作りの振り返りに発展させていく見事な実践である。消費社会で育った親の子育ては、当然作ることよりも買うことが感覚として自然になりやすく、親子共に創造性が弱くなっていくことが危惧される今の時代に、ユニークかつ重要な着眼点での報告である。ただし、根拠となるアンケートの対象、人数が示されていないこと、少人数のアンケート結果の考察として無理がある部分や作ってあそぶ必要性の根拠にデータが不十分なことが残念である。

評者：岡田 澄子

昨年度の作品展の成功から今回は、自分で作るに加えて保護者や祖父母も巻き込んで一緒に作って遊ぶ体験を増やした、大変わかりやすい実践報告になっています。

継続的な活動を通し、子どもたちが「想像力が豊になった」「集中して遊ぶようになった」とアンケートに記されています。アンケートの方法もポストイットを使ったりと保護者が気軽に答えられるよう工夫されています。

保育士間でも環境作り、時間設定を考え直すよい機会になったと筆者が述べています。

日々の保育の中で、職員間での話し合いの機会を持つのはとても大変ですが、最も大切なことだと思います。職員間での話し合い、勉強会の積み重ねが保育の継続や共有につながっていくのではないでし

ょうか。

「作ってあそぼう」の取り組みが継続されることを期待します。

評者：小林 芳文

この研究は、造形的な遊びに視点をおいてその作品を作るだけでなく、さらに「子どもの達成感、探求心」への保育と結びつけたこと、そして保護者などと連携をしてその変化を検証する等の展開で、素晴らしい研究報告と思いました。

「作って遊ぼう」の実践で色々なこと（興味や関心など）が解り、作品の素材を換えたり子どもの育ちの変化を保護者の客観的なアンケートや事例も加えてまとめてあることなど実践報告での重みが増しました。どの子どもも自ら進んで行う活動があれば集中でき、もっとやってみようとする自発性も広がります。

考察にもあるように「自由時間」の保育こそ、創造的な能力や自己肯定としての満足が生まれていきます。今、子どもの学びの方向性で、幼児期の遊び環境の在り方が、将来の生き方に大きな影響を与える事が話題となっています。このためにもさらにこの実践研究を進めていただきたいと思います。

子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて ～お泊り保育から運動会、生活発表会へとつながる心の育ち～

和歌山県・れもん保育園 一谷 あす香

1. はじめに

保育者が一方的に活動を提供し主導していく保育は、何をしたのかわかりやすいし、比較的容易である。しかし、これは果たして質の高い保育といえるのだろうか。そうした思いから、当法人では、子どもの興味・関心を読み取り、遊びや活動が継続する中で広がりや深まりを生むような展開を意識していこうと取り組んでいる。

本事例の年長児クラスは、個々の行動や自分の思いを押し通そうとする姿が目立つ状況にあるとともに、自己肯定感が低いと思われる子、保育者の視線を強く意識する子、すぐに諦めてしまう姿勢が多いように感じていた。そのため、担任として、他者を理解し受け入れる姿勢を育むとともに、子どもたちの自己肯定感を育む必要性を感じ、協同的で困難を乗り越えるような活動を通じてこうした面を育てていきたいと考えていた。

2. お泊り保育での協同的な活動

(1) お泊り保育当日まで

毎年8月に保育者主導で恒例の内容で行ってきたお泊り保育だったが、この年は、前例にとらわれず子どもとともに作り上げることを意識して、テーマ選びから一緒に考えていくこととした。そして、7月のはじめ、子どもたちに「一日保育園に在るのだから何か大きくてすごいものが作れるのではないかと誘い掛けると盛んな話し合いが始まり、最終的に電車と船という2案が残った。しかしその場で決めることはせず、電車チームと船チームに分かれてそれぞれ設計図を描いてみることにした。それは、想像力を膨らませることと、友達と話し合っ調整する経験をしてほしいという思い、そして、設計図づくりからかかわることで主体的な参加意識を持って取り組めるのではないかとこの思いがあったためである。



それぞれのチームに分かれて設計図を書いている中で、当初は個々の思いに応じて書く姿が見られたが、「ここをドアにしようや」とか「電気なかったら暗いんちゃう？」などと相互にやり取りをする中で書く姿が見られ、また、両チームともクラス全員が入れるようにと、全員分の部屋を描くこととする姿があった。最終的に、

両チームが互いの設計図を前に、工夫した点について伝え合ったりした結果、お泊り保育で作るものは船に決まった。

そして、船を作るための材料や作り方について話し合いを行った。「段ボールがいる!」、「段ボールは紐でくっつけばいいやん。」、「色付けしたいよなあ」等の意見が出て、子ども達から出た案は保育者がメモを取り、その日決まったことを一日の最後に振り返り、決まらなかったことは後日また話し合う、というように少しずつ決めていった。

しかし、船の壁はどう作ればいいのか有効な答えが出なかったのだが、ある男児の「薄切りの段ボールで壁作ったらいい。」という意見に皆が賛同し取り入れることとなった。実はこの男児は、それまで友達と上手く関係を築けない場面が多かったのだが、この発言を機に周囲に存在を認められていくことになった。

お泊り保育に向けて、船の部品づくりをすることとなり、柱づくりに取り掛かったが、子どもたちは、柱の高さをどう統一するか、どのように倒れない柱をつくるのかといったことを話し合い、友達同士で「こっち押さえて!」、「ここガムテープにしようやあ」など互いの思いを伝え合ったり、身長より高い部分の段ボールは横に倒して繋げればいいのかと思いつく姿も見られた。さまざまな部品を作るなかで、「窓はどうする?」、「ドアここにしようか!」と自分たちですべきことを考え、提案し、役割分担し進めていくようになった。



(2) お泊り保育当日

お泊り保育当日は、その日までに作った船の部品を園庭で組み立てた。それぞれが協力しないと壁を柱に固定していくことができなかつたため、必然と「こっち持ってて」、「ガムテープとってくるわ!」等協力して行う姿が見られた。

そうした中でも天井を付けることが一番難しく、倒れてくる柱やつなげることの出来ない段ボールに試行錯誤していた。その中である男児が「ここ持っとくから今の

うちにくっつけて！」と皆に呼びかける姿が目立っていた。日常生活において、この男児が他児と協力する姿や他児に呼びかける姿を見かけることがなかったため、担任は非常に驚いたのだが、本児は自分が周りの役に立てることを見つけ、いきいきしているように見えた。

夕ご飯を終え日が沈んでから子どもたちは、懐中電灯を手に自分たちで作った船に乗船した。皆興奮し、船長室に入って大きな声で喜びの言葉を口にしたり、「うわあー！海賊が来たぞー！」「おもかじいばーい！」などと自然と言葉があふれ、自分たちの作った船に満足するとともに、いつもと違う夜の雰囲気の中で友達と一緒にその船に乗っている楽しさで夢中になっていることが感じられた。

しばらくしてから船の中で、『ムーミンのたからもの』（トーベ・ヤンソン作、講談社）という絵本の読み聞かせをした。この絵本は、ムーミンが自分の周りにはみな宝物を持っているのに自分は何も持っていないと悩み、宝物を探す旅に出るのだが、最終的にはムーミンの宝物はみんなのことを考えられる優しい心だという内容である。担任はここに至るまで友だちとたくさん関わり、相手のことを思い、協力してきたことを宝物として捉えて欲しいと思いその本の読み聞かせを行った。



3. 船からつながった運動会

10月の運動会では、前年度の年長児が取り組んでいた姿を見て憧れを抱き、今年は自分たちがやってみようという意見がでたことがきっかけで、カラーガードに取り組むこととなった。そして、テーマは何がいいだろうかと話し合ったところ、お泊り保育での船が強く印象に残っていたようであったのでかっこいい海賊というテーマで進めていくこととなった。

取り組みの最中には、「みんなで一緒にやってみねんから頑張らなあかんで！」「信じれば出来るで！」という発言が沢山あった。そして、もっと早く動こう、かっこよく歩いていけば早くなるのではないかと、等呼びかけ合いながら取り組んでいた。子どもたちの中で協力する、皆で行う、難しくとも頑張れば出来るのだという気持ちがあつた。子どもたちはぐくまれてきているのだと感じた。



4. 振り返りとしての生活発表会

(1) お泊り保育を振り返って

本園では、1月に開催する生活発表会も日常とのつながりを意識して行っており、担任としては子どもたち自身が、自分たちが行って来たことを思い返し、大切な学びがあったことを感じてほしい、それを生活発表会につなげてほしいという思いを持っていた。

まずは、友達同士へのかかわりや思いやりといった面で大きな育ちがあったと感じていたことから、お泊り保育の夜に読んだ『ムーミンのたからもの』を再度読み、皆でお泊り保育時のことについて話し合った。そして、お泊り保育で経験した思い、友達と協力したからこそ出来たことなどについて振り返ったことを土台に『ムーミンのたからもの』の絵本の内容について皆で考え始めた。何日もかけて少しずつ話し合いを進めた。

まずは「一人ずつの宝物って何だろう」というテーマで話し合うこととした。ママとか、自分の好きなおもちゃといった発言が多かったが、翌日は「このクラスの宝物って何だろう」という投げかけを行った。はじめは、物や場所の名前が挙がっていたが、何日もかけて話し合いを重ねていく中で「心？」「やさしい心です。悪かったら一人になるから。」「友達かなあ。だって一人で遊んでもつまらないから。」という意見に変化していった。

このような変化が見られた背景としては、毎日のサークルタイムで、一日に一人ずつ友だちの良いところ探しを行ってきたことがあるように思われる。対象となる子どもが立ち、他児に自分の良いところを伝えてもらうという内容である。当初はなかなか伝えてあげられなかったが、次第に日々の生活の中で友だちの良い所を見付けようとし、見付けた時には「あ！良い所はっけーん！今度良い所探して言おう。」と嬉しそうにする姿が見られるようになった。また、翌日には誰が対象となるのかを事前に伝えておくことで子どもたちはその子に注目するようになっていた。良い所探しでは、「トイレのスリッパちゃんと揃えてました！」等たくさん褒めて貰えることに照れながらも嬉しそうにする姿があった。

このような活動を通して友達の良い所をたくさん見つけたり、考えたりすることで友達を認め、尊重し、周囲の人の大切さに気付く姿勢につながったように感じた。

こうした経緯を経て、「友だち」「心」がクラスの宝物であるということになったのだが、引き続いて、「心が宝物とはいってもそれはどんな心なのだろう？」という話し合いを行った。子どもたちは、子どもたちなりの表現で心を表現し、「優しい心」「ふわふわの心」と言ったり、「キラキラの虹色」「赤色の心」など色で例えてみたりと様々なイメージで心を表現していた。同じ心とい



っても、一人一人の思いや考えが違い、けれども違うからこそ良いということに気付くことにもつながっていった。

(2) 聴覚障害者の来園、交流を通じて感じる自分との違い

当園の生活発表会では、恒例として手話ソングを行っていたのだが、反省として、なぜ手話が必要なのか、手話とは何かといった点を子どもたちに伝えきれていたのだろうかという意識があった。そこで、手話ソングに取り組む前に、聴覚障害者の方に来園いただいた。ほとんどの子どもが、聴覚障害者に初めて会う経験となった。担任と子どもたちは、目隠しをして行動してみたり、発言してはいけない、ジェスチャーでしか自分の気持ちを相手に表現できないという状況を設定して過ごすなど、「自分と違う」ということを実体験を通して知っていった。

その後の子どもたちとの話し合いの中で、人はみな同じではなく違いはあるけれど、それぞれが大切でそれぞれに良さがあるのだと子どもたちが感じるようになってきた。

こうした経験を踏まえ、それぞれの違いを大切に、人と違っていいということ伝えたいと思い、『私と小鳥と鈴と』（金子みすず）の詩を紹介した。

詩の内容については一文一文、時間を掛けて皆で読み解いていった。すると子どもたちから「みんな一緒やったら怖いぞな」、「みんな違うからみんないいんやぞな」等の言葉が聞こえてきた。

子どもたちと詩の朗読を始めると、子どもたち自身で詩の意味について話題にする姿も見られるようになった。



わたしと小鳥と鈴と 金子みすず

私が両手をひろげても、 お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、 地面を速く走れない。

私が体をゆすっても、 きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、 たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。

「わたしと小鳥と鈴と 金子みすず童謡集」JULA出版局

(3) 発表会における取り組み

このような経緯があり、生活発表会では、お泊り保育で船を作るまでの過程やお泊り保育当日の様子を再現するとともに、クラスの宝物について話し合ったサークルタイムの再現をすることとなった。また、「私と小鳥と鈴と」の詩の朗読を行うこととした。

子どもたちは、自分たちが行ってき来た楽しかった思い出を再現する内容だったため、楽しさや面白さを再び感じ、やらされているのではなく、自分たちで取り組もうとする姿が見られた。また、再現する中で、当時ぶつかった問題や乗り越える大変さ、友達と協力したからこそ乗り越えられたことを思い出し、心や友達の大切さ、話し合ったり協力する大切さを改めて感じている様子であった。また、詩の朗読でも、自分とは違う考え方があるということ、身体、こころ、言葉で学ぶことが出来たように感じた。

発表会后、保護者からは「こんなことしていただくとよく分かりました。」「わが子の内気な性格が心配でしたが、自ら先生役を志願して頑張っている姿を見て、本当に成長を感じました。」「子どもたちが楽しそうにしていたから、ほんまに楽しかったんやなって思いました」等の感想が寄せられ、日常の保育について理解を深めてもらえたり、子どもたちの成長を感じてもらうことが出来たように感じている。

5. まとめ・考察

一連の協同活動に取り組んだ約半年の中で、子どもたちは大きく成長したと感じた。一つのことに向かって少人数グループやクラス全体で協力する経験を何度も繰り返し経験していく中で、一人では出来ないことも協力すれば出来るということを実体験として経験し、自分の存在が皆に影響している、皆に求められていると感じることが出来たように思われる。また、今まで協同活動に参加しながら自分の好きなように行動していた子ども、責任感を持って役割を果たそうとする姿を見ることができた。そして、こうした協同的な活動を経て、協同的な関わりが少なかった子自身から「自分がこれするからその間にこれやって」など、自らの役割を見つけ行動しようとする発言を耳にするようになった。

自分たちで考え、活動を進めていく中でたくさんの問題にぶつかり、思うように作り上げることが出来ないことも多かった。しかし自分たちが行っているという意識が高い為、途中で諦めようとするのではなく、問題にぶつかる度に友達と相談し合い、皆で話し合っって試行錯誤し協力して進めていった。これらの経験を通して、問題から逃げるのではなくどうすれば良いのかを考え、自分たちの力で乗り越えていく力が身に付いていったように思う。

消極的で注目を浴びることを避け、みんなの前で発言できなかった子ども、サークルタイムで少しだけでも自分の思いを伝え、聞いてもらえる経験を積み重ねる中で、次第に自分の思いを口にする事への抵抗感が薄れていった。いざこざがあった時に泣いて自分の思いを伝えることを諦めがちであった子ども、少しずつ言葉にすることが出来るようになっていった。しっかりしているが内気で保護者も心配していた女兒は、友達に良いところを見

つけてもらったあと次第に自信をつけていき、生活発表会では先生役を志願しやり遂げた。また、自分の発言を聞いてもらえる経験をたくさんした子どもたちは、徐々に聞く力も身に付けていった。

日々の良い所探しの活動を通して、互いの良い所に目を向け、伝えようとするが増えるとともに、子どもたち同士で指摘し合う姿が減り、自己肯定感が育まれていったように感じている。また、協同活動の話し合いの中でそれぞれの考え方や思い付きに感心、賛同することが多く、それまで友達と上手く関わっていなかった子ども、皆から「物知り博士や！」と認められるような変化も生じていった。

そして違いがあること、一人ひとり違うことが素敵だということについて時間を掛けて考えていく中で子どもたちの発言から相手を否定する内容が少なくなってきたと感じる。

これら一連のつながりや、子どもの育ちを支えたのは何だったのだろうかと改めて考えると、保育者が主導的に決定していくのではなく、子どもとともに作り上げようとする姿勢や取り組みであったように思われる。

つまり、保育者が一方的に決めるのではなく、毎日のサークルタイムを通じて、一人一人が自分の意見を言う場が保証されること、仲間や保育者がその言葉に耳を傾け、それをもとに生活を作り上げようとする環境があったことは、子どもの主体性につながるとともに、自己肯定感の育ちやクラス風土の醸成にもつながっていったよ

うに思われる。また、友だちのいいところ探しを継続したことは、他者の長所を見つける姿勢や風土が築かれるとともに、自らも長所を伝えられることで自信を得ることにつながったのではないだろうか。このような背景があったからこそ、自分たちで活動を主体的に選択する意識が生まれ、活動の継続・展開に結び付いたと感じている。

そして、活動の継続・展開を支えたもう一つの視点として、担任が子どもの内面の成長を意識して読み取ろうとしていた点もあると感じている。担任は、日々の保育日誌を単なる事実記録ではなく、子ども同士のやりとりなども含めたエピソードで記載するように努めており、子どもの発言を拾う姿勢を持ちながら保育にあたっていた。また、お泊り保育の活動などは、ドキュメンテーションづくりも視野に入れていたため、これにより単なる活動の羅列ではなく、子どもの内面で起こっている学びにも視点を向ける姿勢につながったように思われる。

当初は、子どもの興味・関心に基づいた活動の継続・展開とは何だろうか、どうしたら実現できるのかと迷う部分もあったが、振り返ってみると、保育者が子どもの声を聴き、拾い、記録するとともに、そこを起点として保育者がねらいを持ちながら子どもと共に保育を作り上げていく姿勢が必要不可欠であると感じている。

引き続き子どもに寄り添い、子どもたちとともに保育を進めていきたい。

講評：「子どもの興味・関心に基づく活動の展開に向けて
～お泊り保育から運動会、生活発表会へとつながる心の育ち～」

評者：井桁 容子

保育の中の行事は、とにかく出来栄えや無事に終了することに終始しがちだが、本実践報告は、お泊り保育の経験やそこで芽生えた子どもの興味関心が尊重され、子ども同士が話し合い協力し合っ
て遊びが展開されていく見事な実践である。ぶつ切りの行事に終わることなく運動会、生活発表会へとつなげていく連続性のある実践、また、前例にとらわれることなくその行事の意味や主旨を振り返りつつ新たな形で取り組んでいったことも、保育の質の向上を目指す意味においても高く評価できる。欲をいえば、保育者が黒子となって遊びを支えていたとしても、そこにあった配慮や保育者と子どものやり取りが、もう少し具体的に見えると、保育実践報告としての価値がさらに高まったように思う。

評者：石川 昭義

自己肯定感をいかに育むかという主題をもとに、お泊り保育、運動会、話し合い、金子みすずの詩の紹介、生活発表会など、一連の活動の意義を見いだしている報告である。

友達とうまく関係を築けないと見られていたある男児が、周囲に認められ、他児と協力したり、他児に呼びかけるようになっていく。そういう姿を見て、「担任は非常に驚いたのだが、本児は自分が周りの役に立てることを見つけ、いきいきしているように見えた」と表現されている。一連の協同的な活動に取り組む過程で、自分が何かの役割を見つけ、責任を果たそうとする姿に変化していく記述はとても良かった。

自己肯定感を育むことを目標に、園として保育

課程や指導計画をどのように立てていったのか、若手の先生とベテランの先生とでクラスの雰囲気
の醸成に違いはあったのかなど、記述を読みながら質問したいことが思い浮かんだ。今後は、こうした園全体としての問題の捉え方と実践の発展という視点からさらに考察が進むことが期待される。

評者：岡田 澄子

日常の保育は、ともすれば保育者が一方的に活動を提供し主導していく保育になりがちです。ましてや恒例の行事はそうです。しかし、あえて子どもたちとともに作り上げることを意識した活動により、仲間と協力することや責任感を持って役割を果たそうとするなど、成長の様子が窺え、楽しそうな保育が目に見えます。

また、担任が子どもの内面の成長を意識して読み取ろうとしていた点に活動の継続・展開を支えた大きな要因があると思います。日々の保育日誌を単なる事実記録ではなく、子どもの発言を拾う姿勢を持ちながら保育にあたっていたと記載されていることでも分かります。本当に子どもたちのことや保育が大好きなのだと思います。

子どもに寄り添い、子どもたちとともに進める保育を継続して行ってください。

アレルギー代替食の対応について ～富士保育園アレルギー対応マニュアル作成を経て～

広島県・富士保育園 殿山明子・佐々木美佳・本田幸奈・村尾千景

<はじめに>

～アレルギー児とアレルギー食の現状～

アレルギー児の増加の原因にはいくつか考えられる。一つ目に、食生活の欧米化である。日本は米や魚、野菜といったものが中心だった日本食がパンを主食とし、油、動物性たんぱく質を多用する欧米食の影響を戦後大きく受けた。そのため日本人の腸内細菌の状態が変化したことによるアレルギーの増加である。二つ目に抗原性物質の多用である。薬の進化に伴い人間の免疫機能を整える常在細菌の減少したことによるアレルギーが増加した。またその他にも、睡眠時間などによる夜型の生活になったことで自律神経の悪い影響を及ぼし、結果として自然治癒力が低下しアレルギーが増加したとも言われている。

また、アナフィラキシーショックも昔は「子どもの突然死」「原因不明死」とされていたものが食べ物によるアレルギーが原因だと明確になってきたことによる増加も考えられる。

このようにアレルギーが増えた原因はひとつではなく様々な原因が絡み合っている。時代の中で変わってきたことでもあり、アレルギー児が珍しいことではなくなった。命にかかわる問題であるため、子どもの食に携わるうえで食物アレルギーへの理解を深め、アレルギーと向き合っていく必要がある。

当園でも当初はアレルギー児の給食として除去と補食という形で行っていた。しかし、除去と+αだとやはり子どもにとっては「自分の給食はみんなと違う」「普通の給食が食べたい」という声もあり、食べる意欲が落ちてしまう子どももみられた。本来、楽しいはずの給食がアレルギー児にとっては違和感のある時間になってしまっていた。保育園の給食が子どもの発達段階に応じた適正なものであること、栄養的にもバランスのとれたものであること、これらはアレルギー児おいても同様である。「また食べたいな」「おかわりしたいな」「あ～、おいしかった」とアレルギー児も含め子どもたち全員がそのように思ってくれる給食こそが理想の給食だと考える。そこで除去食ではなく代替食に重点をおいて、アレルギー食品は除去しながらも通常の給食と見た目も味も含めて、できる限り近づけていくように調理を行っていった。

<マニュアル作りの目的>

かねてから子ども達が美味しそう、食べたいと思うよ

うな代替が始まった。保育室では誤食しそうになったり、保育室と給食室との伝達ミスがおこったり、といったヒヤリハットは減少しなかった。その理由としてアレルギー担当者が全ての業務を一人で行っていたことや、アレルギーに対する認識の低さがあったと考えられる。そこで保育園全体でどのようにすれば間違えのないアレルギー代替食にできるのか、様々な対応策を考えその都度改善してきた。例えば、3歳未満児は個人の名札が乗ったランチプレートで食べていたがアレルギー児に置き間違えて誤食が起こりそうになった。その改善策としてアレルギー児は、より見た目がはっきりするように名札の色を変えて対策をした。しかし、次には給食室と保育室との伝達が上手くできないということが起こった。その改善策として、色を変えるだけでなく、具体的にどの食品のアレルギーなのかまで名札に記載するようになった。このように、課題の把握と改善を繰り返して行く中で、ヒヤリハットが減少していった。誤食や調理中のミスが起きないための対策として行っていることを誰が、いつどの立場になっても間違えのないように、全員が統一した共通理解ができるためにマニュアルの必要性が高まった。

<マニュアル作り>

マニュアル作りを始めるにあたり、普段日常的にアレルギー代替食の調理方法をどのように行っているのか、個人の認識の差がないのか、もし認識の差があるならばどのように違っているのかを細かく1つずつ確認をした。すると、微妙に個人での意識の差やより良い対応策などが明確になってきた。そのためまずはマニュアルを作る前にどうあるべきかを考え直した。

以下、具体的な内容を記す。

アレルギー一覧表

～背景～

以前は一覧表として書き出しは行っておらず、アレルギー指示書は調理員の担当者のみ把握して管理していた。そのため管理が甘く、アレルギー児の次回の検査日の声かけが遅れることがあった。

アレルギー代替食も一人の担当者が調理を行っていたため、効率よく調理ができておらず、一人の判断で進められていることで、ミスに気が付かないこともあった。その他にも保育士への伝達ミスによってアレルギー児が誤食しそうになるヒヤリハットも起こった。

こういったミス無くすために、アレルギー指示書は複数の調理員で確認を行ったのち、アレルギー児の名前、アレルギー食品、次回の検査日が一目で分かる一覧表を作成して給食室に貼り、いつでも確認できるようにした。

そうすることでアレルギー担当者だけでなく調理員全員がアレルギー児の把握をして、お互いに確認し合うことで、ミスが減るだけでなく、アレルギー担当者が急な休みの場合にも対応でき、適切な時期の再検査によりアレルギー児の状態に合わせた代替食の提供に繋がっている。

～内容～

- ・アレルギー指示書が保育園に届いた日に、担当保育士と給食室とで確認する。
- ・指示書に基づいて食べられるもの、食べられないものに○、×をつけ一覧表にする。(A)
(次回の検査日も記入しておき検査日が近くなったら保育士に声掛けをする)

検査日を記載 (例 H27.○)	たまご			肉	魚	フルーツ	牛乳	その他
	卵	黄身	白身(マヨ)					
A子	○	○	○	×	○	○	食卵 スチム	×
B男							生 パン	
C助							生 パン	

アレルギー一覧表 (A)

アレルギー児名札

～背景～

保育室で給食を食べるため台車で給食を運ぶ3歳未満児には全員名札があった。アレルギー児も同じ色の名札で違いがなかったため、アレルギー児の名札は担当者が抜いて別で調理後に配膳したり、目印をつけたりといったことで識別していた。しかし、通常の給食をアレルギー児に配膳してしまうなどといった配膳のミスや伝達のミスにより誤食が起りそうになるミスが多々起きていた。そのため、アレルギー児の名札の色を変えることで配膳のミスは防げるようになった。しかし、保育室への伝達が「みんなと違う」というだけで具体的な違いまで伝えずに誤食が起りそうになった。そこで、色を変えるだけでなく名札に食べてはならないアレルギー食品の表示も加え全員が一目で分かる名札に変えた。それ以降は、給食室と保育室との伝達の際には、目で見て、口で「この子は○○が食べられないために△△に変えてあります」と話し、より具体的な代替の内容も含めて保育室とともに安全の確認をしている。保育士が疑問点や心配な点があれば調理員に聞く場合もあり、このようなやりとりもヒヤリハット防止のためには重要である。また、配膳時も担当者だけで確認するのではなく、担当者以外の人に名札も含めて確認するようになりミスがなくなった。

また、ランチルームで給食を食べる3歳以上児は子どもが全員自分で、カウンターに給食を取りに行くが、以

前はアレルギー児の個人の名札はなかったため、調理員がアレルギー児に目配りし代替食を渡していた。保育士と調理員で確認をしていたが、それでも配膳ミスや子ども自身もアレルギーの意識があまりないという問題点があった。そのため、アレルギー児は3歳以上児についても3歳未満児と同様に名札を用意し、子どもと保育士と調理員の全員で確認をしてから食べる流れが確立された。

～内容～

・名札にアレルギー食品を記入

【保育室で食べる場合(3歳未満児)】

3歳未満児には、各個人に名札があるため、除去の名札は青色にする。

【ランチルームで食べる場合(3歳以上児)】

3歳以上児は各個人に名札がないため、アレルギー児のみ名札をつくる。

クラスごとに色分けする。

- さくら組(5歳児) 赤色
- ひまわり組(4歳児) オレンジ色
- すずらん組(3歳児) 緑色



名札

給食業務の日報作成

～背景～

給食の発注や調理する際に必要な日報作成は長く行われていたが、アレルギー児の代替食の内容については一切記述がなかった。そのため担当者のみが把握しており、調理中も担当者がアレルギー児分のみを切りだして調理し配膳という効率の悪い流れとなっていた。また、代替しなければならぬ食品を見落として、そのまま気付かず調理をするミスがあったため、日報を作成する際にアレルギー食品は赤字に変えて一目でわかるようにし、具体的な代替食品とアレルギー児の人数を書き出すことで、全員が代替食の内容を理解でき、給食担当も代替食の調理のフォローがしやすくなったため、効率のいい調理過程の流れを作ることができた。

～内容～

- ・給食日報作成ソフトを使用し、日報を編集する。
 - 編集内容(ソフトで行う)
アレルギー食品…赤字にする
 - 編集後印刷
アレルギー食品の横に、代替食品とアレルギー児の人数と名前を手書きで記入する。
- ・日報(別紙1)を元に、離乳食週間献立表(別紙2)、おやつ週間献立表(別紙3)を作成する。

【調理】

<前日>

声だし確認

調理員全員がそろっている間に、翌日のアレルギー代替食の内容と、それに沿った調理の流れについて具体的に声に出して確認する。

ボード記入

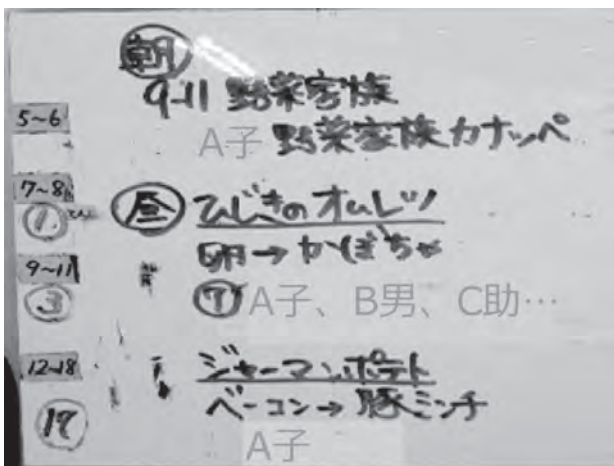
～背景～

以前は給食室のボードには離乳食の材料しか書いていなかったが、アレルギー代替食の内容を書き加えることで調理員全員がアレルギーの把握をしてミスが起きないように注意を払っていけることができ、アレルギー担当者が休んでも、他の調理員が代わりに調理できるように対策を行った。

～内容～

アレルギー担当者が給食業務の日報（別紙1）とアレルギー一覧表（A）を見て、調理室内のボード（B）に各メニューの代替食品・アレルギー児の人数と名前を記入する。

（午前中：朝のおやつ・給食 午後：昼のおやつ）



ボード (B)

おやつ時の名札配置

～背景～

給食時の配膳と同じように、おやつの時もアレルギー児の名札を使用し、配膳する。その際、おやつについてはおやつ週間献立表（別紙3）を見ながら保育室、給食室ともに安全を確認し配膳を行っている。

以前、名札があっても置く場所が他児と同じ場所であり、代替をしていないなどといった間違いや伝達ミスが起きていたため、皿を置く場所についても統一し、書類による確認によりミスが起きなくなった。

～内容～

【保育室で食べる場合（3歳未満児）】

・おやつ週間献立表（別紙3）、アレルギー一覧表（A）で代替食の有無の確認をする。代替食が必要な場合は青色の名札を台車の一番上の段に並べる。（C）



台車 (C)

【ランチルームで食べる場合（3歳以上児）】

・給食配膳と同様な流れのため、後に記載する。

<当日>

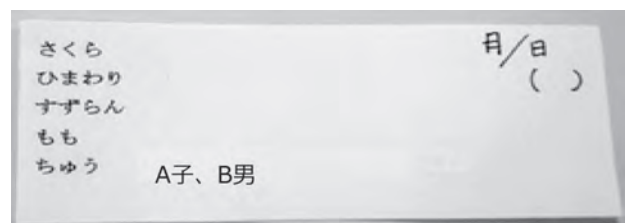
出席表

～背景～

代替が必要な朝のおやつや給食は、通常の朝のおやつ・給食よりも先に切りだしや加熱を始めるため調理過程においては早めの対応が必要である。しかし、もしアレルギー児のために1食が欠席により不必要な場合には大きく調理過程が変更する場合もあり、作り終わってから欠席だったと分かることが多々あった。そのために以下のものとなるべく早めに欠席を確認し、効率的に調理を行っている。

・特別食除去確認表（D）

登園時の子どもの受け入れ担当の保育士が出欠を確認後、給食室に持ってくる。



特別食除去確認表 (D)

特別食除去とは…
朝のおやつで代替食が必要な場合や調理過程で早めの対応が必要な場合のための確認表

・出席表（E）

保育士が、各クラスのアレルギー児の名前が書いてある出席表を給食室に持ってくる。

～例～

出席：名前を囲むように○をする。

欠席：名前に斜線を引く。

出席表除去 (E)

給食内の朝礼

～背景～

毎朝、今日はどんな給食を作り、その日の代替内容や調理の流れを他の調理員に伝えて、全員で安全な代替食を作っていけるように意識を高めている。ボードや日報を目で見確認するだけでなく、実際に自分たちで声に出して確認をすることで、より一層理解が深まり、全員で給食、代替食の再確認ができるため、毎日欠かさず行っている。また、調理の活動は、個々で違う作業をしても、全員で同じものを作っているため、全体で共通理解できるようにするために行っている。

～内容～

- 朝のおやつ担当者、給食のアレルギー担当者がアレルギー食の有無を他の調理員に伝える。

調理中

～背景～

アレルギー代替食を一人の調理員が献立作成、書類作成、調理まで全てを行っていると、負担も大きいミスがあったとしても気が付くことができない。そこで献立作成をする人と調理をする人を別にする事で、代替の内容を確認できミスを防ぐようにした。アレルギー代替の調理をした調理員とは別の調理員が検食を行って、間違えず安全な代替食であるか確認して配膳をするようにしている。代替食はアレルギー児が食事中に食べこぼした時の代わりや、おかわりができるように量は余裕をもって作るといったことにも気を付けている。

代替食は見た目や味も通常の給食に近いものを作っていけるように工夫し、アレルギーの子もみんなと同じような給食が食べられるように配慮している。当園では卵のアレルギーをもつ子どもが一番多いが、給食でオムレツや卵とじなどの献立で卵を除去するとどうしても色味がなく、見た目がかなり違ってしまふ。

その解決策を検討する中で、卵の色味に似ている野菜のかぼちゃを使うようになった。料理によってかぼちゃはペーストにして他の食材と混ぜて使う、細切りにして上からちらすなど使いわけている。このかぼちゃの使い方は当園での代替食の中で代表的なものになっている。その他に牛乳を飲んではいけなない場合は、色味が似ている豆乳を使い、マヨネーズを使った料理の場合は、原材料にアレルギー食材が含まれていない専用のマヨネーズを使用し対応している。

調理をする際は、味はもちろん、見た目も重要であり、視覚からも食欲がわき、「おいしそうだな」、「もっと食べたいな」と思ってもらえるようにしている。代替食をおかわりにくるアレルギー児もおり、「おいしかったよ」という声は調理員みんなの励みになっており、もっと喜んでもらえる給食を作ろうという気持ちが益々強くなっている。

～内容～

- 給食よりも先にアレルギー食を作る。
具体例…食材の切りこみを先にする
味つけを先にする
スチームコンベクションで加熱する際は通常の給食よりも上の段で加熱する
普通食より先に中心温度計を測定する

- 調理器具は兼用にしない。

～例【ひじきのオムレツ】～

- 卵の代替でかぼちゃを使う
- 蒸したかぼちゃをペーストにし、オムレツの食材を取り、最初に焼く。

配膳

～背景～

配膳時は、アレルギーの間違いが特に起こりやすいと言える。以前は、担当者のみで名札や食事の確認をしていたため、誤食しそうになったり、保育室に誤った代替食の内容を伝達したりということが起きていた。また、アレルギー児も一人で給食を取りに来ていたので、調理員が確認をして給食を渡していたが、子どもたちは全員が同じ時間に同じ部屋で給食を食べるため、気が付かないうちにアレルギー児が通常の給食を持っていくことや、調理員のミスで代替食でない給食を渡してしまうことがあった。

そこでアレルギー児は保育士と一緒に給食を取りにくることにし、調理員と保育士で、今日の給食は何が代替されているのか、この給食がその子に持っているアレル

ギー給食であるかということと一緒に確認するようになった。

～内容～

- ・アレルギー担当者がアレルギー一覧表（A）と調理室内ボード（B）で当日の代替食が必要なアレルギー児を確認する。その後、名札を調理台の上に並べ、他の調理員と確認する。名札をクリップで皿に固定し、アレルギー食から配膳する。

台車の場合：一番上の段に置く（C）

ランチルームの場合：返却口の一番上に置く（F）



返却口の一番上（F）

受け渡し

～背景～

名札が確立されていなかったこと、受け渡しの方法も同様に確立されていなかった。担当者が1人だったことや、代替食であっても温かいものを食べさせたいという思いで配膳後の場所による間違いなど様々なミスにつながっていた。そのため、3歳未満児で台車に給食を乗せる場合は名札を見て、具体的な代替の内容も含めて確認し受け渡しをするようになった。

ランチルームで給食を食べる3歳以上児にも、アレルギー児のみ名札は用意し、アレルギー児は保育士と一緒に給食を取りにくることにして、調理員と代替内容の確認を行い、受け渡しをするようになった。そして子ども自身にもアレルギーがあるので、絶対に保育士と一緒に給食を取りに行くというのを理解してもらうように努めた。

おかわりの際もミスを防ぐため、子どもは保育士と一緒にカウンターに行き調理員との確認をしてから、おかわりを貰う。ランチルームでは3～5歳児が交替で給食を食べるため、アレルギー児の担任以外の職員もアレルギー児の把握をして、全体で見守っている。

～内容～

【保育室で食べる場合（3歳未満児）】

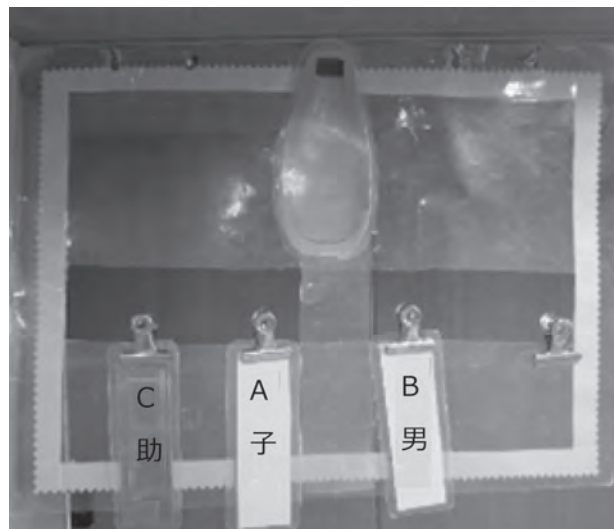
台車を取りに来た保育士と具体的な代替食の内容をどう変更しているかなど、アレルギー一覧表（A）とおや

つ週間献立表（別紙3）を見ながら確認をして送り出す。

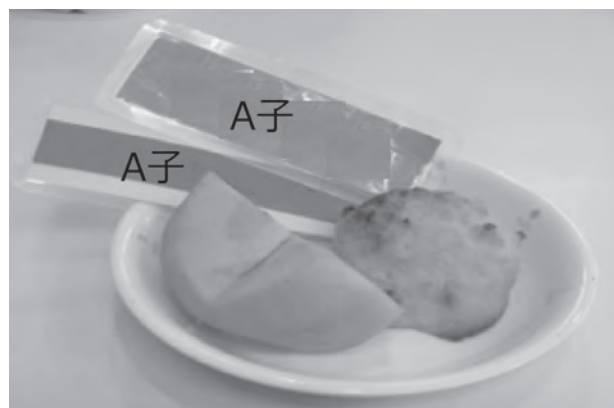
【ランチルームで食べる場合（3歳以上児）】

- ①受け渡し前に、代替する食品の絵を配膳台の上のパネルに貼り出す。（G）
- ②アレルギー児は保育士と一緒に給食を取りにくるので、名前を確認する。
- ③保育士が食器について名札にもう1枚の名札を重ねて名前を確認する。（H）
- ④食べ始めると保育士が名札を外す。

注意 おかわりの際にも保育士と一緒に来る



パネル（G）



名札を重ねる（H）

<考察>

アレルギー児であってもみんなと同じように「給食はおいしいな」「食べるのって楽しいな」と思える給食として始まった代替食であった。しかし、代替以前にアレルギー児についての給食全体の安心できる流れが確立されてなかったのも事実である。そのため、代替を始める一方で、アレルギー児の把握やどんな方法でミスが起こらないか、起きそうになった場合にはその都度、課題に対する改善、対応を行ってきた。その策は、マニュアルは完成したら終わりではなく、今以上に安全でいい策はないか試行錯誤することが重要である。また、その一方

で、代替をするためにどんな食材が似ているか見た目も味も似ているのか、といった代替に対する試行錯誤も行い続けた。それらの結果として、年々ヒヤリハットも減少している。

これは、課題に対する改善を繰り返すだけでなく、日々変わる情報に対する探究心や保育士と給食と家庭といった子どもを取り巻く環境の連携など様々な要因が上手く出来ているからだと言える。1つ1つの要因がつながっているため、どこかが欠けていてもいけないのである。現在給食室が行っている家庭への働きかけとしては、離乳食アレルギー献立表の配布、給食献立メニューのレシピ配布や調理員が行う食育の取り組み案内を行っている。レシピ配布では、アレルギー代替食の食材の記載も欠かさず添えている。

このように当園では、アレルギー食に対して多くの対応を心がけて実践している。アレルギーは特に気をつけなければいけない問題だからこそ、これまでも課題を見つけては解決する方法を見つけ、アレルギー食作りをより良いものにしようとしてきた。現在の園でのアレルギー対応の形を、マニュアルとしてまとめたものを作成したことで、全員の共通理解を深め、マニュアルに沿った統一した対応がよりできるようになり、ヒヤリハットの減少や効率の良い給食作りに繋がっている。

マニュアル作成では誰もが理解できる内容にするために、アレルギー対応の順序を一から追って細かく抜き出していった。そうすることで普段の対応の振り返りにもなり、今一度気になる点や改善したほうがいい点はない

か見直すことができた。しかし、今後の課題として、あらゆる場合を想定したマニュアル対策を考えていくことがあげられる。アレルギー児は年々増加傾向にあるため、アレルギーの発症はいつ起こるか分からない状況であり、アレルギー児の人数が増えた場合や、アレルギー食品が複雑化した場合など、様々な対応策を想定しておくべきである。現在のマニュアルをそのままを活用するのではなく、いつどんな場合がきても対応できるように、定期的にマニュアルを見直し、その都度改善を重ねていく必要がある。また、アレルギー児の把握を徹底し、その子が普段どんな様子で食事をしているかを調理員も実際に見て、保育士から状況を聞くなど、さらにアレルギー児との関わりを深めてアレルギー食作りに活かしていきたい。

給食作りは、調理員全員が同じラインに立って行っているため、一人ひとりが不安にならず、自信をもって業務ができるような環境作りが大切である。ヒヤリハットを防ぐためにも、アレルギーの間違いに気づける場所を要所で作り、1つずつ確認を行いながら、安全でおいしい給食作りをしたいと考えている。そしてアレルギー対応としてマニュアルと同等に大切なのは、保育士、調理員、家庭とが連携し合って全体で子どもの健康とすこやかな成長を見守っていくことである。給食室内でも、また、保育士との連携の中でも、疑問に思ったことは質問したり、分からないことにはアドバイスをしたりと、お互いに声を掛け合って全員がアレルギーと向き合える関係を築いていきたいと思う。

献立表

3歳以上児、3歳未満、職員は一人あたり可食量（単位g）

2015/11/18(水曜日) 富士保育園(一般)

別紙1：日報

午前おやつ	以：0人 未：67人 職：0人	総使用量	3歳以上	3歳未満	職員	
ピーナッツバターパン						
パン・食パン(学校給食用)		469g	100	70	160	
ピーナッツバター	200g	187.6g	40	28	64	
昼食						
ハンバーグステーキ 主510A N	以：102人 未：67人 職：27人	総使用量	3歳以上	3歳未満	職員	
豚ひき肉		7684g	400	280	640	
たまねぎ		3065.4g	150	105	240	
パン粉		1344.7g	70	49	112	
牛乳		2881.5g	150	105	240	→豆乳
卵		2260g	100	70	160	
しょうが		240.1g	10	07	16	④A子
食塩		96g	05	04	08	
こしょう		2.2g	00	00	00	B男
油		192.1g	10	07	16	C助
ケチャップ		576.3g	30	21	48	D美
ウスターソース		192.1g	10	07	16	
ウスターソース・濃厚ソース		384.2g	20	14	32	
豆腐と油揚げの味噌汁						
木綿豆腐		7684g	400	280	640	
油揚げ		576.3g	30	21	48	
ねぎ		1600.8g	50	35	80	
わかめ(生)		886.6g	30	21	48	
豆みそ		1536.8g	80	56	128	
マカロニサラダ 副380A N						
ツナ油漬缶		1921g	100	70	160	
マカロニ・スパゲティー		960.5g	50	35	80	
にんじん		1980.4g	100	70	160	
きゅうり		3920.4g	200	140	320	
とうもろこし(ゆで)		2744.3g	100	70	160	→除去マヨ
マヨネーズ(スプレッド)		1536.8g	80	56	128	
食塩		19.2g	01	01	02	④A子
こしょう		2.2g	00	00	00	B男
みかん						
みかん		14407.5g	600	420	960	C助
午後おやつ						
ミルクココア	以：102人 未：67人 職：0人	総使用量	3歳以上	3歳未満	職員	
スキムミルク		3275.8g	220	154	352	→蒸しパン
水		22335g	1500	1050	2400	
ココア(ビュアココア)		1191.2g	80	56	128	①A子
カップケーキ						
卵	20ヶ	1401.4g	80	56	128	→蒸しパン
粉糖	1600g	1191.2g	80	56	128	
バニラエッセンス	少々	74.4g	05	04	08	④A子
小麦粉	1600g	1191.2g	80	56	128	B男
ベーキングパウダー	20g	14.9g	01	01	02	C助
バター	1600g	1191.2g	80	56	128	D美
りんご	8ヶ	0g	00	00	00	
砂糖	100g	0g	00	00	00	
ココア(ミルクココア)	330g	0g	00	00	00	
粉糖	800g	0g	00	00	00	

曜日	5～6ヶ月頃 (人数0人)		7～8ヶ月頃 (人数1人)		9～11ヶ月頃 (人数2人)		12～18ヶ月頃 (人数15人)		16普通		アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	A子(12～18 期×(つなぎ))	B男 生牛乳×乳製品×	
12月											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食
13日											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食
14日											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食
15日											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食
16日											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食
17日											アレルギー代替食
	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分	校食時間	時分			アレルギー代替食
	異常	有無	異常	有無	異常	有無	異常	有無			アレルギー代替食

別紙2：離乳食週間献立表

午前 おやつ

午後 おやつ

月	日	★◇9~11	12~18	A子	★◇9時	★◇9~11	12~18	A子	★◇9時
12月	月	CD				CD			
	火	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時
13日	水	CD				CD			
	木	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時
14日	金	CD				CD			
	土	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時
15日	日	CD				CD			
	月	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時
16日	火	CD				CD			
	水	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時
17日	木	CD				CD			
	金	★◇9~11 フルーツ ポンチ	12~18 パイプX	A子 菓パン	★◇9時	★◇9~11 カルビス ホイップX	12~18 A子	A子	★◇9時

別紙3：おやつ週間献立表

講評：「アレルギー代替食の対応について

～富士保育園アレルギー対応マニュアル作成を経て～

評者：藤澤 良知

園児のアレルギー疾患の増加要因の検討に始まり、従来、アレルギー児について除去と補食という形で行っていたが、「自分の食事はみんなと違う」といった違和感の解消目指してアレルギー食品は除去しながらも、代替食に重点を置いて、通常の給食と見た目や味も含めて、出来るだけ近づけるよう調理している。

誤食を防ぐためマニュアルを作成、アレルギー指示書は複数の調理員で確認、アレルギー児の名前、アレルギー食品等の一覧表を給食室に掲示、配食に当たりアレルギー児の名札の色を変えるなどの配膳ミスの防止に努めている。給食日報にはアレルギー児の代替食の記載、アレルギー食品は赤字で記載、前日には翌日のアレルギー代替食の内容の声出し確認、給食室のボードにアレルギー代替食の内容の記載などミスの防止に努めている。朝礼において代替食について声出し確認、通常の給食より先にアレルギー食を作る、誤食のないよう配食に細心の注意をしているなど、心配りがみられます。

評者：酒井 かず子

全国の保育園で悩みながら取り組んでいる食物アレルギーについて取り上げ、そのマニュアル作りを研究され、ここに報告をされたことに注目しました。

食物アレルギー児にとって「みんなと同じ給食が食べたい」「普通の給食が食べたい」という当たり前の願いをかなえるために、除去食ではなく、代替食に力を入れて取り組まれた。名札を付けたり、色分けしたり、出席表にチェックをしたり、置く場所を決めたり、調理員と保育士との細やかな連携をとったり等、細かくマニュアルに盛り込まれた。子どもの命を守るために。子どもが喜んで、楽しく食べるために。できる限りを尽くした様子が伺えました。一方で、保育園の規模や調理員の人数や栄養士の有無等が記載されてなく、実

施可能かどうかの判断ができませんでした。ご承知のように、食事療法は医療行為であり、医師の指示のもとに、慎重に進めていかなければならず、調理過程においても十分な注意が必要と考えます。しかし、関係者がここまで努力をされているので、アレルギー児は毎日楽しく食事をしていることと思います。そして、何よりヒヤリハットが減少しているとのこと。取り組みが功を奏したと思います。

是非、今後も研究を続けていってください。期待しています。

評者：日吉 輝幸

アレルギー児への対応については、多くの園で苦慮しながら取り組んでおられる課題であろう。アナフィラキシーショックは、死に至る場合もある重大な事態であるので、保育施設内では絶対に起こしてはならないことである。楽しいはずの食事が取り返しのつかないことにならないよう、調理担当者や保育者は万全の体制を敷かなければならない。

富士保育園のアレルギー対応についての取り組みは、大変細やかであり「緻密」と言えるほど細部まで徹底されており敬服させられる。それらは、過去の経験に基づく検証の上に積み重ねられてきたものであり、一朝一夕にはいかないものであることが、レポートの記述からうかがい知ることができる。しかしながら、詳細に記述されており分かりやすい部分もあるのだが、応募要領に沿った応募作であることを考慮し、適切なレポート量にまとめるよう吟味していただきたいものである。

アレルギー対応食については、富士保育園が提唱するように、単なる除去食から、見た目や栄養量の摂取に配慮した代替食が一般的になりつつある。しかし、あくまでもアレルギー児に対する特別食という意味合いでは、あまり差違が無いのではないかと筆者は思っている。今後は、すべての園児が同じ給食を食べられるように、アレルギー食材自体を全く使わない献立を試みる必要性も感じている。

這うことの大切さ ～はいはい遊びを通して運動機能を高めよう～

鹿児島県・建昌保育園 山崎 千尋

はじめに

建昌保育園は、鹿児島県中央部に位置し、南に錦江湾と雄大な桜島をのぞむ始良市にある。日豊本線の沿線にあり、鹿児島市のベットタウンとして位置し、人口は約7万5千人である。近くに高速道路も通っており現在、大型のショッピングセンターイオンタウンを建設中でそれに伴いスマートインターも設置される予定である。

建昌福祉会では平成23年度に職員の資質向上を目的とし、実践研究発表に取り組んでいる。以前の実践研究でダウン症についての研究を行った際、まず大切なのが、基礎的運動全身を使った粗大運動であることを学んだ。本園の1歳児クラスは2階にある。

0歳児は抱っこされて階段の上り下りをするが、歩けるようになった1歳児は自分たちで階段の上り下りをする。4月当初1階から2階へ移動また2階から1階への移動をするのに、子どもの膝程の高さの階段を毎日上り下りするのは子どもにとって大変な動作であった。また、発達途中の1歳児は身体のバランスが不安定で筋力も弱く保育士自身も危険性を感じていた。0歳児からいる子どもの中には、はいはいをせずに歩行へ移行した子どももいた。そこで「這う」ことについて考えた。

【研究目的と仮説】

粗大運動（全身運動）が発達し、成長につれて動きが多様化、姿勢・移動・操作に関わる細かな機能が分化していく。はいはいは、胴体・手・足をうまく協調させるために、決定的に重要な基礎的力を育むとされている。はいはいをしっかりして歩き出した子どもは、全身の筋力が育ち、腰が安定し転びにくい又は転んでも瞬時に手が出てケガをしにくい。筋力の弱さやはいはい不足は、はいはいをせずに歩行へと移行した子どもでも「はいはい」を運動遊びとして取り入れることで筋力の弱さが改善されるとある。そこで今年度1歳児27名を対象とし、「はいはいを取り入れた遊びを多く経験することで運動機能が高まるであろう」と仮説を立て、検証することが目的である。

【研究方法】

まず5月・6月は這うことの大切さについて調べた。

「はいはい」とは、子どもが両手両足を動かして自ら動く動作のことを言い、ずり這い・四つん這い（両手両足はいはい）、高這いの3種類がある。

「はいはい」は、子どもが成長する過程において、とても大切だと言われているが、これを経験せずに成長していく子どもたちも少なくはない。

「はいはい」をしない原因は…

- ・家に、「はいはい」をするスペースがない。
- ・大人が早く歩けることを喜んでしまう。
- ・床での生活が減り、伝い歩きしやすい家具が多い。
- ・核家族化や少子化、ライフスタイルの変化によって、子どもが集まる機会や乳児同士のコミュニケーションが減ったとある。

はいはいの重要性は…

はいはいは、する・しないという個性ではなく、発達の道筋として飛び越えてはならない重要な全身運動である。はいはい不足は、運動遊びとして取り入れ改善できる。

- ①虚弱な身体が丈夫になる。
(身体を丈夫にするためには、随意筋・不随意筋を育てる。随意筋は、這うなどの全身運動で育つ。)
- ②姿勢が良くなり、転ばなくなる。
(這うことで身体をバランスよく育てる。)
- ③よだれが止まる。
(口を閉じるための筋力は、這うことで育てられる。)
- ④呼吸器が丈夫になり、アレルギーが改善される。
(這うことで、全身の骨格筋を使い、そのことで血行が良くなり、代謝を高め、呼吸力が高まる。)
- ⑤夜泣きがなくなる。寝付き、目覚めが良くなる。
(這うことを生活に取り入れることにより運動量を確保でき、よく眠るという生活リズムが整う。)
- ⑥よく噛んで、飲み込める。偏食の改善。
(肩から首、顎、頬へと動きは連動している。這うことは、それらをよく育てる。顎の発育が良いと、歯並び、舌の動きが良く噛み込むことができる。)
- ⑦トイレでの排泄が出来るようになる。
(這うことで、膀胱の機能が育つ。)
- ⑧便秘が解消される。
(這うことで腹筋が鍛えられる。)
- ⑨衣服の着脱が出来るようになる。
(這う際に、両腕、両掌に力を入れて上体を支え、交互に出すので、負荷がかかり、握る力が育ち協応力も育つ。)

⑩こぼさずに食べる。

(食べる時に上唇と下唇とを合わせてスプーンを挟み込む、食材を口に残すという、唇の操作をする。また、スプーンなどをしっかり握る、手首をうまく返して食べる。など顎や手の動きが重要。這うことでこれらが育つ。)

上記、這うことの大切さを7月に保護者へ知らせた上、アンケート調査を実施した。

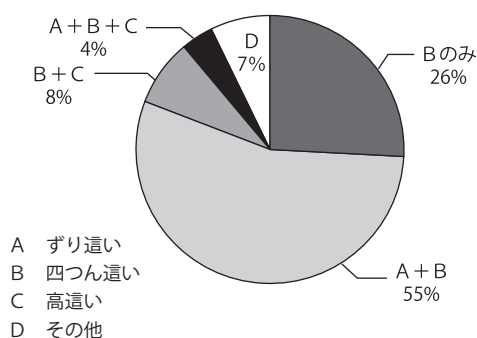
<アンケートの内容>

*あなたのお子様は、「はいはい」をしましたか？

はい……96% いいえ……4%

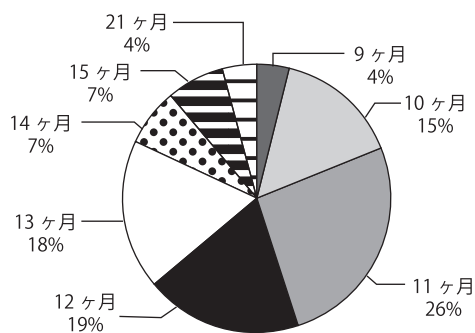
*はいはいの種類を教えてください。

はいはいの種類は？



*歩き始めは、いつでしたか？

歩き始めはいつごろ？



アンケート結果……

- ・はいはいをせずに歩き出した子が4%いた。
- ・歩き始めが生後9か月と早い時期に歩き始めた子もいた。
- ・はいはいをした期間は、短い子で3ヶ月間。一番長い子で10か月間だった。
- ・成長過程で気になることとして、よだれが多い・偏食・夜泣き、寝起きが悪い・便秘・よく転ぶ・身体が弱い・アレルギー体質・噛む力、飲み込む力が弱い・食事の際、食べ物をよくこぼす等があった。

6月・10月・12月の三期に分けて子どもの運動機能チェックを行った。

階段をはいはいで上る。②階段をはいはいで下りる。③階段を手すりを持って歩きで上る。④階段を手すりを持って歩きで下りる。この4パターンのタイムを計った。

8月～12月は運動遊びの実践を行った。

毎週月曜日に園で遊びを実践し、その都度遊びの様子、内容を廊下に写真や文章つきで掲示した。また、アンケートで遊びの実践を協力できると返答のあった家庭には、内容・目的・方法を記載した用紙を月初めに配布、実践した状況を記入し提出してもらった。

家庭での実践状況は、保護者の声としてまとめたものを掲示した。

8月はへそずり這いを取り入れた、魚釣り遊び・ワニさん遊びの運動遊びを行った。

方法として、魚釣り遊びは、子どもはうつ伏せになり、タオルの両端を両手で握る。大人がそのタオルの中央を引き、へそが床についている状態で床を足で蹴りながら、(難しい場合は滑りながら)前に進む。

ワニさん遊びは、床にうつ伏せになった状態のまま、へそをつけながらワニのように両手、両足を使って這う。この二つの遊びの目的は、タオルを握ることで、握力を育てる。力を入れたり・抜いたりすることで全身のバランスを整える。足の指で床を蹴って進むことで足の筋力を育てる。手と足を交互に使い進むことで手足の協応力を育てる。

手の力で支えることにより、口の筋力を育て、口を閉じる力を育てる等の目的がある。

<保護者の方からのご意見・ご感想>

- ・体に遊び、身近にあるタオルを使っただけの遊びはしやすいのでいいと思います。
- ・魚釣り遊びは回数を重ねていくうちに伸びていきました。
- ・ワニさん遊びでは姉より早く、進むことが出来ることもありました。
- ・とても楽しそうに笑っていて、外遊びができない日など、よい遊びとなりました。
- ・足も手も上手に使って、バックもできるようになりました。
- ・はじめは、タオルから手がはずれていましたが、回数を重ねる度に握力がついてきたように感じました。
- ・3歳になるまでの時期に保育園で運動をたくさん出来る環境があることが、親としては嬉しいですし、家でも出来ることは挑戦したいです。
- ・タオルを持って「ねんね」と言うと、ニヤニヤしながら近寄ってきて喜んでやるようになりました。

- なかなか一緒に遊ぶ機会って意外とないので、こういう風にさせていただいて、いいなと思っています。
- 何度か保育園で実践している遊びだからか、回数を重ねるごとに自分から「やる」と言い出し、楽しく笑顔で実施してくれました。
- タオルを手でしっかり握り、足を浮かせて引っ張られたりしています。全身のバランスが良くなっているのかな～？
- この運動の効果か、よく噛んで食べるようになった気がします。親子のコミュニケーションとしても楽しく実践できました。他にも子どものために出来る運動があれば是非やりたいです。
- 最初はタオルを握る力が弱くて、すぐ手が離れてしまいました。回数を重ねるうちに手でしっかりと握れるようになりました。
- 嫌がらず遊びに取り組んでくれました。保育園とは違うからか、脱線ばかりでしたが、今まで力の発達などあまり気にしていなかったため見直すいい機会となりました。

9月は、四つん這いを取り入れた運動遊びとして、リトミック、はいはい鬼ごっこ、はいはいでボールまてまての運動遊びを行った。

方法として、①リトミックは、曲に合わせて犬やくまの鳴き声しながら四つん這い、高這いで動き回る。曲は、「犬のおまわりさん」や「森のくまさん（1番のみ）」などを使用した。②はいはい鬼ごっこは、子どもは四つん這いで逃げ、大人が「待て待て」と、四つん這いで子どもを追いかける。③はいはいでボールまてまては、大人がボールを転がし、それを子どもと一緒に四つん這いで追いかける。

この三つの遊びの目的は、顔をしっかりと上げることで胸、首、腕が鍛えられる。さらに鳴き声をプラスすることで頬も鍛えられる。口を閉じる筋肉が強くなる。目で物を追うことで集中力がつく。顔を上げたまま進むので動きながらの注視力や平衡機能を高める。腕だけではなく腹筋や背筋など全身を動かすので自分の思いどおりに体を動かせる「身体操作性」を高めることができる。待て、待てと追いかけられ、ドキドキしたり興奮することで脳（前頭葉）が刺激され発達を促進する。追いかけることを喜び笑いながら這うことで、肺も鍛えられる等の目的がある。

<保護者の方からのご意見・ご感想>

- 親の方がバテバテで子どもは元気でした。
- 「もっかーい、もっかーい」（もう1回、もう1回）と言うので、しない訳にはいかず、疲れたが嬉しそうなお顔をみて親も楽しく追いかけてまわりました。
- 普段、家で「リトミック」に似た遊びを自発的に行

っています。

- 高這いの状態で犬や猫になりきって、ワンワン・ニャーニャーと鳴き声を出したり、誕生会でもらったコップをエサにみたてて食べるマネをしたりしています。
- 笑いながら追いかけてこしていると子どもも楽しそうです。

10月は、高這いを取り入れた、くまさんで階段の上り下り、クマポーズ、障害物越えの運動遊びを行った。

方法として、①くまさんで階段の上り下りは、ひざ、お尻をつけずに両手両足で階段の上り下りをする。②クマポーズは、子どもの両手を床につき正座をした大人のひざに足の裏をつけ、クマのポーズをとる。③障害物越えは、牛乳パックをつなげた物、毛布や布団をくるめた物をひざとお尻をつけずに、クマ歩きで越える。

この三つの遊びの目的は、腕の力を鍛えて、反射神経につなげる。両腕、両こぶしに力を入れて上体を支えて歩くことにより、肩、首、顎、頬が鍛えられる。手足の協応力が育つ。等の目的がある。

<保護者の方からのご意見・ご感想>

- 家の4階まである階段を1階～4階までくまさんでスタスタと登ることが出来るようになりました。
- クマポーズ（高這い）で最初の頃はどうしても手だけではなく、頭もついてしまっていたが徐々に手で支えられるようになりました。
- 言葉もだんだん分かるようになり、歌だけで何をするのか理解できる等成長を見ることができて嬉しいです。
- 興味を示さないこと（行動）にいかに関心を持たせうまく誘導するにはどうしたらよいか…考えさせられました。
- 大人も一緒にやると体が温まる程いい運動になりました。
- 公園のジャングルジムをひたすら越えて遊んだりするのが上手になったと思います。
- 体全体を使って遊べるのでとても良い運動遊びでした。
- 本人が自発的に高這いの姿勢をとっていたので驚きました。ありがとうございました。
- 自宅で階段を使ってやることはできなかったのですが、実家で自分でやっていたのを見られた事は嬉しかったです。
- クマ歩きは自らやっていました。その他はやる気なし…

11月は、10月でも実施したくまさんで階段の上り下り、障害物ごえを引き続き行った。理由として、高這いは子どもたちの発達が緩やかで難しくまだ上手く高這いので

きる子が少なかったため引き続き行うことにした。また、高這いを取り入れた、くまさんの風船運びを新しく運動遊びとして行った。風船にひもをくくりつけたものを、風船がおなかの下になるようにつけて行う。この遊びは、手のひらを使うので、手指の働きを強くするという目的がある。

<保護者の方からのご意見・ご感想>

- ・公園で遊具や、ちょっとした高さの所によじ登っていくことが増えました。これも腕の力を鍛えられたからなのかな？と思います。
- ・子どもも喜ぶし、体の運動にもなるし、できて喜ぶ顔を見ると親も嬉しくなりとても良い遊びでした。

12月は、子どもの好きな這い方で、橋渡り、トンネルくぐり、坂の上り下りを行った。方法として、①橋渡りは、牛乳パックの台を10センチ程あけて2つ平行に並べ、その上を子どもの好きな這い方で渡る。②トンネルくぐりは、トンネルの中を四つん這いでくぐる。

③坂の上り下りは、2台のテーブルの脚の片側を折りたたみ斜めにする。1台脚をたたんでないテーブルも用意する。

この3つのテーブルを並べ、子どもが好きな這い方で上り下りする。3つの遊びの目的として、つまさきを使うので、足先まで鍛えられる。

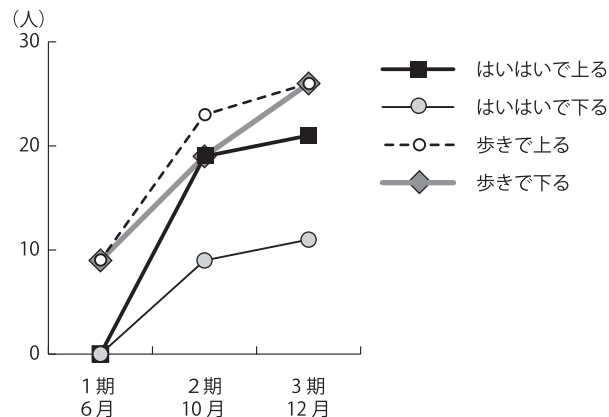
ぶつからないように前を向くので集中力がつく。次の行動の予測ができるようになる。トンネルをくぐると出られる、坂を上ったら次は下りる等の落ちないようにバランスをとることで平衡感覚が養われる等の目的がある。

牛乳パックをつなげたものを家庭でも遊びなどに使えるように、園で使用した空の牛乳パックを部屋の前に多く置き、作り方の見本も置くと、大勢の保護者が見本を見て牛乳パックを持ち帰っていた。

<保護者の方からのご意見・ご感想>

- ・平行棒のような細い板の上も上手に歩いていた。
 - ・平衡感覚が養われているのか？家でできるアスレチックみたいで楽しかった。
 - ・座った状態から立ち上がることがスムーズになり、足も速くなった気がする。
- 「クマ」のポーズをしてくれることも多い。

1月は、子どもの運動機能チェックの変化をグラフ化し、子どもの運動機能が向上したことを検証、結果を掲示した。



【結果と考察】

運動機能チェックの結果。はいはいで上る。下りる。歩きで上る。下りる。この4つの項目のタイムが1分以内だった人数をグラフで表している。

運動遊びを実施する前の6月には1分以内に、はいはいで階段を上る、下りるの動作が出来る子はほぼいなかったのに対し、12月には、1分以内に上ることが出来たのが21人になった。下りることが出来たのは、11人になった。

手すりを持って歩いて上り下りを1分以内に出来たのは、6月は約10人だったのに対し、12月は上り下り、共に26人になった。これは、約7カ月の実践期間中に、身体が発達成長したのも理由の一つとしてあげられるが、やはり、日常の保育で言う動きを取り入れた遊びを多く経験できたことが運動機能の向上に影響したのだと思う。しかし、この4つの項目の中で「はいはいで下りる」の項目だけがあまりタイムが伸びなかった。理由として、階段を後ろ向きで下りていくので、恐怖もあるがまだ一歳児では、後ろの確認、次の動作のイメージができないということがあげられる。また、家庭にも運動遊びの情報を提供し、関心を持ってもらえたこと、協力できる家庭には運動遊びを実施してもらえたことで、子どもと保護者に働きかけることができ、相乗効果がみられたのではないかと感じた。

【まとめ、課題】

今回の実践は、子どもの発達の過程を洞察し、育ちの見通しを持つこと。多様な動きの種類を知り、遊びを通じてどのような動きからどういった力が子どもに育まれるかについての知識を持つこと。これをもとに環境と援助を考え取り組んできた。しかし、運動遊びを行う中で子どもたちの発達を見ながら毎月の遊びの計画を立てたが、しっかりと子どもたちの発達を理解することができておらず、子どもたちにとって遊びが難しく遊びを取り組む期間がながくなってしまってもあった。今後、子どもの発達をもっと理解しながら実践研究を行っていきたいと思う。また今回は、家庭との連携も重視し、家庭にも関心を持ってもらうため、園での遊びを計画する際

には、家庭にあるものでも代用できるようにと使う用具も工夫して考えたり、情報提供をこまめに行い、可能な家庭には協力をもらった。

はいはいが大切だと知らなかった保護者が41%だったのが、取り組みのまとめのアンケートでは、100%の方に大切さがわかったと返答をもらえた。また、「身体が丈夫になった」「転びにくくなった」「よだれが減った」「噛む力・飲み込む力が強くなった」「寝付き・寝起きがよくなった」「便秘が改善された」「腕の力・足腰が強くなった」「大人も楽しみながら遊べた」「はいはいが子どもの成長発達に欠かせない全身運動だと分かった」「園でやっていることが家でできるのは、親子にとって楽しい」「口の中で、ぐじゅぐじゅペーが出来るようになった」「手で握る力が強くなった」「体を動かして遊ぶことが上手になった」などの返答があり良い取り組みだったと感じることが出来た。私たちが考えている以上に家庭と協力して取り組むことができ、「家庭との連携」についても大きな意義があったと感じている。

家庭で5カ月間運動遊びを行った保護者からの感想

- ・友だちの子どもと会う機会がありますが、我が子より大きな子が登れない棚の上などにも、平気で上り下りするなど、足、腰の力もすごく強くなったと感じます。
- ・すべり台が好きなので自分で階段の上り下りをするのですが、自分で判断して、段差の大きい階段では、クマさん、段差が低ければ歩いて、、、とそれなりに使い分けているように思います。何より「自分で登る」という意欲がすごく増加した気がします。
- ・ハイハイの運動遊びを家で行い、子どものマネをすると自分自身も使わない筋力を使えたりしてとても楽しく取り組めた。
- ・子どものハイハイをする動作を取り組んだ遊びを今後も続けていきたいと思います。
- ・5か月間孫と一緒に家庭で運動遊びを体験して取り組んできましたが、改めて「はいはい」が子どもの発達・成長に欠かせない全身運動であることを実感しました。これらの遊びに取り組んで下さった園、さくら組の先生方のご指導、努力に感謝します。
- ・運動遊びというか、保育園でやっていることを子どもが詳しく教えてくれないのでそれを家でできるのは、親も子どもも楽しく家で遊べました。
- ・運動遊びを取り組んでから変化は大きくなかったのですが、あてはまるものが1つですね。
- ・気づかなかった面で少しでも変化ができたのであれば嬉しいです。
- ・口の中で「ぐちゅぐちゅぺっ」をすることができるようになり、うがいが一人でできるようになりました。

- ・体を動かして遊ぶことが上手になった。
- ・手足が丈夫になった。
- ・ジャングルジムに登ろうとしたり、棒にぶら下がったりと握る力が強くなった。

1年間はいはい運動を取り入れ、全身運動を行ったことで全体的に成長がみられた。

今年度は、2・3歳児の成長・発達を考慮すると、体の外側（腕、足、手、指）への発達が促せる様にと「全身運動から微細運動につながる活動」をテーマで実践を行っている。これからははいはいを取り入れた運動遊びを行い、運動機能を高めていきたい。また、保護者とも協力しながら保育に取り組んでいきたいと思う。

参考文献

- ・「ほう運動あそび」で育つ子どもたち 今井寿美枝
- ・保育の友（2013年12月号）の一説「北野幸子」
- ・保育の中の運動遊び 石井美晴・菊池秀範 編
- ・あそびと環境 0・1・2歳 Gakken
- ・カラキュレ 妊娠・出産・子育て 脳が発達する？はいはいさせよう
- ・ママを楽しめ！妊娠・出産・子育て
- ・四つん這いは大切 福井自然体健康塾

講評：「這うことの大切さ～はいはい遊びを通して運動機能を高めよう～」

評者：井桁 容子

現代社会において子どもの身体能力の低下が否めないことから「へそずり這い」「ワニさん遊び」など大変オリジナリティーのある報告であり、面白い。園だけの取り組みに終わらず、保護者への意識改革にもつなげていった実践であり、具体的に体を動かす重要さを保護者も実感できていることが評価できる実践と言える。しかし、はいはいの重要性の意味付けに、“アレルギーの改善”“偏食の改善”“夜泣きがなくなる”“トイレでの排泄ができるようになる”などの科学的な根拠は不十分であり、また、アンケートの対象、人数などデータが足りていないことが残念である。また、1歳児の保育の中で「鍛える」という関わりを意識されていることに、発達の正しい理解が不十分である一抹の不安が否めない。個人差のある時期であり、心身の成長が著しい時期には、一人ひとりの興味や特性を十分に配慮された環境であることが重要であることを保障することが、最善の利益の保障につながるものであり、目に見える“できる”“できない”に目を奪われた保育にならないことを望みたい。

評者：日吉 輝幸

ヒトが生命を授かり、出生後から2足歩行へ至る成長段階で「はう」という行動が如何に大切なものであるか。近年、「はいはい」をせずに歩行を始める子どもが増えていると聞くと、「はう」という行動は、全身運動であるため脳機能や内蔵機能を高めたり、腕の支持力を始めとした、後の運動機能を高めたりする効能があるという説があるほど、とても大切な行動であると言えよう。

建昌保育園では、日頃の1歳児の身体バランス

が不安定なところに注目し、これまでの成育歴を検証するとともに、はいはいを取り入れた遊びによって運動機能が高まるような取り組みを行っている。なお、この取り組みは保育所だけではなく、保護者の賛同を得ながら家庭においても取り組めるように工夫し、多くの家庭で楽しみながら運動遊びに取り組んでいる様子が見て取れた。レポートにも記述があるが、「家庭との連携」が功を奏している好事例だと思えた。

子どもの健やかな成長を願い、保護者と保育者が共に協力し合うことは簡単なことではないが、「運動遊び」という接点を上手く活用して、今後も幅広い年齢で保護者との協力体制をとっていかれることを願っている。

評者：酒井 かず子

ダウン症の研究をした際に、基礎的運動、全身を使った粗大運動が大切であることを学び、そこから「這う」ことについて考え、研究するようになった経緯に興味を持ちました。

まず、はいはいの大切さを理論的に勉強され、その理論をしっかり押さえたうえで方法を研究されたため、軸がぶれずに進められたと思います。随意筋や不随意筋を育てることにより身体が丈夫になり、10項目もの内容で向上があることを確認された。また、段階を経て計画的に進めていき、多くのはいはい運動を考案し、平素の保育の中であらゆる場面で取り入れ、楽しくできるように工夫されたのは素晴らしいと思いました。加えて、保護者にも説明し、理解を得て、親子で楽しめるようなはいはい遊びを伝え、結果、子どもの基礎的運動能力の向上と親子のスキンシップや関わりが増えたのではないかと思います。

体づくりと心を育む食育活動 ～食育活動から見えてきた子ども達の育ち～

沖縄県・愛心保育園 仲宗根 綾乃

1. はじめに

食育活動を通して『体づくりと心を育む』をテーマに掲げ『食べることは楽しいこと』と位置づけてそのスローガンをもとに職員みんなで話し合いをもちながら、食の営みは人間が生きていく上で最も大切に欠かすことのできない営みであることを申し合わせ取り組むことにした。

2. 園の概要

設置主体 : 社会福祉法人 玉重福祉会
 保育園名 : 愛心保育園
 開園 : 昭和58年 4月
 所在地 : 沖縄県那覇市上間384-15
 園児数 : 定員80名 現員96名

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	園児数
定員	10名	15名	15名	15名	15名	10名	80名
現員	12名	16名	18名	18名	18名	14名	96名

職員構成 園長、副園長、事務長、主任、副主任、保育士17名（フリー、パート保育士含む）調理員3名、学童指導員4名

調理員と全クラスの職員みんなで各クラスの喫食状況を把握しながら、子どもによっては調理法なども考慮できるように味付け、刻み方、アレルギーの除去食など意見交換をしながら連携を図っている。

3. ねらい

- ・食育活動を通して食材の種類やその名前を知り、食への関心を高めるとともに作る喜び、食する喜びを育む。
- ・保護者と二人三脚で『食育活動』に取り組むことで家族の絆をより一層深めあうと同時に、心と体の健康バランスを整える。

4. 実践方法

- ①当保育園では給食に使われる食材を紹介しながら三大栄養素をパネルにして『赤→血や肉、骨となる』『黄→熱や力となる』『緑→体の調子を整える』など、色彩豊かな色合いを楽しみながら給食時に子ども達と一緒に食材を振り分けていくことで興味や関心がもてるように取り組んでいる。
- ②2回行っているバイキング形式の食事を通して自分で取り分けることによってその楽しさを味わいながら自分の食べる量を加減できるように取り組みをしている。
- ③4歳児、5歳児で体験しているクッキング活動を通して親子ですぐに取り組めるように身近な食材を子ども達自ら調理する楽しさを味わうよう取り組んでいる。
③に興味・関心がもてるように月1回もりもり会（食育活動）と銘打って、四季折々の食材を使用し、全クラスの子供達と全職員で小さな料理教室を開催し、みんなで作り食する楽しさを体験させている。
- ④食育に関するアンケートの集計、その分析と考察。
- ⑤月に1回給食会議を行い、当園の管理栄養士を中心に

5. 実践

- 実践①『三大栄養素のパネル』を使い、子ども達と一緒に食材を振り分けていくことで興味・関心がもてるように取り組んでいる
- ・毎日、取り組むことで三大栄養素に興味・関心をもつようになった。
 - ・色分けを見て食材が偏っていることに気付く子ども達の様子を見ることで成長を感じる。
 - ・保護者からの連絡帳など、ご家庭で三大栄養素の話や種類など教えてくれるようになり我が子の成長に喜びもひとしおのこと。
 - ・食材が分からない時は子ども達自ら調理員に確認をするなど、意欲的にやりとりを楽しんでいる



(お当番さんの食材紹介の様子)



(三大栄養素のパネル)

実践②バイキング形式の食事を通して自分で取り分ける楽しさが味わえるような取り組みをしている

- ・取り分ける時お皿をしっかりと持ち、こぼさずに取り分けることがスムーズにできるようになった。

- ・食欲旺盛の子は量を多く取り分け、また苦手なメニューになると少なめの量を取り分ける子どもの姿も見られたが、回を重ねるごとに苦手な物でもしっかり食べられるようになってきた。
- ・バイキングの日はいつもより早い時間に完食する子どもが多いことから食に対して意欲的に楽しみながら食べていることがよくわかる。
- ・食事をすることが何より楽しみ様子で食欲旺盛になり、全体的に競い合うかのように食の遅い子や少食の子もおかわりをする姿がみられる。

バイキング

- ・月に2回バイキングの日を設け、5～6種類のメニューを自分たちでお皿、小鉢に取り分けている。バイキングの日は子ども達も嬉しいようで食欲が湧き思わず多く取り分けて量が多くなる場合もあるが、自分達で入れた分はしっかりと完食している。運動会練習など体を動かすことが多くなる月のバイキングは、子ども達もお腹が空くようで全員いつもの月より食べる量が増えるので調理員との連携を図りながら、量を増やすようにしている。

(バイキングの際お皿にこぼさないよう真剣に盛り付けている様子)



実践③クッキング活動を通して身近な食材を自ら調理する楽しさを味わう

- ・エプロンや三角巾を準備するとき、友だちのエプロン着用を手伝ってくれるなど思いやりの心を自然に表現する姿がよくみられる。
- ・おにぎり作りの時には嬉しい気持ちが先走り食の細い子も大きめなおにぎり作りに挑戦しながら楽しみにしている様子がよく見られる。
- ・クッキングの後は自分で作ったおやつが格別においしく感じられるのか完食する時間がいつもより早い。

クッキング

- ・毎月のおやつの中から子ども達と一緒に作ることができる季節のメニューを選び、クッキング活動を行っている。

これまで、野菜スムージー、おにぎり作り、ホットケーキ作り、ジャムサンド作り、いなり寿司作り、団子作り、フルーチェ作り、クッキー作りなどを行ってきた。作る工程を知り、自分で作った喜びを感じながら美味しく頂くことができた。ご家庭でも、保護者と保育園で作ったクッキングのことを思い出しながらいろいろと会話を楽しみ『一緒に作っておいしく食しています』という嬉しい言葉が寄せられ心が和む。

- ・いなり寿司作りでは、日頃、ご家庭の方でいなり寿司作りを経験したことがない子どもがほとんどで驚きと同時に自分で作れたことの喜びが大きかったようで『おいしいね』とみんなの笑顔が一段と輝いていた。

(慣れない手つきながら頑張っているクッキングの様子)



実践④食に興味・関心がもてるように月1回もりもり会(食育活動)と銘打って行う

- ・もりもり会が毎月楽しみ様子で、ご家庭においてもその日に学んだことを家族にいろいろ話してくれるなど保護者の皆さんが喜んでくれており、休みの日は親子クッキングも楽しんでいるとのこと。

(年長児の野菜スムージー作りに取り組む姿を全園児で見守っている様子)



実践⑤各クラスの取り組み

0歳児（苺組）

- ・入園時に、離乳食カードで食事形態や食材を使ってチェックし、調理員に報告。
- ・離乳食カードは月一回、または2カ月に一度のペースで離乳食カードを持ち返し、チェックを行う。
（食材が増え、形態に変更があった場合には、その都度、園に報告してもらい様子を聞く）
- ・家庭での食事状況や具材の大きさを聞き、毎月一度行われている弁当会には、調理員がご家庭での食材の大きさなどを各クラスの子ども達の弁当を見て回りながら参考にしている。また、子ども達一人ひとりの弁当を見た後、調理員と話し合いをもち保護者と二人三脚で離乳食への移行をしていく。
- ・離乳食を始めた頃から、コップでの水分補給や茶碗からスープ飲みができるようにしていく。
<様子>
 - *はじめは、口の横からこぼしたり、コップを見ると顔をそむけたりする姿が見られる。
 - *水は嫌がるが、スープは飲みほすなど味付けされた物を好む姿が見られる。
- ・離乳食に慣れてくると、自分で食べたい、スプーンを持ちたいという意欲が出てくるので、スプーンを持たせて、手づかみでの感触や食べる喜びを味わせていく。そのような体験を通して、食に対する意欲を育み、離乳食も後期から完了食へと進む頃には保育士に促されながら手を合わせて食事前の感謝のごあいさつなどできるようになり笑顔に包まれる。また、自らスプーンを持ち、食材をすくってみたり、上手にすくえず、もう一方の手で手づかみをしたり、上手にすくえたかと思うと口へ運ぶ前にこぼしてしまう姿が見られるが、上手に口へ運べると、得意げな表情を見せてにっこりするなど「おいしい、おいしい」と顔を左右に振って『できた』という喜びを表現する姿がとても可愛らしく感じられる。

1歳児（桜組）

- ・食事の配膳をしている間も座って待つことが難しく、椅子から立ち上がったたり、すぐに食べようとする姿が見られたが、好きな童謡をうたったり声かけをしていくうちに待つことができるようになっていく。
- ・食前の感謝のごあいさつでは、手を合わせることをできない子もいたが、感謝のご挨拶まで言えるようになってきた。
- ・スプーンですくって食べることが難しく、こぼしが多かったり手づかみで食べることが多かったが、その都度、声をかけたり意識をもたせていく中で、少しずつこぼさずに食べられるようになり、スプーンを使って上手に食べられるようになってきている。
- ・苦手な野菜や肉などになると、口に入れなかったり、

テーブルの下に落としたりする子もいたが、保育士や友だちが『おいしいね』と笑顔で食べている姿を見せたり、励ましたりすることで少しずつ食べられるようになった。また、ごはんと一緒に口に入れることにより、苦手な野菜や肉の繊維が残らず食べやすくなることで、飲み込むことができるようになった。

- ・毎月のお弁当会を通して「家では食べてくれないメニューを入れても、食べられるようになった」「家では量は少なめだが、保育園ではたくさん食べているので安心している」など子どもの喫食状況を伝えながら家庭との連携を密に図っている。

2歳児（菊組）

- ・食べる意欲を持たせる為に、給食時に保育士が、食材紹介やメニューの紹介を行う。はじめは、保育士が紹介しても子ども達の方から声は出てこなかったが、日々の積み重ねにより興味が出てきたのか子ども達も食材の名前を喜んで言ってくれたり、以前より大きな声が出てくるようになってきた。魚にも種類があり、名前があったことが新鮮だったようで、魚の紹介の時には「これは何の魚？」と質問して聞いてくる子も増えてきた。
- ・食事を頂きながら、友だちや保育士との会話の中で、「これは、じゃがいもだね」「お魚さんにも名前あるよね」等、楽しみながら食材に興味のある会話も多く見られるようになってきている。また、食事中は正しい姿勢で食事を頂くことや、スプーンを正しく持って食べる等の基本的なマナーを身につけていけるよう、園と家庭との連携を図っている。
- ・スプーンを握るとき上握り→下握り→鉛筆握りの段階を踏まえ、園とご家庭とで連携して、下握りで持てるような声かけをその都度行ったことで、下握りで持つ食べる習慣が身につけてきている。子ども達同士でも「スプーンは下から持つんだよね」と、会話の中から意識している様子が見られるようになってきた。
- ・ご家庭でも、食事中に子どもの方から食材の名前を言うようになり、スプーンを正しく持って、自ら食べる意欲も見られるようになったと、連絡帳などで保護者から伝えてくれるようになり、ご家庭と保育園との連携を図る事で食に対する意識も高まってきたことを嬉しく思う。

3歳児（梅組）

- ・クラスでネギを植え、成長を楽しみながら大きくなったネギを収穫し、給食のおみそ汁に入れてもらい自分たちで育てた食材のおいしさに舌鼓を打ち喜ぶ子ども達の姿に感激した。
- ・お当番活動に喜んで参加する。毎日お当番さんはエプロンを着用し保育士と一緒に食事の配膳のお手伝いを進んで楽しみながらやってくれている。

- ・給食の時間は食材やメニュー紹介の後、配膳された食事を見ながら使用されている食材の名前を言ったり、食材を三大栄養素の表にあてはめ、仕分けをすることを喜んでいる。おかげで、食材に興味を持ち、赤、緑、黄の仲間などについてもよく理解しながら楽しむ姿が見られるようになってきたことが嬉しい。
- ・食の細かい子に対して少し量を減らし、まずはみんなと一緒に完食できるように様子を見てきたところ、かなり早く食べ終わる日も増えてきて「先生、もう食べたよ～」と自信に満ちた笑顔で喜んで話してくれる姿も見られるようになってきた。
- ・スプーンの持ち方についても、互いに子ども達同士で「〇〇さん、その持ち方は赤ちゃんの持ち方だよ～」と注意をしあい教えあう姿もみられ頼もしさを感じる。
- ・食事を食べる席は自由にしているので、「今日は〇〇さんと食べよう！」と仲良く椅子を並べ「〇〇さんが一緒に食べないと言っているよ！」とトラブルになることも時々あるが、別のお友だちの誘いに気をとり直し、楽しい食事時間となっている。
- ・最近では、お友だち同士のおしゃべりが多く目立っているので、「おしゃべりは後にして食べ物をよく噛んで食べましょうね！」と注意される子どももいる。
- ・11月からは、給食でお箸を使うことにし、毎月のお弁当会でもお箸を持って来てもらうよう協力してもらっていることで、ご家庭で十分にお箸の持ち方、使い方を練習していることからお箸の持ち方も上手になってきている。

4歳（百合組）、5歳（桃組）

- ・1人分の食事がセッティングされているトレーを、調理室の入り口に設置されているワゴンから沖縄の方言で「クワッチーサピラ（いただきます）」と調理員に感謝の言葉をかけ受け取る。その後、各自の部屋の入り口で当番さんからみそ汁を配膳してもらい各自テーブルにつく。食材紹介では、献立に使用されている生野菜やその他の食材を当番さんが説明して、一つひとつ見せながら三大栄養素、「困血や肉、骨となる」**圃**熱や力となる」「**圃**体の調子を整える」などの食材をグループ分けをしながら全園児で上手に答えていく。壁には三大栄養素のボードがあり、**圃**、**圃**、**圃**の項目に食材を貼っていく。三大栄養素のボードを通して、献立で使われている食材の三つの働きがひと目でわかる。食材の中で、トウフ、カマボコ、ツナ缶、チクワ、コンニャク、春雨、くずきり、かんぴょう、麺類などは栄養素分けに戸惑うことが多く、その都度もとの素材は何で出来ているかを一緒に考えている。栄養素や食材紹介、ボードなどを一通り行うことで子ども達も食に関心を持ち、食事中に子ども達の会話からも『これを食べると血や肉になるんだよね。熱や力になるんだよね。それからこの食べ物は体の調子を整えるよ』と

いう声が聞かれるなど楽しみながら食事をしている様子を見ると、頼もしさを感じながら食を通して学びがしっかり根付いてきたことを心強く思う（毎日完食、残量なし）

実践⑥アレルギー対応の子どもについて

- ・現在アレルギーの子どもは次の通り4名いる（1歳児2名・2歳児1名・4歳児1名）
- ・アレルギーのため、除去食対応をしている子どもの食事は専用のトレーに1人ずつ写真を付けて準備し、担任が調理員から直接受け取って配膳を行う。
- ・すべてにラップが施され、食べる直前に間違えることがないようにラップをはずして頂く。
- ・食事をする際は必ず担任が側について見守り『アレルギー食対応児・確認表』へ問題がなかったかどうかサインを行う。

6. 実践報告・結果

- ・日々の保育の中で繰り返し食材紹介を行うことで自然と食材の名前を覚え、興味もてるようになってきている。また、三大栄養素についても子ども達でクイズにするなど工夫し取り組むことで楽しみながら覚えることができた。
- ・バイキングを通して自分の食べられる量を考えるようになってきている子もいる。また、盛り付けを楽しみながら自然と食欲も増してくるようで、日頃少食の子もおかわりをする姿が見られる。
- ・アンケートを通してご家庭での食事に対する状況を把握し、理解を深めることで今後の食育活動の参考に活かせる道筋が見つかったことは良かった。
- ・離乳食を進めるにあたり子ども達の咀嚼の状況、日頃食べている食材の大きさや柔らかさを弁当会に調理員へ確認してもらう事で、無理なくスムーズに進めていく事ができている。
- ・もりもり会やクッキング活動を通してご家庭でも料理を手伝うようになったなどの声が多く寄せられ料理への関心・手伝う行動へとつながっていることがたいへん嬉しく、食を通して深い親子の絆が結ばれていることを強く感じる事ができて、この度の食育活動を通しての実践研究の成果に全職員、喜びを感じている。

7. 考察

- ・いろいろな食材紹介を通して料理される前の野菜の形にも興味をもつようになってきている。
- ・野菜の名前を覚えて楽しんでいる。
- ・牛肉と豚肉の区別がつくようになってきている。
- ・三大栄養素に興味をもち全園児が理解して覚えるようになってきている。

8. まとめ・今後の課題

- ・改めて食の大切さを意識して取り組むことにより、食事の際のマナーやしつけについてなど、低年齢児の0歳児から5歳児までの全園児をしっかりと再確認することができて良かった。
- ・これまでは三大栄養素のパネルを3歳児から使用していたが、日頃から遊びの中でも取り組めるよう今後0歳児、1歳児、2歳児クラス用のパネルも作成していく必要性に気づかされた。
- ・保護者アンケートやお誕生会後の試食会を通して保育園のみではなく、ご家庭との連携がいかに大切であるのかを分かったことで、今後さらに多くの保護者の方に参加してもらえるようアンケート内容や試食会についても工夫を凝らし、充実した内容を盛り込みながら今後取り組んでいきたい。

講評：「体づくりと心を育む食育活動～食育活動から見えてきた子ども達の育ち～」

評者：藤澤 良知

日頃から食育活動について熱心な取り組みでご苦労様です。

食育を通じて体と心を育てるといった視点に立って、給食の食材を通じて三大栄養素のバランスのとれた食事のあり方を学ぶ、月2回のバイキング給食を通じて、自分に合った食べる量に応じた取り分け、4～5歳児ではクッキング体験を通じた楽しさ体験をするなど、いろいろな体験の中から、食の大切さを身に着ける活動をされています。

また、応募にあたって保護者に対する食育アンケートを実施され、保護者とともに食育の輪を広げる取り組みは素晴らしいと思います。調査の結果朝食をとらない子が数%、手づくりが減ってファーストフードや調理済み食材の使用があまりにも多いのをどう感じますか。子どもの時から、しつかり手づくり体験をとおして健全な食習慣が身につくよう、事業の発展を祈念します。

評者：岡田 澄子

どこの保育園でも取り組んでいる「食育」ですが、バイキング形式の食事、クッキング、もりもり会など数多くの取り組みをしているところを評価したいと思います。

自分たちで栽培したり、料理したりすると苦手な食材も気にせず食べる。特に、「保育園でみんなと食べるとおいしい」と子どもたちは言います。正に「食べることは楽しいこと」なのでしょう。この報告書からも、子どもたちが楽しそうにクッキングしたりお当番活動をしている様子が分かります。

この食育活動から体づくりが見えてこないことや、保護者へのアンケートをその後の活動に役立てていったかが見えてこなかったのが残念です。アン

ケートは100%回収されたのかも気になるところです。もっと掘り下げて報告していただきたかったと思いました。

今後も心豊かな子どもたちを育む取り組みをされることを期待しています。

評者：日吉 輝幸

まずは、愛心保育園、第2愛心保育園ともに、毎年テーマを変えて本研究・報告に応募いただいていることに敬意を表したい。日頃、このように確固としたテーマを持って保育実践をされているということ自体、大変評価すべき点であると思うものである。

今回の愛心保育園の食育の取り組みであるが、レポートの冒頭に記述されているとおり、「食べることは楽しいこと」ということが食育の基本であることは言うまでも無い。それに加えて、食の営みは人間が生きていくうえで、もっとも大切で欠かせないものであるということ、職員間でしっかりと確認し申し合わせたうえで取り組んでいることは大切なところである。その取り組みたるや、本当に数多くの実践例が記述されているとともに、子どもの年齢に応じた取り組みを系統立て実践されてことにも感心させられた。あえて欲を言えば、多くの取り組みを行った結果について、レポート後段の考察の部分をもっと具体的に記述していただき、更に実践を深めていっていただきたいと感じた。

今後も様々な取り組みを実践され、他の模範となるべくご活躍されることを期待している。

(4) 奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・課題研究②遊びと学び

「0から始まるド・レ・ミ♪」

林 大介（大阪府・認定こども園友渚児童センター）

- ・課題研究③子どもの健康・安全

「保育施設におけるリスクマネジメント

～ヒヤリハットを迅速に共有する～」

熊谷 あすか（東京都・つくしんぼ保育園）

〈実践報告部門〉

- ・「異年齢交流から見えてくるもの～3歳未満児と3歳以上児～」

庵 幸世（富山県・公益財団法人鉄道弘済会富山保育所）

- ・「社会福祉法人都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」

頭師 綾子・岡本 幸子・志水 友美・川並 茉奈果・潮崎 早織

（大阪府・社会福祉法人都島友の会都島乳児保育センター・
都島第二乳児保育センター）

- ・「地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを！」

大神 敬一（福岡市・多々良保育園）

- ・「水・砂・土と触れ合いの中で見えてくる子どもの思い、私たちの思い～
エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～」

中島 陽子・福田 久美子

（北九州市（研究会員）・公益財団法人鉄道弘済会門司保育所）

課題研究② 遊びと学び ゼロ 0から始まるド・レ・ミ♪

大阪府・認定こども園友渕児童センター 林 大介

1. はじめに

性別や世代を越え、国境を越えて存在する音楽。いつの時代でも奏で合い、歌われ、愛され続けてきた音楽は人類の文化とさえ言える。

日本では義務教育に音楽という科目があり、歌や音符を習い、鍵盤ハーモニカやリコーダーなど、様々な楽器も練習をする。さらに大概の幼稚園、保育園でも音楽活動が取り入れられ、幼い頃から音を楽しんでいる。

私たち認定こども園 友渕児童センターでは運動会にはマーチングやパーラック。発表会では合奏や歌はもちろん、和太鼓や5歳児では珍しいカスタネット奏、琉球舞踊で使われる四つ竹という楽器を持ち、演舞を披露する。それらを見て保護者の方々は我が子の成長した姿に大きな拍手を送り、子どもたちも達成感を感じている。

3年前、私たちは法人内での音楽活動の研究発表をする機会があり、幼児の音楽活動において、あそびを通したリズムあそびなどの取り組みや指導方法を実践形式で発表した。そうした経験がきっかけとなり、今まで行ってきた活動を職員間で話し合い、見つめ直す良い機会となったが、今回はさらに掘り下げて、私たちの普段の保育・教育活動を振り返り、“子どもたちにとって音楽とはなにか”“どのように音楽が取り入れられ、それが子どもたちにどのような影響を与えているか”について研究、実践、考察をしていきたい。

2. 乳児期の音との関わり

幼児教育・保育という枠組みの中で音楽という言葉を知ると、5歳児など、主に幼児に対するイメージが先行するが、年齢を遡ると乳児期、さらには母親のお腹の中にいる胎児の頃から“音”と出会っていると私たちは考える。それは母親の心音や鼓動である。その為、生まれてからも母親の左胸に耳をあてて心音を聴くことで安心感を抱き、眠りにつく赤ちゃんも多い。小さな物音にも敏感で、今度は驚いた様子で眠りから目を覚ます。このように乳児期の頃から、子どもたちは様々な音を聴くだけでなく、感情も動かしているのではないだろうか。ここでは、乳児期の子どもたちにとっての音楽を幅広い視点で考察してみる。

乳児期の子どもたちは成長していくにつれ、母親だけでなく様々な大人と出会う。保育者もその中の一人である。赤ちゃんは大人とスキンシップをとってふれあいながら、様々な音やリズムを知っていく。そして、繰り返

し行うことで、聴き慣れた音やリズムが心地よく感じられるようになり、母親以外の大人の声を聞き分けて記憶することを繰り返しながら、音を聞き分ける力が自然と身につく、音の識別能力を獲得していく。

私たちは、保育者の語りかけや歌いかけが如何に重要で必要であるかを深く認識しながら保育を行っている。

【楽器を鳴らすだけが音楽ではない】

0歳児クラスを覗いてみると、どこからともなく職員の良い子守唄が聞こえてきた。その横では、仰向けに寝る赤ちゃんの胸を静かにさすったり、一定のリズムで優しく手の平でトントンする保育者や、抱っこしながらゆっくりとしたリズムで体を揺らしている保育者がいる。聞き慣れた声の子守唄や胸に優しく伝わるわずかな振動が赤ちゃんの気持ちを落ち着かせ、安心した気持ちで入眠している姿が見られた。このような関わりを繰り返すことで、入園して間もない赤ちゃんとの信頼関係を少しずつ深めていくことになる。そして、信頼関係が深まるにつれ、赤ちゃんにとって保育者は一緒に過ごすことが心地よい存在になっていく。



授乳中にミルクを飲む赤ちゃんを見つめ、目を合わせながら保育者が優しく話しかけると、その言葉に答えるかのように、赤ちゃんが時折声を発している。すると、保育者も自然と赤ちゃんと同じように真似て声を発し、会話をするかのように話し掛ける。赤ちゃんは保育者の反応を見て、さらに声を発することを繰り返し、やりとりを楽しみながらコミュニケーションをとろうとする。赤ちゃんはお腹が満たされるだけでなく、心地よい聞き慣れた保育者の声と温もりを感じることで心も満た

され、より安心感を得ることになる。



保育者との信頼関係が深まると、子どもたちの方からコミュニケーションをとろうとするようになってくる。保育者と目が合うとニコリと微笑み、まるで保育者に呼びかけているかのように「あー」と声を出してアピールする。やがて、ハイハイやつかまり立ちができるようになり、活動範囲が広がってくると、保育者の膝の上を目指してハイハイで移動し、抱っこを求めている。保育者の声の調子に合わせて音や声の強弱も真似るようになり、話し掛けるかのように喃語を発する。保育者は、抱っこで向かい合うことで、歌いながらスキンシップをとったり、声に変化をつけながら喃語に答えたりし、言葉の獲得に繋げていくと共に、様々な音（声）を聴かせることで、音楽的な経験も積んでいけるようにしている。



【楽しい雰囲気作り】

活動範囲が広がってくると、自ら玩具を触りに行こうと探索行動が始まる。そして、触った物は何でも口に入れてなめたり噛んだりしようとする。物の形や軟らかさを確かめているようだ。その時、たまたま触った玩具から音が出ると不思議そうにし、どうして音が出たのか、もう一度振ったり叩いたりしながらいろいろな動きを試し、音を出してみようとする。そして、音が出る動きを発見すると、より興味を持って何度も繰り返して音の出し方を学習している。このように、自分自身で音を発見する経験を通して、音に対する集中力や識別力を養っていくことになる。

また、この頃には手あそびにも興味を持ち、歌や動作を模倣したり、絵本などの話に興味を持ち、読んでもら

ったりすることで、保育者の言葉の抑揚も楽しむようになる。子どもは繰り返しのあるあそびが大好きだ。例えば、手あそびやうたなど、気に入った音やリズムを何度も聴きたがり、繰り返してもらうことを喜ぶ。



『音を楽しむ』と書いて『音楽』と言われるように、乳児期では、いろいろな音に親しみ、興味をもてるように、『楽しい雰囲気を作る』ことが何よりも大切だといえる。人は音楽を聴くとリズムに合わせて自然に体が動き始める。リズムに反応するとき身体的な動きを伴うのが自然な現象である。乳児期の子どもたちも、馴染みのある音楽を聴くと体を揺らしてリズムに乗り始める。自然と体が動いている様子を見るだけで、楽しんでいることが伝わってくる。



音や目で見えるものの動作を模倣する能力が著しく発達するようになってくると、つかまり立ちをしながらリズムミカルに体を動かし、踊りに興味を持つようになる。やがて、歩行がしっかりとしてくると、保育者の動きを真似ながらダンスや体操も楽しめるようになってくる。このように、リズムは音楽を成立させている要素のひとつだといえる。音に気付き、音のリズムとある種の音色や狭い範囲の音域に反応することから、原初的な音楽表現が始まる。様々な音に出会い、多様な生活経験を行うことで、豊かな感受性が育まれていく。乳児期に、大人とのコミュニケーションを深めていきながら、音やリズムに気付き、弱音と強音の変化や高音と低音の違いを感じとる経験を繰り返すことで、適度な音量と美しい音質が識別できるようになる。弱音に気付かせ、聞く事に全神経を集中できるような経験を積むことが、ゆくゆくは幼

児クラスで行う合奏へとつながっていくことになる。乳児クラスでは、『音楽活動』と言うようなかしまった事はしていないが、あそびの中で自然な形で音楽を取り入れ、いろいろな音に興味をもてるように保育を行っている。

【楽しさの“連想”と“連奏”】

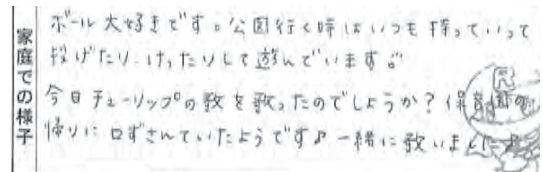
1・2歳児クラスでは楽しい雰囲気作りを心掛け、保育中に子どもたちの好きな歌や音楽を流している。クラスで歌っている童謡が聴こえてくると、子どもたちが鼻歌を歌ったり、体を動かしてリズムをとる姿が見られる。登園の際、保護者と離れて泣いてしまう子ども、大好きな曲を聴けば泣きやみ、職員に抱っこされながら落ち着きを取り戻していた。楽しい印象が残る曲を聴くと、悲しみという感情から喜びに近い感情に変わると考える。自分にとって楽しいイメージがある曲にはそれに伴って嬉しそうな行動や感情で表現される。

5月、子どもたちがこいのぼりの空を泳ぐ姿を見ると、「屋根よ〜り〜た〜か〜い、こいの〜ぼ〜り〜♪」と歌いだした。また違う日には、給食で出た野菜を見て、その頃楽しんでいた野菜の手あそびを口ずさんだ。雨上がりの園庭にとんぼが飛んでいた時には、『とんぼのめがね』を歌い、周りにいた友だちも「ぼくも歌う！」と言わんばかりに一緒になって歌っていた。歌の輪が広がり、まるで2歳児クラスの大合唱だった。このように、この頃の子どもたちは目に入った事象に対し、見たままを素直に歌へ連想させ楽しみながら表現している。そしてそれが連鎖反応を起こし、友だちも歌いだす。子ども同士で歌を楽しんでいる姿だった。



保護者にとっては、送り迎えの時間というのは子どもたちとのコミュニケーションの時間でもある。2歳児にもなると、園でのこともたくさん話すようになる。中には保護者が聞いてもあまり話せない子どもたちもいるだろう。当園では『おいたちの記』という保護者と担任の交換日記のような、子どもの成長や園での様子を毎日伝え合うノートがある。そこにクラスで歌っている童謡なども紹介する。すると、ある日の帰りの自転車の後ろで、『おいたちの記』で紹介されていた童謡を子どもが歌っていると無意識に保護者も口ずさんでいたというのだ。会話ではなく、ただ子どもと一緒に歌を口ずさむ。何気

ないことだとだが、その瞬間でも親子のコミュニケーションにつながるひとときだけだろう。流行りの歌も良いが、当園では誰もが知っているような童謡も季節に応じて大切に歌っている。この親子も童謡でなく流行りの歌だったならば、一緒には歌っていなかったかもしれない。世代を越えて共有できる歌を子どもたちに伝えていく意味を改めて感じる事ができた。



3. つながり

5歳児になると、運動会ではマーチングを行う。合奏ほど使用する楽器は多くないが、当園では大太鼓、トリオ、シンバル、ハイハット、小太鼓、中太鼓という楽器、そしてカラーガード（旗）を持ち、楽曲に合わせて2曲を披露する。どの楽器にもそれぞれに大切な役割があり、どれも欠けてはいけないパートとなるが、5歳児とはいえ、すぐに2曲を完成できるわけではない。そこには積み重ねた経験が子どもたちの中にはあった。

～3歳児～【実践】

子どもたちの身近な動物や野菜、果物の絵カードを使い、簡単なリズムを楽しんでいく。

(手拍子) (手拍子)
「トン うん トン うん」

(手拍子) (手拍子) (手拍子)
「ト・マ・ト うん」

トン、ト・マ・トの部分を手拍子になる。これらを子どもたちが声に出しながら手拍子をつけて進めていく。



「うん」というのは4分休符のことで、リズムの休む部分も手を使いながら表現していく。普段の保育の中で

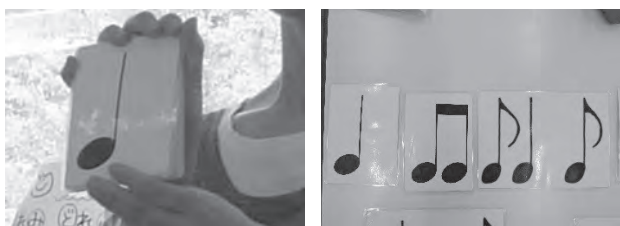
も手あそびと同じようにすることで自然と身につけていくようにし、2月の発表会ではトライアングル、タンバリン、鈴、中太鼓など、打楽器を中心に、主に4分音符で構成された合奏をしている。

3歳児であっても、合奏をするということは理解力、記憶力、集中力、協調性など、これから生きていく上で子どもたちに必要な様々な要素が必要。しかし全員に音感、リズム感、理解力があるわけではなく一人ひとりに差があるのだが、その子に合った楽器を選択することで「楽器を鳴らすことってこんなに楽しいんだ！」という気持ちが芽生えるようにしていく。この時期に苦手意識を覚えると、今後の合奏の練習や小学校に進学しても嫌々取り組むことになってしまう。自分が鳴らした楽器の音が曲の一部となり、友だちと音を奏でるとことこの楽しさも感じていくようになる。



～4歳児～【実践】

ひとつ学年が上がると、絵カードから音符カードに変わり、八分音符も登場する。子どもたちはカスタネットを持ち、職員は音符カードを次々にめくっていくと、その音符に合ったリズムを打っていく。例えば、四分音符であれば、「タン！」八分音符であれば「タタッ！」と2回たたく。声を出しながら進めていけば覚えていくのも早い。



うたを歌う前は足を少し開き、ピアノの音に合わせてつま先を上げたり、肩を上下して身体の緊張をほぐしリラックスしながら歌える準備をする。その次は発声練習

を行う。子どもたちが親しみやすい果物の名前を音程に合わせて保育者と交互に歌っていく。

例： 保「も～も♪」 子「も～も♪」

保「いちご～♪」 子「いちご～♪」



4歳児では元気で声が大きければ良いという考えではなく、声の大きさも自分たちで調整しながら歌えるようにする。低い音程は大きな声では出しづらい。そこで、「音が低くなったら声の大きさも少し小さくしてごらん？」と声を掛けると、子どもたち自身で意識しながら声量を抑えることで、音域の幅が広がりを見せる。音楽活動の際、鍵盤ハーモニカを主に使っていくが、初めは同じ音を連続して吹いたり、順番に音階が上がっていくような曲から練習していく。その際、タンギングや指の押さえ方なども同時に覚えていく。

4歳児は2月の合奏に向け、木琴、鉄琴、キーボード、打楽器類などの様々な種類の楽器を見て、触れながら「やりたい！」と思うものを自分で選ぶ。

やらされるのではなく、子どもが自らやってみようという気持ちに取り組む姿勢を変えている。



4. 5歳児になって

マーチングの練習をしているとプレッシャーを感じ、投げ出したくなる子もいるが、励まし励まされを繰り返し“友だち”という大切な存在や、“心を一つにして創り上げていく”という素晴らしさに少しずつ気付いていく。誰か一人でも何かにつまずいたり、立ち止まった時に皆で話し合う機会をつくったり、モチベーションを上げる言葉掛けを保育者がどれだけできるかも重要となってくる。一人ひとりが主体となって意欲的に楽しく取り組めるように。そして、小さな頃から一緒に同じ時間を過ごしてきた大切な友だちと心を一つにして演奏した時に、心から感動できる経験をすることが一番の目的である。

【卒園児のことは】

今年の夏期に卒園児（小学4年生 男子）がボランティアとして5歳児の手伝いに来た。子どもたちはマーチングの取り組みに精を出していると、取り組み中に小学生の卒園児が「上手くできてるで！」と褒めるだけでなく、「保育室はクーラーあって涼しいけど、グラウンドで取り組みが始まったら暑くて今より声出ないよ！出せるだけ頑張ってお出そう！」と、この卒園児が年長児の時に保育者が声掛けしていたような言葉掛けを自然にする姿がみられた。「暑かったことは覚えてるけど、それ以上にみんなの心が一つになった時の気持ち良さとか、たくさんの人に褒められた時の嬉しさとかの方が印象深く覚えている。大切な思い出やから忘れへん！」という言葉が印象的であった。

【発見する喜び】

3、4歳児の活動が積み重ねとなり、5歳児になると運動会ではマーチングを行う。“バチはハの字を意識して”“太鼓の真ん中を叩く”や、“バチが太鼓の面に触れる瞬間に強く叩く”ことなどの基礎を大切にしている。正しい叩き方をした時とそうでない時の音色や、叩き方の強弱で音が変わることなど、子どもたちが自分で気付けるように、“音”で問いかける。すると子どもたちは静かに集中して耳を傾け、「さっきのほうが音が強い！」や、「今の音は優しい音に聴こえる！」など、自分なりの言葉で音の違いを聴き分けている。

リズムは声・手拍子・カスタネットに合わせて、最後に楽器を演奏する。いざ、全ての楽器で合わせてみるとテンポが遅くなったり速くなる。そこで、曲を自分の耳でしっかりと聴くことの他に、“指揮をみること”を伝える。保育者が「友だちと楽器を合わすには指揮者も見るんだよ」と話すと、自分たちで見て合わせようとする姿が見られる。しかし、常に指揮者を見ては隊形によっては体は横を向いているのに顔だけが前を向いてしまう。「どうすれば良い？」と子どもに尋ねても返答がない。そこで、「顔は動かさず、目だけ動かしてごらん。横にいる友だちが見える？」と聞くと、「見える！」「こういう見方でも横くらいまでは見える！」と次々に声があがった。隊形によっては見ることができない状況もある中で、首を動かさず視線だけでチラッと見るような、普段の生活の中であまりしない目の動かし方に子どもたちが意識的に気付いた瞬間だ。日常生活の中で大人にとっては些細なことも、子どもたちにとっては新しい“発見”となるものがたくさんある。様々な場面で保育者がどのような言葉や行動で子どもたちに発見できるヒントを伝えていくことができるか。保育者の資質向上にこれからも努めていかなければならないと感じた。



【音の響きを感じる】

5歳児になると体力もつき、運動面も発達してくるため、逆上がりができるように目標を立てたり、長い距離を歩いて遠足にも行く。あそびの中ではおにごっこなどルールのある集団ゲームをしたり、全身じゃんけん、友だちと協力する手押し車や雑巾がけをしたりと楽しみながら体力・身体作りをしている。その延長線に和太鼓演奏もあり、左足の膝を曲げて立つ姿勢を保ったり、強くたたかないと響かない和太鼓はリズム感だけでなく体力、集中力、バランス感覚などが必要と考える。

簡単なリズムで和太鼓を叩き、正しい姿勢・打ち方を習得していくが、リズムを覚える時は「ロケットドンドンとんでいく」など、リズムを歌に置き換えて楽しく取り組める様に工夫している。初めは数分しか持続しなかった集中力も長い間集中できるようになり、また、一定のテンポを保てるようにもなる。



和太鼓の音を聴き、子どもたちにどんな音だったか聞いてみた。

「心臓にめっちゃ響く！」と驚いた様子だ。耳で音を聴くことは当たり前だが、身体全身が“響き”を感じるという経験はあまりないと思う。和太鼓をしていると、子どもたちは友だちと鼓動を創り上げていくことを楽しみながら、和太鼓の響きが子どもたちの心を揺さぶり、魅了しているように感じた。

当園の発表会では5歳児クラスでは珍しい『カスタネット奏』を取り入れている。カスタネット＝気軽に楽しめる楽器として幼い頃から使用してきたが、子どもたちの成長と共に表現の仕方も成長する。赤ちゃんの頃は太

人が叩き、聴かせたり、手・足・お腹など身体の様々な部位にカスタネットを触れさせ感触や音に反応することを楽しんできた。乳児クラスでは自ら叩き、喜びなどの感情をリズムで表現してきた。3歳児からは利き手とは反対の中指にゴムを通し、掌で叩くなどの正しいカスタネットの使い方を知り『う・さ・ぎ』などと単語のリズムあそびから始めてきた。そして5歳児では一定のリズムを正確に刻むパートと、早打ちとよばれるとても速いリズムで表現できるまでになった。ひとつひとつの音は小さいが、友だちと音だけでなく心を重ねることで、たくさんのお友達の心に大きく響く音色となった。



5歳児になると、友だちとの関係も深まってくる。一緒に遊ぶ中でけんかもしたり、子どもなりに葛藤が生まれることもたくさんあると思う。それでも、小さい頃から一緒に過ごしてきた友だちはかけがえのない存在。マーチングや和太鼓などに限らず、友だちと気持ちを合わせながら様々なことにチャレンジしようとする子どもたちの姿は、乳児の頃を思い出すと本当に成長を感じることができた。

“ひとりはお友達ののために みんなはひとりのために”
友だちと力を合わせて乗り越えたこと。諦めずに取り

組む経験は、必ず自分の自信に繋がると信じて…。

5. おわりに

今回、課題研究部門の『遊びと学び』へ応募するにあたり、普段の保育・教育や、子どもへの関わり方、遊び方等が子どもの学びや音楽という大きなテーマにどう繋がっているのか職員で再認識し合う良い機会となった。

何のために音楽活動をしているのか。行事のため？親のため？

それは違う。音楽は音やメロディー、リズムを楽しみ、子どもたちの持つ豊かな感性と個性を響き合わせるもの。その裏にはそれぞれにドラマがあり、保育者と、親と、友だちとをつなげるものがある。

今回のように職員で話し合うことで『音楽の力』をより深く捉えられることができた。

“音を楽しむ”

楽器が上手であることがすべてではない。子どもたちにとっての音楽とはクラスの雰囲気を楽しくさせるものだったり、表現やコミュニケーションのひとつだったりする。年長児の合奏や和太鼓、マーチングには見応えはあるが、“頑張ればできるという自信”“できなかったことができるようになった時の喜び”そして、“友だちと心をつなげて創り上げていく”という感動を、子どもたち自身で感じる経験を大切にしていきたい。これから生きていく上で、園での経験が少しでも糧となれば嬉しい限りであり、これからも音楽に限らず、保育・教育に様々な工夫をしながら未来を担う子どもたちと関わっていききたいと思う。

講評：「0から始まるド・レ・ミ♪」

評者：井桁 容子

本研究は、普段の保育・教育活動を振り返り、“子どもたちにとって音楽とはなにか” “どのように音楽が取り入れられ、それがこどもたちにどのような影響を与えているか” について研究、実践、考察を進めるとあり、さらに、0歳児から音を通じたかかわりが保育者との信頼関係の構築や親子でのスキンシップにどのような形でみられるのかを要点を絞って考察するとあり、研究の着眼点が面白く問題提起が明確で期待できた。しかし、残念ながら研究テーマと実践内容の考察に一致が見られず、0歳児の実践と振り返りに絞り込まれていなかった。また、0歳児の個人差等への認識があれば、「赤ちゃん」という表現でひとくくりにできないことに気付くはずであるので、その点において本研究が乳児の保育実践に対する姿勢を再度振り返る機会になり、“0歳児にとっての音を通じた関わりとその意味” について実践に生きる研究になるとその意義が見いだせるに違いない。

評者：岡田 澄子

題名からして楽しそうだなと期待を持って読み進めていきました。

文章に合った写真が添付されていて読みやすかったのですが、0歳児は月齢も記載するとなお良かったのではないかと思います。

友渕児童センターでは、5歳児クラスになるとマーチングや和太鼓演奏があるようですので、0歳児から音楽（リズム遊び）を楽しむその経験の積み重ねが重要なのでしょう。

子どもの様子、保育者間の取り組みなどの記載が少なく詳細には分からなかったのが残念です。しかし、子どもたちが「音を楽しみながら」頑張

ればできること、友だちと心をつなげて創りあげているのだということは察することができました。

何のために音楽活動をしているのか。音楽は音やメロディ、リズムを楽しみ、子どもたちの持つ豊かな感性と個性を響き合わせるもの。保育・教育に様々な工夫をしながら未来を担う子どもたちと関わっていきたくと筆者は思っています。保育とは正にそのようなものだと思います。今後も継続して取り組んでいかれることを期待します。

評者：日吉 輝幸

音楽は人間を豊かにするものであると筆者は思っている。心と癒される音楽もあれば、気分が高揚させられる音楽もある。また、音楽からは様々な知識を得られることもあり、“音学” と言える側面も持っている。

本研究でも、音楽を人類の文化ととらえ、乳児期からの音との関わりについて研究されている。レポートには何度も「音を楽しむ」という記述があるが、乳幼児期の子どもにとっての音楽は、文字通り「楽しむ」という経験が必要であることは言うまでも無い。本研究は、0歳から5歳までの年齢で様々な実践を行っていることが記述されているが、残念なことに応募要領を大幅に超えたレポート量であり、そのせいか研究の要点が絞り込めていないと感じられた。また、研究テーマと研究内容の関連性が分かりづらく、筆者自身テーマ設定の難しさを改めて感じさせられた。しかしながら、友渕児童センターでは、日常の保育の中で子どもたちが「音」や「音楽」と接することを、とても大切なことと位置付けていることが読み取れ、大いに評価するものであったことを申し添える。今後も子どもたちと共に、「音を楽しむ」活動を続けていかれることを期待している。

課題研究③ 子どもの健康・安全 保育施設におけるリスクマネジメント ～ヒヤリハットを迅速に共有する～

東京都・つくしんぼ保育園 熊谷 あすか

1) はじめに

社会福祉法人つくしんぼ保育園は昭和47年、東京都日野市に開園をした。平成25年度3月、旧園舎の老朽化に伴い、新園舎への建て替え工事を行った。新園舎の設計の際には、「子どもが落ち着いて生活することができる施設」、「園内での深刻事故を防ぎ、子どもたちのケガや小さな事故を最小限にできる施設」を目標に、子どもの目線に立ち、打合せを重ねた。建物の詳細部分を決める会議では、園長・副園長を中心とし、幹部職員も参加し、現場からの様々な意見を取り入れた。

また、NPO法人保育の安全研究・教育センター理事であり、心理学博士の掛札逸美氏にも施設内の設計の監修をしていただいたことにより、より利便性と安全性を追求した建物が完成した。掛札氏には「保育の安全」を中心に、年に2回、職員を対象とした園内研修も行っている。

施設の紹介

〈階段の手すりの形状〉

子ども達が階段を上り下りする際、転倒・転落を防止するために使用する手すりには、このような形状のものを選んだ。（主に公共施設で使用されている手すりの形状では、壁との間に腕を入れ、骨折をした症例があったと聞き、使用を避けた。）高さは70cmに設定されており、グリップ部分も丸みを帯びていることから子どもの手にもちょうど握りやすくなっている。また、危険防止のため、あえて大人の高さの手すりは設置しなかった。



〈鍵つきの扉〉

当保育園の構造として、0、1、2歳児は2階部分に保育室があり、3、4、5歳児は1階に保育室がある。

2階で生活する乳児達が、保育士の目から離れ、自分で階段の上り下りをするのが無いよう、階段上部には鍵つきの扉が設置されている。

また、保育園の正面玄関にはオートロックが設置されている。しかし、新園舎開園当初、送り迎えで混雑をしていた時間帯に、2歳の子どもが1人で門の外へ出てしまう事例があった。保護者がすぐに気が付き、事故には繋がらなかったがその事例の対策として、子どもの手が届かない門の上部にもかんぬきの鍵を設置した。現在は、保護者などの大人がそれを開け閉めして施錠を確実にものしている。また、保育室全ての扉には140cm部分に鍵が取り付けられている。子ども達が、気づかれぬまま部屋を出て行ってしまおうことを防止し、保育室内で子どもたちの安全を確認できるようになっている。



<エレベーター>

エレベーター前には扉が設置されており、エレベーター側に手を入れないと開けることのできない鍵がついている。また、エレベーターのボタンは、いたずら防止のため子どもの手が届かない上部に専用ボタンがあり、そこを押さないと他のボタンも感知されないしくみとなっている。そのため、子どもが遊びでボタンを触っても、扉が開かず、閉じ込めや指挟みなどの事故を防ぐことができるようになっている。



<蝶番カバー>

蝶番が使用されている扉には、全てカバーがとりつけられており、指はさみ等の事故を防止している。



<窓の木枠>

0、1、2歳では、視力や空間認識、建物の概念等においてこれから発達をする段階であるゆえ、透明の窓ガラスや網戸の認知が難しいことが想定される。また、遊

びの中で突然走りだす等の突発的な行動が見られることもある。そのため、0、1、2歳の保育室と遊戯室にはそれぞれに木枠が設置されており、木枠の格子部分の木は一本一本が丸く加工されている。保育室のドアも木枠と2重構造としたため、ドアを開けた状態であると、風通しを良くする効果も得られる。



<カバンかけラックの廃止>

ラックにかかっていた通園カバンの取手部分に首を入れ、窒息をしたり、ラックの足部分でつまずいて転倒したり、等の事故が無いよう考慮した。保育室からカバンかけラックを無くし、代りにロッカー内にカバンや必要物品を保管する構造とした。洗濯物やループタオルは壁に（子どもに危険ではない位置に）フックを取り付け、そこにビニールを掛けて保管をしている。



<背の高い汚物洗い槽>

汚物洗い槽は背が高いものを選び、アコーディオンカーテンの中に設置をすることで、子どもがのぞき込んで



転落、溺水をすることを防止している。施設の設計上、アコーディオンカーテンの中に設置できなかったものに対しては、子どもが持ち上げることの出来ない大きさ・重さの木製蓋を使用している。

<子育て安心カード>

保育の安全な環境を整備するとともに、各家庭で起こる事故に対して注意喚起する取り組みも行っている。それは日本保育協会が出版する「子育て安心カード」の活用をすることである。「子育て安心カード」とは、一番発達が盛んな0歳児を中心に、その時期に合わせてご家庭で注意すべき事項が書かれているカードである。入園したばかりの0歳児クラスで、初めて行う保護者会の時に、子育て安心カードについての説明を行う。また、子育て安心カードには「寝返りをする時期」や「ハイハイをする時期」などに合わせ、保護者へカードを一枚ずつ渡し、家庭での深刻事故を防ぐ目的がある。それに加え、園では安全管理に対する高い意識を持っていることを伝えることができるツールとしても役立つ。0歳クラスの担任間ではカードの渡し忘れが無いよう、毎月身長・体重を記入してご家庭に返却する「健康カード」と一緒に保管するという工夫をしている。健康カードの配布と共に、お渡しできる子育て安心カードの確認をし、個人の発達に合わせて適切な時期を選ぶ。そして、保育士からのメッセージを添えて、記念の意味も込め、カードを手渡ししている。



2) 問題の提起

つくしんぼ保育園では、平成24年度より園内で起こったニアミス・ヒヤリハットのシステムを導入した。また、集計・管理に関しては、看護師が代表となり担当した。開始をした当初は、A5サイズの紙に所定の事項が記入できるよう、専用の用紙を作成した。そして職員会議を通し、全職員へヒヤリハットの提出方法について説明を行い、ヒヤリハット事例は全て用紙に記入して共有をするよう職員へ伝えた。

しかし導入してから数カ月が経過しても、全くと言っていい程、ヒヤリハットは提出されることが無かった。提出されたとしても噛みつきやひっかきが実際起こった時など、せいぜい月に1～2件程度の提出数であった。

この結果に対し、どのようにしたら、職員から次々とヒヤリハット報告が提出される体制が整うのか、検討を行った。

3) 目的

各職員の気づきであるニアミス・ヒヤリハットの報告を、他の職員へ頻繁に、かつ迅速に共有することで、園内において、いつの瞬間に起こるかもしれぬ深刻事故を防止することに繋げる。また、つくしんぼ保育園内において、そのシステムを構築する。

4) 方法

数カ月が経過した後、再三の声掛けにも関わらず、なぜヒヤリハットを提出することが難しいのか、職員から意見を聞き取り、分析を行った。職員からは、「記入をしようと思うのだが、保育から手が離せず、記入をしないまま終わってしまう」「何に対してヒヤリハットを記入していいのかわからない」「ヒヤリハットを記入すること自体を忘れてしまう」等の意見が上がった。

以上の意見を受け、A5用紙で作成されていた従来のヒヤリハットの用紙を廃止し、より簡易的に記入ができるよう、付箋メモに記入をする方式を導入した。各クラスカラーの付箋を準備し（0歳児クラスはラベンダー色、1歳児クラスはピンク色など）、職員一人一人が、エプロンのポケットに、付箋用紙を持ち、携帯するようになった。

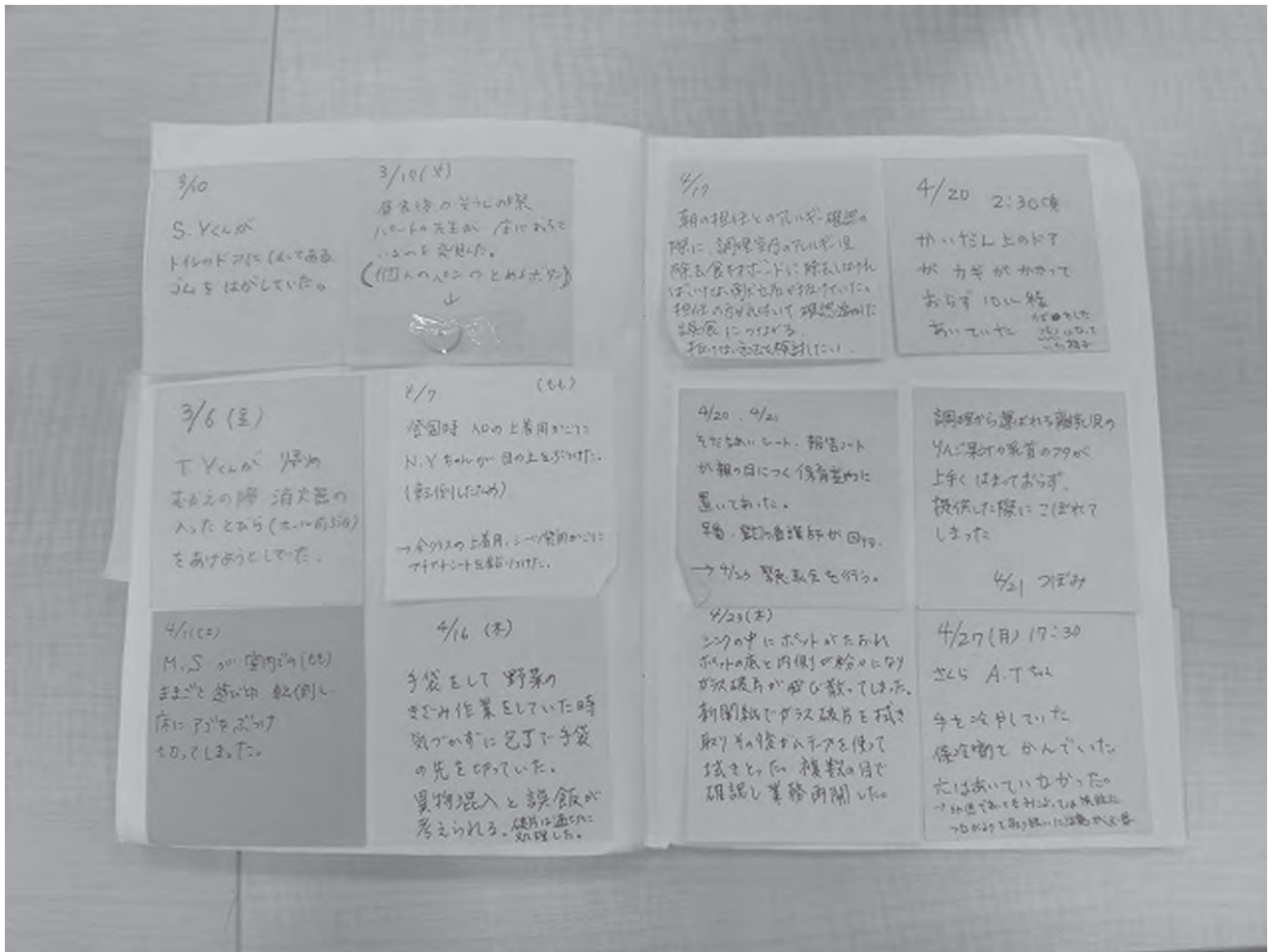
そして、日常で起こる「ヒヤリとした時、ハッとした瞬間」に、出来る限りその場で記入ができるように徹底して声掛けをした。（記入の内容は、日付と時間、ヒヤリハットの内容が簡単に書かれたもののみである。）

迅速に共有をする方法としては、「ヒヤリハットノート」を使用した。「ヒヤリハットノート」とは、各個人でポケットに入っている付箋用紙にヒヤリハット事例を記入した後、すぐにそれを張り付けるためのノートである。

ノートは、職員のタイムレコーダーの横に配置した。付箋にヒヤリハットを記入した職員は、遅くとも退勤の時にその付箋をノートに貼り付けるようにする。そして、朝出勤をした職員はタームカードを押す際に、必ずそのノートを確認してから勤務に入ることを徹底させた。また、提出されたヒヤリハットは、職員会議で共有するようになった。

ヒヤリハット事例の共有をする際は、「このクラスではこのようなことに気が付いてくれた。」という感謝の気持ちを交えて報告をした。加えて、四半期に一度は各クラスのヒヤリハット提出件数を集計し、職員会議でどのクラスで何件のヒヤリハットが提出されたか結果を報告し、更に提出への意識を高めた。

以下に付箋方式で提出されたヒヤリハットの事例と、対応を紹介する。



【ヒヤリハット事例①】

ゆり組（5歳児）のトイレにホッチキスの針が落ちていた。

（対応）

保育室内に落ちたホッチキスの針は、ケガにつながるだけでなく、それが乳児の部屋であった場合、誤飲の危険性もある。ヒヤリハットが提出されて以降は、保育室で針が必要なホッチキスは使用しない取り決めがなされた。ホッチキスを使用する必要がある際は、事務所に物品を持ち込み、使用することを可能とした。また、各クラスに針が不要なホッチキスを配布し、書類をまとめる時は、それを使用することとなった。

【ヒヤリハット事例②】

登園時、Nちゃんが転倒し、入り口に置いてあった上着入れ用かごに目の上をぶつけ、あざができた。

（対応）

Nちゃんがたまたま転倒した際に、起こった事例であったが、今回は幸運なことにアザだけで済んだとも考えられる。万が一眼球に当たってしまう場合や、跡に残る切り傷になってしまう場合も想定ができたため、この事例

に関しても、早急に対応を行った。その日のうちに、緩衝材として使用するビニールシートを、かごの縁の部分に固定し、転倒等で再度子どもが当たってしまった時に、衝撃が吸収されるように配慮をした。

以上のように、提出・共有されたヒヤリハットの中で、施設における危険な箇所の気づきがあった場合、幹部職員で共有し、話し合いの上、できるだけ早く改善できるように対応をすることを心がけた。大がかりなもの例では、園庭に設置された大型遊具のアスレチックへの対応がある。度々アスレチック使用中のヒヤリハットが提出されていたことを受け、万が一の転落事故に備え、平成27年10月に、地面の部分にクッション材を敷く工事が終了している。

5) 結果

このような取り組みを行った結果、職員が継続してヒヤリハットが提出されるシステムを構築することができた。開始当初は殆ど提出がされなかったヒヤリハットであったが、26年度には、園全体で合計252件まで提出されるようになった。現在のつくしんぼ保育園では、ヒヤリハットにより、一人ひとりの職員の気づきが全職員に共有され、それが深刻事故への意識を高めることに役立

っている。

6) 考察

平成24年に、初めてヒヤリハットシステムを導入した当初は、職員が「どのようなことを書いていいのか。」「こんな小さなことでも記入して良いのか。」と戸惑っている様子が見られた。また、自分自身のミスを、わざわざ全職員に共有することに、職員が抵抗を感じることも容易に推測することができた。

加えて、深刻事故は滅多に起こることではなく、「これくらいはいつものこと」「この程度だったら大丈夫」という考えや、日々の保育の忙しさから、職員のヒヤリハット事例を共有する意識がすぐに薄れていく傾向が見られた。

掛札氏は、保育施設で実際に子どもの命を奪っているのは、誤嚥・窒息（息が出来ないできごと）、水死、そして、睡眠中の死亡等であり、これらはハインリッヒの法則に従わない。「これは危ない！」と感じるきっかけ自体、ほとんどなく、ある日突然、深刻な事態が起こると述べている。

乳児の食事を介助する際など、「飲み込む時にちょっと咳き込んだけど大丈夫だった」で終わらせてしまうのでは、そのまま忘れられてしまう可能性がある。「実は

このできごとが窒息につながり、子どもの命を奪っていたかもしれない」という視点を持つことが深刻事故を防ぐことの第一歩であると考ええる。

平成26年より、付箋方式のヒヤリハットを導入したことによって、記入が簡便となり、日常の保育業務を妨げない程度ものとなったこと。また、常にエプロンのポケットに付箋が入っているということも、ヒヤリハットを共有することへの意欲を高める要因となったのではないかと推測できる。

また、最近では、ヒヤリハットに気が付くことができるようになった職員に対し「このヒヤリハットがこのような重大事故に繋がる」という部分まで考察をし、記入をするように依頼している。それは常に最悪の状態を予測し、日頃の保育で何が危険なことか、一人一人が気付くことが出来るスキルを身に着けるためである。

今後も、保育園における重大事故を防止するため、ヒヤリハットを始めとした、危機管理の体制を充実させていきたい。

参考文献

子どもの「命」の守り方

～変える！事故予防と保護者・園内コミュニケーション～
エイデル研究所 掛札 逸美著

講評：「保育施設におけるリスクマネジメント～ヒヤリハットを迅速に共有する～」

評者：石川 昭義

近年、保育場面におけるヒヤリハットの研究や報告が多くなってきている。当園では、ヒヤリハットシステムの導入に係る経緯、すなわち、専用紙から附箋メモ方式へと変更したことの報告がなされている。専用紙のやり方では、「保育から手が離せず、記入をしないままに終わってしまう」という保育の現状を浮き彫りにしたものと思われる。そこで、附箋メモ方式へと変更し、できる限りその場で記入し、それを「ヒヤリハットノート」に貼り付けて、迅速な情報の共有化を図った。そのノートは職員のタイムレコーダーの横に配置され、出勤の際にノートの確認をする流れを作ったことは評価される。

リスクマネジメントでは、一人ひとりの職員の気づきをもとに、それがどのように共有されたのか、その経緯について説明があるとよかった。また、今後は、集められたデータから、保育士一人ひとりの特性（ヒヤリハットの感度）や園の構造的な課題について考察が進められることが期待される。

評者：小林 芳文

本研究は、「子どもの健康・安全」の課題研究部門、保育園での環境等で「ヒヤリとしたこと、ハットしたこと」について保育士による共有方法についてどのように進めたらよいか、その在り方を探る取り組み研究でした。

園の安全環境の保育士の気づきに、ヒヤリハットを「付箋方式」による展開でその方式を見出したこと、安全保育・管理に参考になりました。保育士のちょっとした気づき、重大な事故を防止するためにも、この研究で示したような危機

管理の日頃の体制を充実させる事が大切だと思います。結果で述べられている1年間の「保育園全体での合計252件」の提出について、細かな結果（図表等）があれば、研究の理解がよりできたように思います。

今後は、添付される資料の説明も含め、その活用についても検討して下さい。

評者：日吉 輝幸

保育所という集団生活の場では、保育者がどれだけ細心の注意を払っていても、子どもに事故やケガが発生する可能性は捨てきれない。そのため、如何にして事故やケガにつながるリスクを軽減していくかということは、保育所という組織の本命題であると筆者は考える。

つくしんぼ保育園は、保育施設におけるリスクマネジメントのあり方を考察し、新園舎建て替えの際の設計に生かすなど、大変危機意識の高い園であるとともに、職員にもその意識が徹底されていることに敬服させられた。レポートも施設・設備の写真と解説により危険予防の実例が記されており、とても参考になるものであると思う。また、付箋紙を用いたヒヤリハットの記録についても、携帯性、簡便性の点で筆者自身に取り入れてみたいと思われるものであった。大変分かりやすいレポートであったが、「ハインリッヒの法則」のような専門用語を用いる場合には、簡単な説明があると更に良かったと思われた。

子どもの生命を守ることも、保育者の大切な務めであることを十分に理解し、実践されておられるつくしんぼ保育園の取り組みが、多くの保育施設でも実践されることを願うものである。

異年齢交流から見えてくるもの ～3歳未満児と3歳以上児～

富山県・富山保育所 庵 幸世

キーワード：縦割り保育 交流 保育の変化 職員間の意識

I. はじめに

富山保育所では十数年ほど前まで0歳～5歳の異なる年齢の子ども達が、時間を区切ったり、環境を設定したりなどの保育士による配慮をせずに、家庭にいるようなごく自然な形で触れ合う姿が見られていたように思う。しかし、3歳未満児クラスの拡大、職員・パートの増員、安全面の確保などの時代の変化もあり、今ではその風景を見られることが減少し、またそれに伴い、子ども達の他児と関わる力（同じクラスや同じ年齢という枠を超えた他のクラス・小さい子に対する関心）が低くなってしまったのではないかと寂しさを感じる事が増えてきた。

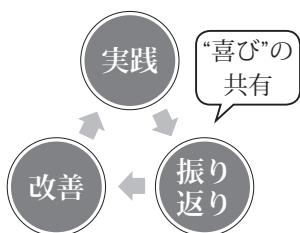
そこで当保育所の保育方針であり、大切にしてきた特長の一つである《家庭的な雰囲気》をより高めると共に異年齢交流をする中で見られるであろう、お互いの変化・影響、また保育者にとっては保育の“喜び”“楽しさ”を求めて、どのように異年齢交流を取り込んでいけば良いのか、探っていきたいと考えた。

II. 研究の目的

- ・子どもと保育者がともに楽しみ合えるような異年齢交流のあり方を探る。
- ・保育者の異年齢交流への意識を高めると共に職員間で一人ひとりの子どもの姿を見つめる事で“保育の楽しさ”を共有し、次への意欲・保育の質の向上へと繋げる。

III. 研究の方法

- ・異年齢交流をしない・できない理由や環境、また職員の異年齢交流への意識や思いなどの現状把握→分析→改善案→意思統一
- ↓
- ・異年齢交流の実践→振り返り→検討→実践
 - ・日々の保育、子どもの姿を通してより良い交流のあり方について職員間で話し合い、考察する。



IV. 事例と考察

(1) 富山保育所の実態・職員構成

定員90名 H25年度102名 H26年度99名

・3歳以上児（縦割り保育）

	ばら組	うめ組	ゆり組	合計
3歳児	7名	7名	8名	22名
4歳児	7名	6名	6名	19名
5歳児	7名	7名	8名	22名
合計	21名	20名	22名	63名
正規職員	10年目	14年目	12年目	

※いずれも一人担任

・3歳未満児（年齢別保育）

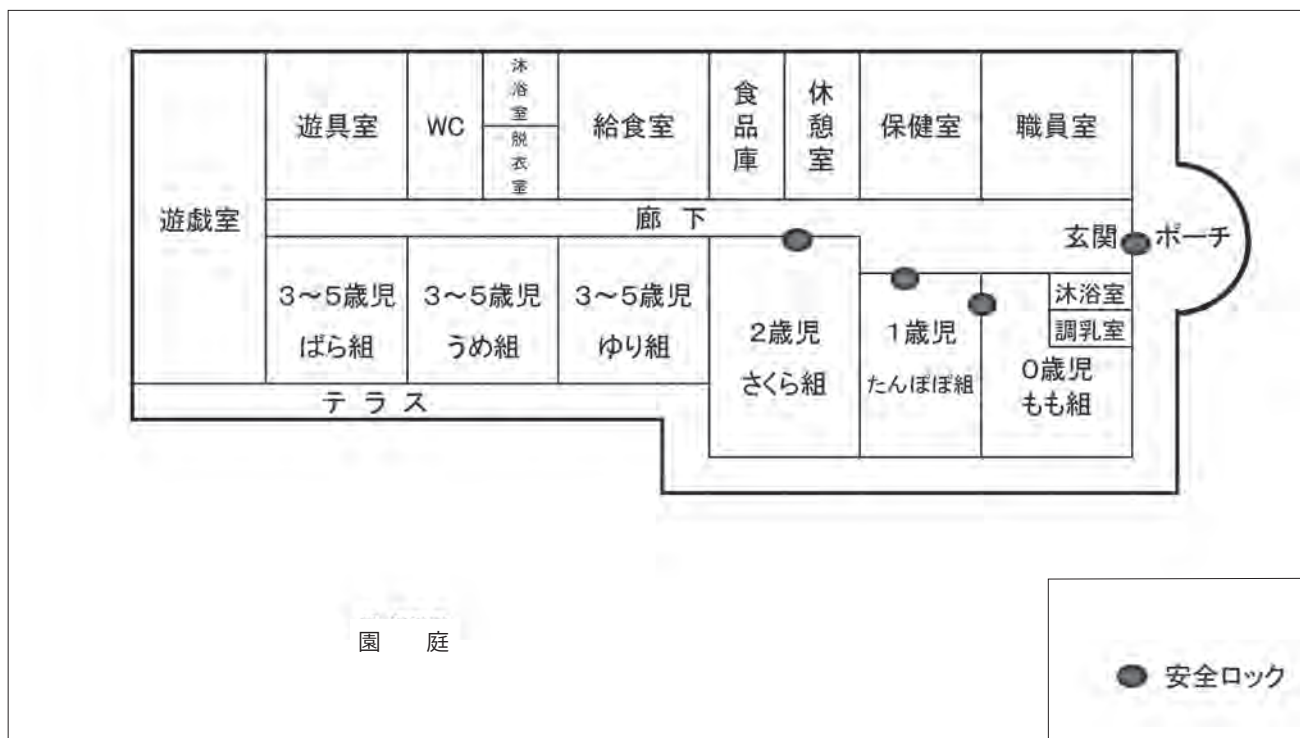
もも組	たんぽぽ組	さくら組
0歳児	1歳児	2歳児
6名	15名	15名
正規職員 2人 ・20年目 ・12年目	正規職員 2人 ・17年目 ・1年目 非正規 1人	正規職員 2人 ・16年目 ・1年目 非正規 1人

(2) 保育者の意識〈H25年度 職員アンケート調査より〉

Q1. 異年齢交流をできない理由や環境は何だと考えるか？

- ◎3歳未満児と3歳以上児の職員間の連携が乏しいため（コミュニケーション不足）
- ◎時間的、管理的な保育になりつつある
- ◎安全面を考え怪我をさせてはいけないと極端に気を使う、保護者からのクレームに怯えるなど、気持ちのゆとりがない
- ◎保育の喜びや新しい活動に対しての努力が報われず、どんどん億劫になっている
- ◎職員同士の異年齢交流への意識の薄れ
- ◎子の幼稚化…体つき・学ぶ力・考える力・年齢に合った友だちとの関わり方や経験不足など

・園舎見取り図



Q 2. どのような異年齢交流を望むか？

- ◎安全に配慮しながら自然な流れの中で異年齢交流を取り入れていきたい
- ◎3歳未満児と3歳以上児の職員間の連携をより取る事で、気軽な感じで遊びに行き来できる交流
- ◎少しずつ異年齢の子どもに関わり、寄り添える雰囲気から始めていけたらいい



Q 3. どのような設定や環境があれば取り入れられるか？

- ◎3歳未満児の保育を一斉ばかりせず、分散したやり方
↓
少人数ごとに責任のおける職員配置が必要
- ◎自然な形で職員同士も声を掛け合い、連携していく必要性
- ◎職員一人ひとりの意識と共通の思い

【考察】

保育経験が浅い保育士は異年齢交流に対するイメージがつきづらく、特に3歳以上児と3歳未満児が交わる事で安全面においての不安が大きい。

また、職員の勤務・雇用形態が多様になり(時差出勤・

アルバイト、派遣など)意思疎通が難しい場面も増えてきて、子どもより保育者の状況に合わせた制限しがちな保育にもなっている事が分かった。

また年度によって、3歳未満児担当職員・3歳以上児担当職員など立場も変わってくるので、そこもしっかりと認識し、そして何より子どもたちが負担を感じないように交流を少しずつ取り入れていける環境や連携を考える事が実践に結びついていくと考える。

(3) 取り入れ・改善案

『きっかけづくり』として環境を設定し、その中での変化を見ていくところ始める。

①おやつ・給食を一緒に食べる

- ・ 1、2歳児クラス ← 3歳以上児が行く (2人程、希望や人を考慮して)
- ・ 3歳以上児クラス ← 2歳児が行く (受け入れクラス担任と相談し、人数や保育士の補助なども決める)
例…お菓子の袋を開けてあげる、食べ方の見本など

②3歳以上児クラスで一緒に活動

主に2歳児(2~3人程から)
例…各保育室での自由遊びやお集まりに混ざり、過ごす。

(4) 事例

◎エピソード1 《不安がいっぱい》H25.12月

(背景)

3歳以上児と3歳未満児クラスとは、外遊びの際に園庭で一緒になる時や雨天時に3歳以上児さんが遊戯室にて自由遊びをしている時に混ざる程度である。

(エピソード)

『お兄ちゃん達のお部屋に行きたい人〜』と2歳児クラスのお友だちに声をかけてみると、反応ナシ。月齢の高い子から個別に聞いてみると次々に首を振った。

そこで、

『Tちゃん(←兄の名前)のお部屋、行ってこようか?』
『Yちゃん(←従姉の名前)のところ、行ってくる?』

と、具体的に名前を出して誘い、行く子が決まった。(Sちゃん:男児)(Kくん:男児)

3歳以上児クラスでお兄ちゃん、お姉ちゃん達と一緒にごはんを食べたり、片づけを教えてもらったり、はじめてするパズルや玩具を自分で選んでは持ってきて、嬉しそうにする姿が見られた。



お昼寝の時間になり『ただいまー!!』と、元気に保育室に戻った。そして寝付くまでの間、一緒に行った保育士を中心に以上児クラスでの様子などを話した。

お昼寝から目覚め、おやつ準備の際に再度、声をかけてみる。

『おやつもお兄ちゃん達のお部屋で食べてもいいってー。どうする? 行きたい人いる?』

『Sちゃん、行くー!』

『Aちゃんも行きたい〜』

午前には反応が無かった子や、首を振った子が手を挙げていた。

(考察)

2歳児の子ども達からすれば急に、3歳以上児クラスに行こうと誘われても想像がつかず、行ってみたい気持ちよりも不安の方が勝る。

しかし、行ってみれば普段と違う玩具や好奇心を駆きたてられる環境があり、年上の子どもたちに優しく教えてもらい、自分もいつもよりお兄ちゃん・お姉ちゃん気分を味わうことができる。そして、この楽しさを経験した子が満足そうな表情をし、具体的に保育士と会話を楽しんでいた。

これもまた、不安を感じていた子どもの心を和らげる一つの方法なのだと感じた。

色々な場面・時間で楽しいと感じられる経験こそ、この交流の基本的な要素である。

そして、何度も繰り返す事やたっぷり時間をかける事で、子ども達の新しい表情が見られることに保育士も喜びや楽しみが増えてきている。

◎エピソード2《どうしていいかわからない》H26. 1月

5歳年長児T君(3人兄弟の次男)のクラス(うめぐみ)に弟の2歳児(さくらぐみ)Sちゃんが遊びに来た。初めてのことである。

(エピソード)

㊦「一緒に給食を食べたり、遊んだりしにきたんだけど、いい?」

兄のクラスに行き、みんなに向けて聞いてみると、

「いいよー」「どこ座る?」「T君、Sちゃん来たよ〜」

と、次々に笑顔で周りのお友だちとおしゃべりする3歳以上児さん。

㊧「はいはい...」

半分嬉しいような、半分は周りの声に参ったという表情だったが、横に来てくれる。

㊦「どうやってするか分から

ない事がいっぱいあると思うから、教えてあげてくれる?」

㊧「うん。分かった!」

自信ありげに返事し、何だか得意気な表情を見せた。椅子を持ってきて座り、配膳時には会話を楽しみ、いただきます。穏やかに給食を食べる二人だったが、食事が進むにつれてSちゃんのスプーンや食べ物が落ちてしまう。困った表情のSちゃん。T君も動けず、ただ見ている。

㊦「どうしたの?」

状況は分かっていたが、保育士が声をかける。

㊧「・・・落ちた」その後も動きがない。

㊦「どうすればいいか教えてあげて。落ちたらどうしてやる?」

㊧「新しいのと交換して...」

と、隣に座っていたMちゃん(年長女児)が、すかさず手順を保育士に教えてくれる。それも耳に入らない様子で茫然と、身動きをとれずにいた。

㊦「じゃあ代わりにMちゃん、教えてあげてくれる?」
と言うと、手際良くSちゃんの手を引いて、丁寧に教えてくれる姿があった。その姿を見ながら保育士が

㊦「T君どうしたん?」

と声をかけると

㊧「(どう教えてあげれば良いか)分からんだ」と答えた。

(考察)

初めて弟と共に過ごす中で、普段は何てことのない出来事が周りから注目され、それによって余計な緊張が生まれ、招いたエピソードだったように感じた。

まだまだ交流が珍しく、興味を引き立ててしまう状態、関心が高まる環境。交流を重ねることで、お互いに対応にも慣れてくるのではないかと予想される。

子ども達同士の自然なやりとりが当たり前に見られるようにこれからも進めていきたいと強く感じた。

◎エピソード3 《小さい子のお世話》 H26. 6月
(背景)

園庭と遊戯室は全園児の共有の遊びのスペースであるが、様子を見ながら時間差をつけて出てみたり、外から室内に切り替えたりして、子ども達の安全を確保している現状である。

(エピソード)

園庭に一番乗りで現れ“ちょこちょこ歩き”ながら、それぞれに散策をしたり、目当ての遊具の方に一目散だったりの0歳児クラス(ももぐみ)その姿を見つけたゆり組(3~5歳 縦割りクラス)の子ども達は次々に窓側に近づき、

『○○ちゃんだ! おーい、○○ちゃ〜ん!』

『△△ちゃんもいるよ〜 かわいい〜!!』

と、今すぐにでも側に行きたい様子。担任保育士はその姿を見て、外遊びに行く前に子ども達の動きを止め、子ども達と確認を行った。

『外遊びに行ってもいいけど、気をつける事はなんですか?』いつもと違った担任保育士の質問に子ども達は少し戸惑い、隣同士コソコソと相談しあう姿も見られる。そしてその中で、年中女児が『小さい子がいる…?』と、言う『小さい子にぶつかると危ない!』『一緒に遊んであげる!』『優しくする!』など次々と自分達の思いがでてくる子ども達。

『そうだねー、もも組さんが遊んでいるから気をつけてあげないとねー。宜しくね!!』と伝え、外遊びに出た。

外では、手押し車に乗せ押してあげたり、手をつないで散策の誘導をしたりと、関わり合う子はどの子も笑顔で喜んでいる。満足気どころか誇らしげでもあった。ゆり組の中では弟的存在の3歳男児K君もこの時ばかりは『僕も押してあげたい!!』とお兄さん顔を見せた。

(振り返りより)

この日のゆり組の子ども達の姿に、もも組担任保育士より『何か子ども達に話してから外に出て来たの?』と、話す機会がもたれた。ゆり組担任が経緯を伝えると、『やっぱり!!言葉がけ一つ、やりとりがあるだけでいつもと全然違って、一緒に遊びやすかったよ!!』。ゆり組担任としては、ほんのちょっとの子どもへの働きかけが変化を生み、双方の子ども達と保育士にとってより楽しい時間となった事が分かり、新たな喜びとなった。

(考察)

3歳以上児の子ども達にとっても赤ちゃん(0歳児)というのは特別な存在である。本能的に“守ってあげたい”と意識が働くのかそれを感じやすい“見た目”があるのか無条件に“優しくしてあげたい”と関わろうとする。子ども達なりに“ケガさせないように”や“喜ばせてあげたい”と



様々に考えて関わる事が、その子ども自身の大きな心の成長と繋がることに保育士は喜びを感じる。

◎エピソード4 《行ってもいい?》 H26.12月
(背景)

2歳児さくら組との部分的交流(おやつ、給食、園庭など)が少しずつ繰り返される“○○ちゃんは○○ちゃんの妹”“△△くんは△△くんのお兄ちゃん”などの認識がなされるようになり、園舎の内外で会った時も双方が手を振り合うなどの姿が多く見られるようになってきている。

(エピソード)

5歳年長児Kちゃん(女児)は、みんなが登所して、身支度を整えてそれぞれにブロックや折り紙など自由に好きな遊びをしているお部屋を後に2歳児クラス(さくらぐみ)の前に行き、立ち止った。しばらくの間、お部屋の中を見ている感じがしたので、不思議に思ったさくら組担任保育士が『どうしたの?』と声をかけると『さくら組さんに入っていいですか?』と答えた。

さくら組に入るとぐりと見渡して、おままごとコーナーに行き、一緒に遊び始めた。突然に現れたお姉ちゃんに2歳児の子ども達も少し呆気にとられたものの、その後は嬉しそうに『お姉ちゃん!!』と喜び、側に行きおままごとを楽しんだ。

(考察)

いつもは同年齢の女の子達で遊ぶことが多く、中でもやや控えめでお友だちのリードに合わせて遊んでいるKちゃん。『行きたかったん!!』と、その後に保育士や母親に話した素直な思いが交流を続けている事で、行動に表しやすくなったのかもしれない。家庭では、ほぼ一人っ子状態で『お姉ちゃん!!』と慕われ、頼られる状況もどこか嬉しく、同年齢のお友だちと遊ぶときは違う心地良さを感じているように見える。このエピソードでは“居場所の広がり”を強く感じた。

Kちゃんにとってはこの交流を重ねるうちに“小さい子”との関わりが日常とは違った[心の休まる場]の一つにもなってきたのかもしれないと考えた。



◎エピソード5 《一緒に遊ぶって?》 H27. 1月
(背景)

幾つもの交流を重ねていくうちに、その時々の子どもの姿から発見や驚き、気づきなどを保育士間で共有することが増えてきた。その中で3歳以上児担当が揃って“横のつながりの薄さ”に疑問、違和感を感じたことから次なる展開を求めて、『他のクラスに遊びに行きやすい方法を子ども達にしっかり提示することで今よりもっと自主的に、積極的に交流がされるのでないか?』と安全面を考慮した、方法を提示することにした。

- ・自分のクラスの先生に行く事を伝える
「〇〇ぐみへ行ってきます」
- ・行ったクラスの先生に聞きましょう
「入ってもいいですか?」



(エピソード)

3歳以上児が一同に集まった機会を利用して“異年齢交流について”子ども達と話す時間を設けた。その中で『お隣のクラスで遊ぶのってどう?』との問いに『ダメ!!』と、答える子もいて、保育士は驚いた。

(考察)

確かに3歳以上児は、園庭や遊戯室では一緒に遊び、早朝や長時間保育時、年齢別保育時にはその担当のクラスに行って過ごすのだが、日中の自由遊び時などに横のクラスの中にまでは、遊びが継続しない不思議な光景が多々あったように見えた。3歳未満児との交流を主に組みこんできたが、子ども達の中には3歳以上児、横のクラスの壁があったのだと改めて気付かされた。



(5) エピソードから見てきたもの
〈異年齢交流に大切なこと〉

*交流する双方が楽しさを味わうこと

新たな出会いの場でもある異年齢交流でこそ、お互い

に楽しさをたっぷり味わい『また次も!!』と、感じあえることが重要!!

保育者は子どもの新たな楽しみや興味に共感し、より発展するような関わり、配慮が大切。

*保育者同士の連携や振り返りを大切に

安全確保はもちろん、振り返りをする事で違う立場からの気づきや保育の喜びを共有できる。また、今後の成長への見通し・保育のあり方に繋がっていく。

*保育所全体で子どもを受け入れる

異年齢交流の方法を職員全体で検討し、共通理解を図ることで子どもの思いを同じ関わりで受け入れることができる。

*子どもが取り組みやすい方法を伝える

分かりやすく提示し進めていくことが、不安に感じてしまう子や経験の浅い保育士やパート保育士などにも有効である。

V. まとめ

今回、テーマを考えた時に取り戻したいと感じた“異年齢交流”だが、こうして取り組むことにより改めて保育を見つめ直し、職員間で話し合い、実践を繰り返す中で見えてくる一人ひとりの子ども達の姿に、また職員間で話し合う、という基本的だが原点の大切さを幾度も感じた。

“保育の喜び” = 子どもの育ちゆく姿とそれを保護者や職員など、共に喜び合える事。

“異年齢交流”は子どもの心をより豊かに培うであろう活動の一つ。

子どもの頃に心に響いた温もりは、その子にとって、貴重な経験でその先の“人との関わり”の中で活かされると子ども達の姿から願っている。

まだまだ子どもも保育士も試行錯誤しながら、進めている交流だが、これが新たな土台となり、保育所全体がクラスや年齢の枠を超えて、子ども達も保育士も関わり合い、更に交流を積み重ねていきたい。



【参考文献】

- ・保育のためのエピソード記述入門
著者 鯨岡 峻 鯨岡 和子 2007年 ミネルヴァ書房
- ・育ての心 (上)
著者 倉橋 惣三 2008年 フレーベル館

【参考資料】

- ・保育士会だより 第263号

講評：「異年齢交流から見えてくるもの～3歳未満児と3歳以上児～」

評者：井桁 容子

この実践報告は、異年齢交流という保育形態の意味を再考することで、子どものみならず保育者も保育の“喜び”“楽しさ”を感じられる保育、つまり保育の質を高めることをめざした実践の報告である。まずは、現状把握ということで保育者の異年齢交流についての意識調査を行うことで、「職員の勤務・雇用形態が多様になり意思疎通が難しい」「子どもより保育者の状況に合わせた制限しがちな保育になってきている」という課題を見出していることが実践者の振り返りの視点や心がけとして素晴らしい。また、異年齢の交流のエピソードを取り上げながら、子どもたちにとっての意味や、子どもの心の育ちを実感することは保育者としての喜びややりがいにつながるという考察も、保育者の専門性として高く評価したい。更に、まとめに表現されている「こうして取り組むことにより、改めて保育を見つめ直し、職員間で話し合い、実践を繰り返す中で見えてくる一人ひとりの子どもの姿に、また職員間で話し合う、という基本的だが原点の大切さを幾度も感じた」ということこそが、実践報告をするもっとも大切な意義である。

評者：石川 昭義

近年、保育の異年齢交流あるいは縦割り保育の実践は多くの園で取り入れられているが、当園の課題として「なぜ異年齢交流ができなくなったのか、どうすれば取り入れていけるか」という問題提起は大変良かった。

異年齢交流ができない理由を分析したり、職員の異年齢交流に対する意識を職員アンケートで把握したりしながら、実践につなげていこうとする過程がうまくまとめられている。換言すれば、異年齢交流による子どもの経験の中身の課題と異年

齢交流を担う勤務態勢の課題を両立させながら解決することの過程であったと思われる。戸惑っていたのは保育士だけでなく、子どももそうであった様子がエピソードの中から伝わってきた。

最後のまとめで、「職員間で話し合う、という基本的だが原点の大切さ」を述べている。保育士同士の連携や振り返りの大切さに改めて気づき、共通理解を持ったことは、このような実践の副産物であったかもしれない。異年齢交流による子どもの成長の姿や経験の浅い職員が異年齢交流をどのように自分のスタイルにしていたかなど、今後のさらなる研究が期待される。

評者：日吉 輝幸

少子化が進んでいる人口減少地域、比較的に子どもが多いとされる都市部であっても、子どもの健やかな育ちのためには、異年齢での関わりが大切であることは変わらない。特に人口減少地域では、保育施設のみが異年齢の子どもが集う場所として機能していると言っても過言ではない。

鉄道弘済会富山保育所では、かつては0歳から5歳の異年齢が関わる機会を多く持っていたそうだが、近年では3歳未満児の増加とともに異年齢の関わりが薄れていったとのこと。しかし、研究園の原点である保育方針に立ち返り、異年齢交流のあり方を検証した結果、異年齢交流を行わなくなった理由の多くが、保育者（大人）の都合であったことに気付いたところは、価値あるものであったと思われる。

レポートの記述においては、一時のエピソードによってその場面を考察することも必要かもしれないが、継続的に子どもの姿を観察した上での考察があると更に良かったと思う。加えて、興味深いエピソードがいくつも記されているのだが、レポートの量が多いので簡潔にまとめていただく、読みやすく参照しやすいものになると思うので、次の機会にはこれらを考慮していただきたい。

社会福祉法人 都島友の会の乳児保育 ～子どもたちの健やかな育ち～

大阪府・都島乳児保育センター／都島第二乳児保育センター 頭師綾子・岡本幸子・志水友美・川並茉奈果・潮崎早織

1. はじめに

社会福祉法人都島友の会は、幼保連携型認定こども園3か所、保育所7か所を運営し、平成27年度の在籍者は約1100名である。

各園では、1日の大半を保育園で過ごす子どもたちが、安心安全に、のびのびと生活ができるように、また子どもたちの調和のある発達を助け、生涯にわたる人間形成の大切な基礎を培う場所になるようにと、教育・保育活動を推進している。

さて当法人は昭和41年、我が国で初めて乳児保育の専門施設として、都島乳児保育センターを開設。その後、多数の入園希望者に応えるため、昭和48年には都島第二乳児保育センターを開設した。

以来、約半世紀にわたり、両園職員は、乳児保育のエキスパートとして、ノウハウを蓄積し実践してきたところである。

このため、平成26年度より両園職員が中心となって検討を重ね、自らの経験や先輩達から学び引継いだすぐれた乳児保育を集大成し、わかりやすく解説したガイドブック「社会福祉法人 都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」を作成した。

両園の概要は次のとおりである。

2. 両園の概要（平成27年4月現在）

施設名	社会福祉法人 都島友の会 都島乳児保育センター
所在地	大阪市都島区本通3-16-8
在籍人数	62名 0歳児17名 1歳児45名
職員構成	施設長 主任 保育士14名 栄養士1名 契約職員3名（保育士） 非正規職員9名 （保育士、看護師等含む）
施設名	社会福祉法人 都島友の会 都島第二乳児保育センター
所在地	大阪市都島区本通3-16-10
在籍人数	70名 1歳児15名 2歳児55名
職員構成	施設長 主任 保育士13名 契約職員1名

非正規職員10名（保育士等含む）

両園合わせて

クラス編成	0歳児	3クラス	
	1歳児	4クラス	
	2歳児	4クラス	計11クラス

3. 乳児保育ガイドブック作成するにあたって

両園は、従前よりそれぞれ保育マニュアルを活用し、子ども一人ひとりを大切に、丁寧な保育を実施してきたところである。しかしながら、両園合わせるとクラスは0～2歳児で11クラスあり、約60名の保育士がいるため、しっかりと伝えあっても、クラス間や保育士間で手順に若干の違いやずれがあった。

そこで、保育内容委員会・リスクマネジメント委員会・サービス向上委員会・食育委員会の職員が中心となり、日々の保育について、授乳・食事・睡眠・排泄などそれぞれの場面での保育士の関わりや保育の進め方の統一を検討した。

保育の中で行っていることのひとつひとつ、細かなところまでを拾い上げ、年齢ごとの発達に応じた援助方法を話し合い、さらに、生活面だけでなくあそび面での援助も必要だろうと考え、項目を整理した結果、ガイドブックは次の15項目に沿って構成することとなった。

食事

- ・調乳方法
- ・授乳方法
- ・哺乳瓶の洗浄方法
- ・保育所における離乳食の進め方
- ・給食のメニュー
- ・配膳方法
- ・アレルギー児対応方法
- ・食事援助方法
- ・箸への移行方法

排泄

- ・布おしめのたたみ方
- ・おしめの交換方法
- ・おしめの便の交換方法
- ・下痢便の処理方法
- ・トイレトレーニングについて
- ・トイレでの排泄(女児・男児)

制作遊び

発達段階	あそび	留意点
1歳6ヶ月～2歳	<p>＜リトミック・音楽＞</p>  <p>＜楽器あそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 思い切り身体を動かして表現できる空間を確保する。 保育士の動作を見て真似をする喜びと力を育てていくようにする。 一人ひとりの子どもの興味や自発性を大切に、一言に経験させようとせず、自ら表現しようとするように促していく。
2歳～3歳	<p>＜うた＞</p>  <p>＜リズムあそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 発達状況に応じて適切なこぼし、リズムの曲を選ぶ。
3歳～4歳	<p>＜楽器あそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 思い切り身体を動かして表現できる空間を確保する。 リズムにのりやすい曲を選び、楽しめるようにする。
4歳～5歳	<p>＜楽器あそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 楽器を使ってリズムを表現する楽しさ知らせ、色々なリズム打ちをしながら表現する楽しさを育てる。

発達段階	あそび	留意点
0歳児	<p>＜指スタンプ＞</p>  <p>＜お花紙＞</p>  <p>＜タンポ＞</p>  <p>＜筆スタンプ＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 指に紙の具をつけてスタンプにする。指に紙の具がつくと気持ち悪くて嫌がる子どもには、無理しない。指で口に入れて噛めたい時期なので、紙の具が口に入ってしまうよう気をつける。 お花紙をしゃくしゃくと丸める。感触を楽しむ。 タンポに紙の具をつけて画用紙にポンポンとたたき、色をつける。 筆のタイヤに紙の具をつけて、走らせるように色をつける。
1歳児	<p>＜指スタンプ＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 保育士に援助されながら紙具の感触を楽しむ。
2歳児	<p>＜お花紙＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> お花紙の感触を楽しむ。
3歳児	<p>＜タンポ＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら物をつかむ。
4歳児	<p>＜筆スタンプ＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 筆を走らせる。

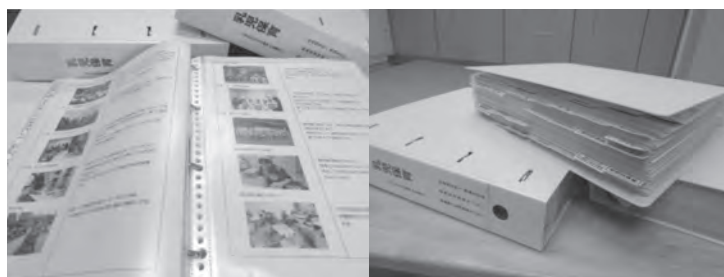
リズム遊び

発達段階	あそび	留意点
6ヶ月	<p>＜保育士の歌いかけ＞</p>  <p>＜音の鳴る玩具＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 保育士の歌声や低い音楽を聴く機会を豊富にする。 好きな歌や音楽は繰り返すようにし、満足感を味わえるようにする。 子どもが興味している時に音に対する興味が育つように優しく語りかけたり、色々な音楽を生活の中で自然に流したりする。
7ヶ月～1歳6ヶ月	<p>＜音の鳴る玩具＞</p>  <p>＜うた・手あそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 玩具を握った時に他の子どもに当たらないよう広い場所を確保する。 子どもの手の届くところに手作りの楽器や音の出るものなどを置き、十分に遊ばせてあげるようにする。
1歳6ヶ月～2歳	<p>＜うた・手あそび＞</p> 	<ul style="list-style-type: none"> うたははっきりと歌い、リズムも大きくし、分かりやすくするようにする。 聞き取りやすい音やリズムを鳴らす。

おもちゃの出し方・消毒方法

●おもちゃを口に入れることもあるので、清潔を保つ為に消毒を行う。

＜おもちゃの出し方＞	＜消毒方法＞
	<ul style="list-style-type: none"> おもちゃを出す際は、壊れないようゆっくりと出すようにする。 一ヶ所に出すと、子どもが重なり取り合いなどが起こる可能性があるため、出て出す・積に取りこくなど工夫をする。 おもちゃが破損していないかなど、定期的に点検する。
	<ul style="list-style-type: none"> おもちゃ拭きタオルとおもちゃ消毒タオルを用意する。
	<ul style="list-style-type: none"> 濡らして絞ったおもちゃ拭き用のタオルでおもちゃを一つずつ拭き、おもちゃ消毒用のタオルの上に置く。 置いたおもちゃにエタノールをかけ、挥发させる。
	<ul style="list-style-type: none"> 感染症などが流行している時期には結核本立てで置べ、エタノール消毒をする。 ぬいぐるみやハンカチ、靴など布製の物は洗濯をしたり、日干しをする。
	<ul style="list-style-type: none"> ブロックなど、濡れにくいおもちゃは、水洗いをし、おもちゃ拭き用のタオルに置べ、エタノールをかけ、挥发させても良い。



5. 両園の特色

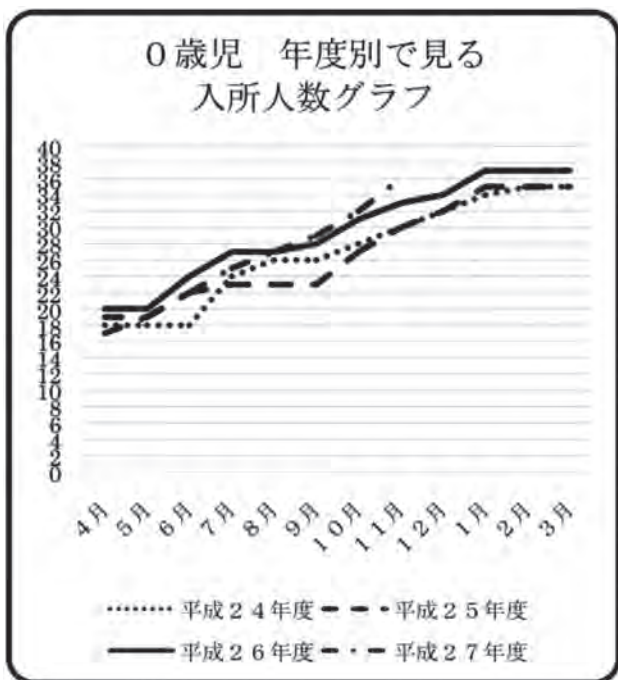
ここで、乳児保育に携わってきた両園の特色を紹介する。

●待機児童の受け入れについて

4月の一斉入所時ではなく、年度の途中で保育所に入所希望者が多い。保育所は生後6か月から入所条件となるが、4月の時点でまだ6か月に満たない子どもやこれから生まれる子どももいる。仕事への復帰を考える母親にとって、途中入所児を受け入れるということは、重要な役割を担っていると言える。

しかし、実際には4月の段階で定員が満員となる保育所が多い中、途中入所児の受け入れを行っている園は少ない。その中でも、都島乳児保育センターが多くの受け入れを行ってきたことは、大きな特色であると言える。毎年20名程の年度途中での受け入れを行える園は都島区内でも他にはない。

- ・都島乳児保育センター 0歳児
途中入所児受け入れの人数推移



多くの待機児を受け入れするにあたり、子どもの負担にならないようによりゆったりと過ごせるよう、職員の配置や環境を整えていく。また保護者にも事前に繰り返し伝えて理解してもらい、保育を行っている。

●地域の在宅の子育て家庭に向けての支援

都島乳児保育センターと都島第二乳児保育センターでは、地域の在宅家庭の親子に向けて園内開放（0・1・2歳児とあそぼう）を行っている。

保育園を知っていただき、同じ年齢の子どもと過ごす機会をもっといただく。保育園について質問を受けたり、日々の悩みを相談できる機会でもある。特に0歳児とあそぼうは、毎回募集定員がすぐに埋まってしまう状況で、年度途中の入所を考え参加する方も多く、待機児の入所に希望を持たれている。

また、一時預かり事業である「すくすく」では、就労、傷病、出産、介護、リフレッシュなどによる一時的に日々の家庭保育が困難となる児童を受けている。

さらに、地域子育て支援センターである「のびのび」では、地域の方に向けて部屋を開放し、あそび場を提供すると共に、相談事業などを行い、在宅における子育てを支援している。ここでの利用が、新年度の入所及び途中入所に繋がることもあり、職員間で連携をとっている。

●地域貢献事業研修センターと連携した子育て支援

社会福祉法人都島友の会では、子育て・障がい・介護などの相談に応じるセンターを設置している。子育てにかかわる様々な課題、不登校、さらには保護者のケアなど、卒園してからもセンターと両園が日頃から連携を密にとり、地域福祉の推進と向上、公益的取り組みの推進に力を入れている。

6. ガイドブック作成から学んだこと

両園は建物が隣接しており、0～2歳児に対し日頃から保育方法を統一しようとしてきたが、今回ガイドブックを作成する中で施設間の違いが明らかになった。

このため改めて、日頃の保育の手順を細かく振り返った。

講評：「社会福祉法人都島友の会の乳児保育～子どもたちの健やかな育ち～」

評者：井桁 容子

乳児保育のエキスパートとしての蓄積をガイドブックとしてまとめた報告は、益々乳児保育が増えてくる社会状況において大変意味深いものである。また法人として、保育観や保育方法の差異のない共通理解をしていくためにも有効であろう。残念ながらそのガイドブックの肝心な内容が十分に伝わってこないために評価が難しい。さらに、分かりやすくマニュアル化されることが、ヒトとしての基礎づくりとなる乳児及びそこに関わる保育者一人ひとりの持つ個別性、特性、文化性などへの尊重や応答性についての矛盾につながらないように注意が必要に思われる。若い保育者世代が、マニュアルの中で育ってきたために、応用がきかないことが危惧されており、また、これからの教育が『非認知的能力』を育てていく必要性を求められている点を考慮し、子どものみならず保育者自身も、目に見えない心が育つ保育となるよう期待したい。

評者：小林 芳文

この実践報告は、報告者の所属する法人による「乳児保育マニュアル」に対して、日頃の保育にこれをどのように活用しているか、特に乳児保育ガイドブックを作成するうえで、このマニュアルが、如何に役立っているかをまとめたものと受け止めました。保育士が日々の保育の合間で、一人ひとりの子どもに寄り添った保育の計画を作成することには多くのエネルギーと時間がかかります。研究報告者の述べているマニュアルがあることで、保育の中で行っている細かなところまで拾い上げられること、発達に応じた援助方法も話し合えること、遊びの援助も整理できることなど保育士の

専門性を高める上でも参考になるものと思いました。

この研究報告のなかで、残念ながら添付された資料（ガイドブック）の活字が余りにも細かく判読が困難であったことです。今後文書の作成において参考にしていただければ幸いです。

評者：岡田 澄子

このタイトルを見た限りでは、ガイドブックだとは思いませんでした。もっとインパクトのあるタイトルにしてもよかったのではないかと思います。

2園で130人もの0、1歳児をどのように保育するのかとても興味があり、なるほどガイドブックは必要だと感じました。しかも保育内容委員会などの組織がありそれぞれの委員が中心となり検討したとのこと。どういった時間にどのように検討していったかという過程も記載されているのもっとよかったと思います。出来上がったガイドブックは、法人内の各施設の乳児保育にも活用しているようですが、全職員が携帯しているのでしょうか。

乳児保育50年のエキスパートとしてノウハウを蓄積し実践してきた都島乳児保育センターです。多くの保育園の模範となるよう更なる研鑽に期待します。

地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを！

福岡市・多々良保育園 大神 敬一

1 はじめに

保育園の社会的な使命は、保育の質の向上を目指し、子どもの最善の利益を守り、子どもたちを心身共に健やかに育てる責任を果たすことにあると考える。また、保育園の生活の基本は、子ども一人ひとりの健康と安心・安全の確保にあると受け止める。そのためには、保育においては、(鍛える)(育てる)(教える)視点での教育指導が必要である。

もちろん、保育所保育指針に規定された保育の目標や各領域のねらいと内容等を逸脱することは許されないが、保育所保育指針に準拠しながら、保育園と地域の実情に応じて、地域の実態に即して保育課程の編成に創意・工夫をこらしていく必要があると考える。

2 地域との連携のあり方について

我々民間保育園は、地域にあっての保育園であるので地域に対して保育園の存在感を実感してもらい、保育園の存在意義と役割を地域住民の方々に理解してもらい、協力をもらうことは極めて重要である、そして地域の保育園として多方面で利用され地域に貢献することも保育園に課せられた社会的責任であると受け止める。

また、地域には多種多様な特技を持っておられる有能な人材がたくさんいらっしゃるので、保育園に招いて、その地域力としての特技を披露、提供してもらうことは、保育のあり方に、変化をもたらし、子どもたちに意欲を与え、保育の質を高め、子どもたちの最善の利益を保障することにつながると考える。

そこで、本園が子どもたちの元気・やる気・根気づくりを目指して、保育の一環として取り入れている相撲を事例に、地域力をどのように活用したかについて述べてい。

3 実践事例―「すもうに、チャレンジしよう。やればできる！」

(1) 「すもう」導入の意図

「すもう」という日本の伝統的な国技を保育の一環に取り入れることで「礼儀作法を身につける」「全力を尽くす」「相手を思いやる」「勝負にこだわらない」「一人はみんなのために」「みんなは一人のためにがんばる」等のスポーツマンシップの素地を身につけることができる。

(2) 「すもう」を導入するための環境整備

- ① すもうのルールを理解する。
九州国技振興会から、「相撲指導の手引き」を提供してもらい、保育士みんなで輪読会を持ち、すもうのルールを理解する。
- ② 子ども用の締め込み(まわし)を準備して、締め込み(まわし)の付け方の実習をする。そして「いつでも」「だれでも」「どのクラスでも」すもうがとれるような体制をつくる。
- ③ 園内相撲大会を開いて、子どもたちのすもうに対する興味や関心を高める。
- ④ 保育園相撲大会にも参加する。
- ⑤ 地域の方々の協力をもらって、土俵をつくる。

(3) すもうを保育内容に特別活動として実践するための工夫や留意事項

- ① 毎日の保育の中に「すもうあそび」を取り入れる。
発達段階に応じて、おしくらまんじゅう、たちずもう、うでずもうなどでいつでも、どこでも、だれとでも「すもうあそび」をして、1対1の遊びのおもしろさ、楽しさを実感させる。
- ② 地域の皆さんで作ってもらった本格的な土俵を使って、クラスごとに簡単なすもうのクラスマッチを定期的に関き、土俵の大きさ、土俵の形や裸足ですもうをとる感触等を味わわせる。
- ③ 相撲大会に出る代表選手の大きい組さんが練習するときは、各クラスのみんなは、練習を見学し、応援をしたり、選手の皆さんの一生懸命に頑張っている姿から、「よし、自分も大きい組さんになったら、絶対に代表選手に選ばれるようにがんばるぞ」という強い気持ちを持つように仕向ける。
- ④ 相撲大会前日には、壮行会を開く。その流れは、まず、在園児に、練習の成果を披露し、その後に土俵前に出場全選手が整列して、自己紹介と決意表明の出席を与える。そして、在園児代表と園長が「優勝をめざしてがんばってください」の激励の言葉をかけて壮行会は閉じる。

(4) 「やればできる！」を相撲大会で実証

- ① 第15回福岡地区保育園相撲大会で総合優勝…平成27年6月20日(土)
*団体戦では、多々良保育園Bチームが優勝し、個人

戦でも多々良チームの代表選手が優勝し、団体戦・個人戦総合優勝の栄誉を手にすることができた。

② 第1回鳥飼八幡宮こども相撲大会で優勝・準優勝独占…平成27年9月19日(土)

*この大会は団体戦のみの大会であったが、多々良保育園A、Bチームが優勝、準優勝の栄誉に輝いた。

(5)「やればできる!」を相撲大会で実証できたのも「地域力」のおかげ

保育園の園児が、園庭に円い白線をひいた即席の土俵ですもうをとる光景を見た近所の有志の方々が「園長さん、すもうは、本物の土俵でとらんと強くならんばい。園庭に土俵を作るとよかばい。自分達がボランティアで作ってあげますたい。」との有難い申し出で保育園に土俵ができたのである。

地域には多種多様な特技を持ち、色々な仕事に携わっている人がおられるので、わずか2日足らずで、立派な土俵ができたのである。(別添資料を参照)

保育園では、運動会等の大きな野外行事等でも、地区の方には多大のお世話になっているが、土俵作りでも地域力に大いに発揮してもらったのである。

4 「地域力を生かして元気・やる気・根気づくりを」目指す保育の成果

地域力を駆使して保育園に相撲の土俵をつくったおかげ

で保育園の相撲熱も高まり、保護者の関心も深まり、波及効果は大きいと実感している。

相撲大会では、手に汗握る素晴らしい熱戦を見て、保護者が我が子の頑張る姿に涙を流して声援を送られる感動的な場面に数多く接した。

子どもたちは、相撲を通して「礼儀作法を身につけ、自分の力を信じて全力を尽くし、友達を思いやり、協力することの大切さを理解し、実感できたと確信するものである。このことは子どもたちの生きる力の基盤作りに寄与すると思うのである。

5 今後の展望

保育園の園長は、日常の保育つまり養護と教育の中で、いかにして「保育の質を高め、子どもの最善の利益を守るか」について、努力・傾注している。自然と関わる体験の機会を増やしたり、相撲などの思い切り身体を動かし競い合う活動を取り入れて、今後も元気・やる気・根気づくりを目指す保育を創意工夫していきたい。

今後も地域社会との連携を深め、地域の人材活用等の地域力を本園の保育目標の具現化に生かしていきたいと考えている。そして地域に貢献し、地域に必要とされ、地域に開かれた保育園づくりに努力精進していきたい。

添付資料1 相撲大会関連記事①

H27.6.21 西日本新聞



福岡地区保育園相撲大会(20日・久山町、福岡久山相撲場)

福岡地区保育園相撲大会 12保育園から96人が出場。(読売新聞西部本社など)が20日、久山町の福岡久山相撲場で行われた。団体戦(1チーム6人)には▽団体 ①多々良B②みそ
12保育園から96人が出場。土俵上で元気よく体をぶつけ合う姿に、客席からは歓声や拍手がわいていた。

多々良Bが優勝

福岡地区保育園相撲大会

▽個人 ①えびつかかんだ(多々良)②あべたいし(みとま)③くわはらゆうご(光和)④ほりうちほるゆき(みそら)

園児65人はっけよい 鳥飼八幡宮で相撲大会



声援を受けて必死に相撲をとる子どもたち

福岡市中央区の鳥飼八幡宮で、第1回こども相撲大会が開かれた。市内の保育園や幼稚園から計9チーム65人が出場し、元気いっばいの取組を見せた。

同八幡宮は、大相撲九州場所ので九重部屋（現・大相撲九州場所）の宿舎になり、境内に土俵もあることから大会を検討。教育的視点で相撲を広めている九州国技振興会の設立30周年記念行事の一環として、初開催することになった。

園児たちは6月頃から練習会に参加し、まわりの付け方や相撲の作法などを教わった。大会は5人1組の団体戦で行い、多々良保育園B（福岡市東区）が優勝した。同八幡宮の山内圭司・権補宣は「子どもたちにも相撲の良さを知ってもらう機会として、これからも続けていきたい」と話していた。

添付資料3 相撲大会関連写真①



平成27年度第15回福岡地区保育園相撲大会参加選手です。

- 1 12名の選手は、保育園の予選を勝ち抜いて選ばれた代表です。
- 2 大会に出場する人は、保護者の「承諾書」を大会本部に提出しています。
- 3 12名の選手は、多々良保育園の代表としてのほこりを体いっぱい感じています。

添付資料4 相撲大会関連写真②



きついけれども、準備運動でも「四股」を踏んで、足・腰を鍛えます。

- 1 すもうの練習で、けがをしないように準備運動は、しっかりします。
- 2 みんなで、声を掛け合ってがんばります。
- 3 汗をかいた後の水筒のお茶が、とてもおいしいです。

添付資料5 相撲大会関連写真③



第15回福岡地区保育園相撲大会で、個人戦・団体戦とも完全優勝しました。

- 1 多々良保育園Bチームが見事に優勝しました。個人戦も優勝しました。
- 2 「自分が負けても、次の人が勝ってくれて、すごくうれしかったです。」
- 3 「がんばって、みんなでチャレンジすれば勝てることがわかりました。」

添付資料6 地域力による土俵作り関連写真①



地域の皆さんのボランティア活動で土俵作りが始まりました。

- 1 何台ものダンプカーで、土俵の土を運んでくれました。
- 2 建設用具を持ち込んで、いろいろな用具を使って、盛り土をしました。
- 3 だんだん、土俵の形に仕上がっていくのが、とても楽しみでした。

添付資料7 地域力による土俵作り関連写真②



土俵に埋め込む「たわら」も近所の人たちが作ってくれました。

- 1 稲わらを束ねて、力を合わせて、土俵の「たわら」作りをしました。
- 2 「たわら」が完成した時は「できたあっ！」の歓声が響き渡りました。
- 3 完成した土俵の「たわら」は、実に、見事な出来栄でした。

添付資料8 地域力による土俵作り関連写真③



地域の方々のご協力で見事な土俵が完成しました！

- 1 完成した土俵に「御神酒とお塩」を上げて、今後の練習の安全を祈願しました。
- 2 理事長や園長から地域の皆さんへ感謝とお礼を申し上げました。
- 3 完成した土俵の前で、記念写真を撮りました。皆様、お疲れ様でした！

講評：「地域力を特別活動に生かして、元気・やる気・根気づくりを！」

評者：石川 昭義

地域の人たちの協力によって土俵を作り、保育の内容が作り上げられていく様子が描かれている。報告書としては、取組の経過説明にとどまっている感が否めないが、保育の内容は、保育士の力のもとより、地域の人々と共に作り上げ、実践していくものであることを教えてくれる報告である。

子どもの発達段階に応じて、「おしくらまんじゅう」、「たちずもう」、「うでずもう」などの遊びを保育に取り入れるとともに、本格的な土俵を作って、園全体で、すもうに取り組む様子が伝わってくる。

すもうを導入した意図として、「礼儀作法を身につける」、「全力を尽くす」、「相手を思いやる」、「勝負にこだわらない」などの「スポーツマンシップの素地を身につけることができる」と説明がなされている。スポーツには勝ち・負けが付くルールの中で、これらの意図が、子どもたちにどのように身に付いていったのか、子どもの日常生活の中でどのように生かされたかについて、エピソードとともに考察が進むことが期待される。

評者：岡田 澄子

近年、どの自治体での「地域力の向上」と言っています。地域力を生かすに当たり、なぜ「すもう」を選んだのか興味がありました。福岡市では大相撲が開催されるからでしょうか。その点が詳しく記載されていないので、想像することしかできないのが残念です。

「すもうは、礼儀作法を身につけ、自分の力を信じて全力をつくし、友だちを思いやり、協力することの大切さを理解し、実感できるもの」とあります。子どもたちは日頃の練習の成果をいかん

なく発揮し、チームワークで優勝を勝ち取り、「やればできる」を実感したことでしょう。羨ましい限りです。

ただ、本格的な土俵を作ってくれた地域の人たちはどんな人で、日頃からどのように協力しているのか等の詳しい報告がなく残念に思います。どのように地域の人たち、地域力を保育園に取り入れていくのか等、地域の中の保育園として、連携や交流等についてのご報告を伺えたら嬉しいです。

評者：酒井 かず子

「保育園は迷惑施設」の風評を払拭するためにも、地域の方たちに保育内容を広報し、自園の地域力を保育内容に生かしている様子を紹介することが意義あるとし、実践報告をされたことに興味を持ちました。同時に、「鍛える」「育てる」「教える」の教育指導が必要であるとの記載には、少々驚きました。

子どもたちは相撲を通して礼儀作法を身につけ、自分の力を信じて全力を尽くし、友達を思いやり、協力することの大切さを理解し実感できたことは、困難にぶつかったときも、自分の力で乗り越えることの基礎ができたのではないかと思います。何より、子どもたちの嬉々とした姿に思わず顔がほころんでしまいました。

また、土俵づくりも地域を挙げて作り上げ、地域の皆様の土俵に対する愛着やその土俵で活躍する園児への愛着も育ち、地域挙げての相撲大会にまで発展したことは、誰にでもできることではなく、理事長先生や園長先生の地道な地域活動により、このような形になったのではないかと推測しました。

水・砂・土と触れ合いの中で見えてくる子どもの思い、私たちの思い ～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～

北九州市（研究会員）・門司保育所 中島陽子・福田久美子

I. はじめに

日常的に自然の中でダイナミックにあそぶ経験が少なくなっている現在、保育園での戸外あそびは、子どもの育ちにとって欠かせないものとなっている。特に戸外での水、砂、土との触れ合いは子どもの心身を開放的にし、伸びやかな育ちを促すエッセンスになると考え、今回の事例研究では、戸外でのあそびを通しての活動の発展・子どもの心情の変化を追う中で浮き上がってくる問題点を職員間で共有し、保育の振り返りを行い、それをまた実践に返し、共に育ちあうことを目標にしていきたい。

II. 研究の目的

- ・水・砂・土と触れる時の気持ちよさを通して、エピソードから見えてくる子どもの姿に着目する。
- ・子どもとじっくりコミュニケーションをとりながら「させる保育」ではなく、子どもの気づき・発見に共感し、共に育ちあう保育を目指す。

III. 研究の方法

- ・水、砂、土と触れ合うことで生まれる、子どもの表情・心情・育ちをエピソード記述の方法で記録する。
- ・「保育実践」→「エピソード記述」→「保育カンファレンス」→「リライト」→「保育実践」という一連のプロセスを経て、保育の振り返りを行う。

IV. 事例と考察

【事例1】

2歳児男児A…「行ってきま～す」

平成23年12月17日生まれ

父・母・姉・兄・二世帯住宅で祖父母も同居している7人家族。姉兄は小学生。

2歳児クラス18名 保育士3名

<背景>

登園時間が早く降園時間は遅いので保育時間が長く月曜から土曜まで毎日登園。就寝時間が遅いようで、朝登園すると機嫌の悪い日が多く、ゴロゴロ横になっていることも多い。11時前後になると眠くなって活動の途中でウトウトし始め、昼食途中で寝てしまう毎日である。

生活・活動両面で友達と一緒に活動から外れてしまうことが多く、その都度個別に対応するが、なかなか活動に入ろうとせず苦慮する状態である。無理に活動に誘わず、好きなように行動させ、保育士が傍で見守り一緒に

行動しているとたいへん機嫌よくしている。友達との活動が楽しくなるようにと色々工夫しているが、気に入らないと目を瞑ってひっくり返って動こうとしない様子が見られる。

<エピソード>

戸外あそびの時のA君は、アスレチック遊具・三輪車・砂場等忙しく移動して友達と関わりをもってあそぶ様子はほとんど見られず、自分の気の向くままに移動しているといった様子である。

5月の外あそびをしている時のこと、A君は最初いつものように一所には留まらず、あちこち移動しながら過ごしていた。私はB君、Cちゃん、Dちゃんと砂山を作ったり、型抜きをしたりして「カレーできたよ」「ご飯よ～」などままごとを楽しんでいた。その時三輪車に乗ったA君が通りがかり、私とB君、Cちゃん、Dちゃんとのやり取りを見ている様子だったので「A君どこいくの？」と話しかけた。特に目的の場所はなかった様で少し間をおいて「あっち行ってくる」と答えが返ってきた。「あっち行くの？行ってらっしゃい」と声をかけるとA君はそのまま立ち去った。しばらくするとA君が三輪車に乗って戻ってきた。戻ってくるということが今まで無かったので、少し驚いたが「A君おかえり」と声をかけた。するとA君は「これどうぞ」と持っていたバケツを渡してくれた。「ありがとう。これカレーかな」と声をかけると「カレーよ」という答えが返ってきた。「A君がカレー持ってきてくれたよ」と一緒にあそんでいた友達に声をかけると「わぁ～おいしそう」「少し下さいな」など友達が集まってきた。A君は集まってきた友達に機嫌よく砂のカレーを分けてあげていた。

友達と接するときには、おもちゃの取り合いや場所の取り合いが多かったため、このように穏やかに友達と楽しんでいるA君の様子を嬉しく感じながら見守った。砂のカレーを分けてしまうとA君は私の側に来て「先生、行ってきま～す」と笑顔で言って三輪車に乗り込んだ。「行ってらっしゃい。今度はどこに行くの？」と声をかけると「カレー持ってくる」と笑顔で返事が返ってきた。「カレー」という言葉に、またカレーを持ってここに戻ってきて、友達に分けてあげる様子が予想できた。「A君またカレー持ってきてくれるってよ」「楽しみね」と一緒にあそんでいた友達に話しかけると、「A君大盛りね」「行ってらっしゃい」と出かけていくA君の後ろ姿に次々と声をかけられた。友達の声を背に受けながら弾んだ様子

で三輪車を走らせていくA君の嬉しそうな様子を友達と笑顔で見送った。

<考察>

あの時A君は、私とB君、Cちゃん、Dちゃんとのやり取りを見ている様子だった。友達の楽しそうな姿に自分を重ねて一緒にあそんでいる光景を思い浮かべていたのかもしれない。「いってらっしゃい」「いってきます」はよく子ども同士・子どもと保育士の間で使われている言葉であるが、A君は今までそのやり取りが誰ともできていなかった。友達や保育士が「いってらっしゃい」「いってきます」とやり取りしているのを聞いて、本当は自分も言ってみたくて羨ましく思っていたのではないかと感じた。2歳児は言葉を使って意思の疎通を大きく欲する時期である。そのことを考慮すると、その子が、「自分もあの言葉を使って友達や先生とやり取りを楽しみたい」と感じている言葉をキャッチしておくことの大切さを感じた。私は自分の思いだけで「友達の輪の中に入れよう。友達と一緒に行動ができるようにしましょう」と躍起になっていたが、大切なのはそのことではなかった。A君の気持ちに寄り添い、欲している言葉を発することでしか心は動かない。今までにない関わりが生まれ心が触れ合った手応えを感じることが出来た。この経験を大切に考えることで、A君との関わり方が変わり、そのことでA君の様子も少しずつであるが変わってきたように感じる。A君と一緒に過ごすときには言葉や仕草、表情から心情を感じるとともに、視線の先にあるものは何か、今欲していることは何かを敏感にキャッチすることで心に共感できる工夫をするようにした。少しの時間ではあるがブロックで剣や列車を作って友達とイメージを共有してあそぶ姿が見られるようになったことは大きな変化である。

【事例2】

1歳児女児E…「Eちゃんのまいまい」

平成24年7月20日生まれ

家族構成は父、母、本児の3人家族である。

1歳児クラス18名 保育士4名

<背景>

0歳児からの進級児で人見知りもなく、クラスの中でも体格がよく友達を呼ぶのに肩をトントンしただけで、小柄な友達が転がってしまうくらい力強い本児で、給食は好き嫌がなく、なんでも食べている。

歌や手あそびが大好きで、近くで保育士が歌っていると寄ってきて一緒にしたり、「まだまだして」とリクエストをせがむ場面もある。言葉（単語）がまだ、はっきりと出ないので、単語の最後だけを発している。母親が「めっ」と怒っていたのを「あい」と言うようになり、次に「まい」と発し、Eちゃんの思ったのとちがうことをすると「まい、まい」と手を振って怒っている。言い出したら聞かないEちゃんに手こずる母親をよく見るこ

とがあった。

<エピソード>

進級して2ヶ月、前年度からの継続の担任にはEちゃんからかわりを持つと近づいて行くが、今年度から担任になった私にはなかなか親しく接してくれずにいた。そんなある日の戸外あそびをしていた時のこと、帽子をかぶり外へ出ていくEちゃん。固定遊具よりも砂遊びが大好きであるEちゃんは、いつものように砂場へ直行した。

砂場に置いてあるバケツやスコップなど砂を入れてあそぶ容器の中から、自分の好きな物を見つけ片手にスコップを持った。その容器に砂を入れたり、山のように砂を盛ったり砂あそびを楽しんでいた。その時、親しくなるきっかけにと私が型入れの容器に砂を入れ、「プリンどぞ」と言って見せると、Eちゃんは手でその砂のプリンをぐしゃぐしゃにして、他の子も一緒とはいえEちゃんの手を見ることが出来た。するとEちゃんが、頭の上に人差し指を左右に立てて何かを言ってきた。私は何を伝えようとしているのかわからず「何、ウシ？」と聞くと「まい、まい」と手を振って違うと言っているようだった。また、同じように頭の上に指を立てて伝えようとしていた。鬼は怖がるから鬼のつのではなさそう。アンパンマンの大好きなEちゃん、型入れの容器の中にバイキンマンがあったのを思い出して「バイキンマンの？」と言うと首を縦に振り、バイキンマンの型入れとわかった。あわてて探しに行くと、Eちゃんもついてきて、一緒に探し始めた。「あった」と私が取り上げるとバイキンマンではなくドキンちゃんだった。Eちゃんに渡し、「まい、まい」と怒って投げ捨てるかと思っていたら、怒らずに2個あったのを一つ友達にあげていた。砂を入れてと来たので入れてみたが、きれいに輪郭ができたものの、細い角が1本のドキンちゃんにEちゃんは喜びもなく見つめていた。やはりもう一度探そうとおもちゃの入っているカゴを見に行くと、Eちゃんもついて来て、かごの向こう側にバイキンマンの型入れが転がっているのが見えた。「バイキンマン、あったよ！」と見せると、とてもうれしそうに手に取って、さっそく砂を入れてと私に持って来た。ドキンちゃんと同じ、角は細くて顔ははっきりしていなくても、2本の角があるからか、とてもうれしそうなEちゃん。作っては壊すといったあそびを何度か楽しんでいた。その時、他の保育士の「さあ、片づけましょう」と言う声が聞こえてきた。私が、「Eちゃんお片づけよ」と言うと、「まい、まい」と手を振って拒否した。「また、今度あそぼうね」と言っても「まい、まい」と言うばかりだった。やっと見つかったバイキンマンの容器であそぼうと意気込んでいたEちゃんにお片づけをすすめるのが酷になり、Eちゃんはしばらくそのままあそばせておいて、私は勝手に作った歌を歌いピョンと跳ねながら片づけを始めた。そんな私の様子を見ていたのか、しばらくするとEちゃんは片づけを始め

た。側にいた子どもたちにも「ないない、まい、まい」と何度も言っていた。Eちゃんは落ちているおもちゃを拾い、最後にバイキンマンの型入れを片付けて、その後も機嫌よく足を洗って部屋に入ってしまった。

<考察>

4月に進級し担任保育士も変わり、クラス全体としてはやっと落ち着いてきたが、Eちゃんとはまだ打ち解けていない部分も感じられ、出来るだけ多く接する機会を持ち信頼関係を築いていきたいと思っていた。しかし、単語もはっきりしないし語尾しか言わないEちゃんの思いを汲み取って気持ちを共有することができずにいたことで「まい、まい」と怒らせてしまうことも多かった。関わりをもとうと何か一緒のあそびをしようとタイミングを計るもののEちゃんも前年度からの担任に行ってしまうことが多く、なかなかじっくりと一緒にあそびに入ることができないでいた。この日の一生懸命身振り手振りで伝えようとするEちゃん、そしてEちゃんから「バイキンマン」のリクエストに応えることで、関わりが深まることを期待した私にも、楽しみ始めたばかりでお片付けとなったのはとても残念で、バイキンマンの型入れを名残惜しくて手放せない様子なのがよくわかった。Eちゃんもそんな風を感じたのか、それとも他の子にバイキンマンをかたづけられなくなかったからか、どちらにしても自分から最後の最後にバイキンマンを片付けて自分から足を洗いに行ってくれたことは、今まで毎回のように「まいまい」と言いながら仕方なく足を洗いに行っていたEちゃんにはめずらしいことだった。私もなんとか思いに応えようとし、Eちゃんもまた私に応えてくれたかのように片付けだし足を洗いに行き、そのようなかわりを持たせたことにびっくりもしたが嬉しく思った。言葉が言えるからすべて伝わるのではなく、自分の気持ちをわかってもらえるか、そしてわかってもらえるか、私たち保育士の受け止め方の大切さを感じた。言葉

をひきだすよう保育していくのももちろんの事だが、思いを「聞こうとすること」「受けとめること」も大切にしていくことが必要であると思った。はじめは困惑していたが、今回のことで初めて言われることがうれしく思えてきた。言われなくても思いをくみ取ることもちろん大切なことだが「まいまい」と言ってくれることも関わりの一つで大切な事だと思うようになった。

V. まとめ

エピソード記述の方法を用いて記録を書き、保育カンファレンスでは、他の保育士のエピソードをグループに分かれて読み合い、どう感じたのか意見を出し合った。それぞれの捉え方を否定するのではなく、別な見方をすることに発見があり、改めて気づくこともあった。今回の研究で、子どもの心情や変化に寄り添い、子どもとの接面を見逃さずにかかわることの大切さを職員全員が感じた。

又、子ども達は自然の中という解放感から表情や心情が大きく表れたように思う、それゆえに「させる保育」ではなく、子どもたち自身があそびを無限に広げていくことで、伸びやかな育ちを促すのではと感じた。そして、それを私たち保育士も子どもたちと共に感じ、共に育ち合う保育を続けていきたいと思う。また、このように子どもの心情や変化に寄り添い子どもとの接面を見逃さずにかかわることが保育士の本来の専門性であると考えている。

【参考文献】

- ・ 鯨岡 峻／鯨岡 和子著
「保育のためのエピソード記述入門」
ミネルヴァ書房（2009）
- ・ 鯨岡峻先生の研修資料より
「保育の変革期の中で、あらためて保育の基本を考える」
「エピソードを通して子どもの心の育ちを描く」

講評：「水・砂・土と触れ合いの中で見えてくる子どもの思い、私たちの思い
～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～」

評者：井桁 容子

実践報告及び実践研究の基本的な注意として、個人情報への配慮が必要であり、事例のデータにその配慮が十分ではないように思われるので、今後注意をしていただきました。

実践内容としては、応答的な保育者の対応がなされていることが伺える。さらに「子どもが感じていることばをキャッチしておくことの大切さを感じた」「保育士の受け止め方の大切さを感じた」など、事例を通しての保育者の気付きも質の高まりに繋がる感性が感じられた。「させる保育」ではなく、子どもたち自身があそびを無限に広げていくことで、のびやかな育ちを保障していく実践の姿勢も評価したい。ただ、テーマと考察のズレがあり、惜しまれる。良い実践を的確に表現する力も保育者にとっては求められる力でもあり、それらを踏まえて再度報告されることを期待したい。

評者：小林 芳文

この実践報告は、自然の中での子どもの遊びが、少なくなっている現在、水・砂・土という自然に触れることの大切さを、事例を通して分析考察したもので、エピソード記述等の展開に興味をもって読ませていただきました。

「触れあいの遊び」が、各事例にどのように影響しているかを記述しています。欲を言えば、これらの事例を取り上げた根拠となる背景について、子どもの発達や行動の状況、特に遊びの様相（好きなこと）などを詳細に触れていただきたいと思いました。そうすることで、事例1（A）、事例2（E）が共に少しずつ変化して発達している姿がもっと確認できること、そしてどのように子

どもに寄り添っていけば伸びやかな育ちが促されていくか、事例児のような子どもの遊び保育の在り方も考察でき、日頃の子どもたちの保育に般化できると考えます。

評者：日吉 輝幸

報告者も記述しておられるように、自然物が豊かな戸外での遊びは、子どもたちを解放的にし、心身ともにダイナミックにする発散の場でもあるため、そこからは屋内の生活では見られない、子どもの姿や他者との関わりが見えてくることもある。そこに、どのように保育者が関わっていくかが大切なのである。

鉄道弘済会門司保育所のレポートは、主に砂場遊びでのエピソードについて記述されているが、テーマに記されてあるとおり、いろいろな自然物との触れ合いの中での子どもの様子について記述していただきたかった。加えて、戸外遊びならではの子どもの体験や、そこから垣間見られる成長を、当該児だけではなく周りの子どもたちの様子を含めて記述すること。また、Ⅲの研究の方法に記されているように、「保育実践」→「エピソード」→「保育カンファレンス」→「リライト」→「保育実践」という一連のプロセスについて、実際のレポートが詳細に記述されていると、より臨場感があり分かりやすい報告書になるのではないかと思われた。戸外遊びという場面設定、着眼点は良いと思われるので、今後の更なる実践に期待している。

第10回 保育所保育実践研究・報告集

平成28年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6-2

アーバンネット麹町ビル6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117